

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 7

—中野市内その1—

さわ だ なべつち い せき
沢田鍋土遺跡

たて が はな おもて い せき
立ヶ花表遺跡

たて が はな じょうあと
立ヶ花城跡

2013. 3

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局
長野県埋蔵文化財センター

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 7

—中野市内その1—

さわ だ なべつち い せき
沢田鍋土遺跡

たて が はな おもて い せき
立ヶ花表遺跡

たて が はな じょうあと
立ヶ花城跡

2013. 3

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局
長野県埋蔵文化財センター



立ヶ花城跡・立ヶ花表・沢田鍋土遺跡遠景（南西より）



沢田鍋土遺跡オンドル状施設（SB103）



沢田鍋土遺跡出土須恵器（左：獣脚、右：「井」の窠書）



立ヶ花表遺跡出土須恵器（「多井□」の窠書）

はじめに

古来、日本海は列島の北と南をつなぐ幹線として、あるいは大陸へ往来する航路として重要な位置をしめてきております。長野県からは千曲川（信濃川）が新潟県へと流れ日本海に通じています。また、信濃町を經由して高田平野へ抜ける国道18号線が日本海へと向かうルートとなっています。沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡・立ヶ花城跡がある中野市立ヶ花周辺は、こうした日本海からの物流や情報が内陸にある長野県へ入る二つのルートが交差する要衝といえます。このような場所で、新しい地域交流の一つともいえる北陸新幹線の建設にともなって平成17～21年度に中野市沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の発掘調査を実施しました。その後、整理作業を継続してまいりましたが、この度、発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

中野市は土雛の里として知られていますが、立ヶ花地区には現在も土雛の制作者がお住まいで、土雛を作っています。また、かつては瓦を焼くだるま窯があり、昭和30年代まで瓦用の粘土が採掘されていました。鍋土という字名が示す通り、この地は良質な粘土がとれる場所として、古くから知られており、現在でもその粘土が使われています。今回の発掘調査でも、縄文時代・平安時代・中世などの粘土採掘跡や奈良時代の土器作りの工房跡が発見されました。その周辺には、古墳時代、奈良時代の粘土採掘跡が確認されており、各時代を通じて土器づくりに重要な土地であったことがわかります。調査では、奈良時代の須恵器窯と須恵器生産に関わる工房跡を明らかにすることができました。奈良時代の須恵器生産は、一郡一窯体制といわれ、各郡で独自に須恵器窯の生産をまかなっていたといわれます。高丘丘陵古窯址群は高井郡に属しますが、沢田鍋土遺跡に隣接する清水山窯跡では「高井」の他、「佐玖郡」と記された須恵器が出土するなど、高井郡を超えた供給先があったことが推定されています。古窯址群がひろがる高丘丘陵の西側には千曲川が流れており、須恵器を消費地に運ぶための水運として利用していたと想像されます。

現代交通網の大動脈である、上信越自動車道と北陸新幹線がまさに沢田鍋土遺跡で交差します。長野県埋蔵文化財センターでは、これらの交通網建設に伴う発掘調査で、高丘丘陵における旧石器時代から中世の貴重な歴史資料を得ることができました。これらの資料を用いた研究により、高丘丘陵、高井郡、そして信濃の古代史が明らかにされていくものと信じています。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線建設局の方々、長野県教育委員会や中野市教育委員会の方々、地元地権者や区長の方々、発掘・整理作業に従事協力いただいた方々に心から敬意と感謝を表す次第です。

例 言

1. 本書は北陸新幹線建設に関わる長野県中野市立ヶ花に所在する沢田鍋土(さわだなべつち)遺跡、立ヶ花表(たてがはなおもて)遺跡、立ヶ花城跡(たてがはなじょうあと)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(独) 鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けた(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで発掘・整理作業の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』22～26、現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告書とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000『中野西部』、1:50,000『中野』である。
5. 発掘、整理作業において以下の機関に業務委託をした。
測量業務及び空中写真撮影：(株)ワイド、(株)写真測図研究所
遺物の注記：(株)歴史の杜
遺物の写真撮影：(株)ルックス田中
石器の展開写真：(株)アルケーリサーチ、(株)アルカ
金属製品のX線撮影および保存処理：長野県立歴史館、(株)文化財ユニオン
6. 発掘、整理作業において以下の方々に、ご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
会田進、赤熊浩一、赤羽貞幸、小野昭、工業普通、黒坂禎二、佐川正敏、笹澤浩、佐藤宏之、城ヶ谷和広、高橋龍三郎、田中広明、戸沢充則、永井智教、長友恒人、中島庄一、中村由克、藤沢高広、丸山徹一郎、望月明彦、山田真一、吉田恵二
中野市教育委員会、中野市立博物館、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、鳩山町教育委員会
7. 発掘調査・整理作業の担当者、発掘・整理補助員(作業員)は第1章第1節第2表に記載した。
8. 本報告書は鶴田典昭が執筆し、調査部長大竹憲昭、調査第1課長上田典男が校閲した。
9. 註および引用参考文献は各章の末尾に記載した。
10. 調査資料及び遺物は中野市教育委員会へ移管予定である。

凡例

1. 遺物分布図・遺構図等に示した国家座標は日本測地系（旧測地系）の値である。
2. 遺物の番号は本文、挿表、実測図、分布図、遺物出土状況図、写真のすべてに共通する。
3. 基本土層・埋土の色調の記録は『新版 標準土色帖』による。
4. 本報告書掲載図の縮尺は原則として以下の通りである。

（遺構実測図）

全体図（1：400） 遺構配置図（1：400、1：500） 竪穴住居跡（1：60） 土坑（1：40）
粘土採掘跡（1：200）

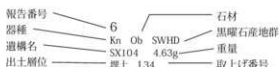
（遺物実測図）

土器・陶磁器実測図（1：4） 土器拓本（1：3） 石製品・土製品・金属製品（1：2）

旧石器時代石器実測図（3：4） 旧石器時代以外の石器実測図（1：2、1：4）

上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。

5. 旧石器時代の石器実測図に付したキャプションの見方は以下の通りである。
6. 石器実測図、挿表、遺物観察表の石材・石器器種・黒曜石産地群の略称は以下の通りである。



（石材）

Ag：玉髄 An：無斑品質安山岩 Ch：チャート Di：輝緑岩

DP：ヒン岩 Ge：下呂石 Gr：花崗岩 Ob：黒曜石

PAn：輝石安山岩 Rh：流紋岩 Sa：硬砂岩 Sh：頁岩

SS：珪質頁岩 TS：凝灰質頁岩 Tu：凝灰岩

安山：多孔質安山岩・安山岩

（石器器種）

Po：槍先形尖頭器 Kn：ナイフ形石器 Tr：台形石器

ES：搔器 Gr：彫器 Sc：削器 NS：挟入削器

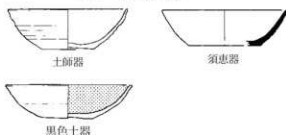
MB：細石刃 RF：二次加工がある剥片

UF：刃器（微細な剥離がある剥片） BI：石刃 FI：剥片

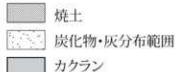
Ch：砕片 Co：石核 Ha：敲石 AH：石鏃

7. 本報告書で用いたスクリーントーンの凡例は以下の通りである。この他のものは、各図版に凡例を付した。

土器・土製品図版



遺構図版



都道府県	エリア	判別群	記号
長野	和田 (WD)	鷹山群	WDTY
		小深沢群	WDKB
		土屋橋北群	WDTK
		土屋橋西群	WDTN
		土屋橋南群	WDTM
		芙蓉ライト群	WDHY
		古峠群	WDHT
	和田 (WO)	ブドウ沢群	WOBD
		牧ヶ沢群	WOMS
		高松沢群	WOTM
	諏訪	星ヶ台群	SWHD
		冷山群	TSTY
	蓼科	双子山群	TSHG
		稲鉢山群	TSSB

黒曜石の産地群と産地記号

目次

はじめに

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過と方法	1
第1節 発掘調査の経過	1
1 調査に至る経緯 2 発掘作業と整理作業の経過 3 調査体制 4 調査日誌抄	
第2節 発掘調査の方法	5
1 発掘作業の方法 2 整理作業の方法 3 遺物と記録の収納	
第2章 遺跡の環境	10
第1節 遺跡の位置と地理的環境	10
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	11
第3章 沢田鍋土遺跡の調査	19
第1節 調査の概要	19
1 遺跡範囲と発掘調査歴 2 調査成果の概要 3 基本層序 4 調査の方法	
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	27
1 概要 2 遺物の分布 3 遺物	
第3節 縄文時代から古墳時代の遺構と遺物	37
1 概要	37
2 遺構	37
(1)粘土探掘跡 (2)陥し穴	
3 遺物	40
(1)縄文時代の土器 (2)縄文時代の石器 (3)弥生・古墳時代の遺物	
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	56
1 概要	56
2 遺構	56
(1)竪穴住居跡(土器製作工房跡)(2)掘立柱建物跡・ピット群 (3)土師器焼成遺構 (4)土坑 (5)粘土探掘跡	
3 遺物	80
(1)遺物の分類と概要 (2)土器 (3)特殊な器種と土製品 (4)金属器 (5)粘土塊・スサ入りの窯体片について	
第5節 中世以降の遺構と遺物	110
1 概要 2 遺構 3 出土遺物	

第4章 立ヶ花表遺跡の調査	115
第1節 調査の概要	115
1 遺跡範囲と発掘調査歴 2 調査の概要 3 基本層序	
第2節 旧石器時代から弥生時代の遺物	119
1 旧石器時代の遺物 2 縄文時代と弥生時代の遺物	
第3節 奈良時代以降の遺構と遺物	121
1 概要 2 窯跡 3 灰原 4 中世の遺物	
第5章 立ヶ花城跡の調査	143
第1節 立ヶ花城跡の発掘調査歴	143
第2節 調査の方法と調査成果	144
1 調査の方法 2 調査成果	
第6章 自然科学分析	148
第1節 自然科学分析の概要	148
第2節 火山灰分析・年代測定	148
1 火山灰分析・光ルミネッセンス年代測定 2 放射性炭素年代測定	
第3節 胎土分析・黒曜石産地分析	150
1 胎土分析	150
(1) 分析の目的と分析試料 (2) 分析成果の概要と検討	
2 黒曜石産地推定	153
第7章 総括	154
第1節 調査成果と課題	154
第2節 高丘陵地における須恵器生産	156
1 須恵器窯跡について	
2 工人集落について	
遺物観察表	165
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

第1図 グリッド設定の方法	6	第8図 沢田銅土遺跡の層序 (1)	22
第2図 グリッド設定図	7	第9図 沢田銅土遺跡の層序 (2)	23
第3図 遺跡周辺の地形	10	第10図 2区遺構配置図 (1)	24
第4図 遺跡の位置	10	第11図 2区遺構配置図 (2)	25
第5図 調査遺跡周辺の鳥瞰図	11	第12図 1区・4区遺構配置図	26
第6図 周辺の遺跡分布図	14	第13図 旧石器時代の調査範囲(1区・2区・4区)	30
第7図 沢田銅土遺跡調査範囲	20	第14図 旧石器時代の遺物出土状況(2区・4区)	31

第15図	旧石器時代の遺物出土状況(1区A地点)	32	第58図	SB103出土土器	98
第16図	旧石器時代の遺物出土状況(2区B地点)	33	第59図	SB103・SB104出土土器	99
第17図	旧石器時代の遺物出土状況(4区F地点)	34	第60図	SB105出土土器	100
第18図	旧石器時代の石器(1)	35	第61図	SB105・SB106出土土器	101
第19図	旧石器時代の石器(2)	36	第62図	SB107出土土器	102
第20図	2区縄文時代土器の出土状況(1)	43	第63図	SB107,SK118・120・121・122・128出土土器	103
第21図	2区縄文時代土器の出土状況(2)	44	第64図	SK142・148・151・189出土土器	104
第22図	SX105・106・107・110(1)	45	第65図	SK155・189・198・202,SD121・125・129出土土器	105
第23図	SX105・106・107・110(2)	46	第66図	SX104・125・遺構外出土土器	106
第24図	SX108・109	47	第67図	遺構外出土土器	107
第25図	SX111,SK119・125・149・177	48	第68図	土製品・金属器	108
第26図	縄文時代の土器(1)	49	第69図	2区粘土塊出土状況	109
第27図	縄文時代の土器(2)	50	第70図	中世以降の焼物・ビット群2	111
第28図	縄文時代の土器(3)	51	第71図	SX104(1)	113
第29図	縄文時代の土器(4)	52	第72図	SX104(2)	114
第30図	縄文時代の石器(1)	53	第73図	立ヶ花表遺跡調査範囲と基本層序	117
第31図	縄文時代の石器(2)	54	第74図	立ヶ花表遺跡遺構配置図	118
第32図	弥生・古墳時代の土器と石器	55	第75図	旧石器時代～弥生時代の遺物	120
第33図	奈良・平安時代の遺構配置図	66	第76図	SY01	123
第34図	SB101	67	第77図	SY01遺物出土状況	124
第35図	SB102(1)	68	第78図	SY01写真	125
第36図	SB102(2)	69	第79図	SY01出土遺物(1)	126
第37図	SB102(3)	70	第80図	SY01出土遺物(2)	127
第38図	SB103(1)	71	第81図	SY01出土遺物(3)	128
第39図	SB103(2)	72	第82図	SY01出土遺物(4)	129
第40図	SB103(3)・SB104	73	第83図	SY02・SQ03	132
第41図	SB105	74	第84図	SY02出土遺物	133
第42図	SB106	75	第85図	SY02・SQ03出土遺物	134
第43図	SB107	76	第86図	SY03・SQ01	136
第44図	掘立柱建物跡・ビット群	77	第87図	SY03・SQ01出土遺物	137
第45図	ビット群・2区土坑(1)	78	第88図	灰原遺物出土状況	139
第46図	1・2区土坑(2)	79	第89図	灰原・遺構外出土遺物(1)	140
第47図	4区土坑・粘土探掘跡	80	第90図	灰原・遺構外出土遺物(2)	141
第48図	須恵器・土師器の器種分類(1)	82	第91図	中世の遺物	142
第49図	須恵器・土師器の器種分類(2)	83	第92図	立ヶ花城跡の調査範囲とグリッド配置図	143
第50図	須恵器の法量計測	86	第93図	立ヶ花城跡 トレンチ配置図	144
第51図	SB101出土土器	91	第94図	立ヶ花城跡 土層断面図	145
第52図	SB102出土土器	92	第95図	立ヶ花城跡の概略図	146
第53図	SB102・SB103出土土器	93	第96図	胎土分析資料	151
第54図	SB103出土土器	94	第97図	立ヶ花表遺跡出土須恵器	157
第55図	SB103出土土器	95	第98図	長野県須恵器・瓦窯跡分布図	158
第56図	SB103出土土器	96	第99図	高丘陵陵古窯址群窯跡分布図	159
第57図	SB103出土土器	97	第100図	オンドル状施設を有する竪穴住居跡	160

表目次

第1表	文化財保護法に關する諸届けと受委託契約一覧	1	第12表	古代の土器 器種分類表	84
第2表	調査体制	4	第13表	遺構別器種組成	86
第3表	周辺の遺跡地名表	15	第14表	粘土塊集計	89
第4表	沢田鍋土遺跡 層序の対比	21	第15表	スサ入り窯体片集計	90
第5表	光ルミネッセンス年代測定と火山灰分析結果	28	第16表	光ルミネッセンス年代測定と火山灰分析結果	148
第6表	出土地点別割片・碎片点数	33	第17表	沢田鍋土遺跡放射性炭素年代測定結果	149
第7表	縄文時代石器組成	41	第18表	立ヶ花表遺跡放射性炭素年代測定結果	149
第8表	棒状礫出土点数	42	第19表	割片の偏光顕微鏡観察による土器胎土の特徴一覧	152
第9表	粘土探掘跡出土棒状礫一覧	42	第20表	黒曜石産地推定分析結果	153
第10表	ピット群1遺構一覧	61	第21表	高丘丘陵古窯址群の窯跡編年	156
第11表	古代土坑一覧	63			

写真図版目次

PL1	沢田鍋土遺跡の遺構1	PL12	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器5
PL2	沢田鍋土遺跡の遺構2	PL13	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器6
PL3	沢田鍋土遺跡の遺構3	PL14	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器7
PL4	沢田鍋土遺跡 旧石器・縄文時代の石器	PL15	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器8
PL5	沢田鍋土遺跡 縄文時代土器1	PL16	立ヶ花表遺跡・立ヶ花城跡遠景
PL6	沢田鍋土遺跡 縄文時代土器2	PL17	立ヶ花表遺跡の遺構
PL7	沢田鍋土遺跡 縄文時代土器3・弥生時代の遺物他	PL18	立ヶ花表遺跡遺物1
PL8	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器1	PL19	立ヶ花表遺跡遺物2
PL9	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器2	PL20	立ヶ花表遺跡遺物3
PL10	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器3	PL21	立ヶ花表遺跡遺物4
PL11	沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器4	PL22	立ヶ花表遺跡遺物5

添付 DVD 収録データ

- A 報告書 PDF 版
- B 遺物観察表
- C 挿表
- D 自然科学分析・保存処理報告
- E 遺物写真
- F 調査写真
- G 台帳

第1章 発掘調査の経過と方法

第1節 発掘調査の経過

1 調査に至る経緯

沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の隣接した3遺跡は長野県の北部、中野市立ヶ花にあり、旧石器時代から中世にわたる遺跡として知られていた。これらの遺跡の一部に北陸新幹線本線および変電所の建設が計画されたことから、日本鉄道建設公団（平成16年度より独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）と長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下県教委）が協議を重ねた。その結果、保護措置は記録保存とし、発掘調査は財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が日本鉄道建設公団の委託を受けて実施することとなった（第1表）。その後、埋文センター、中野市教育委員会を含めた四者で協議を進め、発掘調査に至った。協議の経緯の詳細は、本線部分と施設部分とに分けて、以下に協議の経緯を記す。なお、沢田鍋土遺跡は本線建設に関わる1区と、施設建設に関わる2～5区に区分される。

遺跡名 (調査年次)	発掘届 (法92条1項)		発掘許可通知 (法92条2項)		発掘終了報告 (法92条2項)		埋蔵物発見届 (遺失物法)		埋蔵文化財保管証 (法92条2項)		文化財認定 (法102条)	
	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号
沢田鍋土(H17)	H17.8.15	17長埋 第12-18	H17.9.5	17教文 第4-17号	H17.12.27	17長埋 第15-15	H17.12.27	17埋文 第13-15	H17.12.27	17長埋 第14-15	H18.1.11	17教文 第6-120
沢田鍋土(H20)	H20.5.29	20長埋 第1-1号	H20.6.2	20教文 第6-2号	H20.11.17	20長埋 第4-7号	—	—	—	—	—	—
沢田鍋土(H21)	H21.2.26	20長埋 第1-11号	H21.3.2	20教文 第6-16号	H21.10.6	21長埋 第4-8号	H21.10.6	21長埋 第2-8号	H21.10.6	21長埋 第3-8号	H21.10.16	21教文 第20-80
立ヶ花表(H19)	H19.11.16	19長埋 第8-8号	H19.11.16	19教文 第4-8号	H19.12.6	19長埋 第11-14	H19.12.6	19長埋 第9-13号	H19.12.6	19長埋 第10-13	H19.12.26	19教文 第6-101
立ヶ花表(H20)	H20.3.13	19長埋 第8-17号	H20.3.25	19教文 第4-18号	H20.11.5	20長埋 第4-9号	H20.11.5	20長埋 第2-7号	H20.11.5	20長埋 第3-7号	H20.11.25	20教文 第26-94
立ヶ花城跡(H18)	H18.5.26	18長埋 第1-4号	H18.6.6	18教文 第1-16号	H18.8.7	18長埋 第4-5号	H18.8.7	18長埋 第2-5号	H18.8.7	18長埋 第3-5号	H18.8.25	18教文 第6-50号

諸届一覧

年度	契約期間	契約額		作業内容
		総額	総額	
平成14	14.11.15～15.3.20	4,054,000		中野市月岡遺跡の確認調査・基礎整理作業
平成15	15.4.1～16.3.31	33,042,000		月岡遺跡の発掘作業・基礎整理作業
平成16	16.4.1～17.3.31	17,287,000		月岡遺跡の本格整理作業
平成17	17.8.22～18.3.31	20,162,000		南曾峯・沢田鍋土遺跡の発掘作業・基礎整理作業 月岡遺跡の本格整理作業
平成18	18.4.1～19.3.31	11,929,000		南曾峯遺跡の発掘作業・基礎整理作業 立ヶ花城跡の発掘作業・基礎整理作業
平成19	19.6.13～20.3.31	7,587,000		南曾峯遺跡の発掘作業・基礎整理作業 立ヶ花表遺跡の確認調査・基礎整理作業
平成20	20.4.1～21.3.31	38,708,000		沢田鍋土・立ヶ花表遺跡の発掘作業・基礎整理作業
平成21	21.4.1～22.3.31	57,569,000		沢田鍋土遺跡の発掘作業 月岡・沢田鍋土・立ヶ花表遺跡の本格整理作業。月岡遺跡報告書刊行
平成22	22.4.1～23.3.31	18,278,000		南曾峯・沢田鍋土・立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の本格整理作業
平成23	23.4.1～24.3.31	26,176,000		南曾峯・沢田鍋土・立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の本格整理作業 南曾峯遺跡報告書刊行
平成24	24.4.1～25.3.31	9,384,000		沢田鍋土・立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の本格整理作業・報告書刊行

受委託契約一覧

第1表 文化財保護法に関する諸届けと受委託契約一覧

(1) 本線部分（立ヶ花城跡、沢田鍋土遺跡1区）

立ヶ花城跡

新幹線本線の高丘トンネル坑口部分については、平成15年11月19日の保護協議（15教文第7-78号「北陸新幹線橋梁設置工事にかかる中野市立ヶ花城跡の保護について」）により、確認調査を含めた本調査は鉄道・運輸機構が埋文センターへ委託して実施することで合意した。平成18年4月27日の県教委、鉄道・運輸機構、埋文センターとの協議で、確認調査の方法、調査時期等について打ち合わせをおこない、平成18年7月に調査に着手した。

沢田鍋土遺跡1区

北陸新幹線は高丘トンネルの地下を高丘トンネルで抜ける。平成17年度、高速道路の地下を横断するトンネル工事に当たり、急速、沢田鍋土遺跡部分の立坑工事が必要となった。工事は、民有地を借地した1,540㎡の敷地内に19.65m×22.8mの範囲で立坑を掘削するものである。これを受けて、埋蔵文化財の保護措置について鉄道・運輸機構、県教委、埋文センターとの協議の結果、立坑工事の掘削部分を埋文センターが発掘調査をおこなうこととなった。また、工事敷地内への進入路の造成部分については工事立会いをすることとなった。発掘調査は、新幹線本線部分に関わる長野市南曾峯遺跡の調査班が、南曾峯遺跡の調査と合わせておこなうこととなり、平成17年10月26日から実施した。

(2) 施設部分（立ヶ花表遺跡、沢田鍋土遺跡2区～5区）

立ヶ花表遺跡

平成19年8月7日に、県教委、中野市教育委員会、鉄道・運輸機構、埋文センターの四者で協議をおこなった結果、すでに大規模な掘削・造成が実施されている掘削造成部分は慎重工事とされ、その他の部分については、埋文センターで確認調査を実施することとなった。平成19年11月の埋文センターの確認調査により須恵器窯跡が発見され、本調査の範囲が決定された。なお、本調査範囲に連続する斜面地についても確認調査をおこなう必要があると判断され、平成20年度に本調査と合わせて確認調査をおこなうこととなった。

沢田鍋土遺跡2～5区

沢田鍋土遺跡の調査対象地は、変電所構内道路部分（2・3区）、付替え道路部分（2・3・5区）、進入路部分（4区）分けられる。進入路部分は、既存道路の拡幅で、遺跡範囲外と認識されていたが、中野市教育委員会に照会したところ新たな遺跡地図では遺跡範囲内とされており、平成18年6月27日の協議で進入路部分（4区）は保護措置の対象となった。当初、変電所構内道路部分と付替え道路部分は平成20年度に調査を実施する予定であったが、用地内の畑灌施設の撤去が遅れたことから、本調査は平成21年度に実施されることとなった。

なお、平成20年5月におこなわれた県教委と中野市教育委員会との協議により、沢田鍋土遺跡と立ヶ花表遺跡の境界を地形に即して一部変更することになり、平成20年度の立ヶ花表遺跡の発掘調査範囲の一部が沢田鍋土遺跡となった。平成20年6月に実施した沢田鍋土遺跡3区の確認調査部分に相当する。

2 発掘作業と整理作業の経過

(1) 発掘作業

沢田鍋土遺跡

発掘調査は平成17年・20年・21年の3ヶ年にわたる。平成17年度は1区の発掘調査をおこない、旧石器時代のブロック、近世以降の溝などを検出した。旧石器包含層の堆積年代を明らかにするために、火山灰分析、光ルミネッセンス年代測定を実施した。

平成20年度は3区の確認調査をおこなった。3区の一部の表土を除去し遺構の有無を確認した後、旧石器時代の遺物の有無を確認する試掘坑の掘下げをおこなったが、遺構・遺物は確認されなかった。

平成21年度は2区～5区の発掘調査を実施し、粘土採掘跡、土器製作工房跡と推定される竪穴住居跡などが確認された。

発掘の調査期間と調査面積は下記のとおりである。

平成17年10月26日～12月9日	450㎡ (1区)
平成20年6月5日～6月13日	1,120㎡ (3区上段確認調査)
平成21年4月8日～9月30日	7,346㎡ (2～5区)

立ヶ花表遺跡

平成19年度にトレンチ掘削による確認調査を実施し、その結果、A区で須恵器窯跡が確認された。立ヶ花表遺跡では初めての須恵器窯跡の発見である。また、A区に連続する斜面地であるC区についても確認調査をおこなう必要があると判断した。

平成20年度にA区の本調査と合わせてC区の確認調査をおこなったが、遺構・遺物は確認されなかった(第73・74図参照)。A区では須恵器窯跡3基が検出された。

発掘調査期間と調査面積は下記のとおりである。

平成19年11月19日～11月26日	11,000㎡ (確認調査対象面積)
平成20年6月24日～10月29日	1,600㎡

立ヶ花城跡

発掘調査は、人力によるトレンチ掘削で、立ヶ花城に関わる遺構を探した。遺構は確認されず、遺物も出土しなかったため、トレンチの掘削で調査を終了した。発掘調査期間と調査面積は下記のとおりである。なお、調査終了後、調査区内の樹木の伐採を待って、12月5日に空中写真撮影を実施した。

平成18年7月10日～8月8日	3,000㎡
-----------------	--------

(2) 整理作業

写真の注記、アルバムへの収納、図面の確認、遺物台帳の確認等は基礎整理作業として、発掘調査年度の冬期間(12月～3月)に実施した。遺物の接合、実測などの本格整理は、すでに報告書を刊行した「南曾峯遺跡」の整理作業と並行して実施した。

平成20年度は、立ヶ花表遺跡の炭化物の年代測定・樹種同定を実施した。

平成22年度は、土器の注記、石器の展開写真撮影を業務委託で実施した(株式会社歴史の杜、株式会社アルカ)。

平成23年度は、土器の接合、復元、実測とトレース、旧石器の実測とトレース、遺構図のデジタルトレースをおこなった。また、沢田鍋土遺跡の炭化物の年代測定・樹種同定、沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡の黒曜石産地推定および須恵器・土師器・縄文土器の胎土分析を実施した。

平成24年度は、遺物写真撮影(業務委託)、金属器保存処理(業務委託)、遺構図のデジタルトレース、図版作成、原稿執筆、遺物収納をおこなった。



3 調査体制

発掘調査の調査体制は第2表のとおりである。

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成17年	仁科松男	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田典昭 西香子
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	鶴田典昭
平成19年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭
平成20年	仁科松男	平林 彰	上田典男	費田 明 山崎まゆみ
平成21年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭 費田 明 白沢勝彦 大沢康哲 市川隆之
平成22年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田典昭
平成23年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田典昭
平成24年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田典昭
平成17～21年度 発掘作業員				
池田 勝 池田道保 石井 博 稲田敏恵 内山紀明 江坂法子 遠藤加代子 太田正紀 大塚加津美 岡村文雄 依原洋子 加藤充也 川村幸彦 木村喜光 久保 昇 小林紀代美 小林房江 小林清雄 坂本精一 塩崎 巖 鈴木友江 関 武 高山いず美 田中邦男 田村多恵子 土屋美晴 松島寿夫 徳武知哉 徳水利夫 永原幸男 野村善和 野本秀男 平尾恭子 藤澤正美 藤村眞一郎 古澤三代 堀内貞江 松本 武 松本たつ子 丸山いづ子 丸山千寿 宮本和子 山上知也 山口 守 山田寿恵				
平成17～24年度 整理作業員				
阿部高子 市川ちず子 宇賀村節子 窪田 順 小池美香 小林 愛 近藤朋子 高橋康子 清水栄子 清水秋子 田村多恵子 土屋美晴 西村はるみ 日向富美子 増田千加代 宮澤理恵子 矢島美雪 柳原澄子 山上知也 山下千幸 山本和美				

第2表 調査体制

4 調査日誌抄

【沢田鍋土遺跡】

(平成17年度) 1区

- 10月26日 1区表土剥ぎ開始。
10月27日 1区表土剥ぎ終了。長野市(旧豊野町)南曾
峯跡跡調査のため、一時調査を中断。
11月 7日 遺構の調査開始。
11月 9日 旧石器時代の確認調査開始。
11月10日 旧石器時代の黒曜石出土。
11月17日 旧石器時代の調査区を2カ所設定。
11月18日 長友恒人奈良教育大学教授による光ルミネッ
センス年代測定サンプル採取。
11月23日 地団研長野支部地層見学。
11月28日 旧石器時代の調査終了。進入道路部分の工事
立会調査。
11月30日 遺構調査終了。
12月 2日 プレハブ撤去。
12月 7日 土層観察のため断ち割り調査。
12月 9日 断ち割り部分の土層断面記録。火山灰分析用
土壌サンプル採取。調査終了。

(平成20年度) 3区上段

- 6月 5日 3区上段重機によるトレンチ調査を開始。
6月 9日 調査作業員開始式。
6月10日 旧石器時代の確認調査開始。
6月13日 出土遺物なく、3区上段の調査終了。
(平成21年度) 2区・3区下段・4区・5区
4月 8日 2区の表土剥ぎ開始。
4月10日 現場事務所プレハブ設置。
4月15日 3区下段で確認調査開始。
4月21日 竪穴住居跡(SB101～SB103)と粘土探掘跡
を確認。
4月23日 粘土探掘跡(SX106)より旧石器と思われる
黒曜石剥片出土。

- 4月27日 3区下段で旧石器時代の確認調査。
4月30日 粘土探掘跡(SX107・SX110)で旧石器と思
われる黒曜石剥片が出土。3区に旧石器は確
認されず、トレンチ埋め戻し。
5月 1日 測量基準点・グリッド設定。
5月12日 土器焼成遺構(SK121・122)の調査。
5月13日 市道部分の通行止めの許可があり、表土剥ぎ
を開始。
5月14日 粘土探掘跡(SX110)で縄文後期土器が出土。
5月15日 粘土探掘跡(SX104)で内耳鍋が出土。
5月20日 4区表土剥ぎを開始。攪乱より石刃が出土。
5月21日 2区地形測量。
5月22日 旧石器時代の確認調査を開始。
5月27日 4区表土剥ぎ終了。
6月 4日 粘土探掘跡(SX108)で打製石斧出土。
6月10日 粘土探掘跡(SX105)埋土中に竪穴住居
(SB107)床面を確認。
6月12日 SB103にオンドル状の施設が確認される。
6月19日 2区西端部、表土剥ぎ開始。
6月23日 4区西区で旧石器時代の調査開始。
7月15日 4区の調査を中断し、2区に合流。
7月26日 現地説明会開催。見学者63名。
7月28日 TOTを使用した脆弱土器の取上げを開始。
8月 3日 2区旧石器の確認調査開始。
8月 6日 空中写真撮影。城ヶ谷和弘氏調査指導。
8月17日 竪穴住居跡床下調査を開始。
8月26日 粘土探掘跡(SX105)を重機で掘り下げる。
8月28日 5区の調査開始。
9月 3日 4区の調査再開。粘土探掘跡(SX126)から
多数の土器器が出土。
9月 7日 5区の調査終了。
9月10日 2区旧石器の調査開始(B地点)。

- 9月16日 4区調査終了。
- 9月25日 2区粘土採掘跡の写真撮影（高所作業車を使用）。
- 9月29日 2区調査終了。
- 9月30日 調査作業員終了式。

【立ヶ花城跡】**(平成18年度)**

- 7月7日 確認調査のトレンチ設定。
- 7月10日 トレンチ調査開始。
- 7月14日 トレンチ調査終了。
- 7月20日 土層断面記録。
- 7月26日 埋め戻し終了。
- 8月3日 地形およびトレンチ位置の測量。
- 8月8日 トレンチ測量図作成。器材撤収。
- 12月5日 空中写真撮影。

【立ヶ花表遺跡】**(平成19年度)**

- 11月19日 確認調査を開始（A区）。須恵器破片、窯体破片出土。
- 11月20日 灰原を検出。黒曜石割片出土。
- 11月22日 窯跡（SY01）を確認。A区埋め戻し開始。
- 11月26日 B区重機によるトレンチ調査。遺物・遺構が確認されず、人力で埋め戻し。調査終了。

(平成20年度)

- 5月19日 現場事務所プレハブ敷地（借地）の造成。
- 5月28日 調査日程について鉄道・運輸機構と協議。
- 6月2日 鉄道・運輸機構、工事共同企業体（以下JV）と協議。
- 6月4日 調査区に防塵ネットを設置。
- 6月9日 調査作業員開始式。

- 6月12日 A区樹木伐採開始。
- 6月24日 A区表土剥ぎ開始。
- 7月1日 A区に転落防止柵を設置。
- 7月4日 窪地に広がる灰原を確認。
- 7月14日 SX01～04の調査を開始。
- 7月16日 A区表土剥ぎ終了。
- 7月17日 A区で黒曜石の影器出土。C区トレンチ調査開始。
- 7月22日 C区、遺物・遺構確認されず、トレンチを埋め戻し調査終了。
- 7月23日 城ヶ谷和弘氏（愛知県埋蔵文化財センター）の調査指導。
- 7月25日 SY01の調査開始。
- 8月6日 SY02の調査開始。
- 8月20日 灰原掘下げ開始。
- 8月27日 A・C区間の谷部で、重機によるトレンチ調査。遺構・遺物なし。
- 8月28日 山田真一氏（安曇野市郷土博物館）の調査指導。
- 9月1日 赤羽貞幸氏（信州大学教育学部）の調査指導。
- 9月13日 遺跡説明会。76名参加。
- 9月30日 SY03の調査開始。
- 10月7日 鉄道・運輸機構との協議（沢田鍋土遺跡畑灌施設撤去について）。
- 10月17日 空中写真撮影。
- 10月28日 A区の窯跡調査終了。地形測量。
- 10月29日 SY02写真撮影。器材撤収。調査終了。
- 11月6日 鉄道・運輸機構との協議で、沢田鍋土遺跡2～5区の発掘調査を次年度送りとする。
- 11月20日 調査作業員終了式。
- 11月26日 現場事務所プレハブ撤去。

第2節 発掘調査の方法

1 発掘作業の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号

長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）では記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を9分割した地区記号で、須坂市以北の千曲川東岸地区を示す「A」、2文字目および3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺構記号を用いた。各遺跡の遺跡記号は下記のとおりである。

沢田鍋土遺跡（SAWADANABETSUCHI）：「ASD」

立ヶ花表遺跡（TATEGAHANAOMOTE）：「ATH」

立ヶ花城跡（TATEGAHANAJOUATO）：「ATJ」

遺構記号

発掘調査では県埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

S B：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。【竪穴住居跡・竪穴状遺構】

S K：単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないS Bより小さな掘り込み。【土坑】

ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。これ以外の落ち込みと関係が認められるものがある。【掘立柱建物跡】

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床】

SH：石が面的に出土するもの。【礫群、集石遺構】

SD：溝状の掘り込み。【溝跡、河道、自然流路他】

SQ：遺物が面的に集中するもの。【旧石器時代の遺物集中（ブロック）他】

SY：須恵器窯、炭窯など。【窯跡】

SW：【窯跡にともなう灰原・物原】

SX：以上に記した以外の不明遺構、および粘土採掘跡沼地、湿地、池など。

(2) 調査グリッドの設定と呼称

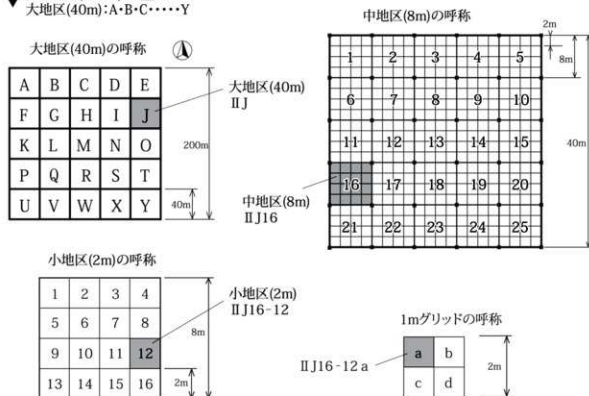
国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点（ $X = 0.0000, Y = 0.0000$ ）に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これを元に、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した（第1図）。

大々地区は200m×200mの区画で、ローマ数字で示した。沢田鍋土遺跡と立ヶ花表遺跡では $X=80,600, Y=-16,400$ を基準として調査対象地区全体にかかる5区画を設定し、I～Vと表記した。（第2図）。立ヶ花城跡では $X=80,200, Y=-16,800$ を基準として1区画を設定し、Iと表記した（第2図）。

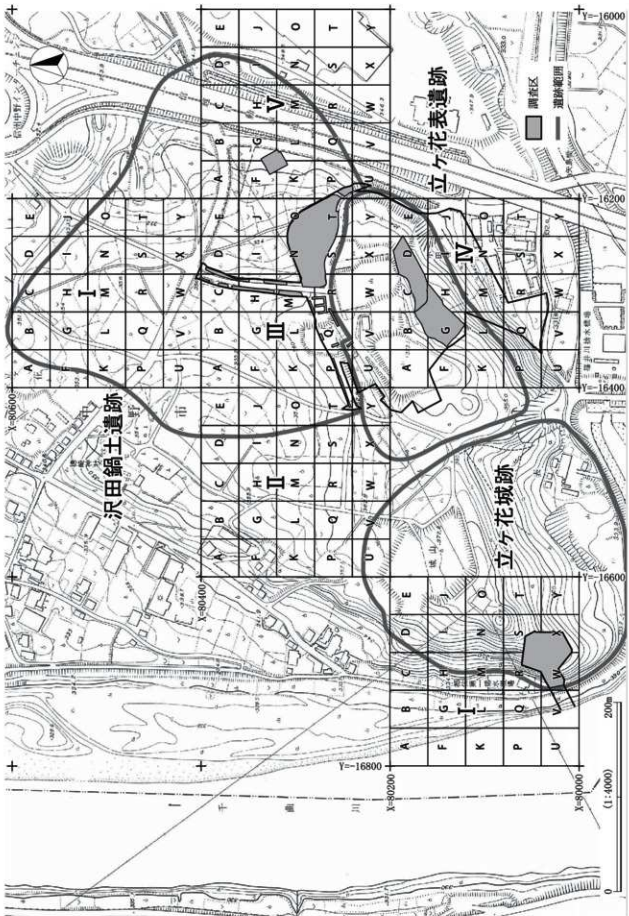
大地区は大々地区を40m×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yまでの大文字アルファベットを用いた。

中地区は大地区を8m×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区である。

▼ 大々地区(200m):I・II・III・…
大地区(40m):A・B・C・…・Y



第1図 グリッド設定の方法



第2図 グリッド設定図

小地区は、中地区内を16分割(2×2m)したものである。北西から南東に1から16の算用数字を用いた。中地区がⅡJ16の場合、小地区名はⅡJ16-1、ⅡJ16-2、ⅡJ16-3・・・となる。さらに、必要に応じて小地区を4分割(1×1m)して第1図のとおりa～dの記号を付した。

大々地区から中地区までのグリッド杭の打設は測量業者に委託して実施したが、小地区は中地区を基準に県理文センターが設定した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値を用いている。したがって、報告書に掲載した図面の座標値は日本測地系である。

(3) 記録写真と自然科学分析

写真撮影は6×7、35mm一眼レフのカメラを用い、それぞれ白黒フィルム、リバーサルフィルムを用いて撮影した。また、35mm一眼レフとあわせてコンパクトデジタルカメラによる撮影をおこなった。空中写真撮影は平成18年度(立ヶ花城跡)、平成20年度(立ヶ花表遺跡)、平成21年度(沢田鍋土遺跡)の調査で実施した。

以下の自然科学分析を業務委託で実施した。詳細は第6章に記述した。

火山灰分析/光ルミネッセンス年代測定/放射性炭素年代測定/胎土分析/黒曜石産地推定分析

2 整理作業の方法

(1) 注記および管理番号について

出土遺物について、金属器以外の土器・石器については微細な資料を除きすべてに注記をした。遺跡名は3文字のアルファベットで(沢田鍋土遺跡:ASD、立ヶ花表遺跡:ATH)、出土地点または層位は以下の略号を用いて注記した。なお、発掘時の遺物取上げ台帳と注記の対応表を添付CDに収録した(ファイル名「遺物取上げ台帳」)。

注記に用いた略号

フ:覆土(埋土)、ユ:床面、カ:カマド、カク:攪乱、トレ:トレンチ、検:検出面

ケ:検出面、シ:焼成部、ネ:燃焼部、タ:焚口

旧石器時代の石器群、縄文時代以降の加工が認められる石器・石核、特に資料化を必要とする土器、土製品については個別に管理番号を付した。管理番号は遺跡ごとに以下のとおり付した。

(沢田鍋土遺跡)

旧石器時代～弥生時代の石器・石製品 No 1～268

縄文時代の土器 No 1～100

弥生・古墳時代の土器 No 301～303・No 401～402

古代の土器・土製品・粘土塊 No 1001～1477

中世・近世の土器・陶磁器 No 2001～2004

金属器 No 1

(立ヶ花表遺跡)

旧石器時代～弥生時代の石器・石製品 No 1～20。(剥片はNo 1001～1042の番号を付した)

弥生時代土器 No 301

古代の土器・土製品 No 1001～1144

金属器 No 1

(2) 土器・土製品・石器の整理について

ア 沢田鍋土遺跡

竪穴住居跡及び付属施設の溝跡出土土器については、それぞれの遺構内の接合作業をおこなった後、遺構間の接合作業を実施した。それ以外の遺構出土土器は遺構ごとに接合作業をおこなった。遺構外出土土器については、当該グリッドにある竪穴住居跡などの遺構出土土器との接合作業をおこなった。石器は、全出土遺物の法量を計測し、遺物観察表に示した。石器の接合作業は実施していない。

イ 立ヶ花表遺跡

竪穴内の接合作業をおこなった後、各窯跡と灰原出土遺物の接合作業をおこなった。石器は、全出土遺物の法量を計測し、遺物観察表に示した。石器の接合作業は実施していない。

(3) 遺構図と写真の整理について

全体図、遺構図、断面図等は Adobe IllustratorCS3 を用いてトレースおこなった。一部の図面は第2原図をスキャナで読み込み、Adobe IllustratorCS3 のライブトレースを用いて図面をデジタル化した。

発掘調査での記録写真は、35mmフィルム（モノクロ・リバーサル）、6×7フィルム（モノクロ・リバーサル）、コンパクトデジタルカメラデータがある。フィルムは種別ごとに、撮影順にアルバムに収納し、Microsoft Excel を用いて写真台帳を作成した。デジタルデータは撮影内容をファイル名としハードディスク及びDVDに記録した。

3 遺物と記録の収納

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、DVDに記録した。ただし、立ヶ花表遺跡のデジタル写真は、遺構別のフォルダに分けファイル名は変更していない。

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

本書で報告した3遺跡は、中野市大字立ヶ花の以下の地籍に所在する。

沢田鍋土遺跡：中野市大字立ヶ花字鍋土 583-7 ほか

立ヶ花表遺跡：中野市大字立ヶ花字表 872-1 ほか

立ヶ花城跡：中野市大字立ヶ花字表山 772-1 ほか

これらの遺跡は高丘陵の南端部に立地する。高丘陵は千曲川の右岸にあり、北側の一段高い長丘陵へと続く。また、千曲川を挟んで蟹沢丘陵と対しており、その間を千曲川が蛇行して北流する（第3図・4図）。これらの丘陵は2～4万年前に隆起を始めたかと想定されており、現在の丘陵部分もかつては千曲川増水時には水に浸かる環境であったと考えられる。兩岸の丘陵上に堆積した水成層（粘土やシルト層）から旧石器時代の石器が出土していることも、かつては水辺であった場所が隆起して丘陵となったことを物語っている。

遺跡がある丘陵南端部は篠井川と千曲川の合流地点に面しており、西から立ヶ花城跡、立ヶ花表遺跡、沢田鍋土遺跡となる。立ヶ花城跡は南西に突き出た丘陵突端部に立地し、立ヶ花表遺跡はその東側の篠井



第3図 遺跡周辺の地形



第4図 遺跡の位置

川に面した丘陵南斜面に、沢田銅土遺跡はさらにその北側に広がる緩斜面に立地する。立ヶ花城跡と立ヶ花表遺跡にはそれぞれ山頂部をもつ小山が存在したが、いずれも山頂部周辺は削平されており、旧地形を留めていない（第2図）。

なお、遺跡範囲は『長野県中野市遺跡詳細分布図』（中野市教育委員会 2006）によるが、細部が不明確であったので、沢田銅土遺跡と立ヶ花表遺跡の境界について、中野市教育委員会及び中野県教育委員会との協議の上、両遺跡の境界部を確認した。その結果、両遺跡の境界部は第2図の通り定められた。（註1）。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

沢田銅土遺跡・立ヶ花表遺跡・立ヶ花城跡周辺の中野市西部、小布施町、長野市豊野の千曲川兩岸の遺跡を中心とした分布図を第6図に示した。図中の番号は第3表および以下の文章の括弧内の番号に対応する。

旧石器時代：沢田銅土遺跡（83）と立ヶ花表遺跡（84）からは、細石刃、ナイフ形石器、彫器などが出土している。これらの遺跡がある千曲川流域では、中野市から飯山市にかけて旧石器時代の遺跡が多数確認されている。千曲川左岸の長野市南曾峯遺跡（199）、千曲川右岸の高丘丘陵にある中野市がまん淵遺跡（90）、牛出古窯遺跡（73）、茶臼峯窯跡（109）などでブロックが確認されている。その他、浜津ヶ池遺跡（60）などでも旧石器がまとまって出土している。千曲川下流の飯山市の関沢遺跡、上野遺跡、太子林遺跡、日焼遺跡、トノ池南遺跡、新堤遺跡、さらに下流の栄村の横倉遺跡、小坂遺跡などでも発掘調査により旧石器が確認されている。また、沢田銅土遺跡の北西12.5kmのところに野尻湖遺跡群があり、多数の旧石器時代遺跡が発掘調査されており、これらの資料をもとにした野尻湖編年が提示されている（谷・大竹 2003、谷 2004・2007）。

沢田銅土遺跡（83）、がまん淵遺跡（90）、野尻湖遺跡群の立が鼻遺跡の石器群は長野県最古段階と位置付けられている（中島 1997・2006、大竹 2010）。また、信濃町の野尻湖遺跡群では、台形石器、斧形石器を伴う環状ブロック群が複数確認されている。中野市の牛出古窯遺跡（73）では台形石器と斧形石器を伴うブロック群が確認されており、これらはAT降灰以前の所謂後期旧石器時代の古い段階の遺跡である。

さらに、下流の信濃川流域にあたる新潟県津南町周辺には旧石器時代から縄文時代草創期の多数の遺跡



第5図 調査遺跡周辺の鳥瞰図

が存在している。遺跡周辺の千曲川・信濃川流域の遺跡群と野尻湖遺跡群を含む一帯は、日本列島の中でも旧石器時代の遺跡密度が高く、とりわけ旧石器時代の始まりを探る上で貴重な遺跡がまとまっている。

縄文時代：遺跡周辺の千曲川流域の遺跡を概観する。草創期では、飯山市のカササギ野池遺跡で爪形文土器が、飯山市小佐原遺跡、北竜湖遺跡、木島平村三枚原遺跡で表裏縄文土器が出土している。千曲川流域からは離れるが、長野県北部（北信地方）では、前述の野尻湖遺跡群で、隆起線文土器、爪形文土器、円孔文土器、多縄文土器などが多数出土している他、高山村湯倉洞穴、須坂市石小洞洞穴などの群馬県境付近の山地部で草創期の良好な資料（隆起線文・爪形文・円孔文・多縄文土器など）が出土している。

早期には、木島平村の三枚原遺跡、高山遺跡、飯山市トノ池南遺跡などで押型文土器、中野市がまん淵遺跡（90）、飯山市新堤遺跡などで沈線文系土器が比較的まとまって出土している。

前期では、長野市上浅野遺跡（210）で環状集石群が確認されている。また、千曲川上流の長野市松原遺跡では地表下約5mから前期の集落跡が確認されている。千曲川下流の中野市の立ヶ花遺跡（79）、南大原遺跡（34）、飯山市の有尾遺跡、大倉崎遺跡、瀬附遺跡で竪穴住居跡が確認されている。なお、南大原遺跡（34）、有尾遺跡は前期土器型式の標識遺跡である。

中期には、上浅野遺跡（210）で中期前葉の遺物が比較的まとまって出土している。千曲川下流域では中野市の栗林遺跡（62）、姥ヶ沢遺跡（50）、宮反遺跡（49）、千田遺跡（23）、柳沢遺跡、飯山市深沢遺跡、飯綱町上赤塩遺跡（6）などで集落跡が確認されている。また、長野市明神前遺跡（263）で中期後葉を中心に多数の遺物が採集されており、中野市風呂屋遺跡（25）では中期前葉の土器がまとまって出土している。上赤塩遺跡（6）、風呂屋遺跡（25）では北陸系の土器が、千田遺跡（23）では火焰型土器や東北系（大木式）の土器が、栗林遺跡（62）では関東系（加曾利E式）の土器が出土するなど、他地域との交流が認められる。また、姥ヶ沢遺跡（50）ではほぼ完全な形で復元される土偶が、千田遺跡（23）では200点を超える土偶が出土している（長野県埋蔵文化財センター2011）。なお、沢田鍋土遺跡（83）の上信越道建設に伴う調査では中期後半の粘土探掘跡が発見されている（長野県埋蔵文化財センター1997）。

後期には、中野市栗林遺跡（62）、飯山市東原遺跡などの集落跡と、石棺墓群などの墓域が確認された中野市千田遺跡（23）、飯山市宮中遺跡などがある。栗林遺跡（62）では貯蔵穴、水さらし場などの施設が発見されている。この他、長野市上浅野遺跡（210）、明神前遺跡（263）、中野市飯綱平遺跡（18）、南大洞遺跡（24）、風呂屋遺跡（25）、山根遺跡（31）、田上寺の前遺跡、新野遺跡などで後期の土器が発見されているが、中期に比べ遺跡数は少なくなる。なお、飯綱平遺跡（18）では加曾利B1式期の粘土探掘跡が確認されており、今回の発掘調査で発見された沢田鍋土遺跡の粘土探掘跡（堀之内1式期）と共に、長野県内では希少な事例である。

晩期には遺跡が少なく、集落跡は確認されていない。長野市豊野の南曾峯遺跡（199）、立石ヶ丘遺跡（203）、堰上遺跡（182）、中野市の牛出遺跡（74）、山根遺跡（31）、南大洞遺跡（24）、千田遺跡（23）、飯山市の山ノ神遺跡、上野遺跡などで晩期の遺物が確認されている。特に飯山市山ノ神遺跡でまとまった土器が出土しており、その中に魚形線刻画がある椀形土器が見られる。

弥生時代：千曲川流域には中期後半（栗林式）から後期（吉田式、箱清水式）の集落跡が多数確認されているが、高丘丘陵周辺では中期前半の弥生時代の遺跡は少ない。

中期後半（栗林式）では、長野市の南曾峯遺跡（199）、向平遺跡（202）、北土井下遺跡（262）でまとまった遺物が出土している。南曾峯遺跡と北土井下遺跡では環濠の一部と評価されている溝が検出されているが（豊野町誌刊行委員会2001）、竪穴住居跡などの居住施設が見つからない。中期後半栗林式の標識遺跡である栗林遺跡（62）では、環濠集落、礫床木棺墓などが確認されている。今回の調査では確認

されなかったが、立ヶ花城跡(88)で竪穴住居跡が確認されている。

後期では、中野市がまん淵遺跡(90)、栗林遺跡(62)、安源寺遺跡(112)、七瀬遺跡(59)、宮反遺跡(49)、千田遺跡(23)、千川保遺跡(19)、小牧遺跡などの集落が千曲川沿いの丘陵や川岸に立地する。この内、千田遺跡(23)では箱清水式に先行する吉田式の集落跡が確認されており、当該期の数少ない集落遺跡の事例となる。箱清水式期の七瀬遺跡(59)などでは、北陸系、東海系土器の存在が明らかにされている。隣接する中野市がまん淵遺跡(90)では、北陸地方に見られる斜面に環濠をもつ高地性の防御的集落が確認され、安源寺遺跡(112)では土坑墓群が確認されている。なお、千曲川東岸の扇状地上には中野市西条岩船遺跡群、間山遺跡などの集落跡が存在している。

古墳時代: 高丘陵陵付近の千曲川流域では、古墳時代の集落遺跡の発掘例が少なく、集落跡の実態は明らかにされていない。近年ようやく、調査事例が蓄積されつつある。千曲川右岸の中野市牛出古窯遺跡(73)、牛出遺跡(74)では前期、栗林遺跡(62)では中期の集落跡が調査されている。また左岸上流の長野市の立ヶ花丘遺跡(203)、明神前遺跡(263)、北石遺跡(259)、などで前期の上師器が出土しており、これらの中に北陸系や東海系の土器が認められる。下流左岸の中野市替佐遺跡群(川久保・宮神遺跡)(19)、千田遺跡(23)など前期と後期の竪穴住居跡が確認されている(註2)。

古墳では、立ヶ花表遺跡(84)の範囲に立ヶ花1～3号墳(85～87)の3基の古墳が確認されている。それぞれ長径18.8m、31.6m、20.5mの円墳であるが、未発掘のため内容は不明である。

弥生時代後期末から古墳時代初めにかけて、中野市安源寺城跡(66)・安源寺遺跡(67)の前方後方墳丘墓、前方後方形周溝墓が確認されている。弥生時代後期の東海系、北陸系土器の流入と共に、千曲川下流域の善光寺平(長野盆地)北部の古墳文化の成立を考える上で重要な資料が、近年の発掘調査で明らかとなってきている。

高丘陵陵から離れるが、中野市高遠山古墳は近年の発掘調査で東日本最古級の前方後円墳であると評価されている。前期古墳では、この他、善光寺平最古段階の前方後方墳とされる中野市蟹沢古墳、飯山市勘介山古墳があり、長野県最古段階の弘法山古墳に後続して作られたと想定されているが(豊野町誌刊行委員会2000、小林2006)、発掘調査は行われていない。中期古墳では中野市七瀬双子塚古墳(57)、山の神古墳(41)、林畦1・2号墳(45・46)、七瀬古墳群(52～55)、京塚古墳(92)などの調査がおこなわれている。後期古墳では、中野市風呂屋古墳(26)、長野市山崎古墳(211)などの発掘調査例がある。この他、長野市八雲台1号古墳(233)・上伊豆毛古墳(237)・東宇山古墳(231)などから出土したとされている須恵器、金環、勾玉、直刀、鉄鎌、南首峯古墳(201)の銀象嵌のある直刀鐔などの遺物が伝えられており、後期古墳は千曲川西岸の丘陵部にまとまっているようである。

また、上信越自動車道建設に関わる沢田鍋土遺跡(84)の発掘調査で、古墳時代前期の粘土採掘跡が発見されている。

奈良・平安時代: 沢田鍋土遺跡(83)・立ヶ花表遺跡(84)周辺には須恵器の窯跡が多数確認されている。千曲川西岸の髷山西南麓には髷山古窯址群、東岸には高丘陵古窯址群があり、それぞれ水内郡と高井郡の須恵器生産地とされている。沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡では須恵器の窯跡が調査されており、両遺跡は高丘陵古窯址群に属する。これらの窯址群は7世紀末から9世紀にかけて操業されており、がまん湖1号、茶臼峯6号・9号などが高丘陵古窯址群操業開始期の窯跡と考えられている。操業のピークは8世紀代と考えられ、長野市豊野町の山ノ神窯跡(258)、蟻ヶ崎窯跡(184)、中野市の清水山窯跡(81)、池田端窯跡(80)、牛出古窯遺跡(73)、茶臼峯窯跡(109)など多数の奈良時代の窯跡が調査されている。清水山窯跡(81)では「佐玖郡」「高井」などのヘラ描須恵器が出土しており、官窯の可能性が指摘されている。また、池田端窯跡(80)では瓦窯や粘土採掘跡が確認されている。



第6図 周辺の遺跡分布図

地図番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世	調査歴	地図番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世	調査歴		
1	田中下土浮遺跡・芋川氏遺跡	芋川								H13~15	69	小丸山古墳	安源寺										
2	東柏原遺跡	東柏原									70-72	栗林1~3号古墳	栗林										
3	上今田遺跡	赤塩									73	牛出古塚遺跡	牛出									H5-9	
4	毛尻遺跡	赤塩									74	牛出遺跡	牛出									H6~8	
5	柳屋敷遺跡	赤塩									75	立ヶ花・上川端遺跡	牛出										
6	上水垣遺跡	赤塩									76	牛出遺跡	牛出									H6-9	
7	与四郎屋敷遺跡	倉井								S35-53, H7	77	草間西原塚跡	草間										
8	中畑遺跡	倉井									78	本賢寺跡	立ヶ花									S37, H1・2・5・9・12	
9	大原遺跡	倉井									79	立ヶ花遺跡	立ヶ花									S37, H1・2・5・9・12	
10	桜畑遺跡	倉井									80	池田塚跡	立ヶ花									H3・4	
11	一ツ屋遺跡	倉井									81	清水山塚跡	立ヶ花									H4・6	
12	袖久保遺跡	豊津									82	立ヶ花表山塚跡	立ヶ花									S45	
13	大日影遺跡	豊津									83	沢田綱土遺跡	立ヶ花									H3・4・7・17・21・22	
14	長谷島(滝脇)遺跡	豊津								S31, H23	84	立ヶ花表遺跡	立ヶ花									S37, H20	
15	笠倉遺跡	豊津								H23	85-87	立ヶ花1~3号墳	立ヶ花										
16	笠倉館(森の家)跡	豊津									88	立ヶ花城跡	立ヶ花									S55, H18	
17	飯綱平北遺跡	豊津								H4・16	89	島軒別遺跡	立ヶ花										
18	飯綱平遺跡	豊津									90	がまん(藤原)遺跡 (倉、西山塚跡、西山中野墓址、竜徳寺跡)	草間									H3・5	
19	替佐遺跡帯(川久保・宮中・東浜)	豊津								S41, H16・19	91	草間城跡	草間										
20	飛山遺跡	豊津								H6	92	京塚古墳	草間									H3	
21	替佐城跡	豊津								H7	93	西山古墳	草間									H3	
22	対面所遺跡	豊津								H7	94	上の山遺跡	草間										H6
23	千田遺跡	豊津								H13-15・17-18	95	秋葉山古墳	草間										
24	南大洞遺跡	豊津									96	御嶽山古墳	草間										
25	風呂屋遺跡	上今井								H6	97	社宮司古墳	草間										
26	風呂屋古墳	上今井								H6	98-99	高山1・2号古墳	草間										
27	風呂屋居館址	上今井									100	高塚遺跡	草間										
28	北城城址	上今井									101	草間中組遺跡	草間										
29	寺窪宮址	上今井								H3	102	上の山宮址	草間									H5	
30	西山根遺跡	上今井									103	大久保館跡	草間										
31	山根遺跡	上今井								H3	104	大久保塚跡	草間										S39-58
32	内堀館跡	上今井									105	林野塚跡	草間										
33	南城城址	上今井									106	中原塚跡	草間										S59
34	南大原遺跡	上今井								S26-32, 54, H23	107	東池田塚跡	草間									H16	
35	壁田城跡	壁田									108	坂下塚跡	草間										
36	ねごや遺跡	厚貝									109	茶臼塚跡	草間										S38・39・46, H17・18
37	末塚古墳	厚貝									110	茶臼塚跡・茶臼塚跡 (含茶臼塚遺跡)	草間										S49
38	赤畑古墳	厚貝									111	風巻遺跡	安源寺										S36・29・40・41・51・54・59・60・61・62, H6・14
39	陣場遺跡	厚貝									112	安源寺遺跡	安源寺										
40	峯遺跡	厚貝									113	西郷遺跡	押羽										
41	山の神古墳	田委								S23	114	向原遺跡	北岡										
42-44	中畠1~5号古墳	田委								S61・62	115	西郷坊遺跡	北岡										
45-46	林野1・2号古墳	田委								S23	116	三木遺跡	北岡										
47	三ツ又遺跡	田委									117	六川遺跡	都住										
48	大俣城跡	大俣									118	道添遺跡	都住										
49	宮反遺跡	大俣								S58-59	119	中子塚遺跡	都住										S53
50	姥ヶ沢遺跡	大俣								S57	120	松宮遺跡	都住										
51	七瀬北原草址	七瀬								S63	121	三田町遺跡	都住										
52-55	七瀬1~3・5号古墳	七瀬								S61・62・63	122	中条廻道跡	中松										S28・51・52
56	前山古墳	七瀬								S50	123	大道上遺跡	中松										S51, H5
57	七瀬双子塚古墳	七瀬									124	中町遺跡	雁田										
58	寿徳寺跡	七瀬									125	木下遺跡	雁田										
59	七瀬遺跡	七瀬								S58, H3・4・6	126	宮林遺跡	雁田										
60	浜津ヶ池遺跡	栗林・片塩								S62, H6	127	清水端遺跡	雁田										
61	光海寺跡	栗林									128	鏡子塚古墳	都住										
62	栗林遺跡	栗林								S23・25・40・44・52・54・56・58・62, H3・4・6・11	129	古堂塚古墳	中松										
63	大徳寺遺跡	片塩									130-131	薬師堂3・4号墳	雁田										
64	片塩遺跡	片塩								S35	132	わぐ遺跡	雁田										
65	から池遺跡	安源寺																					
66	安源寺城跡	安源寺								H10													
67	安源寺跡	安源寺																					
68	安源寺館跡	安源寺								H2													

第3表 周辺の遺跡地名表

第2章 遺跡の環境

地図番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世	調査歴
133	飯師前遺跡	雁田	○							
134	木戸脇遺跡	雁田		○						
135	権助上高遺跡	雁田		○						
136	雁田城跡	雁田					○			
137	二十端城跡	雁田						○		
138	滝の入城跡	雁田						○		
139	原明寺遺跡	雁田								
140	新田原遺跡	雁田	○							
141	蟹が遺跡	雁田								
142	観音崎遺跡	雁田	○							
143	松川端遺跡	雁田		○						
144	外不動遺跡	雁田						○		
145/148	二十端1～4号墳	雁田								
149/151	下入4～6号墳	雁田								
152/160	岩松院1～8号墳	雁田								
161/62	薬師堂1・2号墳	雁田								
163/65	鳥の林1～3号墳	雁田								
166/67	観音下1・2号墳	雁田								
168/70	集人塚1～3号墳	雁田								
171	沢入古墳	雁田							S62	
172	外不動古墳群	雁田							S49	
173	大日堂古墳	大日								
174	居村古墳	福原								
175	万葉塔古墳	上町								
176	石碑古墳	福原								
177	飯田古屋敷遺跡	飯田								
178	菰山遺跡	上今井	○					○	H6	
179	二ツ石遺跡	豊野								
180	小杉井遺跡	豊野								
181	榊堂寺跡	豊野								
182	塚上遺跡	豊野	○							
183	どうろく神坂遺跡	豊野								
184	蟻ヶ崎窯跡	豊野								
185	竹原遺跡	豊野		○						
186	白山遺跡	豊野								
187	狐山塚原群	豊野								
188	日影川谷遺跡	豊野			○					
189	長清寺跡	豊野								
190	大倉城跡	豊野						○	H6	
191	北裏遺跡	豊野								
192	真羽田遺跡	豊野								
193	八幡社遺跡	豊野								
194	坂橋遺跡	豊野								
195	下弦遺跡	豊野	○							
196	手子塚城跡	豊野								
197	膳橋遺跡	豊野								
198	手子塚遺跡	豊野	○							
199	南首峯遺跡	豊野			○					
199	峰(峯)の畑遺跡	豊野			○				S45・55・H5・17～19	
200	坊瀬(墳墓)	豊野								
201	南首峯古墳	豊野							S32・H5	
202	向平遺跡	豊野								
203	立石ヶ丘遺跡	豊野	○							
204	立石ヶ丘古墳	豊野	○							
205	観音堂遺跡	豊野								
206	中島遺跡	豊野								
207	町尻遺跡	豊野								
208	大道添遺跡	豊野								
209	大川端遺跡	豊野								
210	上浅野遺跡	豊野							S57	
211	山崎古墳	豊野							S57	
212	松ノ木下遺跡	豊野								
213	堤遺跡	豊野								
214	堤塚跡	豊野								

地図番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世	調査歴
215	泉平空跡	豊野								
216	十二個塚原群	豊野							○	
217	西蔵寺遺跡	豊野								○
218	長塚塚原群	豊野								○
219	泉平遺跡	豊野								○
220	西蔵寺跡	豊野								○
221/23	泉平1～3号古墳	豊野								○
224/25	大久保1・2号古墳	豊野								○
226	松窪古墳	豊野								○
227	ゴンボ山遺跡	豊野	○							
228	月光寺遺跡	豊野								○
229	大久保遺跡	豊野							○	
230	聖林寺跡	豊野								○
231	東宇山古墳	豊野								○
232	上伊豆毛遺跡	豊野								○
233/26	八雲台1-4号古墳	豊野								○
237	上伊豆毛古墳	豊野								○
238	徳満寺跡	豊野								○
239	行人塚古墳	豊野								○
240	西字山古墳	豊野								○
241	豊野遺跡・豊野窯跡	豊野								○
242	中尾遺跡	豊野		○						
243	荒古窯跡群	豊野								
244	荒古窯跡	豊野								
245	荒古塚原群	豊野								
246	笹山遺跡	豊野								
247	堤遺跡	豊野								
248/252	跡山・一里塚塚原群	豊野								
253	清水上窪遺跡	豊野								
254	鍋山遺跡	豊野								
255	三日城跡	豊野								
256	石村城跡	豊野								
257	鷹寺遺跡	豊野								
258	山ノ神窯跡	豊野								S34
259	北石遺跡	豊野								
260	殿塚敷遺跡	豊野								○
261	穂長社古墳	豊野								○
262	北土井下遺跡	豊野			○					S58
263	明神前遺跡・栗野神社前遺跡	豊野		○	○					S52
264	神宮寺跡	豊野								○
265	入石遺跡	豊野								S41
266	中ノ丁遺跡	豊野								○
267/270	上ノ山1～4号古墳	豊野								○
271	鷹寺古墳	豊野								○
272	郷林古墳	豊野								○
273	神楽殿古墳	豊野								○
274	栗ノ平古墳	豊野								○
275	栗野神社古墳	豊野								○
276	釈迦堂塚原	豊野								○
277	廣慶塚古墳	豊野								○
278	小瀬遺跡	豊野								○
279	西沖遺跡	豊野								○
280	殿橋遺跡	中野市								
281	左岸寺跡	小川原								
282/83	六川道西沖第1・2号古墳	小川原								
284	丹波塚古墳	日滝								
285/26	日明塚第1・2号古墳	日滝								
287	北久保遺跡	都住								
288	十楯遺跡	都住								
289	焼釣遺跡	都住								
290	坂の上遺跡	飯田								
291	前平空跡	豊野								
292	橋場遺跡	豊野								

※ 288 は中野市では川端遺跡で登録されている

周辺の遺跡をみると、奈良時代では中野市壁田遺跡、替佐遺跡群（川久保・宮沖遺跡）（19）などで集落跡が確認されている程度で、奈良時代の集落跡の発見例が少ない。今回確認された沢田鍋土遺跡（83）は数少ない奈良時代の集落跡の調査例である。平安時代では、中野市の牛出遺跡（74）、栗林遺跡（62）、安源寺遺跡（112）、風呂屋遺跡（25）、替佐遺跡群（川久保・宮沖遺跡）（19）、飯綱平遺跡（18）、宮反遺跡（49）、飯山市の田草川尻遺跡、黄金石上遺跡、上野遺跡など千曲川沿いにある遺跡と、中野市の西条岩船遺跡群、上小田中遺跡、新野遺跡、間山遺跡、小布施町の中子塚遺跡（119）、大道上遺跡（123）など千曲川に流れ込む河川の扇状地上にある遺跡が確認されている。

中世:高丘丘陵では、中野市清水山古窯跡（中世墓址群）（81）、西山中世墓址遺跡（90）、牛出城跡（76）、安源寺館跡（68）などの発掘が実施されており、中世墓址では多量の五輪塔が発見されている。さらに、千曲川流域の近隣遺跡をみると、中野市対面所遺跡で多量の五輪塔が発見され、小布施町玄照寺跡、中野市牛出古窯遺跡（73）などでは火葬施設や周溝がある中世墓などが発見されている。この他、中野市替佐遺跡群（宮沖遺跡）（19）、千田遺跡（23）などで水田跡、畑跡、掘立柱建物跡などが調査されており、千曲川流域の中世社会の研究をする材料が蓄積されつつある。

註

- 1) 中野市遺跡詳細分布図では沢田鍋土遺跡と立ヶ花表遺跡は離れているが、2008年5月29日に中野市教育委員会に確認し、両遺跡は市道を挟んで接していることを確認した。
- 2) 宮沖、川久保、千田遺跡の発掘調査は長野県埋蔵文化財センターが実施しており、報告書は2013年3月刊行予定である。

引用・参考文献

- 大竹憲昭 2000 「第5章 成果と課題」『貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48
- 大竹憲昭 2010 「『竹佐中原遺跡石器文化』の時代性に関して（予察）」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85
- 小布施町教育委員会 1987 『長野県上高井郡小布施町遺跡詳細分布図』
- 小林秀夫 2006 「千曲川流域における古墳の動向—5世紀代の古墳を中心として—」『シナノ』の王墓の考古学 有山閣
- 谷 和隆・大竹憲昭 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『第15回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」—発表資料—』
- 谷 和隆 2004 「第5章第1節 旧石器時代石器群の位置付け」『貫ノ木遺跡 照月台遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書62
- 谷 和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館 研究紀要』第13号
- 豊田村教育委員会 2005 『飯綱平遺跡Ⅱ』
- 豊野町教育委員会 1985 『南曾峯遺跡』
- 豊野町誌刊行委員会 1997 『豊野町の自然 豊野町誌1』
- 豊野町誌刊行委員会 2000 『豊野町の歴史 豊野町誌2』
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌 豊野町の資料（一）』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 遺跡地名表』
- 中島庄一 1997 「第9章第1節 高丘丘陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群—がまん淵遺跡を中心として」『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡遺跡・がまん淵遺跡他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
- 中島庄一 2006 「中野市周辺の調査と石器群—南曾峯・沢田鍋土・がまん淵—」『第18回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム後期旧石器時代以前の遺跡・石器群をめぐる諸問題 発表資料』
- 中野市教育委員会 2006 『長野県中野市遺跡詳細分布図』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山遺跡 池田端窯

第2章 遺跡の環境

跡 牛出古窯遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24

長野県埋蔵文化財センター 2005 『長野県埋蔵文化財センター 年報 21』

長野県埋蔵文化財センター 2006 『長野県埋蔵文化財センター 年報 22』

長野県埋蔵文化財センター 2007 『長野県埋蔵文化財センター 年報 23』

長野県埋蔵文化財センター 2008 『長野県埋蔵文化財センター 年報 24』

長野県埋蔵文化財センター 2009 『長野県埋蔵文化財センター 年報 25』

長野県埋蔵文化財センター 2011 『長野県埋蔵文化財センター 年報 27』

牟礼村教育委員会 2000 『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』



高丘陵を望む（南から） 矢印部が遺跡

第3章 沢田鍋土遺跡の調査

第1節 調査の概要

1 遺跡範囲と発掘調査歴

沢田鍋土遺跡は中野市大字立ヶ花字鍋土583-7ほかに所在する。遺跡範囲は、南北約360m、東西約400mの範囲であり、立ヶ花表遺跡、立ヶ花表山窯跡、清水山窯跡とそれぞれ接している（第7図）。第7図の遺跡範囲は、立ヶ花表遺跡との境界部分で、『中野市遺跡詳細分布図』（中野市教育委員会2006）と相違があるが、平成20年に中野市教育委員会及び長野県教育委員会との協議上、定められたものである。

沢田鍋土遺跡ではこれまで3次にわたる発掘調査がおこなわれており、その調査履歴は以下のとおりである。それぞれの調査範囲を第7図に示した。

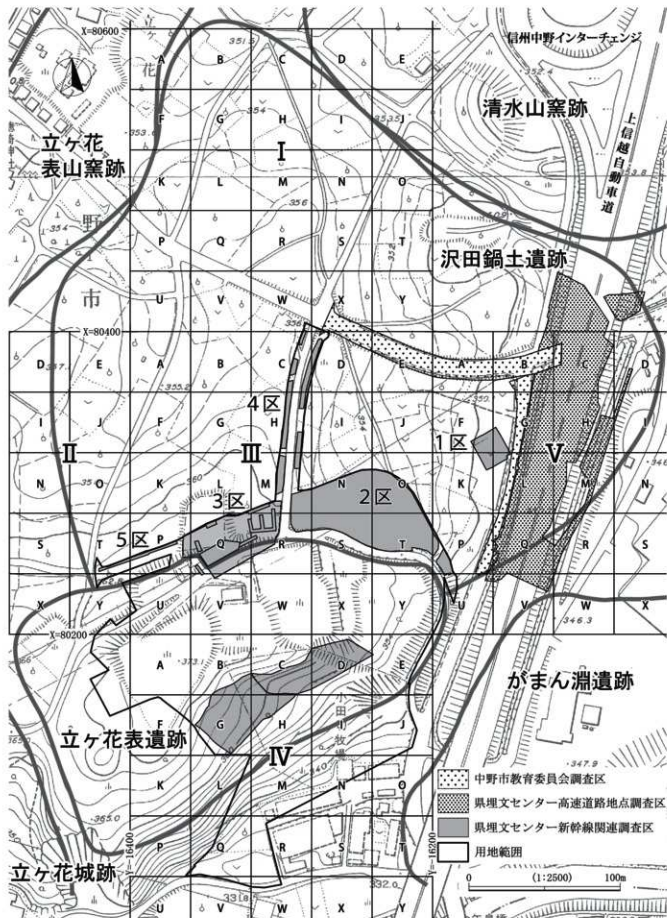
- ①平成3年（1991年）当センターによる上信越自動車道建設に伴う発掘調査（高速道路地点）
- ②平成4年（1992年）中野市教育委員会による県営農林漁業用揮発油税財源身代農道整備事業等の工事に伴う発掘調査（高速道路側道第Ⅰ・第Ⅱ地点）
- ③平成6年（1994年）中野市教育委員会による市道高丘9号線道路新設工事に伴う発掘調査（市道高丘9号線地点）

これらの調査により、旧石器時代の遺物集中地点6か所、縄文時代中期と古墳時代前期の粘土探掘跡、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡1棟、奈良時代竪穴住居跡4棟、奈良時代須恵器窯跡2基、灰原1基などが検出され、それぞれ発掘調査報告書が刊行されている（註1）。

2 調査成果の概要

今回、北陸新幹線建設に伴う発掘調査では、トンネル工事に伴う立坑部分（1区）、変電所用地内（2・3・5区）、変電所建設に伴う道路拡張工事部分（4区）の発掘調査をおこなった（第7図）。遺構の多くは2区と4区で確認された。1区では旧石器時代のブロックと時期不明の土坑、近世以降の溝跡が検出されたのみである。3区と5区では、トレンチ調査で遺構や遺物が検出されなかったため、それ以上の調査は不要と判断した。なお、3区は大きく削平され旧地形が変更されていることを確認した。4区北側の道路部分は、遺構が存在していたことが想定されるが、道路建設に伴う掘削で遺構検出面より下部まで破壊されていたため、調査不要と判断した。北陸新幹線建設に伴う発掘調査で検出された遺構は以下のとおりである。

- ブロック3か所（旧石器時代）
- 竪穴住居跡7棟（奈良時代。須恵器工房跡、鍛冶関連施設を持つ竪穴住居跡を含む）
- 掘立柱建物跡1棟（奈良時代？）
- 粘土探掘跡20基（縄文時代後期、平安時代、中世ほか）
- 土器焼成遺構2基（奈良時代）
- 陥し穴4基（縄文時代？）



第7図 沢田鍋土遺跡調査範囲

土坑98基(縄文時代、奈良時代、平安時代。ピット群2か所を含む)

この他、時期不明の土坑、中近世以降の溝跡などがある。近世以降の溝跡等の遺構は遺構配置図に位置のみを示した(第10～12図)。

また、旧石器時代の石器が粘土採掘跡から多数出土しており、旧石器時代のブロックが粘土採掘によって破壊されたことが伺われる。弥生時代から古墳時代では、遺構は確認されなかったが、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器と、石器が少量出土した。

3 基本層序

沢田鍋土遺跡は調査地点により、層序が異なっており、これまで刊行された発掘調査報告書でも、調査地点ごとに異なる基本層序を定めている。特に、旧石器時代以前の層序は遺跡全体に均一ではない。

今回の調査では、1区とそれ以外の調査区では、調査年次が異なり、層序の対比ができなかったため、それぞれ異なる名称を用いた。第8図に、高速道路地点も含めて層序を示した。

1区の層序

I層は耕作土。II層は暗褐色土からいぶい黄褐色土で、色調によりII a層とII b層に分層できる場所がある。III層は、明黄褐色から黄褐色のシルト層で、クラックが見られる。マンガン沈着の程度、クラックの入り方によりIII a層～III c層に分層される。IV層は黄褐色粘土であるが、場所により粘土の色調が異なる。V層は砂礫層である。III a・b層が旧石器時代の遺物包含層である。詳細は第8図に記した。

なお、II・III a・b層が風成堆積層、III c・IV層が水成堆積層である。

2～5区の層序

I層は耕作土。II層は黒褐色土、III層は暗褐色土でII層とIV層との漸移層。IV層は黄褐色シルト層でクラックが見られない上層部(IV 1層)とクラックが認められる下層部(IV 2層)に分層される。V層は粘土層、VI層は砂質シルト・砂層・砂礫層である(注2)。1区ではシルト層の下に砂礫層が確認されたが、2区の基本層序観察地点では、砂層・砂礫層(VI層)は確認できず、2区の粘土採掘跡よりも北西側にVI層が確認された。III O11グリッドでは、IV層の下にVI層(砂層)を確認している。V層とVI層が層序をなして確認されるところがないため、両者の堆積順は明確ではない。なお、1区の深掘り部では、粘土層の下に砂礫層がある(第15図)。詳細は第8図に記した。

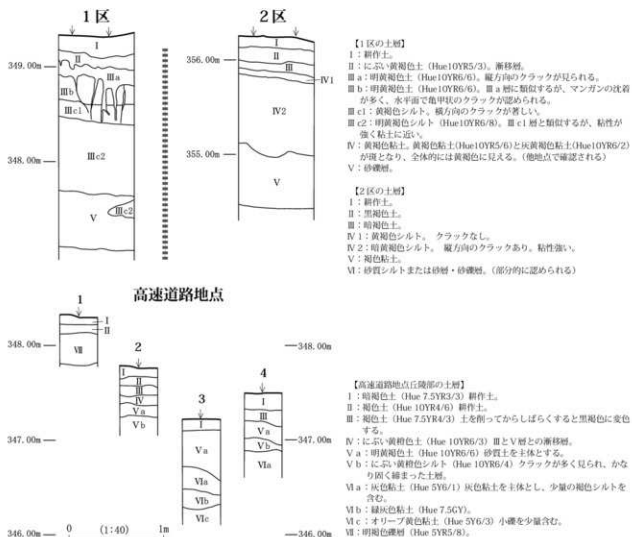
2区～5区は広範囲に及ぶため、表土(耕作土)下の土層が場所によって異なる。2区では、I層の直下にVI層の砂礫層が認められる場所もある。II層が奈良時代と縄文時代の遺物包含層、III層が縄文時代から旧石器時代の遺物包含層、IV層が旧石器時代の遺物包含層である。

各調査地点の層序の対比と沢田鍋土遺跡の基本層序

これまでの発掘調査では、それぞれの調査地点により層序名が異なっており、沢田鍋土遺跡の基本層序が示されていない。特に、旧

地点名	新幹線地点1区	新(本)線基本土層(2区)	市道高丘9号線地点	高速道路側道地点	高速道路地点	
層序	I	I	I	I	I・II	表土 黒褐色・暗褐色土
	(欠落)	II	II	II	III	
	II	III	III a	III 1	IV	シルト層
	III a～c 1	IV 1・2	III b IV V	III 2	V a・b	
	III c 2・IV	V		IV・V	VI a～c	
V	VI?			VI		

第4表 沢田鍋土遺跡 層序の対比



第8図 沢田鍋土遺跡の層序 (1)

石器時代の遺物包含層の名称が報告書により異なっており、対比がなされていない。これは、旧石器時代の遺物包含層が水成層起源であり、発掘地点ごとに土層の様子が異なっており、対比が困難であることに起因する。各調査地点の層序との対比を試みるため、第9図に各調査地点の土層図を示した。各地点の層序を概観すると、シルト層と粘土層の在り方が調査地点により異なるが、基本的にはⅠ：表土（耕作土）、Ⅱ：黒褐色または暗褐色土（平安時代から縄文時代の遺物包含層）、Ⅲ：漸移層、Ⅳ：黄褐色シルト層（旧石器時代遺物包含層）、Ⅴ：砂質シルト層または砂層（部分的な堆積）、Ⅵ：粘土層、Ⅶ：砂礫層と捉えられる。これに従って、新幹線地点2区（本書）は層名を付しており、2区の層序を本報告書での基本層序とする。報告書の記述を参考に、各地点の層序の対比を第4表に示した。

4 調査の方法

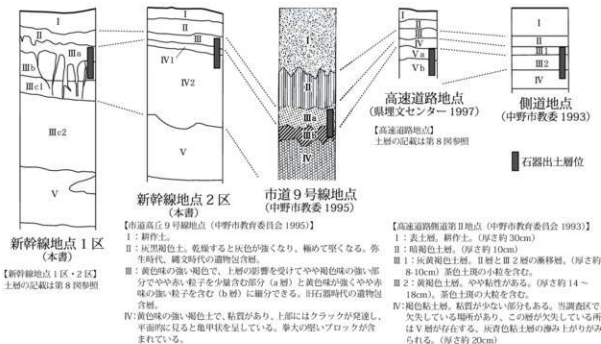
遺構の検出と調査面

基本層序Ⅰ・Ⅱ層を重機で除去し、遺構検出をおこなった。遺構検出面はこの1面で、縄文時代以降の遺構を検出した。

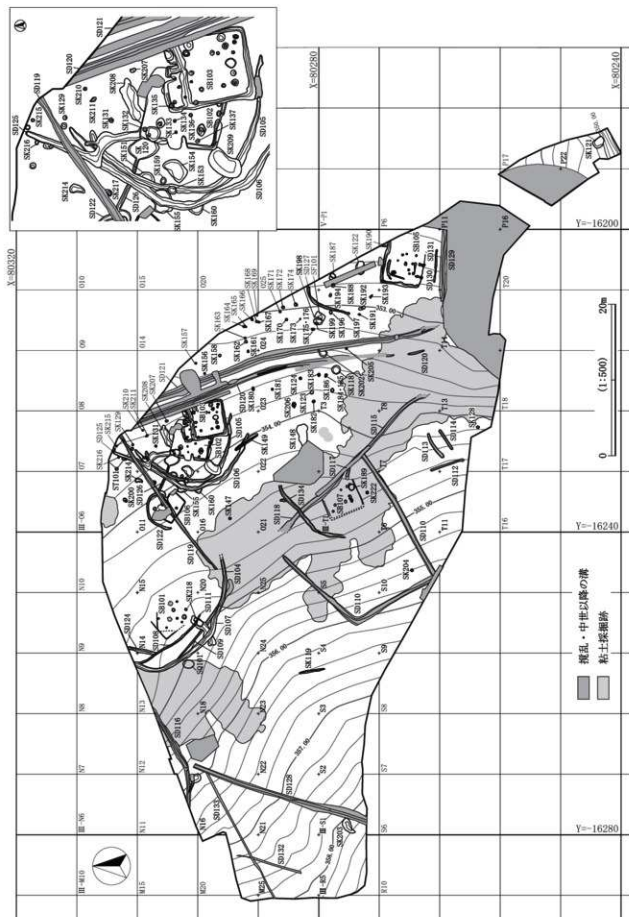
これまでの発掘調査成果から、旧石器時代時代のブロックの存在が予想されたため、旧石器時代の遺物包含層に相当する基本層序Ⅳ層を掘り下げる試掘調査をおこなった（第13図）（註3）。Ⅰ・2区では2×2mの試掘坑を設定し、人力で掘り下げ、3・4区では重機を用いてトレンチを掘削し、石器の有無を確認した。Ⅰ区と2区で、基本層序Ⅲ層とⅣ層から剥片を検出した。さらに、遺構検出及び遺構埋土掘削時に石器が出土した箇所を中心に、調査範囲を設定し旧石器時代遺物包含層の掘り下げをおこなった（第13図）。

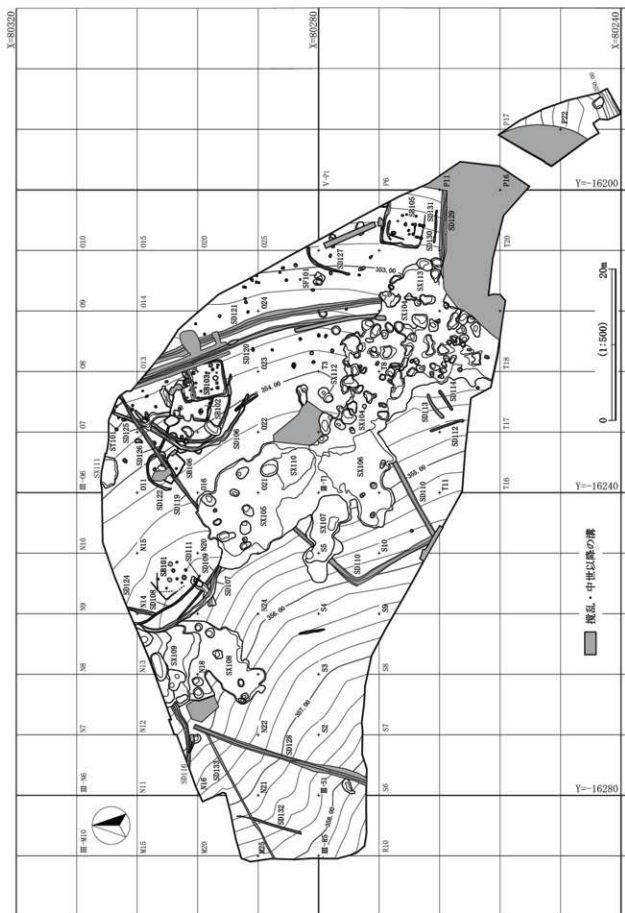
調査区およびグリッドの設定

調査区の名称：調査の過程で調査区名称を以下のように変更した。遺物、写真等の記録類はすべて報告書で用いた変更後の地区名称（新名称）を用いている。日誌、協議記録等に旧名称が用いられているものがある。

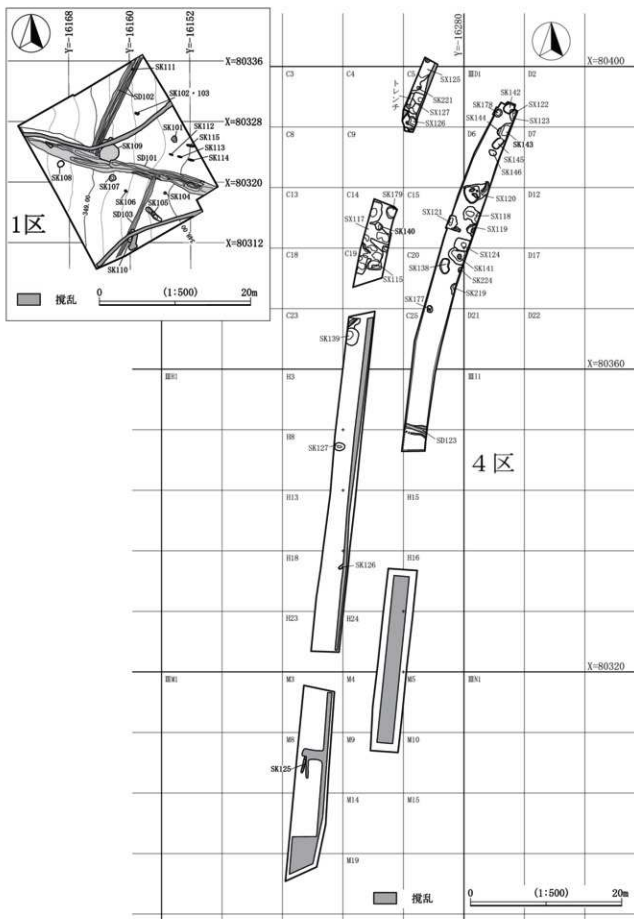


第9図 沢田鍋土遺跡の層序（2）





第11図 2区道構配置図(2)



第12図 1区・4区遺構配置図

(新名称)	(旧名称)
1区	地区名なし
2区	E区・F区
3区	C区・D区
4区	G区
5区	A区・B区
6区	H区

グリッドの設定方法は1章2節に記述した。但し、1区は調査区内に任意の基準線を設定し、他の地区とは異なるグリッドを設定した(第15図)。

遺構番号

当センターでは平成3年に上信越自動車道建設に伴い沢田鍋土遺跡の発掘調査をおこなった(高速道地点)。今回の調査では平成3年の調査と同じ遺跡記号「ASD」を用いており、高速道地点と区分するために、新幹線関連の調査では101番から遺構番号を用いた。今回の調査では以下の遺構記号及び番号を用いた。

SB【竪穴住居跡・竪穴状遺構】SB101～SB107

SK【土坑・土器焼成遺構・陥し穴】SK101～SK224

SD【溝跡、自然流路他】SD101～SD134

ST【掘立柱建物跡】ST101

SF【火床】SF101

SX【粘土採掘跡他】SX101～SX127

SQ【遺物集中地点】SQ101～SQ102。なお、発掘調査では、旧石器時代の遺物包含層から出土した石器群の平面的なまとまりに対し遺構記号を用いていない。報告書ではこれらのまとまりをブロックと呼称し、101号ブロック～103号ブロックの名称を用いた。

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

第13図に旧石器時代の包含層の調査範囲を示した。この他に、3区上段でマス掘りによる確認調査をおこなったが、遺物は検出されなかった。剥片が出土した試掘坑を中心に1区で2か所、2区で1か所、4区で2か所の調査区を設定し、基本層序Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げをおこなった。調査の結果、1区では基本層序Ⅳ層中に1か所、2区では基本層序Ⅲ層中に1か所、4区では基本層序Ⅳ層中に1か所のブロック(101～103号ブロック)を検出した(註4)。いずれも剥片のみで構成され、二次加工が認められる定形的な石器は含まれない。これとは別に、2区と4区の縄文時代以降の遺構埋土等から多数の剥片とともに、ナイフ形石器、台形石器、槍先形尖頭器、彫器、石刃、細石刃、石核が出土した。これらの石器群は遺構単位で取上げており、詳細な出土地点は不明であるが、一定の範囲にまとまって出土する傾向があり、前述の



3区旧石器調査

101～103号ブロックを含めて6か所の遺物分布のまとまり(A～F地点)を認識した(第14図)。これらの他に、A地点から北に約20mの地点(A7グリッド)で、基本層序IV層から黒曜石の剥片が1点出土し、周辺を掘り下げたが、他に遺物は出土しなかった。

なお、1区において、土層の火山灰分析と光ルミネッセンス年代測定を実施した。火山灰分析ではⅢa層が立川ローム上部ガラス質火山灰(UG:1.5～1.6万年前)の降灰層準、Ⅲb層が始良丹沢火山灰(AT:2.6～2.9万年前)の降灰層準である可能性が高いことが指摘された。また、Ⅲc1・Ⅲc2層からは御岳第1テフラ(On-Pm1)、阿蘇4(Aso4)に由来する可能性がある火山ガラスが検出され、Ⅲc層群の堆積年代が10万年以降のものであることが想定された。光ルミネッセンス年代測定では第5表に示した結果を得た。詳細は、添付DVDのPDFファイル「沢田銅土遺跡ルミネッセンス年代測定」「沢田銅土遺跡火山灰分析」を参照していただきたい。

基本層序名	I区層名	IRSL年代(千年前)	火山灰分析
Ⅲ	Ⅱ	5.2±0.4	UG
	Ⅲa	12±2 (14±2)	UG・AT
	Ⅲb	22±2	AT
Ⅳ	Ⅲc1	34±4	On-Pm1?
	Ⅳ	36±3	

※()内の数値はフェイディング補正をした年代値。

2 遺物の分布

第5表 光ルミネッセンス年代測定と火山灰分析結果

A～F地点の6か所の遺物分布のまとまりを認識した(第14図)。

A地点:1区J2グリッド周辺の基本層序Ⅲ層からIV層(註5)にかけて、剥片7点、破片2点が出土し、101号ブロックとした(第15図)。黒曜石6点、チャート3点である。剥片はすべて2cm以下の小形のものである。6m×3mの範囲に散漫に分布する。南側の調査区外に分布域が広がる可能性がある。

B地点:2区ⅢO12グリッドⅢ層で剥片4点、破片13点が出土し、102号ブロックとした(第16図)。102号ブロックは4m×4mほどの範囲に分布する。すべて黒曜石である。この他に、102号ブロック周辺の縄文時代の遺構埋土や遺物包含層から、槍先形尖頭器1点、ナイフ形石器1点、細石刃1点、二次加工がある剥片1点、微細な剝離がある剥片2点、石刃1点、剥片・破片109点が出土した。槍先形尖頭器(第19図9)は、102号ブロックに近い位置で出土しており、102号ブロックと同じ時期の石器群である可能性がある。B地点では、縄文時代の土器がほとんど出土していないことから、剥片・破片の大半が旧石器時代の遺物である可能性が高い。

C地点:2区ⅢT01グリッド周辺の縄文時代以降の遺構埋土から、ナイフ形石器4点、台形石器1点、抉入削器2点、彫器1点、二次加工がある剥片1点、石刃4点、細石刃3点、石核1点、剥片・破片284点が出土した。SX107埋土からは100点を超える黒曜石の剥片・破片が出土しており、他の遺構に比べ出土数が多いことから、SX107があるⅢS05グリッド周辺に旧石器時代のブロックが存在していたと想定できる。さらに、粘土採掘跡で石器製作活動は考え難いことから、粘土採掘跡の埋土から出土した剥片、破片の多くは旧石器時代の遺物と判断した。また、台形石器、ナイフ形石器と細石刃と思われるものが出土しており、異なる時期の石器群が混在している可能性が高い。

D地点:2区ⅢN13グリッド周辺の縄文時代以降の遺構埋土から、ナイフ形石器1点、石刃2点、剥片3点が出土した。これらの石器は縄文時代の粘土採掘跡埋土などから出土した。

E地点:2区ⅢM25グリッド周辺の縄文時代以降の遺物包含層から、ナイフ形石器1点、抉入削器1点、剥片・破片が5点出土したのみで、他の地点に比べ石器が少ない。抉入削器と剥片は縄文時代のものである可能性がある。

F地点:4区でⅢC20・C25グリッドのIV層から剥片11点、破片9点が出土し、103号ブロックとした(第17図)。5m×2mの範囲に分布するが、東側の調査区外に分布範囲が広がると予想される。これらの石材は黒曜石16点、チャート3点、珪質頁岩1点である。この他、103号ブロックの周辺の遺構埋土から

台形石器 1点、抉入削器 2点、二次加工がある剥片 3点、微細な剝離がある剥片 4点、石核 6点、石刃 1点、剥片・碎片 91点が出土した。遺構埋土からは奈良・平安時代の以降の遺物が出土しており、縄文時代、弥生時代の土器は 1点も出土していない。また、剥片等が多数出土する遺構（SK177・219、SX117）（第6表）は 103号ブロックの周辺部にあり、特に SK177・219 はブロックに接している。

3 遺物

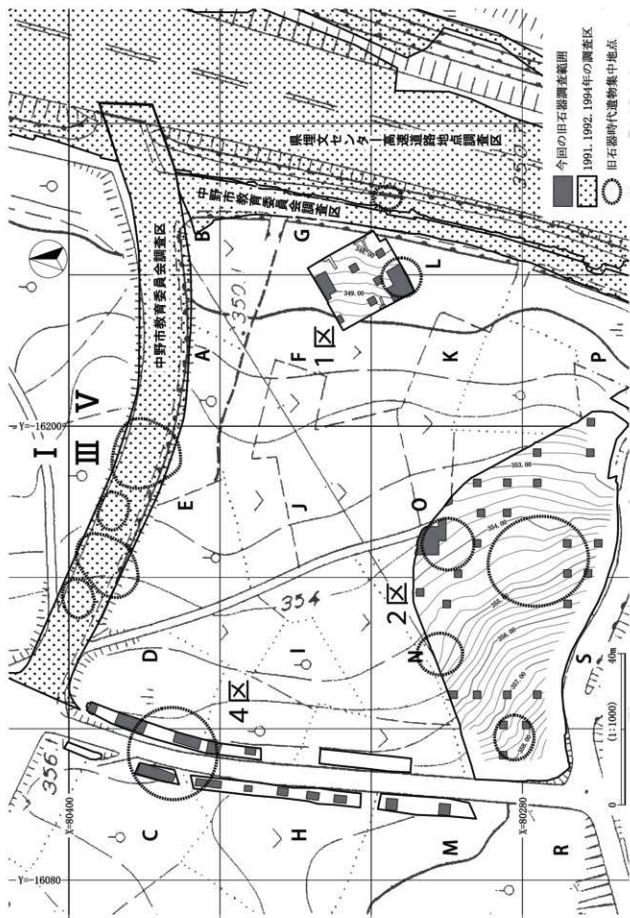
槍先形尖頭器 1点、ナイフ形石器 7点、台形石器 2点、彫器 2点、抉入削器 5点、細石刃 4点、石刃 8点、二次加工がある剥片 7点、微細な剝離がある剥片 9点が出土した。二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片については、前述の A～F 地点の範囲外の遺構埋土等から出土したものを含んでおり、縄文時代の遺物が含まれている可能性を考慮しなくてはならない。これらの石器の大半は黒曜石で、二次加工があると微細な剝離がある剥片に、玉髓 2点、チャート 1点、珪質頁岩 1点が見られるのみである。前述のとおり、旧石器時代の遺物包含層から出土したものは剥片 22点・碎片 24点のみであり、他は縄文時代の遺物包含層（基本土層Ⅱ層）と遺構埋土から出土した資料である。

第 18・19 図に旧石器時代の石器と判断したものを示した。これらは縄文時代以降の包含層または遺構埋土から出土したもので、図示したものはすべて黒曜石製である。

1・2 は台形石器、3～8 はナイフ形石器、9 は槍先形尖頭器、10・11 は彫器、12～16 は石刃、17～20 は細石刃である。但し、細石刃については、出土点数が少なく、細石刃核も確認していないことから細石刃と断定はできない。

上記の石器の他に、縄文時代以降の遺構埋土等から剥片・碎片 640点と石核 9点が出土した。第 4表に遺構別の剥片、碎片的点数と縄文土器の出土量を示した（註 6）。大半が黒曜石であり、玉髓、チャートなどの石材がわずかに含まれる。縄文土器が出土していない遺構やグリッドから出土した石器類は旧石器時代の遺物である可能性が高く、特に、縄文土器が出土しない 4 区の石器類はすべて旧石器時代の遺物であると判断した。出土状況や剥片の形態から、旧石器時代の遺物であると判断したものは、遺物観察表（添付 DVD に収録）の時期欄に「旧石器」と記載し、縄文時代の可能性があるものについては、「旧石器・縄文時代」と表記した。

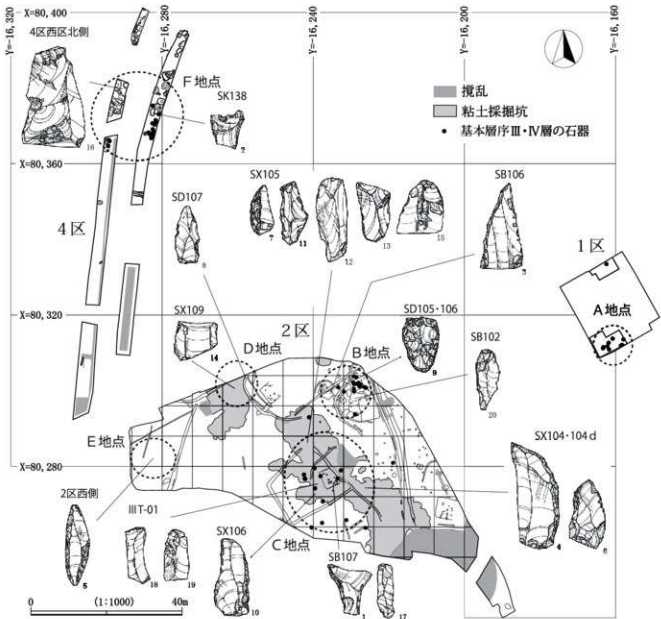
定形的な器種の内 26 点の黒曜石産地推定分析をおこなった結果、諏訪星ヶ台群 6 点、和田鷹山群 15 点、和田土屋橋北群 2 点、和田土屋橋西群 2 点、和田芙蓉ライト群 1 点、との結果を得た。諏訪星ヶ台群は C 地点、和田土屋橋北群は B 地点のみに限られ、和田鷹山群は B～F 地点すべてに見られた。和田土屋橋西群は C と F 地点、和田芙蓉ライト群は C 地点にそれぞれ 1 点ずつ確認された。なお、黒曜石産地推定分析は望月明彦氏に依頼し実施したもので、分析報告は添付 DVD に収録した。



第13図 旧石器時代の調査範囲(1区・2区・4区)



4区出土の石器 (S ≒ 1/2)

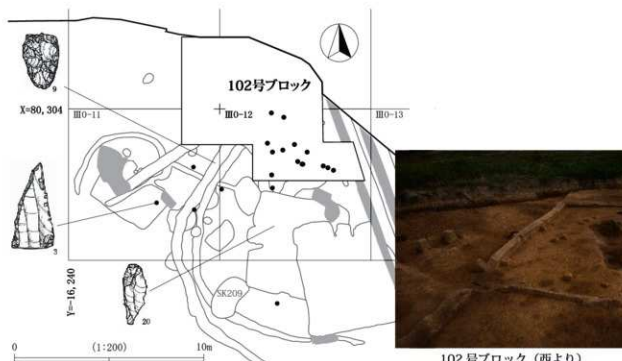


第14図 旧石器時代の遺物出土状況(2区・4区)

調査地区名	遺物集中地点名	遺構グリッド	黒曜石	チャヤト	頁岩	無垢品質安山岩	玉石	燧石	燧石	合計	總出土数(%)
2	B	#006	1						1		
2	B	#007	1						1		
2	B	#011	2						2		30
2	B	#012	10	1					11		
2	B	#013	4	1					5		
2	B	SB102	12	1	1				14		
2	B	SB103	8						8		
2	B	SD106	1						1		
2	B	SD125	2						2		
2	B	SK120		1					1		
2	B	SK154	1						1		
2	B	SK208	4						4		
2	B	SK209	58						58		
2	B・C外縁	#016		2					2	10	
2	B・C外縁	#017	4						4		
2	C	#021	2						2	190	
2	C	#104	6						6	790	
2	C	SB107	17						17		
2	C他	SX1044他	16	1	3				20	1144	
2	C	SX105	30	5	3	6			54	10253	
2	C	SX106・110	5	1					6		
2	C	SX106	4	1					5	9113	
2	C	SX106・110	10		2				12	842	
2	C	SX107	126		2	1			129	1139	
2	C	SX110	57	1					58	4585	
2	C外縁	#T03	1						1		
2	D	SX108	1	1					2	6455	
2	D外縁	SX109	1						1	9037	
2	B	SD128	1	1					2		
4	F	#C14	2						2		
4	F	#C20	4						4		
4	F	SK128	5						5		
4	F	SK129	4						4		
4	F	SK140	1						1		
4	F	SK141	2						2		
4	F	SK142	1						1		

調査地区名	遺物集中地点名	遺構グリッド	黒曜石	チャヤト	頁岩	無垢品質安山岩	玉石	燧石	燧石	合計	總出土数(%)
4	F	SK177	30						30		
4	F	SK219	10						10		
4	F	SX115	5						5		
4	F	SX117	23						23		
4	F	SX118	2						2		
4	F	SX120	1						1		
4	F	SX124	1						1		
4	F外縁	SK146						1	1		
1	地点外	SD101	13	25	2	1			41		
1	地点外	SD102		3					3		
1	地点外	SK101	1						1		
1	地点外	SK110	3	2	2				7		
2	地点外	#019	1						1		
2	地点外	#024	2	1					3		
2	地点外	#501	2						2		
2	地点外	#504	5						5		
2	地点外	#705	1		1				2		
2	地点外	#T10		1	1				2		
2	地点外	#T15							1		
2	地点外	V P22	1						1		
2	地点外	SB104	25	1					26		
2	地点外	SB105				5			5		
2	地点外	SB106		1					1		
2	地点外	SD118	1	1					2		
2	地点外	SD120	1						1		
2	地点外	SD121	2						2		
2	地点外	SD129		2	1				3		
2	地点外	SD134	1						1		
2	地点外	SP101	5						5		
2	地点外	SK121		1					1		
2	地点外	SK187	1						1		
2	地点外	SK196	1						1		
2	地点外	SK198	3						3		
2	地点外	SX113		1					1		
4	地点外	SK223	1						1		
4	地点外	SX125	1						1		

第6表 出土地点別剥片・碎片点数

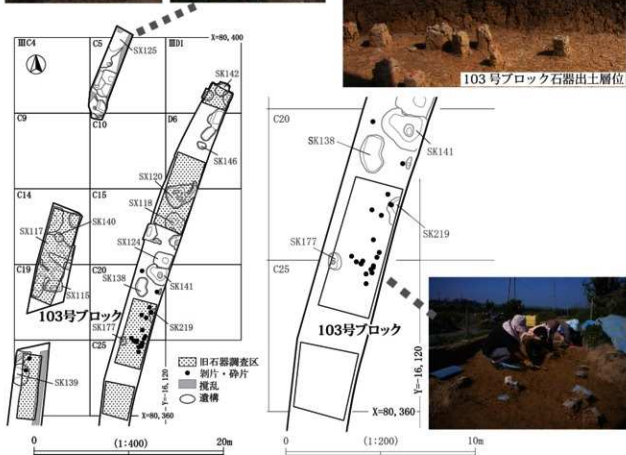


102号ブロック（西より）

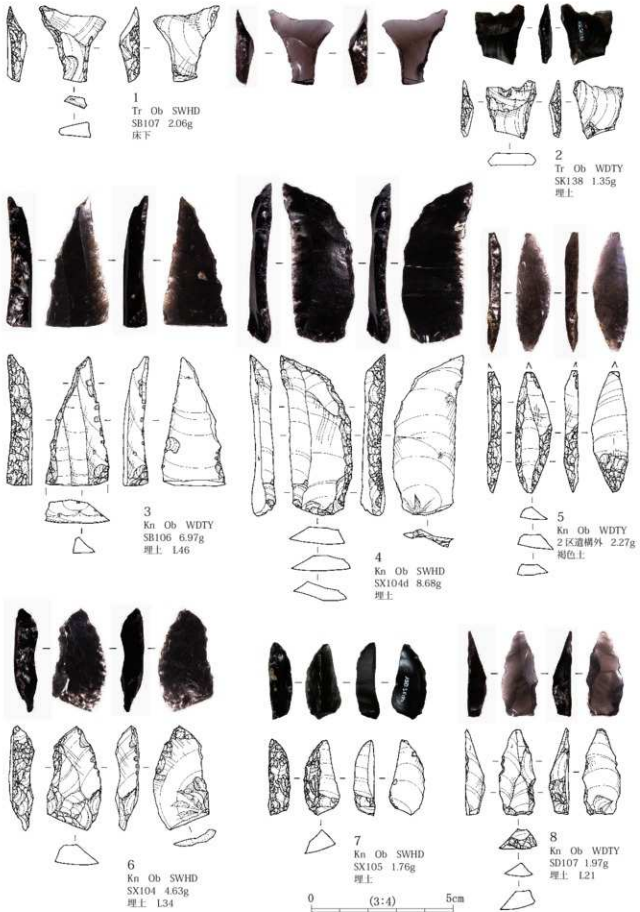
第16図 旧石器時代の遺物出土状況（2区B地点）



4区出土の割片 (S 1/2)



第17図 旧石器時代の遺物出土状況(4区F地点)



第18図 旧石器時代の石器(1)



第19図 旧石器時代の石器(2)

第3節 縄文時代から古墳時代の遺構と遺物

1 概要

縄文時代

2区で縄文時代後期初頭から前葉の粘土採掘跡3か所を確認した。この他、時期不明の陥し穴が2区で2基、4区で2基検出された(第25図)。この他、1区では遺構は検出されなかったが、打製石斧7点、石鏃5点のみが出土した。3～5区では縄文時代の遺構、遺物は検出されなかった。

2区では粘土採掘跡周辺を中心に遺物が出土した。縄文土器はすべて2区から出土しており、その大半は後期初頭から前葉で、中期の土器片がわずかに含まれる。第20図に、表土剥ぎ及び遺構検出時に出土した土器のグリッド別重量分布と、遺構埋土の土器出土量を示した。土器の大半は、SX105・106・108～110などの粘土採掘跡の埋土から出土した。石器は粘土採掘跡を中心に出土するが、土器が出土しない調査区東端部(ⅢO24・ⅢT4・5・10グリッド)などでも複数の石器が出土した。特殊磨石など後期には認められない石器も出土しており、石器には後期以外のものが一定量含まれていると判断できる。

この他、2区と4区で剥片、砕片、石核などが出土した。多くは旧石器時代の遺物の可能性があり、詳細は第2節に記載した。

弥生時代・古墳時代

遺構は検出されていないが、弥生時代中期の太型蛤刃石斧1点と弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器が数点出土した。

2 遺構

(1) 粘土採掘跡

粘土層を掘り込んだ不整形な穴を粘土採掘跡と認識した。2区で検出された7基の粘土採掘跡は、出土土器から、すべて縄文時代後期堀之内1式を中心としたものと判断できる。粘土採掘跡は、不整形なアメーバー状の平面形態をしており、複数回の採掘の結果こうした形状となったものと推定できるが、それぞれの採掘の単位を明確に把握することができなかったため、突出部分などで平面的に区分できるまとまりを捉えて、便宜的に別個の遺構番号を付し、7基の遺構とした。これらの採掘跡は、大きく3か所にまとめられる。すなわち、①SX105・106・107・110、②SX108・109、③SX111である。

遺構ごとに出土土器を見ると、SX105・106・109・110と比べ、SX107・108が古い様相の土器がまとまっている(第21図)。

なお、長野県内の粘土採掘跡の調査例は十数例と少なく、縄文時代の粘土採掘跡は沢田鍋土遺跡を含め、中野市東池田古窯跡遺跡、飯綱平遺跡のみである。沢田鍋土遺跡では、今回確認された2区の粘土採掘跡の北東方向の高速道路地点で、縄文時代中期と古墳時代前期の粘土採掘跡が検出されている(長野県埋蔵文化財センター1997)。

SX105・106・107・110(第22・23図)

位置:ⅢN20・25、ⅢO16・21、ⅢS5、ⅢT1・2グリッド。

構造:これらはアメーバー状の平面形をしており複数の単位に区分できることから、それぞれ遺構名を付したが、それぞれの切り合い関係は捉えられなかった。SX105とSX110は検出時には区別されていた

が、結果的に平面形では区分できないものとなった。SX110の東側が大きな攪乱で破壊されている。遺構は南北27.2m、東西19.4mの範囲に及び、深いところで検出面から0.8m、検出面での広さはおおよそ300㎡である。粘土層またはシルト層を掘りこんでいる。埋土上層部は暗褐色土が堆積するが、下層部分には粘土及び暗褐色土、黄褐色土の混土層がみられる。これらの堆積状況から、廃土を採掘し終えた場所に置きながら順次採掘坑を拡大し、採掘で生じたくぼみに暗褐色土が自然堆積する様子が伺われる。

SB107、SD107・SD110・SD118・SD119・SD134・SK222・SX104と重複しており、本遺構群が一番古い。

遺物出土状況：遺構埋土から、縄文時代後期初頭から前葉の土器が主体的に出土した（第21図）。SX107出土土器が他に比べ古い様相を示している。文様が確認できる土器はすべて後期のものである。

縄文時代以外の遺物では、奈良時代の須恵器・土師器の小破片が出土した。SX105で47点、SX106で20点、SX107で1点、SX110で57点である。比較的多くの須恵器・土師器が見られるが、大半が攪乱または上層の黒褐色・暗褐色土から出土したもので、それらを除くと全て小さな破片である。攪乱を見落とした可能性を考慮し、SX105・106・110出土の奈良時代土器小破片については、遺構の時期を示す遺物ではないと判断した。SX106・110埋土に掘られたSD134の南半部は検出できずに、SX106・110として調査しており、この時SX106・110の遺物に奈良時代のものが混入したものと考えられ、出土位置が確認できる奈良時代の遺物はすべてSD134の推定延長上にあることを確認した。

この他、SX106とSX110に接したSX104d（註7）でも多数の須恵器・土師器とともに34点（約1.1kg）の縄文土器破片が出土している。縄文時代の遺構を破壊してSX104dが掘られた可能性があるが、遺構の切り合いが正確に捉えられなかったため、推測の域をでない。

石器では、台石2点、特殊磨石1点、敲石2点が出土した。この他、SX105・107・110で多数の剥片が出土したが、ナイフ形石器などが出土していることから、剥片は旧石器時代の遺物の可能性が高い。詳細は第2節に記述した。また、SX105・106から楕円礫12点を採取した。欠損品も認められるが、長さ15～20cm程の棒状のものが多く、形状に選択性が認められることから遺物であると判断した。調査当初は遺物と認識していなかったため、廃棄されたものがある。粘土採掘跡内に出土する礫が遺物であるか否か、体系的な調査と検討が必要である。

遺構の時期：遺物出土状況からSX105・106・107・110は縄文時代後期初頭から前葉の所産と判断した。

SX108・109（第24図）

位置：Ⅲ N12・13・17・18 グリッド。

構造：アメーバー状の平面形をしており、大きく2つの単位に区分できることから、それぞれに遺構名を付したが、切り合い関係は捉えられなかった。北側は調査区外に広がっており全容は不明である。遺構は南北16.2m、東西11.4mの範囲に及び、深いところで0.7m、検出面での広さはおおよそ124㎡である。粘土層及びシルト層を掘りこんでいる。斜面下方（北東側）では壁面が明瞭にできなかったが、SD107より東側に遺構は広がらない。調査区北壁の土層断面で、基本層Ⅱ層が遺構埋土を覆っていることが確認された。埋土上層部は暗褐色土が堆積するが、下層部分には粘土及び暗褐色土、黄褐色土の混土層がみられる。これらの堆積状況から、廃土を採掘し終えた場所に置きながら順次採掘坑を拡大し、採掘で生じたくぼみに暗褐色土が自然堆積する様子が伺われる。SD107・109・116と重複しており、本遺構が一番古い。

遺物出土状況：縄文時代後期の土器が主体的に出土した。縄文時代以外の遺物では、SX108から1点の須恵器杯小破片が出土したが、2cm角程度の小破片であり、調査で攪乱を見落とした可能性を考慮し、遺構の時期を示す遺物ではないと判断した。東端部の上層の暗褐色土中に土器がまとまっており、遺物集中地点（SQ101）として遺構名を付したが、SX108・109埋土中の土器であると判断した。遺構埋土か

ら後期初頭から前葉の土器が出土した。SX109では底部破片が多く、10個体分の底部を確認した。土器の様相をみると、SX109が堀之内1式の時期が多いのに対し、SX108により古い様相の土器が出土する傾向がある(第21図)。

石器では、石鎌1点、打製石斧1点、剥片3点が出土した。また、SX109から8点の棒状の楕円礫を採取した。長さ15cm前後のものが多く、形状と大きさに選択性が認められることから遺物と判断したが、調査当初は遺物と認識していなかったため、採取されなかったものがある。また、弥生時代中期栗林式に多くみられる輝石安山岩製の刃器がSX108から1点、SX109から3点出土した。当初、弥生時代中期の石器と考えたが、当該期の土器が出土していないこと、千曲川下流の中野市千田遺跡の縄文中期から後期の遺物包含層において輝石安山岩の同様な石器が出土していることから、縄文時代の石器と判断した(註8)。

遺構の時期：上記の遺物出土状況から、SX108・109は縄文時代後期初頭から前葉の所産と判断した。

SX111 (第25図)

位置：Ⅲ O06 グリッド。

構造：北側が調査区外にあり、全体の形状は不明である。遺構は南北2.2m、東西4.3mの範囲に及び、深いところで0.4mで、検出面での広さはおおよそ7mである。シルト層を掘りこんでいる。

遺物出土状況：縄文土器数点と、須恵器小破片1点が出土した。縄文土器の文様が確認できるものはすべて縄文時代後期のものである。石器では、石皿破片1点(第31図26)が出土した。

遺構の時期：須恵器小破片は2cm角程度であり、混入の可能性があることから、縄文時代後期初頭から前葉の遺構である可能性が高いと判断した。

(2) 陥し穴

4基の陥し穴が確認された。1基は底面に小ピットを有する形態で、3基は溝状の陥し穴である。これらの遺構には出土遺物がなく、時期の判別は困難であるが、埋土の色調から平安時代以前のものであることが想定され、土器生産に係る活動がなされている奈良、平安時代の遺構の近辺に陥し穴は設置しないと考えられることから、古墳時代以前の遺構と判断した。縄文時代の遺構と断定することはできないが本節で扱うこととする。

溝状の陥し穴は、飯綱町表町遺跡などで同様の形態の陥し穴が確認されており、縄文時代後期の遺構とされている(長野県埋蔵文化財センター2009)。表町遺跡の例は複数の土坑が連続して配列されることが観察されており、本遺跡でも、3基は規模と形状が類似しており、配列された陥し穴群の一部と推定できる。特にSK119とSK149は等高線に直行する方向に配置されており、一連の遺構群である可能性が高い(第25図)。SK119とSK149の間隔は約32mであるが、中間部に粘土採掘跡があり、1基が壊れていると想定すると間隔は約16mとなる。SK125は他の2基に比べ主軸がややずれており、別の配列の遺構群であると推定できる。

SK119 (第25図)

2区Ⅲ N23 グリッドで検出。長さ3.41m、幅0.27m、深さ0.52mである。砂礫層を掘り込んで掘削されている。出土遺物なし。

SK125 (第25図)

4区Ⅲ M8 グリッドで検出。北側が攪乱で壊されており、残存部分の長さ2.13m、幅0.28m、深さ0.54mである。出土遺物なし。

SK149 (第25図)

2区ⅢO17グリッドで検出。長さ3.58m、幅0.47m、深さ0.88mである。出土遺物なし。SD106と重複しており、SK149の方が古い遺構である。SD106は奈良時代の遺構であり、本遺構が奈良時代以前のものであることが判明した。

SK177 (第25図)

4区ⅢC20・25グリッドで検出。長さ0.86m、幅0.70m、深さ0.79mである。底面中央に直径約0.2m、深さ0.29mの穴がある。出土遺物なし。

3 遺物

(1) 縄文時代の土器

2区の粘土採掘跡の検出面および埋土から縄文時代後期の土器約50kgが出土した(第20図)。今回の調査では、後期初頭から前葉の土器が大半を占め、後期以外では中期1点(第27図12)を確認したのみである。粘土採掘跡埋土の粘土を混じた土層から出土した土器は脆く、取り上げが困難なものがありTOTを用いて処理をして補強したものがある(註9)。粘土採掘跡出土土器は概して風化が著しく器面が剥落しているため、文様の有無が不明なものが多い。なお、器面が剥落しており観察ができないものは、胎土の類似をもって縄文土器と認識した。また、当該期の土器は、精製土器と粗製土器に大別されるが、器面の観察ができないものが多く、粗製土器と精製土器の判別が困難であり、その割合は算出できなかった。

2区の粘土採掘跡から出土した後期の土器は、大きく2つに大別される。堀之内1式期(後期前葉)とそれに先行すると考えられる一群(後期初頭)である。後者は概ね称名寺2式に併行すると考えておきたい。なお、本遺跡出土の土器群は、約2km北東の栗林遺跡で類似資料がまとめて出土しており、栗林遺跡の報告(長野県埋蔵文化財センター1994)の分類に基づいて本遺跡の土器を分類した。

中期は12の1点のみであり、加曾利EⅢ式のキャリバー形土器の口縁部である。

後期初頭は10・11・13・14・58～64・69・70・74～79が該当する。10・58・59・74・75は櫛歯状施工具による条線文がある土器で、本遺跡では格子目状と蛇行する条線が認められる。10は5本一単位の格子目状の条線である。74・75は同一個体の可能性ある。なお、SX105とSX108に格子目状の条線文の土器が少量出土したが、条線文は称名寺式、三十稲場式などに伴っている例が確認されている。11は頸部の縄文帯と胴部上半に文様の痕跡が認められるが、表面の剥落が著しく文様が判別できない。13・14・69・70・76は断面円形の棒状工具による刺突文が認められる。69の橋状把手と76の鱗状の刺突文は三十稲場式で認められる要素である。77～79の浅鉢形土器は、胎土が類似しており同一個体の可能性があり、SX108から出土したことから後期初頭と判断した。14と70は棒状工具による刺突別に胴部は無節の縄文が施文され、同一個体の可能性がある。60～64は堀之内式には認められないモチーフの帯縄文で、栗林遺跡第Ⅸ群土器(称名寺式土器様式)の中に類似するモチーフがある。

後期前葉は1～9・15～57・65～68が該当する。これらは、文様と器形から以下のように分類される。1・3・5・6はA群、2・9はB1群、4はB2群、7はC群である(註10)。8は無文土器である。破片資料では、20～27・40・57はA群、34・37はB1群である。なお、B2群の9・34など南三十稲場式ととらえられる土器が認められる。なお、3は表面が剥落しており、部分的に沈線が確認されるのみで文様が判別できない部分が多い。図示していないが、口唇部に1条の浅い沈線があると思われる。30は文様の全容が不明であるが、共存遺物から後期初頭の可能性がある。56・66～68などやや新しい様相を示しているようにもみえる資料もあるが、破片であり明確には判断できない。

80～86は底部に網代痕が認められるものである。表面が剥落し、網代痕の有無が確認できない土器が多いが、多くの底部資料に網代痕が確認される。

縄文土器5点の胎土分析をおこなった。分析試料は第26～29図1・2・27・76・77である。薄片による顕微鏡観察と蛍光X線分析法による2種類の分析をおこなった。顕微鏡観察による胎土及び砂粒の特徴では、1・2・77と27・76に大別された。但し、三十稲場式の76には他の縄文土器には認められない骨針化石が確認されている。蛍光X線分析では、それぞれに異なる元素組成を示しており、まともは確認できない。分析結果の報告書は添付DVDに収録した(PDFファイル)。

(2) 縄文時代の石器

縄文時代の石器は1区で13点、2区で62点、出土地不明1点、合計76点が出土した。この他、剥片も多数出土しているが、旧石器時代の遺物である可能性が高く、詳細は第2節に記述した。各器種の石材組成は第7表に示した。

多くの石器は粘土採掘跡検出面及び埋土から出土しているが、粘土採掘跡とは離れた2区のⅢT5・ⅢT10グリッド周辺と1区SD101に出土する一群がある。また、後期には見られない特殊磨石が認められるなど、後期以外の石器が多く含まれていると考えられる。また、打製石斧は1区に集中しており、粘土採掘跡とは関わりが認められない出土状況を示す。

以下に器種別にその概要を記す。詳細は巻末の石器観察表および添付DVDの石器観察表を参照していただきたい。

石鏃(第30図1～10): 17点出土。有茎石鏃が3点ある。黒曜石8点、チャート6点、無斑品質安山岩3点である。

削器: 3点出土。チャート2点、無斑品質安山岩1点である。

楔形石器(第30図11・13): 8点出土。黒曜石6点、チャート2点である。

二次加工がある剥片(第30図12): 4点出土。黒曜石2点、チャート2点である。旧石器時代の遺物集地点に近いところから出土するものもあり、旧石器時代の石器である可能性がある。

石匙(第30図14): 1点出土。玉髓製である。2区のⅢT10グリッドから出土した。

石核・原石(第30図17): 石核10点、原石1点出土。石核は黒曜石6点、チャート4点で、原石は黒曜石である。1区から2点、2区から8点が出土した。石核は、旧石器が出土した遺構からの例もあり、旧石器時代のものを含んでいる可能性がある。

打製石斧(第30図15・16): 8点出土。15のみ2区出土で、他は1区から出土した。15は無斑品質安山岩で、他の打製石斧と異なり厚手で調整加工が粗く、刃部の摩耗痕は認められない。16と他の1区から出土した打製石斧はすべて真岩であり、欠損品や刃部が摩耗したものが認められる。

刃器(PL 4): 4点出土。すべて輝石安山岩である。刃部に微細な剝離が認められるものがある。

器種	石材										合計	
	黒曜石	チャート	頁岩	無斑品質安山岩	輝石安山岩	玉髓?	硬砂岩	花崗岩	安山岩	多孔質安山岩		ヒン岩?
石鏃	8	6							3			17
石匙					1							1
削器		2		1								3
楔形石器	6	2										8
打製石斧			7	1								8
二次加工がある剥片	2	2										4
刃器					4							4
石核	6	4										10
原石	1											1
特殊磨石						3			1			4
砥石								1	4			5
凹石									4	1		5
石皿									2			2
台石									3			3
合計	23	16	7	2	4	1	3	1	17	1	1	76

第7表 縄文時代石器組成

敲石・棒状礫 (第31図18～20)：敲石は6点出土。すべて2区出土。安山岩4点、花崗岩1点、ヒン岩?1点である。長さ10cm～20cmほどの棒状礫の長軸の端部に敲打痕が認められる。18は長軸の両端部に加え側縁にも敲打痕が見られる。

組成表には掲載していないが、2区から棒状礫41点を採取した(下写真、第8・9表)。当初、遺物と認識できず廃棄してしまったものもある。これらの礫には敲打痕は認められないが、敲石と形状と大きさが類似している。41点中24点が粘土採掘跡から出土しており、掘削行為に関わる道具であった可能性もあるが、詳細は不明である。粘土採掘跡出土の棒状礫の点数は、SX104が10点、SX105が4点、SX106が4点、SX109が5点、SX113が1点である。なお、SX104とSX113は中世の粘土採掘跡と判断した遺構である。

特殊磨石(第31図21～23)：4点出土。硬砂岩3点、安山岩1点である。いずれも2区から出土した。21・22は一側縁に磨り減った機能面がみとめられる。23は図示されていないが二側縁に磨り減った機能面が確認され、長軸両端部には顕著な敲打痕が認められる。

凹石(第31図24・25)：5点出土。すべて安山岩で、2区から出土した。

石皿・台石(第31図26)：石皿2点、台石3点でいずれも2区出土。すべて破片で、安山岩である。石皿は中央の機

出土地点	出土点数
SB102	3
SB103	3
SB104	1
SB107	3
SK118	1
SK197	2
SX104a	1
SX104b	1
SX104c	2
SX104d	1
SX104g	5
SX105	4
SX106	4
SX109	5
SX113	1
III N14	1
III N19	1
III O18	1
III S05	1
合計	41

第8表
棒状礫出土点数

出土地点	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
SX104a	14.5	4.6	5.0	335	
SX104b	11.9	5.9	3.5	325	
SX104c	(7.4)	5.3	5.0	270	赤色化
SX104e	9.3	7.2	3.4	300	
SX104d	11.2	4.8	2.6	190	
SX104g	12.2	7.4	6.0	700	
SX104g	14.2	6.7	6.2	540	
SX104g	10.8	6.6	3.9	410	
SX104g	10.2	4.8	3.6	260	
SX104g	9.5	3.8	3.3	160	
SX105	16.5	6.2	5.7	995	
SX105	13.0	6.0	4.1	470	
SX105	21.1	7.4	6.5	1705	
SX105	19.7	8.5	5.6	1210	
SX106	14.5	6.0	4.7	560	
SX106	(17.2)	7.3	(5.9)	755	赤色化
SX106	(12.5)	6.4	6.2	700	
SX106	(8.5)	5.1	(5.5)	255	
SX109	14.3	6.1	3.5	465	
SX109	17.6	9.0	8.0	1820	
SX109	16.5	8.1	7.3	1500	
SX109	17.5	7.2	5.4	920	
SX109	16.7	6.1	6.2	870	
SX113	14.0	5.3	3.4	300	

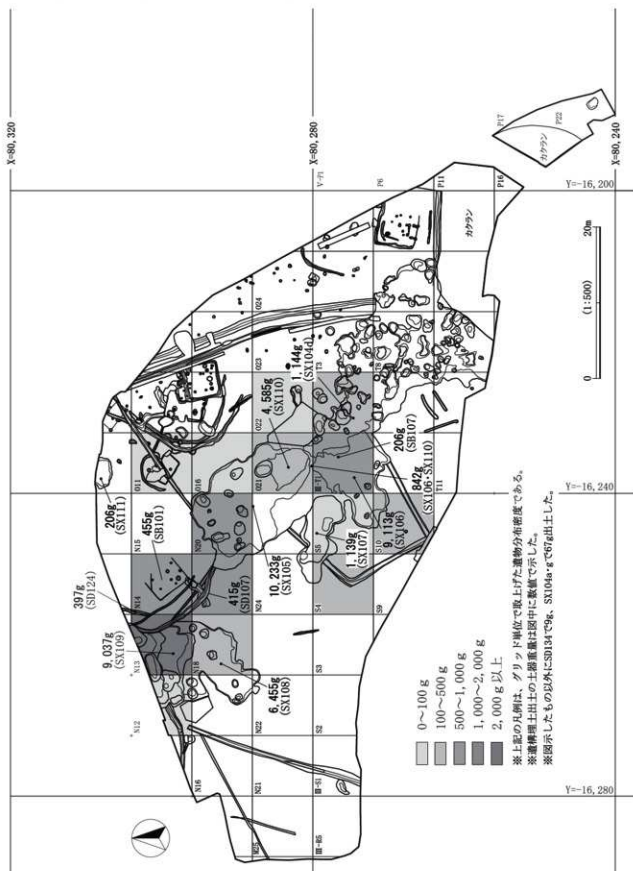
()内は欠損の残存値を示す。

第9表 粘土採掘跡出土棒状礫一覧

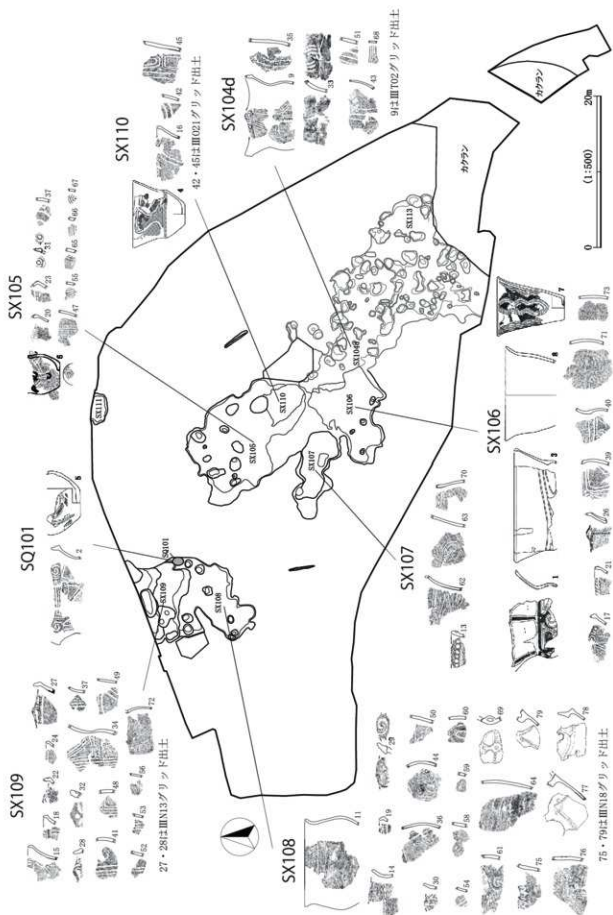


粘土採掘跡から出土した棒状礫(約1/6)

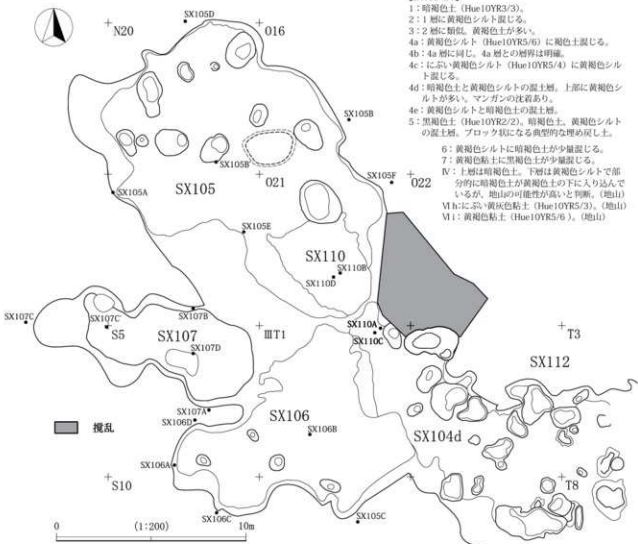
能部がくぼむものと、板状の平坦なものがあり、後者は片面が磨れて滑らかである。台石は、平坦面を有する大形礫であるが、使用痕跡は確認できない。



第20図 2区 縄文時代土器の出土状況(1)

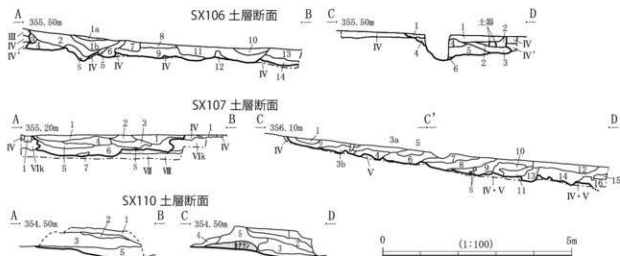


第21図 2区 縄文時代土器の出土状況(2)



第22図 SX105・106・107・110 (1)

第3章 沢田銅土遺跡の調査



【SX106 A-B】

- 1a: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- 1b: 黄褐色土、暗褐色土と黒褐色土の混土層。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)、暗褐色土、黄褐色土を混じる。
- 3: 褐色土 (Hue10YR4/4) と黄褐色土の混土層。
- 4: 黒褐色土、黄褐色土と褐色土の混土層。
- 5: 黄褐色シルト (Hue10YR5/6)。
- 6: 暗褐色土と黄褐色土の混土層。
- 7: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
- 8: 褐色土 (Hue10YR4/6) に暗褐色土がシミのように入る。
- 9: 暗褐色土と黄褐色土の混土層。
- 10: 黄褐色土と暗褐色土の混土層。
- 11: 黒褐色土、黄褐色土と暗褐色土の混土層。
- 12: 黄褐色土と褐色土の混土層。マンガン沈着あり。
- 13: 暗褐色土 (Hue10YR3/4)。
- 14: にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) と黄褐色シルトの混土層。
- Ⅲ: にぶい黄褐色土。マンガンの沈着あり。(地山)
- Ⅳ: 黄褐色シルト (Hue10YR5/6)。(地山)
- Ⅴ: 黄褐色シルト (Hue10YR5/6) へ粘土。(地山)

【SX106 C-D】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
 - 2: 黄褐色土と暗褐色土 (Hue10YR3/3) の混土層。
 - 3: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。黄褐色土をブロック状に少量混じる。
 - 4: 褐色土、暗褐色土と黒褐色土の混土層。
 - 5: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) と黄褐色土の混土層。大きなブロック状に混じる。
 - 6: 黄褐色土に褐色土を混じる。
- ※Ⅳ、ⅤはA-Bの土層と同じ。

【SX110 A B C D】

- 1: 黄褐色土 (Hue10YR5/8) とにぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) に明黄褐色土 (Hue10YR6/6) が混じる。しまりわずかり。粘性なし。
- 2: オリーブ灰色土 (Hue2.5GY6/1) と明褐色土 (Hue7.5YR5/6) が混じる。しまり強い。粘性あり。
- 3: 緑灰色土 (Hue10GY6/1) と明褐色土 (Hue7.5YR5/6) が混じる。しまり強い。粘性強い。
- 4: 暗灰色土 (Hue10YR4/1) と褐色土 (Hue10YR4/4) が混じる。しまり強い。粘性わずかり。
- 5: 暗オリーブ灰色土 (Hue2.5GY7/1) と明褐色土 (Hue7.5YR5/6) が混じる。しまりあり。粘性きわめて強い。



SX105 露出土状況

【SX107 A-B】

- 1: 暗褐色土。(Hue10YR3/3)。
- 2: にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)、黄褐色土 (Hue10YR5/6) をブロック状に混じる。
- 3: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に黄褐色土ブロックを混じる。
- 4: 3層に類似するが黄褐色土が多い。
- 5: 3層に類似。
- 6: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) シルト。編環状に暗褐色土を混じる。粘性あり。マトリックスは2層に類似。
- 7: 暗褐色土と黄褐色シルトの混土層。
- Ⅳ: 黄褐色シルト。(地山)
- Ⅴk: 黄褐色粘土 (Hue10YR5/6)。下部は灰色を帯びる粘土 (地山)。
- Ⅴb: 黄褐色シルト (地山)。
- Ⅴc: 褐色シルトへ砂層 (地山)。

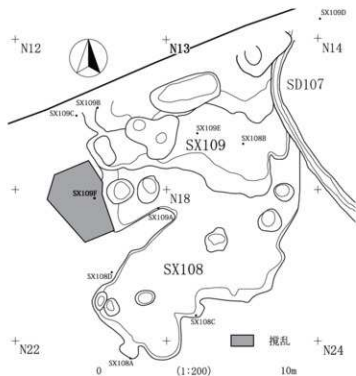
【SX107 C-D】

- 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
- 2: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) シルト。マンガンの沈着あり。
- 3a: 1層に類似。
- 3b: 暗褐色土と黄褐色シルトの混土層。暗褐色土が多い。
- 4: 黄褐色シルト。わずかに暗褐色のシミがある。
- 5: 黄褐色シルトと暗褐色土の混土層。黄褐色シルトが多い。
- 6: 3層に類似。
- 7: 黄褐色シルト (Hue10YR5/6) と褐色土 (Hue10YR4/4) の混土層。炭化物混入。
- 8: 暗褐色土に黄褐色シルトがブロック状に混じる。
- 9: 褐色土に黄褐色シルトがブロック状に混じる。
- 10: 黄褐色シルト。褐色土が少量混じる。
- 11: 暗褐色土。黄褐色シルトが少量混じる。
- 12: 1層に類似。
- 13: 黄褐色シルトと暗褐色土の混土層。
- 14: 黄褐色シルトと暗褐色土と褐色土の混土層。(断面A-Bの2層に相当)
- 15: 暗褐色土に黄褐色土が少量混じる。(断面A-Bの3層に相当)
- 16: 黄褐色シルトに暗褐色土が少量混じる。
- Ⅳ: 黄褐色シルト (地山)。
- Ⅴ: 砂質シルト (地山)。



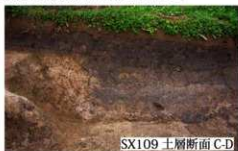
SX107 土層断面 C-D

第23図 SX105・106・107・110 (2)



【SX108 A-B C-D】

- 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。マンガンの沈着あり。
- 1b: 褐色土 (Hue10YR4/4)。マンガンの沈着あり。
- 2a: 1層の暗褐色土に黄褐色シルトが少量混入する。
- 2b: 暗褐色土と黄褐色土がまだらに混入する。
- 2c: 2b 層に類似。
- 2d: 黄褐色シルト (Hue10YR5/5)。暗褐色土がシミのように混入する。
- 3a: 黄褐色シルトと褐色粘土の混土層。上部に黄褐色シルトが多く、粘土を欠除する部分もある。
- 3b: 褐色粘土 (Hue10YR4/4)。黄褐色シルトが少量混入する。
- 4: 暗褐色土に黄褐色シルトをブロック状に少量混入する。
- 5: 褐色粘土と黄褐色シルトの混土層。縦かくブロック状に混入する。
- 6: 褐色粘土と黄褐色シルトの混土層。下部に褐色粘土がたまる。
- 7: 黄褐色シルト中に褐色粘土がブロックで混入する。黄褐色シルトが乱れた感じに暗褐色土をわずかに混入する。
- 8: 暗褐色シルト (Hue10YR6/6)。地山の可能性あり。
- 9: 褐色粘土 (Hue10YR4/4)。黄褐色シルトが混入する。地山の可能性あり。
- 10: 黄褐色シルトと暗褐色土の混土層。
- 11: 暗褐色土と黄褐色シルトブロックが少量混入する。

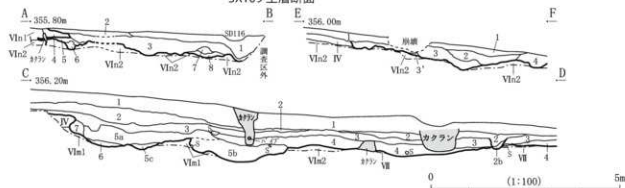


SX108 土層断面

【SX108 地山土層付記】
 IV 1: 褐色粘土と黄褐色シルト。薄移層。
 VI 2: 褐色粘土 (Hue10YR4/6)。下部部は灰色味をおびる。砂: 砂礫。
 VI 3: 灰黄褐色粘土 (Hue2.5Y6/2)。VI: シルト中に砂礫が混入する。



SX109 土層断面



【SX109 A-B】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- 2: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。マンガンの沈着あり。
- 3: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。黄褐色土ブロックが混入する。マンガンの沈着あり。
- 4: 暗褐色シルト (Hue10YR5/6)。
- 5: 黄褐色シルトと暗褐色土。
- 6: 灰黄褐色粘土と黄褐色シルトの混土層。
- 7: 黄褐色シルトと暗褐色土の混土層。
- 8: 暗褐色土と灰黄褐色粘土の混土層。
- Vn 1: 黄褐色シルト (Hue10YR5/6)。下半部は粘土質。(地山)
- Vn 2: 灰黄褐色粘土 (Hue10YR5/2)。上部は高い黄褐色粘土 (Hue10YR5/4)。褐色と灰色がまだらになる。(地山)

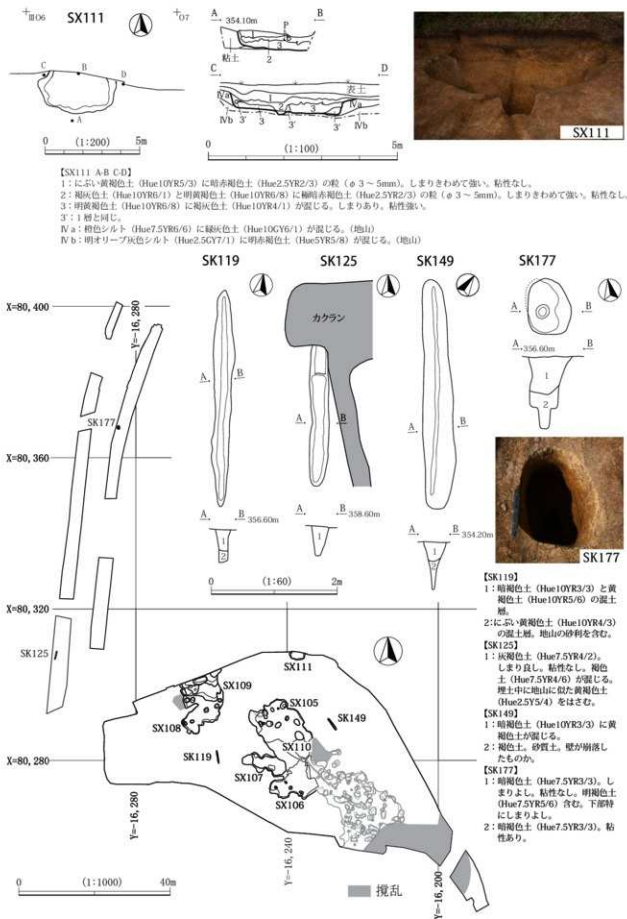
【SX109 C-D】

- 1: 褐色土 (Hue10YR4/4)。表土 (耕作土) 基本順序1層。
- 2: 暗褐色土 (Hue10YR2/2)。しまりあり。基本順序5層。
- 2b: 黒褐色土に暗褐色土を混入する。
- 3: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)。しまりあり。黒褐色土が混入する。マンガンの沈着あり。基本順序層中に類似。
- 4: 灰黄褐色シルト (Hue10YR4/2)に黄褐色シルトが小ブロック状に混入する。
- 5a: 黒褐色土に黄褐色シルトが混入する。
- 5b: 黒褐色土に黄褐色シルトと灰色粘土が混入する。
- 5c: 5b 層に類似。
- 6: 灰黄褐色粘土。黄褐色土と黒褐色土の混土層。
- 7: 黄褐色シルト。マンガンの沈着あり。
- IV: 黄褐色シルト。マンガンの沈着あり。(地山)
- Vn 1: 灰黄褐色粘土 (Hue10YR5/2)。(地山)
- Vn 2: 褐色粘土 (Hue10YR6/1)。(地山)
- V: 黄褐色シルト。砂礫が混入する。(地山)

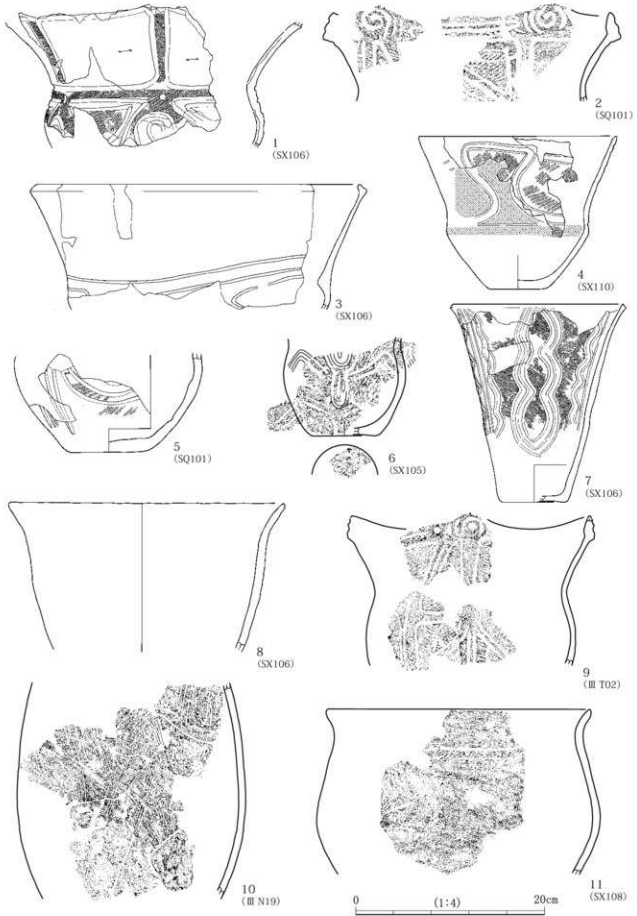
【SX109 E-F】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。マンガンの沈着あり。
- 2: 暗褐色土と黄褐色土の混土層。
- 3: 黄褐色土に灰色粘土が混入する。
- 3': 3層に類似。
- 4: 黄褐色シルトに暗褐色土が混入する。
- IV: 黄褐色シルト。(地山)
- Vn 2: 灰黄褐色粘土 (Hue10YR5/2)。(地山)

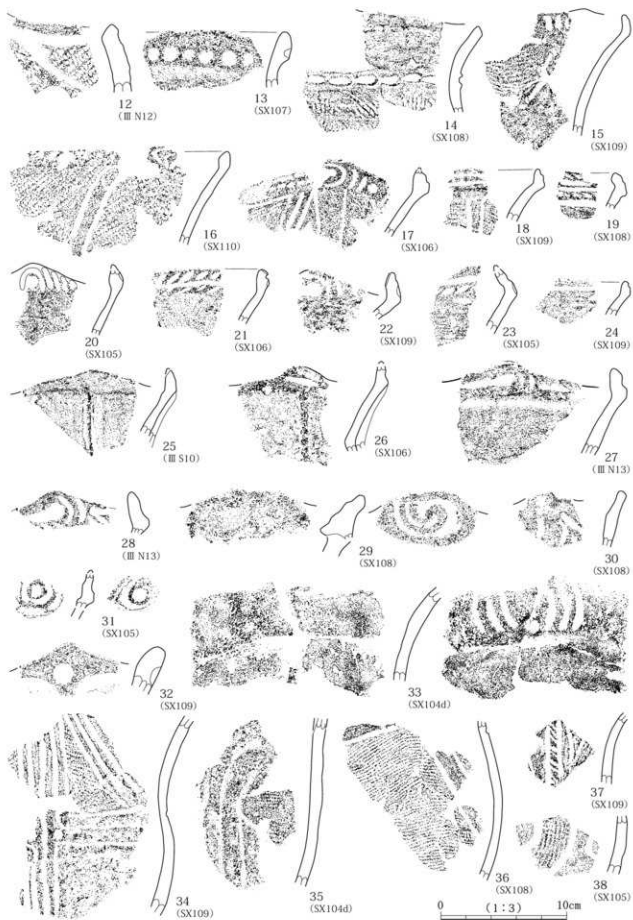
第24図 SX108・109



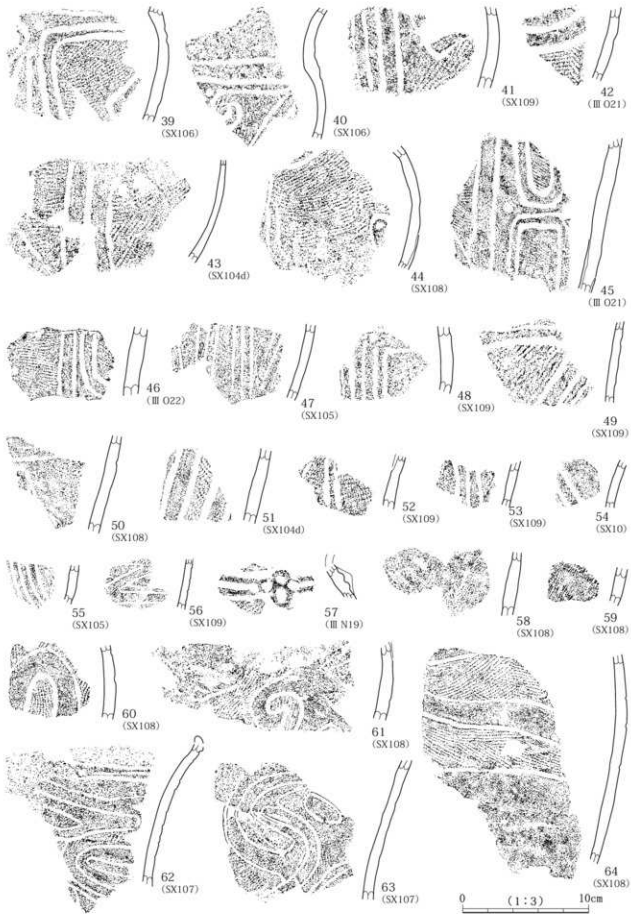
第25図 SK111、SK119・125・149・177



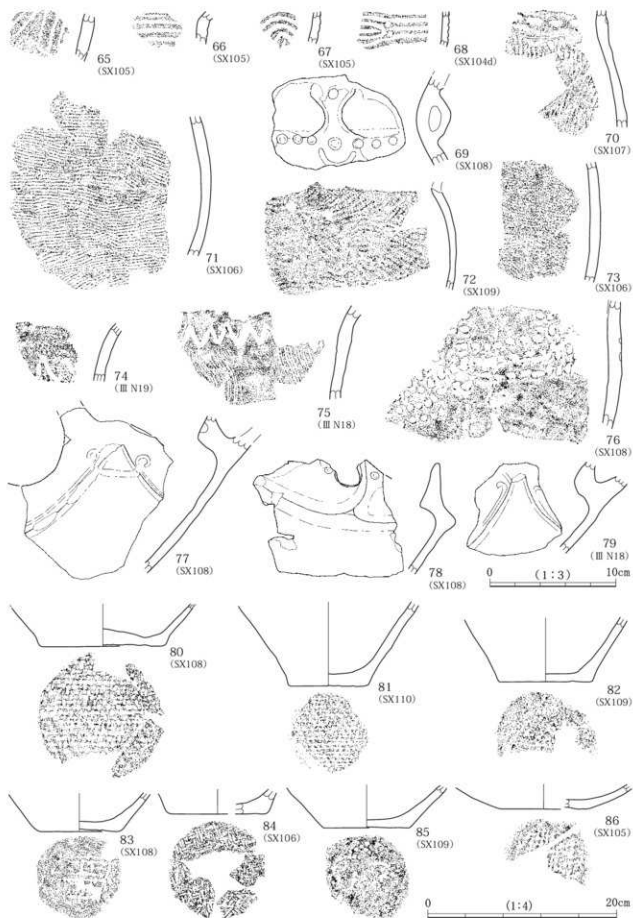
第26図 縄文時代の土器 (1)



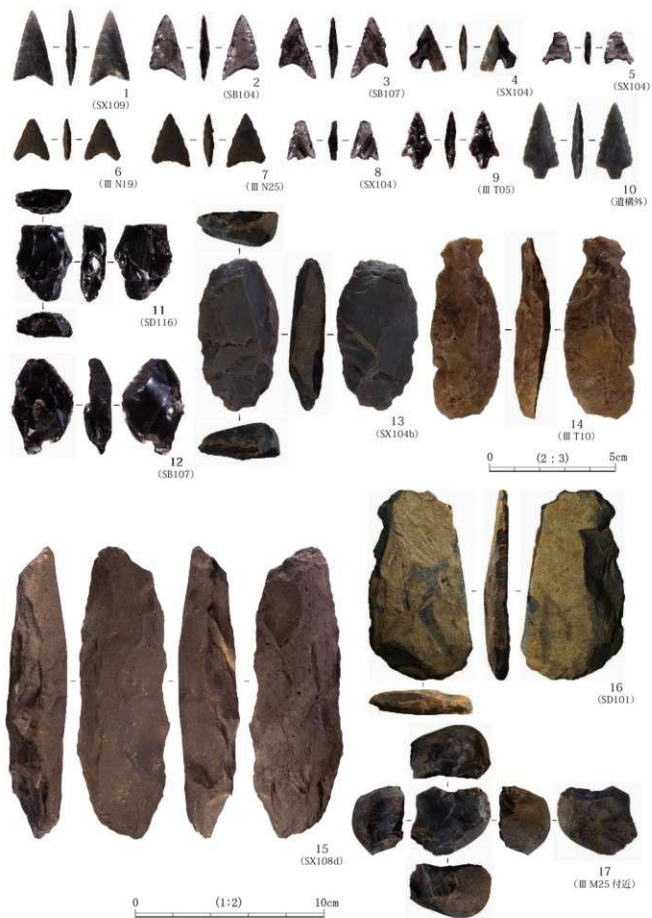
第27図 縄文時代の土器(2)



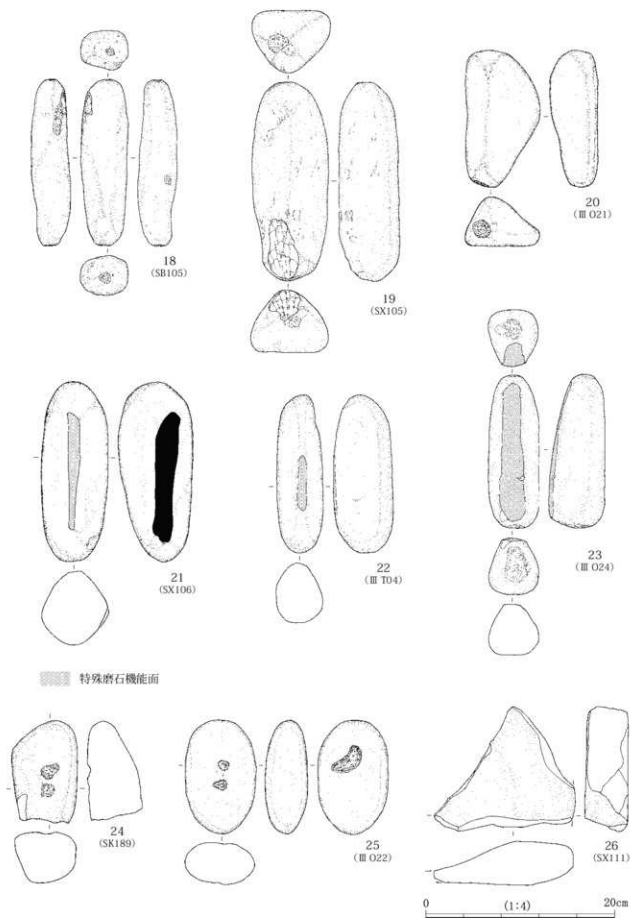
第28図 縄文時代の土器(3)



第29図 縄文時代の土器 (4)



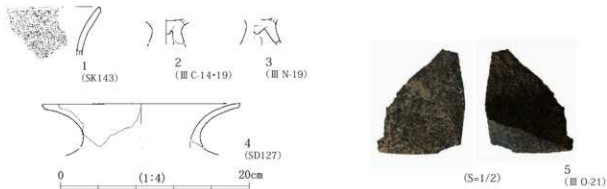
第30図 縄文時代の石器(1)



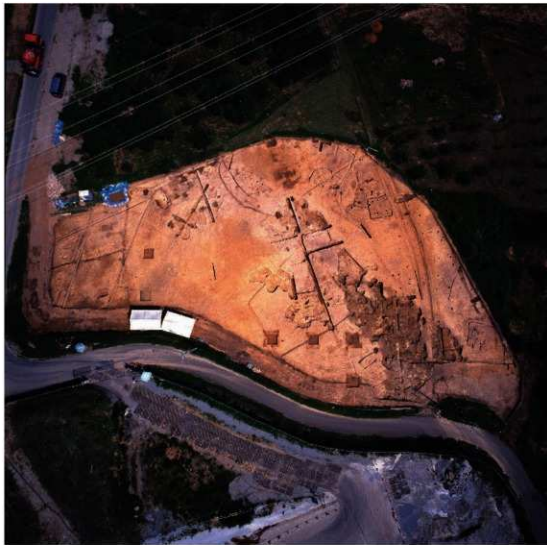
第31図 縄文時代の石器(2)

(3) 弥生・古墳時代の遺物

弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器片 11 点と弥生時代中期の太型蛤刃石斧の破片 2 点が出土した(第32図、PL7)。いずれも、2区または4区の遺物包含層もしくは、奈良時代以降の遺構埋土から出土した。第32図1は櫛描波状文の甕口縁部破片である。2・3は高杯の破片で、いずれも赤彩されている。4は球胴形の甕の口縁部破片である。5は輝緑岩製の太型蛤刃石斧の刃部破片である。



第32図 弥生・古墳時代の土器と石器



沢田鍋土遺跡2区(写真上が北)

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要

今回の調査では、2区と4区に遺構が検出された。竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、土器焼成遺構3基、粘土採掘跡6か所、土坑65基（ピット群1を含む）、溝跡6条を確認した。なお、溝跡はいずれも、竪穴住居跡の付属施設であり、竪穴住居跡の項目で報告する。

2区では、北東向きの緩斜面に奈良時代の遺構群が確認された。外周に廻る溝を有する竪穴住居跡（SB101・102・103・104・107）、ロクロピットやオンドル状遺構を有する竪穴住居跡（SB103）、鍛冶遺構と想定される火床面を有する竪穴住居跡（SB105）など、通常集落では見られない構造の住居跡が確認された。この他、竪穴住居跡に先行する土器焼成遺構2基が確認されており、これらは、いずれも奈良時代前半期の須恵器・土師器生産、製鉄に関わる遺構群と想定される。

4区では粘土採掘跡と考えられる遺構群が確認された。2区では奈良時代前半期の遺構が検出されたのに対し、4区には奈良時代後半以降の遺構がまとまる。

調査区の周辺では、奈良時代前半期の須恵器窯跡などが複数確認されている。2区の東側50mにある沢田銅土遺跡側道地点と高速道路地点には、須恵器窯跡2基と竪穴住居跡5棟（中野市教育委員会1993、長野県埋蔵文化財センター1997）、北側300mの清水山窯跡には須恵器窯跡3基（長野県埋蔵文化財センター1997）、南西側150mの立ヶ花表遺跡には須恵器窯跡2基（本書第4章）、などが確認されている。

以下、第2項では遺構について記述し、第3項では遺構別に出土遺物の観察結果を記述する。

2 遺構

（1）竪穴住居跡（土器製作工房跡）

SB101・SD104・SD107・SD108（第34図）

調査経過：Ⅲ N14 グリッド周辺で検出した。検出面で焼土が確認され、遺物がまとまって出土したことから、竪穴住居跡と判断し遺構検出をおこなったが、攪乱が広範囲にわたっており、プランは明確にはとらえられなかった。

遺構の構造：表土直下に床面が検出され、掘りこみはほとんど確認されず、床面と焼土が確認されたのみである。北側に部分的に数cmの立ち上がりか2か所確認されたが、攪乱があり遺構の形状は明確には確認できなかった。第34図に示したように重複している可能性がある。柱穴は特定できず、焼土周辺に確認されたピットは本遺構の施設であるか否か判断できない。床面に火床面が2か所確認された（焼土1・焼土2）。

付属施設：SB101の斜面上方に弧状にめぐる溝（SD104・SD107）が確認され、出土遺物の時期と位置関係から、これらはSB101の付属施設と判断した。SD104とSD107は、調査当初、屈曲部で切り合う異なる遺構と判断し、個別の名称を付したが、底面も同じレベルであることから、一つの遺構であると認識した。SD104・107は幅62cm、深さ20～30cmである。SD104・107と平行してSD108が確認された。幅22cm、深さ15cmの溝でSD104・107と北端部で切り合うが、平面プランの観察から、前後関係は確認できなかった。2条の溝は埋土が類似しており、出土遺物に時期差は認められないことから、ほぼ同時期のものと推定される。SB101に住居の重複があるとすると、2条の溝は新旧それぞれの竪穴住

居に伴う施設である可能性がある。

出土遺物：SB101は埋土がわずかであり、出土遺物は少なく、SD104・107から多くの遺物が出土した。SB101では、須恵器杯蓋・長頸壺、土師器甕などが出土し、SD104・107では須恵器杯A・杯B・杯蓋・長頸壺、土師器甕・長胴甕・小型甕など（第51図）と、縄文土器数点が出土した。図示したものの以外では、SB101では長胴甕破片が多く、胴部破片はいずれもハケ調整である。SD104・107では、土師器長胴甕の胴部器面調整がハケ後ヘラ削りとタタキ後ハケとの2種類が認められる。須恵器杯では土師器の焼成に類似した焼成タイプIVが多くみられる。SD108からは須恵器破片1点、土師器破片3点と縄文土器が数点出土したのみである。

杯Aの底部切り離し技法はすべてヘラ切りによるもので、糸切りは認められない。

遺構の時期：出土遺物から8世紀前半と判断した。

SB102・SD105・SD125（第35図・36図）

調査経過：Ⅲ O12 グリッド周辺で検出した。SB102はSB103と重複しており、遺構埋土の切り合いからSB102が新しいと確認された。SB102の斜面上方にSD105とSD106が巡っており、遺物の時期と位置関係から、これらがSB102またはSB103の付属施設であると判断した（第37図）。SD105とSD106の新旧関係は明確ではないが、SD105がSB103に接しているためSB102とSD105、SB103とSD106がそれぞれセットになると判断した。また、SB102はSK120、SK208、SD125と接するが、SB102埋土がそれぞれの埋土を切っていることを確認した。また、SD125はSD105・106よりも古いことを確認している。なお、SK133～SK137はSB102埋土に掘られており、本遺構より新しい（第10図）。

遺構の構造：SB102は5.34m×5.38mの方形で、深さ14cmである。北東角は攪乱が及んでおり壁は確認できなかった。柱穴はP1～P4であり、それぞれ深さ50cm、48cm、25cm、56cmである。P6・P7は完掘後にSB103の埋土中で確認したものであり、本遺構の施設であるかどうか判断できない。周溝が北壁を除いて確認された。南壁では周溝の重複が確認され、いずれも中央部で途切れる。途切れた部分に38cm×22cm、深さ13cmの穴（P8）が確認された。床面に3か所の焼土があり、少なくとも2か所は火床面が確認される。

カマドは西壁中央にあり、焚口から燃焼部にかけてわずかに窪む。カマドの構築材は灰黄褐色粘質土を用いており、石や土器などの構築材は用いていない。カマドの北側には深さ10cmの浅い穴（P5）が検出された。なお、Pit5の北側の床面北西隅に粘土が堆積していた。

付属施設：斜面上方にめぐるSD105と北西隅につながるSD125を付属施設と判断した。SD125埋土はSB102に切られたと観察したが、SB102の周溝が重複しており建て替えがおこなわれていること、SB102との接触部で底面の高さが同じで連続すること、遺構間に土器の接合関係が複数認められることを考慮すると、SD125が付属施設である蓋然性は高い。すなわち、SB102は建て替えが行われており、第一段階でSD125が付属施設として機能しており、建て替えに伴いSD125は廃棄されSD105が新たに掘られたと考え、遺構の切り合いと矛盾しない（註11）。

SD105は、幅36～50cm、深さ6～13cm、長さ約19.5mである。SD125は幅40～55cm、深さ13cm、長さ約8.8mである。

出土遺物：SB102とSD105では須恵器杯A・杯B・杯蓋・鉢・盤・高杯・甕・長頸壺・短頸壺・壺蓋・掃鉢・紡錘車、土師器長胴甕・小型甕・浅鉢形甕などが出土した（第52・53・68図）。SD125では須恵器杯A・杯B・杯蓋、土師器長胴甕・小型甕・浅鉢形甕などが出土した（第65図）。

図示しなかったものを観察すると、SB102に、須恵器杯Aでは焼成Ⅲ類・Ⅳ類が多く、長胴甕は内外

面がハケ調整で、底部丸底のケズリ調整のものが認められる。SD105では須恵器杯に焼成IV類があり、長胴甕はハケ調整であることが確認できるが、出土遺物は少ない。SD125では、底部静止ヘラ削りの須恵器杯A、ハケ調整の長胴甕などが観察される。竪穴住居跡及び付属施設の溝跡から出土した杯Aはすべて底部ヘラ削りによるもので、糸切りは認められない。

SB102とSD125の遺構間接合が8例確認された(第52図23・25・31・39・40・43)

遺構の時期: 出土遺物から8世紀前半と判断した。

SB103・SD106 (第38図～40図)

調査経過: III O17 グリッド周辺で検出した。SB102と切り合っており、SB103が古いため、SB102→SB103の順で調査をおこなった。斜面上方に弧状にめぐるSD105とSD106のいずれかが付属施設と想定され、位置関係からSD105がSB102の、SD106がSB103の付属施設と判断した。(第37図)

遺構の構造: SB103は、5.99m×4.83mの方形で、深さ22cmである。北壁はカマドの西側が突出しており、南北の長さが西側では5.99mで、東側では5.46mである。北東隅が灌水施設埋設の掘削で破壊されている。柱穴はP2・P5・P8が想定されるが、北西隅の柱穴が確認できなかった。P21が柱穴の候補になるが、深さが他のピットに比べ浅く、位置もやや南に寄っている。また、P1～P13は床面で確認したピットで、P14～P21は床下の調査で確認したピットである。P7とP10はロクロピットと想定され、P10は上部がラッパ状に開く断面形状で側面に土器片が貼り付けられていた(写真参照)。北壁のカマド付近を除き周溝がめぐっており、加えてカマド手前に竪穴内を横断する溝が周溝につながっている。カマドの火床面の下には土器片で覆われた溝があり、住居内の溝につながる(第39図)。これらの溝の底面はほぼ同じ深さであり、一連の施設であることが想定される。また、土器の出土状況や、埋土上層が溝に落ち込んでいる状況から、使用時には溝は空洞であったと考えられる。これらの溝がカマドの火床下につながっていることから、暖気を循環させるオンドル状の機能を有した施設と判断した。

カマドは特別な構築材は用いず、土で築いたもので、袖の形状を明確には確認できなかった。火床面と思われる焼土を除去すると、土師器長胴甕・円筒形土製品、須恵器大甕の破片が溝に落ち込む状態で出土した。前述のとおり、これらの土器は、カマド下に掘られた溝を覆う蓋の役割をしていたものと思われる(第39図)。

住居跡南壁中央部に長さ43cm、幅35cm、厚さ20cm、重さ33.6kgの大形の石が出土した。上面が平坦になるように設置されており、石の下には周溝が廻っていることなどから入口部の踏石施設と想定される。北西隅と南壁側の床面に粘土が堆積しており、一部は周溝内に落ち込んでいる。粘土の周辺には焼土と炭化物が分布する。また、竪穴の中央部では床面が焼けており、焼土上面とその周辺に炭化物が分布する。

付属施設: SB103の斜面上方にめぐるSD106は、幅41～62cm、深さ10～20cm、長さ約20.0mである。SB103とSD106間の遺物接合関係は認められなかったが、出土遺物の内容と遺構の位置関係からSB103の施設であると判断した。

出土遺物: SB103・SD106からは須恵器杯A・杯B・杯蓋B・椀類・鉢・壺蓋・横瓶・水瓶?・甕・大甕、土師器長胴甕・浅鉢形甕、円筒形土製品、粘土塊などが出土した(第53～59・68図)。他の竪穴住居跡に比べ土器の出土量が多い。第40図に実測図掲載遺物の出土位置と接合関係を示した。図中のドットは床面および埋土中の遺物で出土位置を記録したものである。

SB104検出面で出土した小破片が接合する横瓶(第55図116)がある他は、遺構間接合はみられない。SB102南東部出土の土器片と接合するものが数例あるが、SB102で接合する土器はすべてSB103と重複する部分で出土しており、発掘時の掘り間違いがあると思われる。

図示したものの以外を観察すると、SB103では黒色土器Aの杯破片、横瓶、土師器または須恵器の杯破片などが確認される。また、長胴甕ではケズリとハケ調整のものが認められ、底径10～13cmほどの平底の底部が確認される。SD106では須恵器盤または皿の口縁破片、底部に条線状の圧痕がある須恵器杯Aが確認される。

遺構の時期：出土遺物から8世紀前半と判断した。

SB104（遺物集中）・SD127（第40図）

調査経過と構造：Ⅲ T04・05 グリッドに位置する。遺構検出で周辺部と色調が異なる黒褐色土の中に遺物がまるとまると出土したためSB104の遺構記号を付して調査を進めたが、平面形態が不明確で、床面、カマド跡等が確認されなかったため、竪穴住居跡ではないと判断した。ただし、本遺跡では遺構以外で遺物がまるとまると出土している例がないことから、遺構である可能性を完全には否定できない。また、遺物集中の斜面上方に弧状の溝（SD127）が検出された。幅30～45cm、深さ21cmの溝で、長さ5.56mで、SB101～SB103・SB107の付属施設の溝と類似している。SB104は単に遺物集中だけではなく、竪穴住居跡に類する施設である可能性がある。

なお、当該グリッドの遺物集中から出土した遺物は調査時の遺構記号をそのまま用いてSB104と注記した。

SK187は出土遺物からSD127と同時期の土坑と考えられる。87×75cmの不整な方形で、深さ5～17cmの土坑で、底面に炭化物が堆積していた。竪穴住居跡の存在を仮定するならばSB104と関連する遺構の可能性がありここで報告した。

出土遺物：SB104では、須恵器杯A・杯B・杯蓋の他、須恵器土鍾・獣脚面硯の破片、土師器小型甕・長胴甕が出土した（第59・68図）。この他少量であるが、須恵器甕破片が認められる。須恵器杯は硬質の焼成が良好なもの（焼成Ⅰ類・Ⅱ類）と、灰白色の軟質須恵器に類似した焼成が悪いもの（焼成Ⅲ類）が認められ、後者も一定量存在する。図示していないものでは、底面に条線状の圧痕がある須恵器杯Aや、底部回転ヘラ切りの土師器杯A、土師器と思われる甕底部破片が出土している。SD127では、須恵器杯A、土師器長胴甕などが出土した。

SB104の須恵器横瓶小破片がSB103出土の破片と接合した（第55図116）。

SB105（第41図）

調査経過：Ⅲ T10 グリッドに位置する。東側のプランが表土からの攪乱のため壁が確認できなかった。また、P9はSB105埋土中に掘りこんでいることを確認している。床面中央に広範囲の焼土が確認され、製鉄に関わる遺構の可能性があるとして判断し、一部の埋土について磁石による鉄滓等の微細金属遺物の採取を試みたが、製鉄に関わる遺物は採取できなかった。ただし、スサ入り粘土塊などが多数出土していることが整理段階で判明し、これらの粘土塊が焼土に関わる構造物である可能性を指摘しておきたい。

遺構の構造：東壁と北壁の一部が確認されず、全体の形状は不明であるが、南北5.45mの方形を呈すると想定される。西壁と北壁に深さ15cmほどの周溝がある。カマド、柱穴は確認されなかった。中央部床面に広範囲に焼土が確認された。焼土範囲は2か所に分かれているように示してあるが、根による攪乱により分断されたもので本来一つの火床面であると判断した。硬化した火床は6cmほど赤色化しており、他の竪穴住居跡のカマドの火床面に比べ、より強く被熱していると理解できる。この焼土を切るビットが4基確認される。P9はこの焼土より新しいことが確認されており、P14・15・18も焼土より新しい遺構の可能性が高い。また、焼土の南側に二列に連なるビット群（P1～3、5～8、13・18）についても、

一部が南壁と切り合っており、SB105に関連する施設であるかどうか判断できない。断面C-Dに示されているP18はピットの深さを示したのみで、埋土との関係は確認できていない。北西隅の床下調査で確認されたL字状の溝は幅14～28cm、深さ5～8cmである。この溝に囲まれるようにP10が検出されている。P10は直径46cm、深さ40cmほどのロクロピット状の遺構であるがL字溝との関係等詳細は不明である。この他P11・12・16・17など比較的浅いピットが確認されているが本竪穴との関係は不明である。

付属施設：竪穴外部の付属施設は確認されない。

出土遺物：完形に器形復元できる遺物はなく、遺物出土量も少ない。須恵器杯A・杯B・杯蓋・短頸壺・長頸壺・鉢・甕、土師器小型甕・長胴甕・台付土器・脚付土器などが出土した（第60・61図、68図）。須恵器杯Aはすべて底部回転ヘラ切りである。図示していない遺物では、底面に条線状の圧痕が見られる須恵器杯A、ハケ調整の土師器長胴甕、土師器浅鉢形甕の底部などの破片が出土している。土器の遺構間接合は確認できなかった。

これらの土器の他に、スサ入り粘土塊や、須恵器窯の窯体に類似する資料が出土した。

遺構の時期：埋土から出土した炭化物3点の放射性炭素年代測定をおこない、暦年較正年代でAD686～719年、664～693年、692～749年（1σ）の結果を得た。出土遺物から8世紀前半の遺構と判断した。

SB106・SD122・126（第42図）

調査経過：Ⅲ O11 グリッドに位置する。近世以降の溝跡（SD119）に切られている。なお、竪穴の西側に重機のバケットで大きく攪乱されているのが確認された。

遺構の構造：埋土1層下面が床面である。約3.78m×2.48mの歪んだ方形で、深さ11cm程である。北東壁にカマドが確認された。カマドは南東側の袖が確認され、袖部には床面と同じ高さに長胴甕が伏せて設置されていた。カマドの芯材として用いられたものと判断した。また火床面周辺には円筒形土製品の破片がまとまって出土した。柱穴は確認されなかった。壁際には幅約10cmの周溝が廻る。

付属施設：竪穴外に伸びるSD122・SD126が周溝に連結する。周溝埋土とこれらの溝の埋土の切り合いは確認できず、周溝と溝の底面の高さが同じであることから、SD122とSD126はSB106に関連する遺構と判断した。

出土遺物：須恵器杯A・杯蓋・甕、土師器長胴甕、脚付土器脚部が出土した（第61・68図）。上記以外の図示していない遺物は少なく、須恵器杯A、須恵器甕などの破片が出土している。土器の遺構間接合は確認できなかった。

遺構の時期：出土遺物から8世紀前半と判断した。

SB107・SD134（第43図）

調査経過：Ⅲ T01 グリッドに位置する。本遺構はSX106・107・110（縄文時代粘土採掘跡）の埋土中に構築されており、調査当初は遺構の存在を認識できず、粘土採掘跡の調査中に竪穴及び溝跡の存在を確認した。そのため、SD134の南部分はSX110の埋土として調査し、破壊してしまった。しかし、SD134の延長上に帯状に古代の土器が出土したことからSD134がSB107の斜面上方に弧状に配置されていることが判明した。また、SB107西壁は現代の灌水施設のパイプ埋設のための掘削で破壊されていた。東壁はSD117・SD118（近世以降）により壊されている。SK189がSB107埋土中に構築されていることが確認された。

遺構の構造：東西の壁が壊されており、全体形状は不明であるが、4.86m×4.32m以上の隅丸方形で

あると想定される。埋土は深いところで18cmである。床面に7基のピットを確認した。柱穴は、その配置からP2またはP3・P5・P7が想定され、床面からの深さは、P2は33cm、P3は41cm、P5は26cm、P7は23cmである。P1はロート状の断面形をしており、P1の西側の床面に粘土塊が出土していることを考慮すると、ロクロピットの可能性がある。また、SK189に切られており全長は不明であるが、P1と南壁の間に幅55cm、深さ8cmの溝状の掘りこみが確認された。北壁際には幅30cm、深さ10cmの溝が検出された。床面は平坦ではなく、中央部が盛り上がり、その中心に火床面が確認され、その周辺に炭化物が分布する。カマドは確認されなかった。

付属施設：位置関係と出土遺物から斜面上方に巡るSD134がSB107の付属施設と判断した。

出土遺物：第43図にはSB107の床面及び埋土中に出土した小破片を除いた遺物の出土状況を示した。中央の盛り上がり部の北側に遺物が集中している。SB107・SD134では須恵器杯A・杯B・杯蓋・長頸壺・短頸壺・甕、土師器長胴甕などが出土した(第62・63図)。

図示していない遺物を観察すると、須恵器杯Aはすべて底部回転ヘラ切りで、底部に条線状の圧痕が見られるものが多い。須恵器甕では胴部内面に無文のあて具痕とハケ目が残る破片が認められる。土師器長胴甕はハケ調整のみのものとタタキ調整の痕跡を残すものが認められる。須恵器の焼成はタイプⅠ～Ⅲのもので占められ、タイプⅣの土師質のものは認められない。なお、土器の遺構間接合は確認されなかった。

遺構の時期：出土遺物から8世紀前半と判断した。

(2) 掘立柱建物跡・ピット群

ST101 (第44図)

ⅢO07グリッドで検出した。6基のピットで構成される1間×2間の掘立柱建物跡と想定される。北東隅のピットは調査区外であるため、全体形状は不明。P4とSD119(近世以降)が重複し、P4の方が古いことを確認した。P2とSD125(奈良時代)が重複するが、埋土が類似しており、新旧関係は確認できなかった。P2とSD125の埋土が類似していることから奈良時代に近い時期の遺構である可能性が高い。

P1とP5から須恵器の蓋と椀の小破片が1点ずつ出土したのみである。

ピット群1 (第44図・第10表)

土坑の中で、直径30cm以下の柱穴と考えられるものが、2区東端部にまとまって検出され、多くは掘立柱建物跡の配列を確認できないものである。それぞれの穴はSKの遺構記号を付けて記録したが、直径約30cm以下のものをピットと呼称し、それ以外の土坑と区別した。分布状況からこれらを2群に分け、それぞれピット群1、ピット群2とした。ピット群2は中世以降のものが大半を占めるため、第5節に記述した。

ピット群1は、ⅢO18・19・23・24、ⅢT03・O4グリッドで検出された。33基のピットが確認されるが、規則的な配置が確認されない。詳細は第44図および第10表に示した。SK197の底面には

遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK123	Ⅲ0-23	古代?	遺物なし	
SK124	Ⅲ0-23	古代?	遺物なし	
SK156	Ⅲ0-18	古代	遺物なし	
SK158	Ⅲ0-18	古代	古代土師器1点	
SK161	Ⅲ0-18	古代	古代須恵器1点	
SK162	Ⅲ0-19	古代	古代土師器1点	
SK163	Ⅲ0-19	古代	遺物なし	
SK164	Ⅲ0-19	古代	古代土師器	
SK165	Ⅲ0-19	古代	古代土師器	
SK166	Ⅲ0-19	古代	弥生・古代土師器	
SK167	Ⅲ0-24	古代	古代須恵器1点	
SK168	Ⅲ0-19	古代	古代土師器1点	
SK169	Ⅲ0-19	古代	遺物なし	
SK170	Ⅲ0-24	古代	遺物なし	
SK171	Ⅲ0-24	古代	遺物なし	
SK172	Ⅲ0-24	古代	古代須恵器	
SK173	Ⅲ0-24	古代	遺物なし	
SK174	Ⅲ0-24	古代	遺物なし	
SK175	Ⅲ0-24	古代	遺物なし	
SK176	Ⅲ0-24	古代	古代須恵器1点	
SK180	Ⅲ0-18	古代	遺物なし	
SK181	Ⅲ0-23	古代?	遺物なし	
SK182	Ⅲ0-23	古代?	古代須恵器	
SK183	Ⅲ0-23	古代?	遺物なし	
SK184	ⅢT-03	古代?	古代須恵器・土師器	
SK185	ⅢT-03	古代?	遺物なし	
SK186	ⅢT-03	古代?	古代須恵器	
SK191	ⅢT-04	古代?	遺物なし	
SK193	ⅢT-04	古代	遺物なし	
SK194	ⅢT-04	古代	遺物なし	
SK196	ⅢT-04	古代?	遺物なし	
SK197	ⅢT-04	古代	礎2点	SD127に切られる
SK205	ⅢT-04	古代?	古代須恵器1点、赤彩1点	

第10表 ピット群1遺構一覧

礫が3点出土しており、SD127(奈良時代)より古いことが切り合い関係から確認されている。SK165・166・167・168・172・176・182・184・186・205から1～数片の須恵器・土師器が出土した。

出土遺物と埋土の色調から、奈良時代前後の遺構と判断した。

(3) 土師器焼成遺構

SK120 (第45図)

ⅢO12グリッドで検出。SB102・SD125より古いことを埋土の切り合いで確認した。

134cm×188cmの方形で、深さ29cmである。南東隅がSB102により壊されている。北側以外の3方の壁は垂直に立ち上がり、北側のみ緩やかに立ち上がる。床面の南側3分の2程とそれにつながる壁面が焼けて赤褐色化しているが、北側の床面に火床面は認められず、焼土塊や炭化物が分布する。また、西壁際の4層上面に焼土塊(3層)が堆積している。これらの焼土塊は、窯壁が崩壊したような状況を示す。

遺物は少なく、須恵器杯A・杯B・杯蓋・甕・土師器小型甕・長胴甕などの破片が30片程度出土した(第63図217)。須恵器杯A・杯Bは灰白色の焼成タイプ1類のものが出土し、杯Aは底部回転ヘラ切りである。いずれも埋土に混入した状態で、本遺構に関わるものは確認できない。

埋土から出土した炭化物1点の放射性炭素年代測定をおこない、暦年較正年代でAD615～670年(2σ)の結果を得た。

遺構の構造から土器焼成遺構と判断したが、どのような器種を焼いていたのかが不明である。炭化物の年代測定では7世紀代の年代が示されているが、7世紀代と考えられる土器が本調査区からは出土していない。出土遺物とSB102との切り合いから、8世紀初頭の遺構と判断した。

SK121 (第45図)

VP22グリッドで検出した。丘陵の縁辺部に位置しており、南東側が削平されている。

全体形状は不明であるが、幅110cm、残存長146cmの隅丸の長方形であると推定した。深さは20cmを測る。床と壁が焼けて赤褐色化しており、床面に焼土粒と炭化物が分布している。埋土に焼土塊が多数含まれており、窯壁が崩れたような状況であった。焼土塊は廃棄しており、詳細は不明である。遺構の構造から土器焼成遺構と判断した。

土師器長胴甕破片4点と須恵器杯破片1点が出土したのみ。須恵器杯は小破片であるが、長胴甕破片は比較的大形で、胴部は内面にハケ、外面にはケズリ調整が認められ、底部は平底である。周辺部に他の遺構が確認されないことから、土師器長胴甕を焼成した可能性が高い。出土遺物から8世紀代の遺構である蓋然性が高いと判断した。

SK155 (第46図)

ⅢO11グリッドで検出した。埋土の切り合いからSD106より古いことを確認した。154cm×122cmの隅丸の方形で、深さ13cmである。東壁以外は垂直に立ち上がる壁であるが、東壁は明確な立ち上がりを確認できない。埋土に多量の炭化物・焼土粒が含まれるが、火床面は確認できなかった。北壁の一部に焼土ブロックが帯状に確認されたが、二次的に堆積した焼土である。

須恵器杯A(第65図234)・杯蓋、土師器長胴甕などが出土した。須恵器は橙色の焼成Ⅱ類・Ⅳ類のものが主体を占める。焼成時に弾けて割れたと考えられる剝離したような器面を有するものが多い。

土器焼成遺構に類似する規模で、土師器及び土師質の須恵器が複数出土していることから、火床面は確認できなかったが、土器焼成遺構の可能性はある。

(4) 土坑

2区と4区から当該期の土坑29基が確認された。土坑の多くは、出土遺物が少なく、埋土の色調から時期を判別した。各土坑の寸法と出土遺物の概要は第11表に示した。この他、1区では2基の土坑(SK104・110)を確認したが、出土遺物がなく当該期の遺構であると認識できなかった。以下に特徴的な土坑、及び出土遺物の図を掲載した土坑について記述する。

SK122 (第46図)

ⅢT05 グリッド(2区)で検出した。171cm×117cmの不整な楕円形で、深さ21cmである。中央部が攪乱で破壊されている。東側の床面に焼土粒と炭化物粒が散っている。須恵器杯A・甕・壺、土師器小型甕が出土した(第63図220・221)。

SK128 (第46図)

ⅢT12 グリッド(2区)で単独で検出された39cm×33cm、深さ20cmのビットである。須恵器杯蓋(第63図222)などが出土した。

SK142 (第47図)

ⅢD01 グリッド(4区)で検出した。158cm×123cmの不整な方形または楕円形で、深さ23cmである。埋土中及び床面から土師器長胴甕(第64図223～226)の破片が多数重なり合って出土した。出土遺

地区	グリッド	遺構名	遺物出土状況	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
2	ⅢT-03	SK118	古代須恵器・土師器	円形	117×114×21	
2	ⅢT-05	SK122	古代須恵器・土師器	方形	171×117×21	SB104 埋土?を切る
4	ⅢH-18	SK126	遺物なし	長楕円形	(85)×(39)×26	
4	ⅢH-08	SK127	遺物なし	楕円形	(131)×101×47	
2	ⅢT-12	SK128	古代須恵器・土師器	楕円形	39×33×20	Pit
4	ⅢD-01	SK142	古代土師器	楕円形	158×123×23	
4	ⅢD-06	SK145	遺物なし	隅丸長方形	(168)×98×35	
2	ⅢO-16	SK147	古代須恵器・土師器	円形	33×31×21	Pit, SK105埋土内
2	ⅢO-22	SK148	古代須恵器・土師器	不整形	(268)×123×13	須恵器蓋出土
2	ⅢO-11	SK153	古代須恵器・土師器	円形	56×54×22	SD105に切られる
2	ⅢO-11・12	SK154	古代須恵器・土師器	不整形	160×100×12	
2	ⅢO-11	SK155	古代須恵器・土師器	不整形	(154)×122×13	SD106に切られる
2	ⅢO-13	SK157	遺物なし	円形	24×23×18	Pit
2	ⅢO-11	SK159	遺物なし	楕円形	48×38×10	Pit
2	ⅢO-11・16	SK160	古代須恵器・土師器	円形	(102)×(50)×10	Pit, SD106に切られる
4	ⅢC-14	SK179	古代須恵器・土師器	不整形	149×(118)×29	
2	ⅢT-05	SK187	古代須恵器・土師器多数	不整形	87×(67)×23	焼土坑?。SB104の施設か?
2	ⅢT-05	SK188	遺物なし	楕円形	(45)×(27)×19	焼土坑
2	ⅢT-01	SK189	古代須恵器・土師器	隅丸方形	81×73×21	SB107を切る
2	ⅢT-10	SK190	古代須恵器・土師器	楕円形	(86)×(48)×11	SB105の周溝に切られる
2	ⅢT-04	SK192	遺物なし	不整形	90×35×39	
2	ⅢO-24 ⅢT-04	SK198	古代須恵器・土師器	楕円形	121×77×15	SF101の下
2	ⅢO-24	SK199	遺物なし	楕円形	51×21×15	SK198と重複
2	ⅢO-23 ⅢT-03	SK202	古代須恵器・土師器	楕円形	108×(80)×20	SD121に切られる
2	ⅢS-10	SK204	遺物なし	楕円形	38×36×22	
2	ⅢO-16・17	SK209	古代土師器	不整形	245×128×86	土師器3片。SD105に切られる
2	ⅢN-14	SK218	古代土師器1点	不整形	478×111×60	土師器1片。SD107に切られる
4	ⅢC-20	SK219	古代須恵器(糸切り)	不整形	148×50×31	
4	ⅢC-05	SK221	遺物なし	楕円形	(33)×(26)×22	
2	ⅢO-22 ⅢT-02	SK112	古代須恵器・土師器	円形	121×126×50 137×(101)×60	2基の土坑の切り合ったもの

※()内の数値は残存値

第11表 古代土坑一覧

物から2区で検出された遺構群より新しい遺構であることが確認される。

SK148 (第46図)

ⅢO22グリッド(2区)で検出した。268cm(残存値)×123cmの不整形な土坑で、北側に溝状の窪みがある。中央の平坦部の深さは13cm、溝部分は検出面から深さが19cmである。南東隅に深さ37cmの円形の窪みが確認され、別の土坑が切り合っている可能性があるが、埋土の切り合いは確認できなかった。

溝部分に、須恵器杯A・杯B・杯蓋(第64図227～229)がまともに出土した。

SK151 (第46図)

ⅢO11グリッド(2区)で検出した。SD105の埋土に切られていることが観察された。溝に壊されており、全体形状は不明であるが、直径100cmの円形もしくは不整形な方形と推定され、深さ6cmを測る。北隅の床面に、ほぼ完形の須恵器壺(第64図230)がつぶれて出土した。

SK188 (第46図)

ⅢT05グリッド(2区)で検出した。攪乱で東側が破壊されており、全体の形状は不明であるが、径45cmの円形もしくは楕円形と推定した。深さ19cmを測る。底面に焼土と思われるにぶい赤褐色の土層が確認される。攪乱を挟んで東側に対峙する、SB104の施設と想定したSK187が対峙する。出土遺物なし。

SK189 (第46図)

ⅢT01グリッド(2区)のSB107埋土中で検出しており、SB107より新しい遺構である。81cm×73cmの隅丸方形で、深さ21cmである。SB107床面より深く掘り込まれており、土坑底面から須恵器杯A、土師器壺・長胴甕(第64図231～第65図233)などが出土した。埋土には炭化物が多数含まれている。

SK198 (第46図)

ⅢO24・ⅢT04グリッド(2区)で検出した。121cm×77cmの楕円形で、深さ15cmである。すり鉢状の底面付近から、須恵器杯A・杯蓋、土師器浅鉢形甕(第65図235～237)が出土した。

SK202 (第46図)

ⅢO23・ⅢT03グリッド(2区)で検出した。SD121(近世以降)に切られる。108cm×80cmの楕円形で、深さ20cmである。底面よりやや浮いて、須恵器杯蓋・短頸壺、土師器長胴甕(第65図238～240)の破片が出土した。

(5) 粘土採掘跡

2区と4区で粘土層を掘りこむ不整形な穴が検出され、粘土採掘跡と判断した。2区は縄文時代と中世以降の粘土採掘跡であり、古代の粘土採掘跡と確認できるものはない。4区で6基の奈良・平安時代の粘土採掘跡と思われる遺構が確認された。遺物は小破片で時期が不明なものも多いが、4区では須恵器杯A底部が回転糸切りのものが大半を占める。4区の粘土採掘跡は、2区の竪穴住居跡(工房跡)などの遺構群よりも新しい時期のものであると判断される。

なお、4区北部には遺構が集中しており(第12図)、当該期の粘土採掘跡とした遺構以外にも粘土採掘跡の可能性のある不整形な穴が確認された。これらの遺構からは出土遺物が確認されず、時期が判断できない。この中のSX121では近代の瓦破片が出土しており、4区北側には近代以降の遺構の存在が想定される。これら4区の時期不明の遺構については、添付DVDの遺構台帳にその概要を記録した。

SK138、SK141、SK143-144 (第47図)

ⅢC20及びⅢD06グリッド(4区)で検出した。これらの遺構は検出時点で、円形もしくは楕円形の整った形状と判断したためSKの遺構記号を用いた。最終的に不整形で、粘土層を掘り込んでおり、埋土が暗褐色土と粘土等の混土層の埋め戻し土であることから、粘土採掘跡と判断した。調査区外へ伸びており全

体形状が不明のものもあるが、調査区内で確認された各遺構の大きさは、SK138は長さ201cm、幅108cm、深さ39cm。SK141は長さ226cm、幅195cm、深さ42cm。SK143・144は長さ138cm、幅252cm、深さ47cmである。いずれの遺構からも土師器または黒色土器の破片が数点出土した他、SK143・144からは須恵器杯破片がわずかに1点出土した。

SX117・SX115 (第47図)

ⅢC14・19グリッド(4区)で検出した。SX115とSX117は別個の遺構として調査をおこなったが、切り合い関係が明確にできず、一連の遺構と判断した。幅約3.5mの調査区に9.1mにわたり確認されたアメーバー状の平面形を呈する遺構である。深いところで検出面から40cmである。明黄褐色粘土を掘り込んでおり、不定形な形状をしていることから粘土採掘跡と判断した。埋土内に複数の攪乱がみられる。

須恵器杯B、土師器長胴甕などの破片が29片出土した。他時期の遺物が出土しないことから、古代の遺構と判断した。

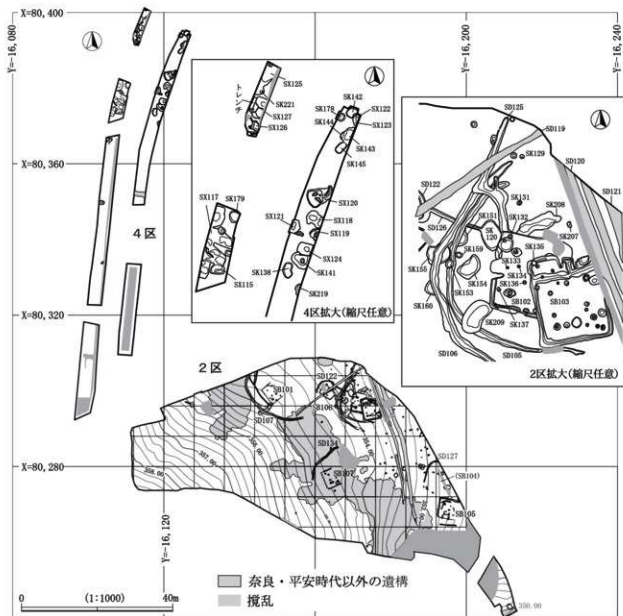
SX120 (第47図)

ⅢD11グリッド(4区)で検出した。東側が一部調査区外に出ており、全体形状は不明であるが、336cm×234cmの不整な方形で、深さ41cmである。粘土層を掘り込んでおり、粘土採掘跡と判断して調査を進めたが、整理段階で断面の写真を観察する限りでは、風倒木痕の可能性がある。土師器と黒色土器の杯A、土師器長胴甕の破片が22点出土した。杯Aはいずれも底部回転ヘラ切りである。

SX125 (SQ102)

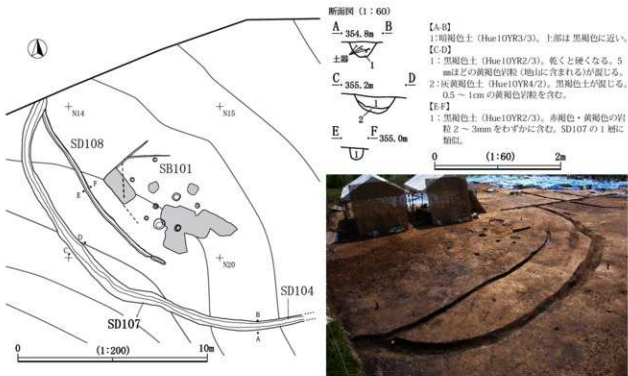
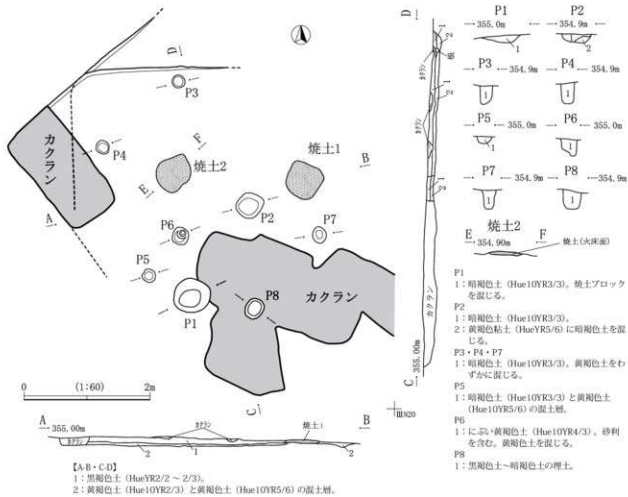
4区北端部のⅢC05グリッドで検出した。調査区外の西側と北側にさらに広がり、全体形状は不明であるが、幅141cm、長さ424cmにわたって確認された。深さは32cmほどである。

遺構検出面に土師器長胴甕・小型甕がまとめて出土した(第66図258～260)。なお、まとめて出土した土師器は、SQ102として記録した。



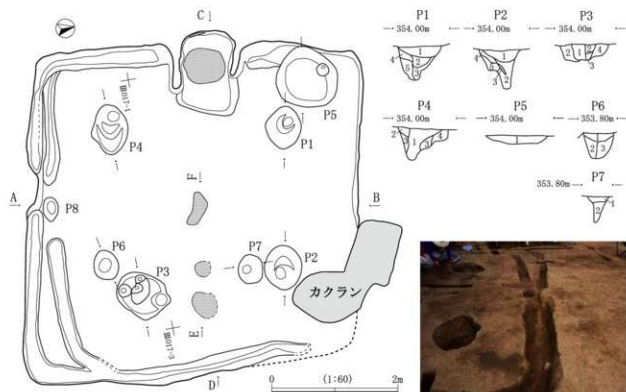
2区調査状況
(北東より)

第33図 奈良・平安時代の遺構配置図

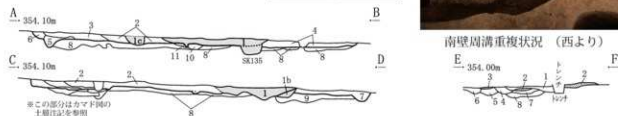


SB101 と SD104・107・108 (北西より)

第34図 SB101



南壁周溝重複状況 (西より)



【A-B, C-D】

- 1: 黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 粘質土。(層による程度)
- 1b: 8割に 1cm 大の焼土ブロックを含む。(層による程度)
- 1c: 黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 粘質土。粗砂を少し含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂を多く含む。1cm 大のロームブロックを含む。
- 3: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 粘質土。粗砂多く含む。1cm 大のロームブロックを含む。2 層より黄色強い。
- 4: 黒褐色 (Hue10YR3/1) 粘質土。1 ~ 5cm 大のロームブロックを含む。埋め土。
- 5: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。1cm 大の黒褐色土 (Hue10YR3/1) 粘質土ブロックを含む (粗砂少量含む)。ローム粒を少量含む。P8 埋土
- 6: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂多く含む。1cm 大のロームブロックを含む。
- 7: 黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 粘質土。粗砂少し含む。1 ~ 2cm 大の焼土ブロックを含む。
- 8: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。1 ~ 2cm 大の粘土ブロックを含む。
- 9: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 粘質土。粗砂多く含む。1cm 大の細かい粘土粒を少し含む。
- 10: 黒褐色 (Hue10YR4/1) に、にぶい褐色土 (Hue2.5YR6/3) が混じる。焼土。
- 11: にぶい黄褐色 (Hue10YR7/2) 粘土。ブロックを多く含む。

【E-F】

- 1: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。1cm 大の焼土ブロックを含む。
- 2: ブロック状になった焼土。上面が火床面。
- 3: 褐色 (Hue5YR6/8) 焼土。
- 4: 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 1 ~ 3cm 大の焼土ブロック。灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土ブロックを含む。
- 5: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 粘質土。焼土ブロックを少し含む。1cm 大の粘土ブロックを含む。
- 6: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂多く含む。焼土粒少し含む。
- 7: にぶい赤褐色 (Hue5YR5/3) 焼土。
- 8: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。1cm 大のロームブロックを含む。

【P1】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂多く含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。黒褐色土とロームブロックを含む。
- 3: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粘土ブロック含む。
- 4: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2)。ロームブロック多く含む。
- 5: 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘質土。ロームブロック含む。

【P2】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 粘質土。粗砂多く含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック含む。
- 3: にぶい赤褐色 (Hue5YR5/3) 焼土。
- 4: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粘土ブロック含む。
- 5: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粘土ブロック多く含む。

【P3】

- 1: 黒褐色 (Hue10YR3/1) 粘質土。粗砂多く含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR3/2) 粘質土。粘土ブロック含む。粗砂含む。
- 3: 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘質土。粗砂多く含む。
- 4: にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。粗砂多く含む。

【P4】

- 1: 黒褐色 (Hue10YR3/1) 粘質土。粗砂多く含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粘土ブロック多く含む。
- 3: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック含む。
- 4: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂少し含む。

【P5】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂多く含む。

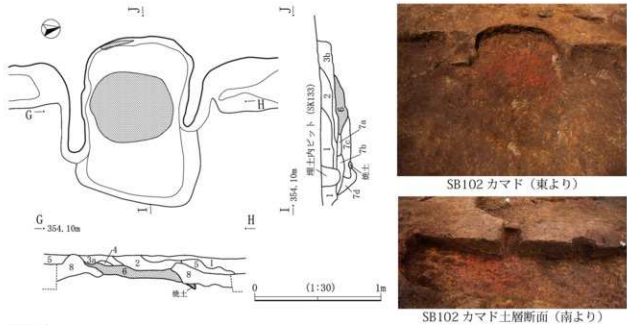
【P6】

- 1: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。ロームブロック含む。細かいローム混入の埋め土。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック含む。(柱礎)
- 3: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック含む。覆方。埋め土。

【P7】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂多く含む。
- 2: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック多く含む。

第35図 SB102 (1)



SB102 カマド (東より)



SB102 カマド土層断面 (南より)

【G・H・I】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂含む。焼土粒、灰白色粘土ブロック少し含む。(断面A・B・C・Dの2層に相当)
 2: 灰黄褐色(Hue10YR5/2)粘質土。にぶい黄褐色(Hue10YR7/2)粘土。ロームブロックを含む。焼土粒少し含む。
 3a: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂少し含む。
 3b: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。焼土ブロックを含む。
 4: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロックを含む。

- 5: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。ロームブロック含む。
 6: にぶい赤褐色 (Hue2.5YR4/3) 焼土層。上面が火床面。
 7a: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。黒色土とロームブロック含む。
 7b: にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。
 7c: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。
 7d: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。焼土を含む。
 8: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。カマドの底。



SB102, SD105・SD106 (東より)



SB102 (北より)

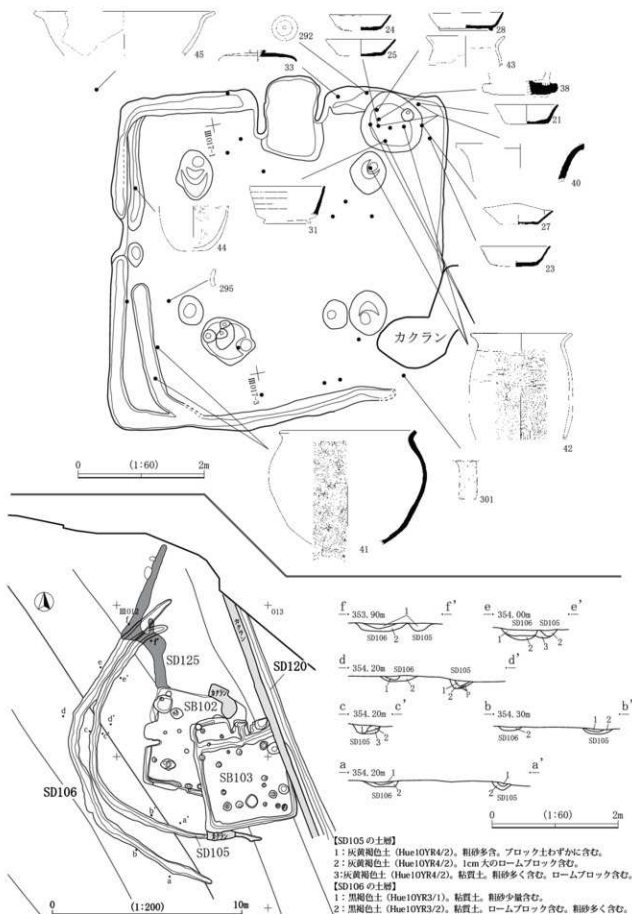


SB102 遺物出土状況 (南西より)



SB102 P5 遺物出土状況 (東より)

第36図 SB102 (2)



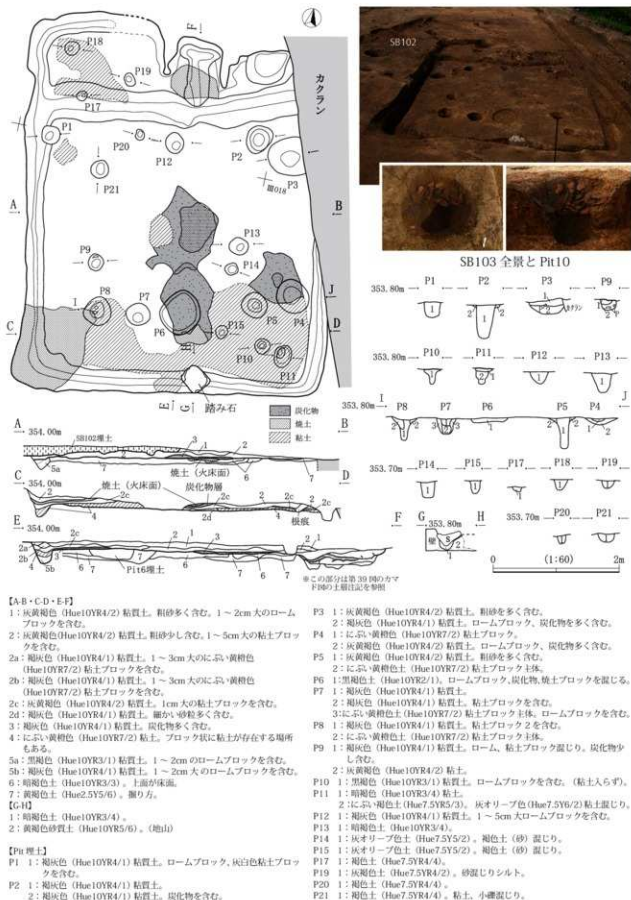
第37図 SB102 (3)

【SD105の土層】

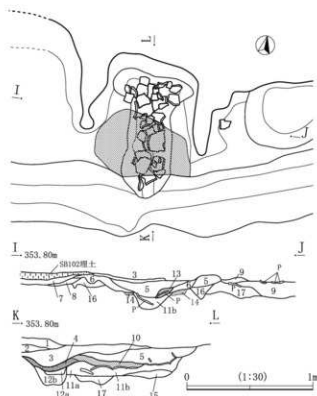
- 1: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)。粗砂多含。ブロック土わずかに含む。
- 2: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)。1cm 大のロームブロック含む。
- 3: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)。粘質土。粗砂多く含む。ロームブロック含む。

【SD106の土層】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/1)。粘質土。粗砂少量含む。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。粘質土。ロームブロック含む。粗砂多く含む。



第38図 SB103 (1)



【1】～【17】

- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。粗砂少し含む。(断面 E-F の1層に対応)
- 2: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。にぶい黄褐色 (Hue10YR7/2) 粘土ブロックを含む。(断面 E-F の2層に対応)
- 3: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。焼土粒、炭粒、ローム粒を含む。
- 4: 黒色土 (Hue10YR2/1) 炭化物主体。1～2cm 大の焼土ブロックを少し含む。
- 5: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。1～3cm 大粘土、1cm 大焼土ブロック、ロームブロックを含む。
- 6: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。灰白色粘土ブロックを含む。焼土粒を少し含む。
- 7: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。1cm 大灰白色粘土ブロックを含む。
- 8: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。細かい炭粒。焼土粒を含む。
- 9: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。細かい焼土ブロックを含む。
- 10: 明赤褐色 (Hue5YR5/6) 焼土ブロック。下部明赤褐色土 (Hue5YR5/6) 上部明褐色土 (Hue7.5YR5/6) ブロック層大きな塊が割れたもの。
- 11a: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。炭多く含む。1～2cm 大焼土ブロックを含む。
- 11b: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。炭と焼土ブロックを少量含む。(写真より判別)
- 12a: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。1～3cm 大の黄褐色土ロームを含む。炭化物を少し含む。
- 12b: 黒褐色土 (Hue10YR3/1)。炭埋土。
- 13: にぶい赤褐色 (Hue5YR5/4) 焼土。
- 14: にぶい赤褐色 (Hue2.5YR5/4) 焼土。
- 15: 褐色 (Hue10YR4/1) 粘質土。粗砂を少し含む。
- 16: 褐色土 (Hue10YR3/4)。袖部埋土。
- 17: 褐色土 (Hue10YR4/4)。(地山?)



カマド火床面 (南より)



カマド火床面下遺物出土状況 (南より)



カマド完掘 (南より)

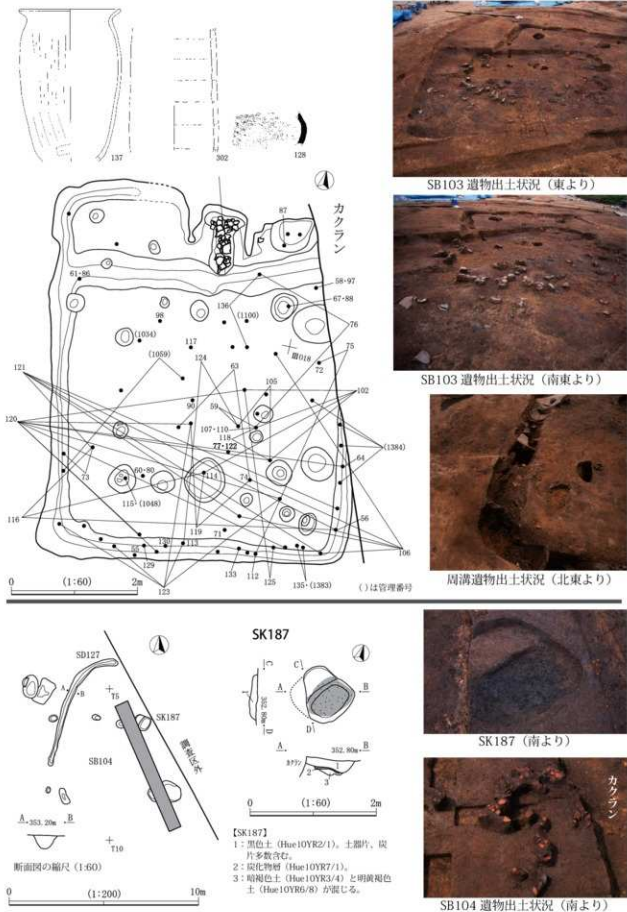


カマドと住居内の溝 (北より)

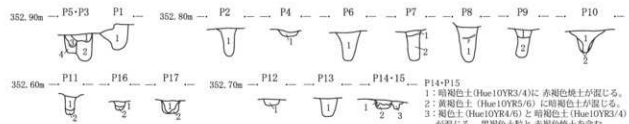
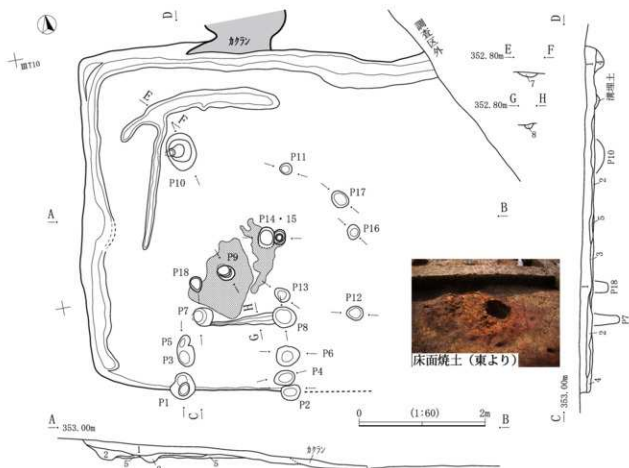


カマド土層断面 (東より)

第39図 SB103 (2)



第40図 SB103 (3)・SB104



- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。
- 2: 灰赤色土 (Hue2.5YR4/2) に 暗褐色土 (Hue10YR3/4) が混じる。
- 3: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に 焼土と炭化物が混じる。
- 4: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に 灰赤褐色土の小ブロックが混じる。
- 5: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/3) に 明黄褐色土 (Hue10YR6/6) が混じる。
- 7: 明赤褐色土 (Hue5YR5/6) と 黒褐色土 (Hue5YR3/1) が混じる。炭化物を含む。
- 8: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) と 灰赤褐色土 (Hue10YR6/4) が混じる。

【Pit 埋土】

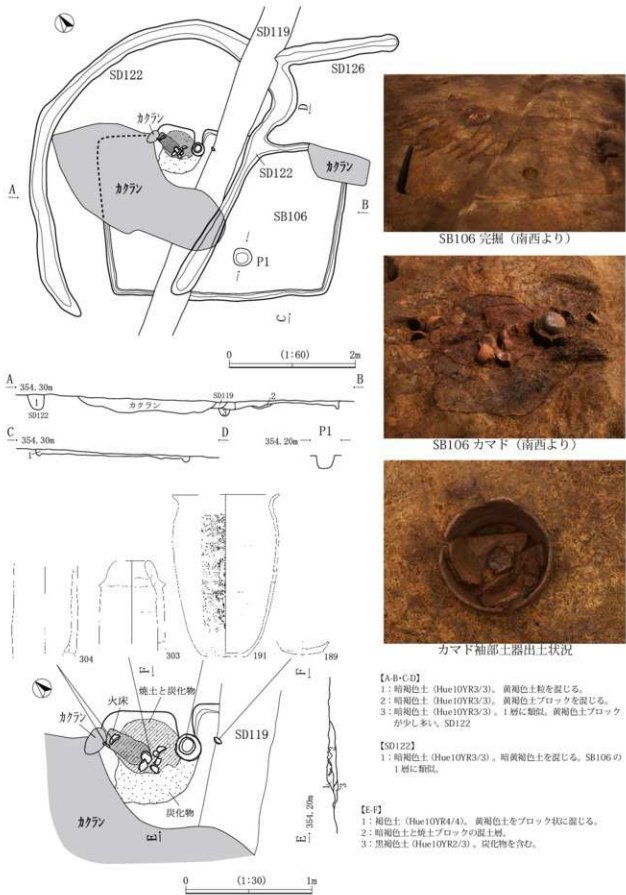
- P1 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に 炭化物が混じる。
- P3・P5
 - 1: 灰赤色土 (Hue2.5YR4/2) と 黒褐色土 (Hue5YR2/2)・黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。
 - 2: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/3) に 明黄褐色土ブロックが混じる。
 - 3: 黄褐色土 (Hue10YR5/8) に 黒色土と炭化物が混じる。
 - 4: 褐色土 (Hue10YR4/6)。
- P2 1: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/2) に 赤褐色土 (Hue5YR4/6) ブロックが混じる。
- P4 1: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/2) と 黒褐色土 (Hue5YR2/2)・黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。
- P6 1: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/2) と 黒褐色土 (Hue5YR2/2)・黄褐色土が混じる。
- P7 1: 灰赤褐色土 (Hue10YR4/2) に 黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。炭化物を含む。
- 2: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) に 黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。炭化物を含む。
- P8 1: 褐色土 (Hue7.5YR4/4) と 褐色土 (Hue10YR4/6) ブロックが混じる。
- P9 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に 明黄褐色土 (Hue10YR6/6)・赤褐色土 (Hue5YR4/6) が混じる。
- 2: 黒色土 (Hue10YR2/1) に 黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。
- P10 1: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) と 黒褐色土 (Hue5YR2/2) 焼土が混じる。
- 2: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) に 暗褐色土 (Hue10YR3/3) が混じる。



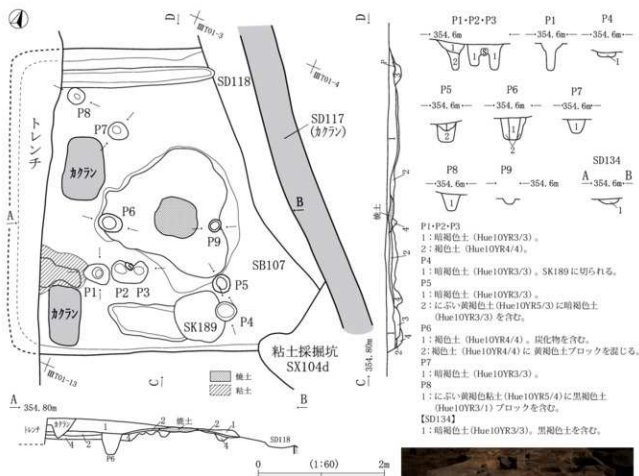
遺物出土状況(南より)

- P14・P15
 - 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/4) に 赤褐色土が混じる。
 - 2: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) に 暗褐色土が混じる。
 - 3: 褐色土 (Hue10YR4/6) と 暗褐色土 (Hue10YR3/4) が混じる。黒褐色土粒と 赤褐色土を含む。
- P11 1: 黄褐色土 (Hue10YR5/6) と 灰赤褐色土 (Hue10YR4/2) が混じる。炭化物と焼土粒を含む。
- 2: 明黄褐色土 (Hue10YR6/6) に 灰赤褐色土が混じる。
- P12 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に 褐色粘土ブロックが混じる。
- P13 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に 褐色粘土ブロックが混じる。
- P16 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3) に 褐色粘土ブロックが混じる。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR2/3) と 黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。
- P17 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/3)。
- 2: 褐色土 (Hue10YR4/6)。

第41図 SB105



第42図 SB106

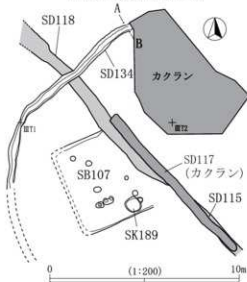
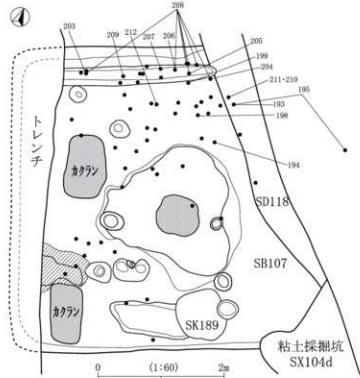


【SB107埋土】

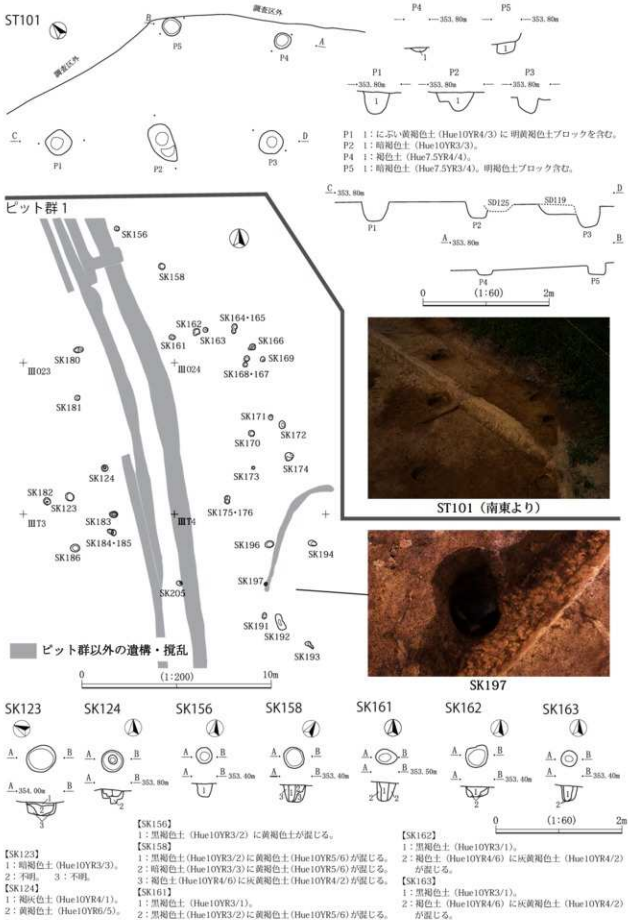
- 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3). にふい黄褐色土粒を含む。炭化物と多量の遺物を含む。
- 2: にふい褐色土 (Hue10YR5/4). 上面が床面。非常に硬い。
- 3: 暗褐色土 (Hue10YR3/3). 両溝の埋土。
- 4: 褐色土 (Hue10YR4/4). 黄褐色土 (Hue10YR5/6) が混じる。床下の土。



遺物出土状況 (北より)

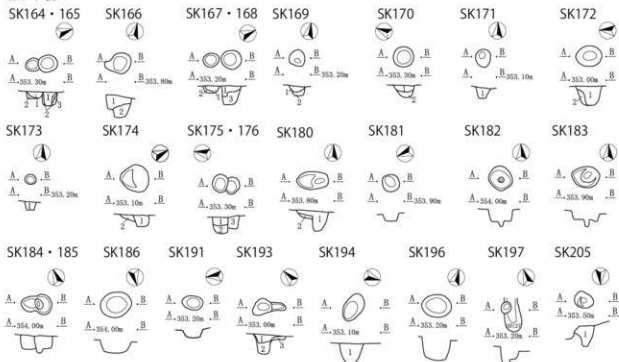


第43図 SB107



第44図 掘立柱建物跡・ピット群

ピット群1



【SK164・165】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄褐色土 (Hue10YR5/8) が混じる。
- 3: 黄褐色土 (Hue10YR5/8)。

【SK166】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- 2: 黄褐色土 (Hue10YR3/2) に黒褐色土 (Hue10YR3/2) ブロックが混じる。

【SK167・168】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- 2: 褐色土 (Hue10YR4/6)。
- 3: 褐色土 (Hue10YR4/6) に黄褐色土のブロックが混じる。

【SK169】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。
- 2: 褐色土 (Hue10YR4/6)。

【SK170】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。
- 2: 黄褐色土 (Hue10YR5/8)。

【SK171】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。

【SK172】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。炭化物含む。
- 2: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)。

【SK173】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に褐色土 (Hue10YR4/4) が混じる。

【SK174】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/1)。
- 2: 暗褐色土 (Hue10YR3/4)。

【SK175・176】

- 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
- 2: 褐色土 (Hue10YR4/4)。
- 3: 黒色土 (Hue10YR2/1)。

【SK180】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- 2: 褐色土 (Hue10YR4/4) に黒褐色土 (Hue10YR2/2) が混じる。

【SK193】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/1)。
- 2: 炭化物・焼土含む。3: 不明。

【SK194】

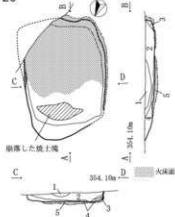
- 1: 黒色土 (Hue10YR2/1)。

【SK205】

- 1: 褐色土 (Hue10YR4/3)。黄褐色土 (Hue7.5YR4/3) を30%程度含む。

0 (1:60) 2m

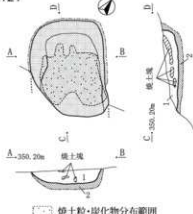
SK120



【SK120】

- 1: 暗褐色土 (Hue10YR3/4)。
- 2: 暗褐色土に黄褐色土が混じる。
- 3: 暗褐色土と焼土ブロック、赤褐色土の混土層。
- 4: 暗褐色土 (Hue10YR3/4)、炭化物、焼土粒が混じる。
- 5: 焼土層。炭化物粒を含む。上面が赤褐色に硬化した火床面。

SK121



【SK121】

- 1: 相灰色土 (Hue10YR4/1)。赤色 (Hue10YR4/8) 焼土ブロック・炭化物が混じる。
- 2: 赤色土 (Hue10YR4/8)。焼土・炭化物の広が。炭化物は焼土の上に薄く広がる。

0 (1:60) 2m

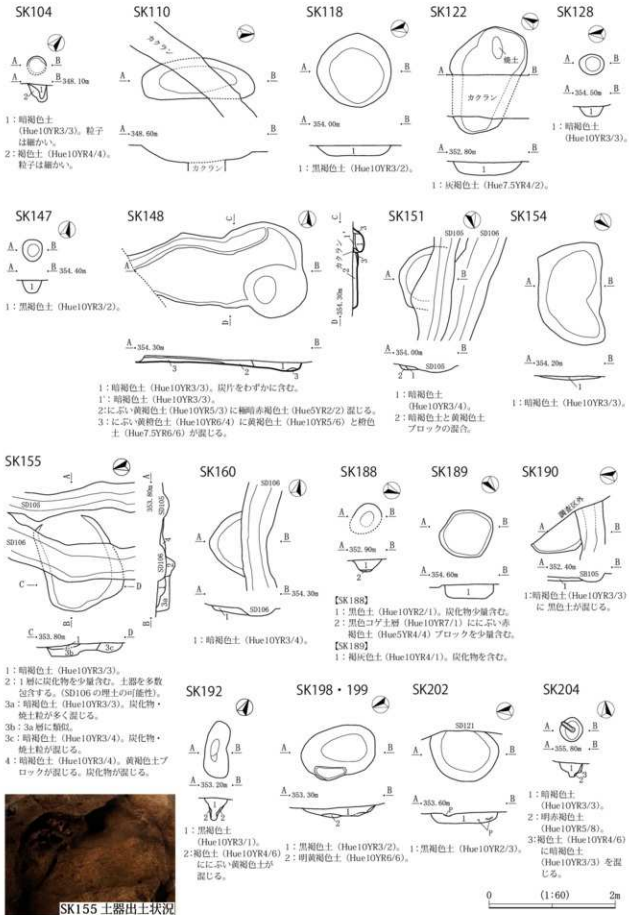


SK120 (西から)



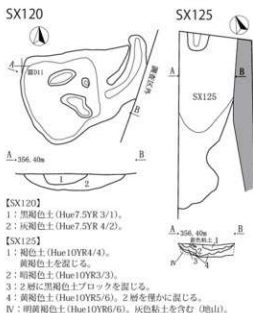
SK121 (北西から)

第45図 ピット群・2区土坑 (1)



第46図 1・2区土坑(2)

第3章 沢田銅土遺跡の調査



SK138 土層断面



SK143・144 土層断面



SX117 南より

第47図 4区土坑・粘土採掘跡

3 遺物

(1) 遺物の分類と概要

(ア) 土器の分類

器種分類

本遺跡が含まれる高丘丘陵古窯址群の須恵器を総体的にとらえるため、今回の発掘調査で出土していない器種も考慮し、センター刊行の『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』（長野県埋蔵文化財センター1997）に準じて、器種分類をおこなった（第48・49図、第12表）。ただし、分類概念に本書との齟齬がある場合は一部変更した（註12）。本遺跡では灰釉陶器、緑釉陶器が出土していないため、須恵器と土師器のみの分類を示した。本分類は、立ヶ花表遺跡（第4章）の報告にも用いる。

なお、土器の焼成、製作技法により土器の種類を以下のように区分した。

須恵器：還元炎焼成による硬質灰色土器。酸化炎焼成や軟質の焼き上がりを呈するものもある。ロクロ調整で、窯で焼成された土器。

土師器：酸化炎焼成による軟質赤焼土器。非ロクロ調整とロクロ調整がある。

黒色土器：土師器の一種で、ミガキ調整を伴い器面に炭素の吸着をおこなう黒色処理をしたもの。黒色処理が内面のみのもを黒色土器A、内外両面のもを黒色土器Bとする。

須恵器の焼成分類

須恵器について、焼成の違いにより以下の4類に分類した（PL8参照）。第4章の立ヶ花表遺跡の須恵器も同様に分類した。

タイプⅠ：青灰色で硬質のもの。暗赤褐色で硬質なものがある。

タイプⅡ：赤褐色から橙色の部分があり、硬質のもの。概して、タイプⅠより焼成が悪い。

タイプⅢ：灰色で軟質のもの。触ると手に粉状の胎土が付着する。

タイプⅣ：橙色の軟質のもの。触ると手に粉状の胎土が付着する。土師器との区分が困難である（註13）。

出土遺物の概要

土器は大半が遺構およびその周辺の遺構検出面で出土した。主な遺構の出土遺物を前述の器種分類に従い第13表に示した。数値は残存率1/8以上の口縁部破片数である。接合して一団体となるものは1点とカウントしている。

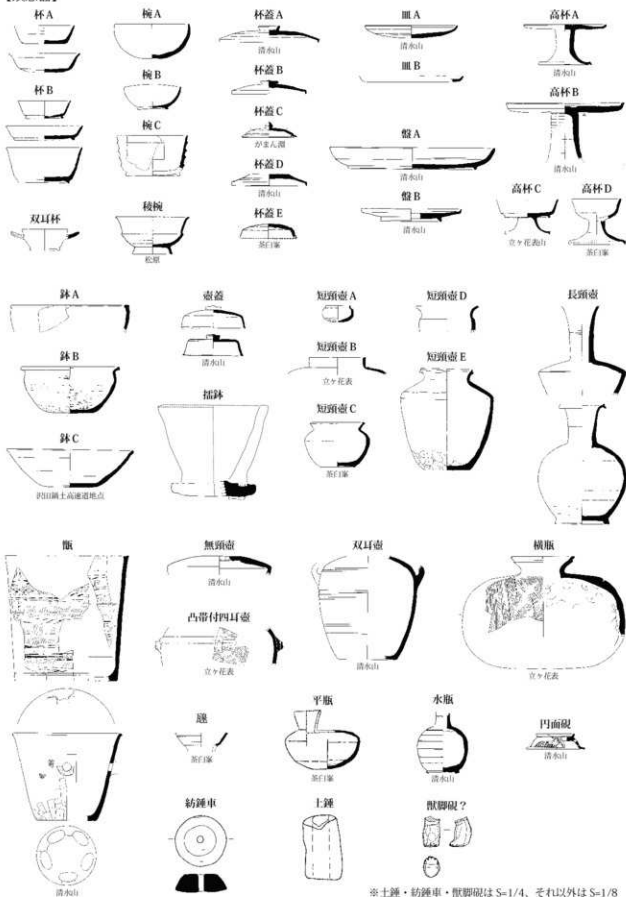
(2) 土器

竪穴住居跡、粘土採掘跡、土坑、遺構外出土土器の順に報告する。竪穴住居跡の斜面上方を廻る付属施設と判断した溝跡の出土土器は、付属する竪穴住居跡と一緒に報告する。断面を黒色で塗ったものが須恵器、断面白抜きが土師器である。器種名、焼成分類については、遺物観察表を参照していただきたい。

SB101・SD104・107（第51図）

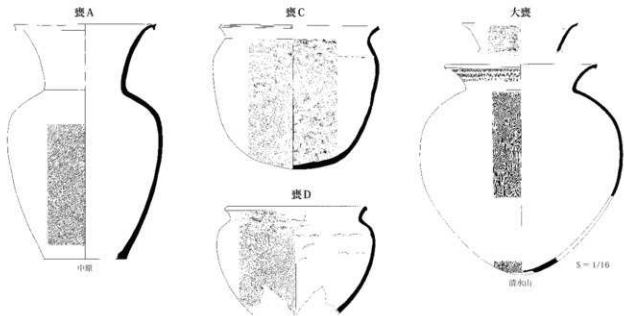
1～3はSB101、4～20はSD104・107（SB101付属施設）から出土した。1・9・10は杯蓋で、9は厚さ2～3mm程度の薄い作りである。2・3・18～20は長胴甕で、2は口縁部にわずかにタタキ目が観察され、3はハケ、18・20はヘラ削り、19はナデ？の調整が認められる。4・5は底部静止ヘラ削りの杯Aで、5の底面には篋書がある。6・8は杯B、7・11・12は長頸壺。13は鉢、14は甕とともにタタキ目が見られる。15は甕で胴部上半の把手は失われている。16・17は小型甕で、16はハケとヘラ削り、

【須恵器】

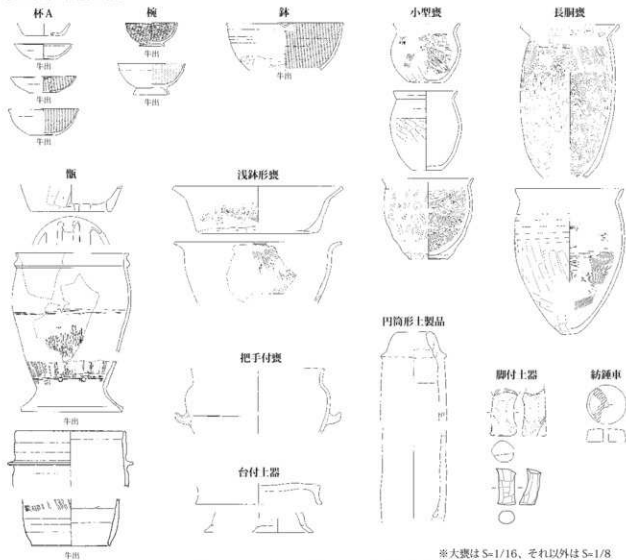


※土鐘・紡錘車・獸脚硯はS=1/4、それ以外はS=1/8

第48図 須恵器・土師器の器種分類 (1)



【土師器・黒色土器】



※大甕はS=1/16、それ以外はS=1/8

第49図 須恵器・土師器の器種分類(2)

第3章 沢田銅土遺跡の調査

【須恵器】

本報告書	説明	上信越遺13 (中島1997)
杯A	ロクロ調整で、直線的に開く体部を持つ無台の杯。	杯A
杯B	ロクロ調整で、筋形の体部に高台を付した形態の杯。	杯B
杯C	ロクロ調整で、丸底で、蓋や部分を持ち、受け部から口縁にかけて立ち上がる形態の杯。古墳時代からの伝統的な器種。本報告書では該当遺物なし。	杯C
双耳杯	杯Bに二つの把手が付くもの。	なし
椀A	口縁部が内湾した無台の椀。	椀A
椀B	口縁部が内湾した高台を付した形態の椀。	椀B
椀C	椀身に棟線や段が付く椀。佐渡埋椀を模倣したもの。	椀C
接吻椀	体部に暈を有する椀。	なし
杯蓋A	口縁部を折り曲げ、天井部に環状のつまみがつくもの。本報告書では該当遺物なし。	杯蓋A
杯蓋B	口縁部を折り曲げ、天井部に宝珠形・擬宝珠形のつまみがつくもの。	杯蓋B-C
杯蓋C	内面にかえりが付き、天井部に平坦な宝珠形のつまみがつくもの。本報告書では該当遺物なし。	杯蓋D
杯蓋D	口縁部を折り曲げ、天井部につまみがないもの。本報告書では該当遺物なし。	杯蓋E
杯蓋E	古墳時代の杯蓋の系譜を引き、椀を伏せた形態で杯Cの蓋になる。本報告書では該当遺物なし。	杯蓋E
皿A	丸底で、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。本報告書では該当遺物なし。	皿A
皿B	平らな底部で、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。	皿B-C
盤A	口縁部がなだらかに立ち上がり、高台を付した形態。本報告書では該当遺物なし。	盤A
盤B	口縁部が屈曲して立ち上がり、高台を付した形態。本報告書では該当遺物なし。	盤B
高杯A	皿に脚台を付けたもの。本報告書では該当遺物なし。	高杯A
高杯B	口縁部が直立した皿に脚台を付したもの。本報告書では該当遺物なし。	高杯B
高杯C	杯Aに脚台を付けたもの。本報告書では該当遺物なし。	高杯C-D
高杯D	杯Bに脚台を付けたもの。本報告書では該当遺物なし。	高杯E
鉢A	体部が丸みを帯びるボール鉢状のもの。	鉢A
鉢B	底部から体部は直線的に開き、頸部で緩く締まった口縁部で外反するもの。	鉢B
鉢C	体部が逆台形の浅鉢状のもの。	鉢C
蓋	口縁部が直立し、天井部に宝珠形のつまみがつくもの。短頸蓋の蓋になる。	蓋
摺鉢	逆碗形の体部に分厚い円筒状の台を付けたもの。	鉢A
短頸蓋A	短い口頸部をもち、特に小形のもの。	短頸蓋B
短頸蓋B	短い口頸部が直立して短く立ち上がるもの。	短頸蓋B
短頸蓋C	短い口頸部が「く」の字に屈曲し、器高が体部径より小さいもの。	短頸蓋C
短頸蓋D	細い体部に緩やかに外反する口頸部を有するもの。	短頸蓋D
短頸蓋E	短い口頸部が「く」の字に屈曲し、器高が体部径より大きいもの。	短頸蓋E
長頸蓋	体部から細い口頸部が直立気味に長く伸びるもの。	長頸蓋A-B
無頸蓋	「く」の字状に屈曲する体部の長頸蓋の口頸部が無い形態のもの。本報告書では該当遺物なし。	無頸蓋
甌	いわゆる甌形土器で、孔があくなど、底部が閉鎖していないもの。底部、把手の形態は多様。	甌
凸唇付耳盃	平底の大形の盃で肩部に凸唇を返し、耳状の突起を1単位付すもの。	凸唇付耳盃
双耳盃	体部に耳状の把手が2か所付くもの。本報告書では該当遺物なし。	双耳盃
横瓶	横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付すもの。	横瓶
甕	体部に注口を有する甕で、一般的呼称に従う。本報告書では該当遺物なし。	甕
平瓶	平坦な体部で、口頸部を天井の一方の端に付すもの。本報告書では該当遺物なし。	平瓶
水瓶	卵形の体部に細長い口頸部を付すもの。長頸蓋より細い口頸部を持つ。	長頸蓋C
円面甕	一般的呼称に従う。	なし
紡錘車	一般的呼称に従う。	なし
土罎	一般的呼称に従う。	なし
獣脚甕?	獸脚円面甕の可能性があるが、体部が欠損して詳細は不明。	なし
甕A	タタキ調整がある体部に外反する長い口頸部を付し、平底のもの。	甕Aの一部
甕B	タタキ調整がある体部に直立する口頸部が付すもの。本報告書では該当遺物なし。	甕B
甕C	タタキ調整がある体部に外反する短い口頸部を付し、甕Dに比べ深いもの。丸底のものが多い。	甕C-D
甕D	タタキ調整がある体部に外反する短い口頸部を付し、甕Cに比べ浅いもの。平底のものが多い。	甕E
大甕	タタキ調整がある体部に外反する長い口頸部を付し、体部の直径が概ね50cmを超えるもの。	甕Aの一部

【土師器・黒色土器】

本報告書	説明	上信越遺13 (中島1997)
杯A	無高台の杯で、ロクロ調整のもの、ミガキ調整がみられるものを含む。	杯
椀	ロクロ調整で、内湾気味に立ち上がる体部に高台を付したものの。	椀
鉢	ロクロ調整で、口径が18cm以上のもの。杯Aと相似形のものや、片口が付くものがある。	鉢
小型甕	器高、口径とも20cm以下の小型の土師器甕。	小型甕
長胴甕	口径より器高の方が大きい土師器の甕で、輪楕円整形のもの・ロクロ調整が見られるものを一括する。器面の調整はハケ・ヘラ削り・ナデ・タタキがある。	長胴甕A-E
甌	須恵器風に準じる。羽釜形など土師器にのみみられる形態がある。	甌
浅鉢形甕	口径より器高が小さい甕。底部が平らで洗面器形のものには脚が付く可能性がある。	鉢の一部
把手付甕	把手がついた甕形土器。	なし
台付土器	高台が付く土器。体部形状が不明であり、便宜的に付した器種名。	なし
円筒形土製品	体部の直径15cm前後の円筒形のもの。	なし
脚付土器	脚が付く土器。体部形状が不明であり、便宜的に付した器種名。	なし
紡錘車	一般的呼称に従う。	紡錘車
土罎	一般的呼称に従う。	土罎

第12表 古代の土器 器種分類表

17 はナデ調整が観察される。

SB102・SD105・SD125 (第52・53図、第65図)

21～45はSB102、46～54はSD105、242～245はSD125から出土した。

21～27は杯Aで、22底部には円形の刻印が、21・24～27には細い条線状の圧痕、23には太い条線状の圧痕が見られる。28～31は杯B、32・33は杯蓋、34は壺蓋である。35は高杯、36は短頸壺、37は長頸壺である。38の播鉢は、白色砂粒を多量に含む胎土で、他の須恵器に比べ異質である。また、底部に須恵器破片が付着している。39～41は甕A・C、42・44は長胴甕、43は小型甕である。42は目の粗いハケ目が見られる。45は浅鉢形甕と判断したが、小破片であり器形が判然としない。

46は回転ヘラ切り未調整の杯Aである。47は杯B、48は長頸壺である。49は長頸壺または横瓶であり、肩部の屈曲は焼成時の歪みであるとする横瓶と見ることが出来る。3個の焼台が付着している。50は類例が見られない器種であるが、小片のため器形復元は不正確である。51～53は小型甕でそれぞれ器面調整が異なる。54は長胴甕で、タタキ後のハケ調整が観察される。第65図242～244は杯A、245は小型甕である。

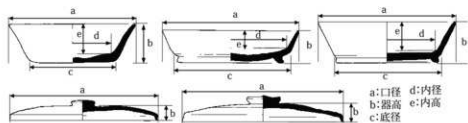
21・244は須恵器焼成タイプⅣとしたもので、土師質の胎土である。須恵器には27など極端に歪んだものが含まれる。

SD105では須恵器杯に焼成タイプⅣがあり、長胴甕はハケ調整であることが確認できるが、出土遺物は少ない。SD125では須恵器杯・杯蓋、土師器長胴甕、小型甕、浅鉢形甕の破片が出土した(第65図)。

SB103・SD106 (第53～59図)

55～137はSB103、138～149はSD106から出土した。

杯Aはすべてヘラ切りであるが、底部がヘラ切り未調整のもの(55・57・61・63・66)と、ヘラ切り後に付けられた条線が見られるもの(56・58・59・64・65)がある。これらの条線は、ハケ目に類似したものと、圧痕のように観察されるものがある。66は底面に篋書がある。杯Bでは、75・76には「井」が記されているが、75は焼成後の条線、76は焼成前の篋書である。77には「一」または「×」の篋書が認められる。74は口縁部に沈線が廻る。84は4条の凸帯が廻る椀Cで、清水山窯跡で類似した高台付きの椀Cが出土している。80・81は口縁部に沈線が廻る。78～81は焼成が良好で、自然軸がかかるものがある。91はつまみが倒落した杯蓋で、つまみを接合するための螺旋状の沈線が見られる(第54図写真)。100・101は口径19cmを超える大形品で、74の沈線が廻る特殊な杯Bとセットになる可能性がある。特に100の高さがある宝珠つまみが他の杯蓋と異なる趣である。いずれもつまみが付くと思われる。105は内外面にカキ目と、底部付近の外面にヘラ削りがあり、底面には条線状の圧痕が認められる。106は体部上半がロクロ調整で、下部ではタタキの後ナデ調整がおこなわれていることが観察できる。112は他の長頸壺に比べ薄手で無頸壺・短頸壺などであるかもしれない。111は内径1.0cmほどの水瓶の注口部破片と思われる。113は焼成時に著しく歪んで割れたのが観察でき、肩部に同心円状の浅い沈線が廻る短頸壺と判断した。115は外面にかすかにタタキ目が観察される。116はタタキの後にカキ目が施される。117は外面がハケ目、内面にナデが認められ、割れ面に軸がかかっている。他に類例を見ない器形であり、全体形状が不明である。甕、大甕の体部外面はタタキが全面に認められるが、内面の調整にバリエーションがある。118は内面に青海波文が認められ、外面にはタタキの後にカキ目が施される。焼成時に器面が水膨れ状に発砲している。119には焼台が付着する。120の内面には篋状工具のナデがみられる。121の内面はあて具痕の凹凸が顕著である。124の外面はタタキ後のカキ目が帯状に廻り、内面にカキ目と同様の工具によるハケ目が部分的に確認される。125は頸部外面にタタキの痕跡がわずかにみとめられる。128は内面に青海波文が認められるが、焼成時にひび割れて歪んでおり、カマド下



第50図 須恵器の法量計測

遺構名	須恵器											土師器						黒色土器			
	杯	杯A	杯B	杯蓋	壺・皿	椀	大甕	甕	長頸壺	短頸壺	壺蓋	横瓶	甌	杯	甌	長胴甕	小型甕	甕	円筒形土製品	浅鉢形甕	杯
SB101	2	2	0	1					1							6					
SB102	38	10	5	15	1			7	1	1	1			1		5	1	1		2	
SB103	52	19	18	56		8	2	22	7		4	3		2		14		9	1		1
SB104	4	3	2	12							1			3		6	1	2			
SB106	2	0	2	2				1	1	1			1	1				3	2		
SB107	29	6	4	8	1	1		10	2	1				1		7	3	4			
SD104・107	12	5	2	3				4	3						1	4	7	2			
SD105	5	1	1	5				1	2					1		1	4				
SD105・106	4	0	0																		1
SD106	14	0	5	4	1		2	7		1				1		3		1	1	1	
SD127	4	0	0					2								2					
SD122	0	0	0																		
SD125	6	10	1	3				0						1		1	4				1
SD134	1	0	0	1										1				3			
SK155	8		1	2														1		1	12
SK118	3			1												1					5
SK121	1																				
SK147				2																	
SK148	1			1																	
SK151	1																				
SK160																	1				
SK167	1																				
SK172				1																	
SK186	1																				
SK187	2			4																	
SK187																					
SK198				1											1		1				
SK202				1																	
SK208	1																				

第13表 遺構別器種組成

の溝を覆う構築材として用いられたものである。

129・130は胎土、調整等が同じであり同一個体の把手と思われる。131～133は外面ナデ調整である。長胴甕には個体により異なる器面調整が認められ、134・147・148はハケ目、136はハケ目とケズリ、137はケズリが外面に観察される。135は器面が摩耗しており、全面ナデであったかどうか不明であり、内面頸部にハケ目がわずかに観察される。142は頸部外面にタタキの痕跡が残る。143は外面にタタキ、内面はナデで、あて具痕は認められない。146は単沈線で区画された中に、櫛歯状工具による波状文と短沈線が見られる。149は浅鉢形甕でタタキの痕跡がわずかに観察される。体部下端の細い沈線は全周していない。

61・139は須恵器焼成タイプⅣとしたもので、土師質の胎土である。須恵器の中には63・71・73・78・94・101・112・113・118などの著しく歪んだものが含まれている。

SB104・SD127 (第59図)

150の内面と157の底部外面には「一」の窠書が見られる。151は歪みが著しい。152は底面外面が丁寧なナデ調整の小形の杯Aであり、この法量の杯Aは土師器のみである。土師器杯AはSB104にもっとも多く出土している。155・156は外面、内面ともハケ調整であるが、摩耗が著しく明確に観察できない。157・158は土師質で、底部外面はナデのように見えるが、摩耗が著しくはっきりしない。160は下部にケズリが認められる。

SB105 (第60・61図)

161～164は杯Aで、いずれも軟質の焼成で、底部回転ヘラ切り未調整である。165～168は杯Bで、168の底面に「一」の窠書がある。169・170は杯蓋である。171・174・175は短頸壺で、171は体部下端から底部にかけてヘラ削り、174はロクロ調整で肩部に稜がある器形で、本遺跡では他に類例がない。175は自然軸がかり粘土塊が付着する。172は長頸壺。173は鉢Aで口縁部に沈線が廻り、体部内面にはカキ目状の細い条線残存部が一面に認められる。176～180は甕で、176体部と177の頸部にはタタキ目がナデにより消されているのが観察される。178は外面がタタキで、内面にはナデが見られる。179は歪みが著しく、タタキがある面が内側に反っている体部の破片である。180は焼成が不良な破片であり、胎土分析をおこなった。169・179は歪みが著しく、162～164、170は土師質の焼成である。

181は小型甕で、底部に木葉痕と思われる沈線が認められる。182は他に類例がない器形であり、他の長胴甕とは異なる器形を示す。183～185は長胴甕である。182・183・184の外面は、摩耗しており調整が観察できない。185は丸底の長胴甕底部で、内外面にハケ目が顕著に残る。186は台付土器の台部で、1/3強ほど残存しており、スカシ孔が一か所確認される。

SB106 (第61図)

187は底部ヘラ切り未調整の須恵器杯Aで、土師質の焼成で底部外面に黒斑が確認される。188は須恵器杯蓋である。189～191は土師器長胴甕で、191はハケ目と底部付近にヘラ削りがみられ、内面には輪積み痕が部分的に観察できる。192は須恵器甕で、ナデ調整によりタタキ目が消されており、二条の沈線部分に把手が付いていたものと想定される。

SB107・SD134 (第62・63図)

杯Aは、193～195で底部回転ヘラ切り未調整もしくはヘラ切り後ナデがあり、194には板状工具によるナデで条線状のナデ痕が見られる。196は底部静止ヘラ削りのみ観察され、切り離し技法が異なる可能性がある。197の底部には「一」または「×」の、200内面には「×」の窠書が見られる。201の杯蓋には二重の沈線が廻る。203の短頸壺？は外面にカキ目が見られる。206の甕は粘土帯の接合部で割れて、その割れ面が磨滅しており、欠損後も底部のみで二次利用していた可能性がある。内外面に黒斑

が認められる。

長胴甕では、209・210が摩耗しており器面調整が観察できない。211はハケ目、212は外面が板状工具等のナデ、内面には板状工具による粗いハケ目状のナデと指頭圧痕が認められる。

213は底部回転ヘラ切り後にナデ、214は摩耗しているが底部に回転ヘラ切り痕が観察される。なお、214は土師質の焼成タイプIV類である。

土坑・溝・粘土探掘跡出土遺物（第63～66図）

特徴的遺物のみ記述する。他は遺物観察表を参照していただきたい。

215は須恵器杯Aで底部回転ヘラ切り未調整である。217は土師器小型甕で、外面に浅いカキ目が認められ、全体に黒色土器のごとく黒褐色である。

218は須恵器杯Aで、底面中央に板状工具による条線の後に、「一」の筧書が見られる。219は土師器把手付甕もしくは甕であろう。表面が摩耗しており器面調整は確認できないが、把手の位置に沈線が廻る。

223～226は口径が22～24cm、底径約3cmの長胴甕である。体部上部にロクロ調整、下部はケズリで内面はハケ調整が見られる。

230は短頸壺Eで、全面にロクロナデが見られ、体部下端部にケズリがある。部分的に自然釉がかかっており、内面底部に粘土塊が付着している。体部から肩にかけて2本の沈線が廻る。底面はナデの後に板状工具による条線がわずかに認められる。

231は須恵器杯Aで、底部回転ヘラ切り未調整である。232は土師器甕で、体部にケズリ調整が認められ、底部にはスリット状のスカシ孔がある。

234は須恵器杯Aで、土師質の胎土（焼成タイプIV）である。ロクロ調整で底部回転ヘラ切りである。器高が低く、本遺跡出土の他の須恵器杯Aとは異なる形態である。

239は須恵器長頸壺で、肩部に沈線が廻る。240は長胴甕で体部全体にハケ調整が見られるが、底部付近にはハケ調整以前のタタキ調整が確認される。内面にはあて具痕が認められる。

241は須恵器甕と推定したが、残存部上端で屈曲しており、全体形状が不明である。

247は底部に筧書の一部が認められる。249は鉢と推定され、底面と体部下端部に6か所の棒状工具による筧書もしくは圧痕がある。250は擂鉢で、底面はナデ調整で平滑である。251は皿Bで、本遺跡では類例がない。252は短頸壺又は鉢で、「井」と推定される筧書の一部が見られる。254は須恵器甕Cで内面に板状工具によるハケ目に類似した浅い条線が認められる。253は短頸壺Bで、わずかにタタキ痕が残されており、筧書の一部が認められる。255は浅鉢形甕としたが、小破片のため器形復元が正確でない。タタキ後のナデと浅いハケ目が観察される、内面は摩耗のため器面調整が観察できない。256は摩耗のため器面調整が観察できない。257は内外面ともにハケ目が認められる。

258は小型甕、259・260は長胴甕で、いずれも体部上半がロクロナデで、下半はケズリが観察される。長胴甕は口径22cm前後、底径4.2cmで、内面は摩耗のため器面調整が観察しがたいが、部分的にハケ目が認められる。

なお、SD121、SD129、SX104は中世以降の遺構であり、241・246・247～257は遺構外とみなした方がよい。

遺構外（第66・67図）

261～291は2区で出土した。特徴的遺物のみ記述し、他は遺物観察表を参照していただきたい。

261～270は底部回転ヘラ切りの須恵器杯Aで、261・263～268・270に「一」「＝」「井?」「×」の筧書が確認される（PL8）。269は底面に平行する線状の圧痕が確認される。273はつまみが剥落した杯蓋で、第54図91と同様につまみの接着を強化するための螺旋状の沈線が見られる。274は土師質の

胎土の須恵器杯蓋である。275は須恵器椀で口縁部に沈線が廻る。276は須恵器高杯、277は短頸甕であり、いずれも本遺跡では類例が少ない器形である。280～282は須恵器甗である。280は焼成タイプⅣでの土師質の胎土で、スリット状のスカシ孔である。281は5穴と想定される底部破片である。282は底部に張り出し部がある甗で、底部のスカシ孔の形状は不明である。283は須恵器鉢Bで、タタキの後ナデ調整をし、体部下半にケズリがなされている、本遺跡で類例が少ない。284は横瓶の口縁部。285は土師器杯Aで、SB104で類例が出土している。286は器面がナデ調整の土師器小型甗である。287は土師器甗の把手であろうか。288は器種不明である。290は浅鉢形甗で、横ナデでタタキ痕が消され、底部付近にケズリが認められる。291は高さ3cm程の台部が付くが、全体形状は不明である。本遺跡では本例のみであり、時期も含めて検討を要する。

(3) 特殊な器種と土製品 (第68図、PL15)

土製品

292・293は土製紡錘車である。292は須恵器、293は土師器である。294は須恵器の土錘で、上端部が欠損した後磨いて、割れ面を平坦にしている。295は用途不明の土師器の棒状の土製品である。

円面硯

296は須恵器獸脚円面硯の獸脚の破片と判断した。脚部全面に丁寧なケズリ調整がなされており、先端に5か所のキザミで指を表現している。他の出土遺物から本資料は8世紀前半のものであると想定され、大きさ、脚の長さを考慮し、獸脚円面硯の脚部と判断した。2区ⅢT04グリッドから出土した。この他、1区SD101から円面硯の小破片が1点出土している。

土師器脚部破片

297～301は土師器の脚部である。端部が平坦になっており、298～300は自立する。297・299・300の端部平坦部には圧痕が観察される。299・300の圧痕は布目痕の可能性が高い。301は他の4点に比べ精巧な作りで、断面方形に削りだしている。把手である可能性も否定できないが、297・298・301は器体との接合部分が平坦に剝離しており、底部に付けられた脚部と判断した。

円筒形土製品

302～304は円筒形土製品である。いずれも土師器で、内面には輪積み痕が観察される。302はSB103から出土した。303・304はSB106から出土しており、胎土・焼成、径が類似しており同一個体である可能性がある。この他、SB105、SD106、ⅢO11グリッドから円筒形土製品が出土している。

(4) 金属器

305は先端と基部が欠損した鉄鎌である。錆の付着が著しく、原型を明確に捉える事が出来なかったが、実測図の下方が断面方形であり、上方が二側縁に刃部を持つ形態であることが判明し、鉄鎌と判断した。

(5) 粘土塊・スサ入りの窯体片について

粘土塊 (第69図・第14表)

PL15に粘土塊の写真を示した。粘土塊は150点出土し、総重量2,925gである。粘土塊は概ね以下のように分類される。

1類：子供のこぶし程度のボール状の粘土塊。4点出土。

2類：棒状の粘土塊。3点出土。

3類：板状の粘土塊。スサ(植物繊維)を含むものと、含まないものがある。42点出土。

地区	出土地点	総重量 (g)	個数
2区	SB102	121	16
2区	SB103	1287	54
2区	SB105	507	20
2区	SB107	97	8
2区	SD105	6	1
2区	SD106	10	1
2区	SD118	86	1
2区	SD125	15	1
2区	SD127	6	1
2区	SK120	31	2
2区	SK121	9	2
2区	SK155	72	4
2区	SK189	9	1
2区	SX104	134	10
2区	ⅢO11	13	1
2区	ⅢT05 (SB104)	206	12
2区	ⅢT10	278	12
2区	表採	38	3
	合計	2925	150

第14表 粘土塊集計

3a類：スサを含まない。管状圧痕が認められるものがある。14点。

3b類：スサを含む。管状圧痕が認められるものがある。28点。

4類：小破片で形状が判明しないもの。スサを含むものと、含まないものがある。70点出土。

4a類：スサを含まない。67点。

4b類：スサを含む。28点。

5類：一定の形状を呈しているもの。窯道具などを含む。6点出土。

これらの粘土塊は酸化炎焼成のにぶい橙色をしており、黒色の部分が部分的にみられるものがある。本遺跡出土の粘土塊の主体は3類、4類である。粘土塊の分布状況を見ると、SB103とSB105周辺に多く出土する（第69図）。SB103の北西には土師器焼成遺構と判断したSK120があり、SB105には鍛冶関連遺構を想定させる床面の焼土が確認されている。粘土塊は、これらの施設に関連した遺物である可能性が高い。

スサ入り窯体片（第15表）

須恵器窯跡に関わるスサ入り窯体片が出土している。上記の粘土塊に対し、一面が他の面に対して特に硬化した面を持つ粘土塊を窯体片とした。スサ入りの窯体片は107点、総重量10.65kgで、大半は2区から出土した。2区以外では1区SD101から2点出土したのみである。

窯体の大半はSB05及びその周辺の遺構やグリッドで出土した。SB105からは7.7kgが出土、さらにSB105があるⅢT10グリッドおよびその周辺グリッドの窯体を加えると9.7kgになる。本遺跡出土の窯体の9割以上がSB105およびその周辺のグリッドから出土している。

また、SB105の南東約30mにあるSK121の埋土内にスサ入りの窯体破片が多数出土していたが、調査段階で廃棄しており、その詳細は不明である。

これらの窯体はすべてスサ入りであり、多くは拳大以下の小破片である。SB105から出土した窯体は比較的大きなものがあるが、最大のもので20×15cm、厚さ5～7cm程度である。

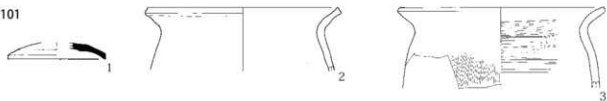
SB105出土のスサ入り窯体片には、片面に自然釉がかかり光沢があるもの、須恵器が付着したものが数点認められる。また、自然釉がかかった上にさらにスサ入り粘土を塗り重ねているものも1例確認される。近隣には沢田銅土1号・2号窯、清水山1～3号窯、立ヶ花表1～3号窯があり、須恵器窯の窯体である可能性も完全に否定できるものではないが、スサ入り窯体片がSB105に集中すること、SB105の床面には鍛冶関連遺構に係る可能性がある火床面が確認されていることから、2区出土のスサ入り窯体の多くが鍛冶関連遺構の残滓であると考えておきたい。

なお、須恵器窯に関わるスサ入り粘土が付着した焼台は出土していないことから、これらのスサ入り窯体が近隣の須恵器窯から持ち込まれたものである可能性は低いと考える。

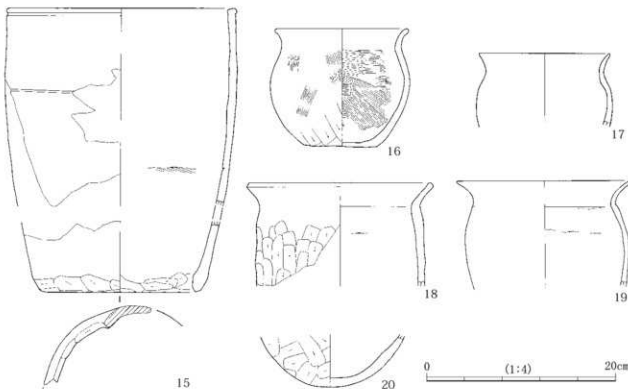
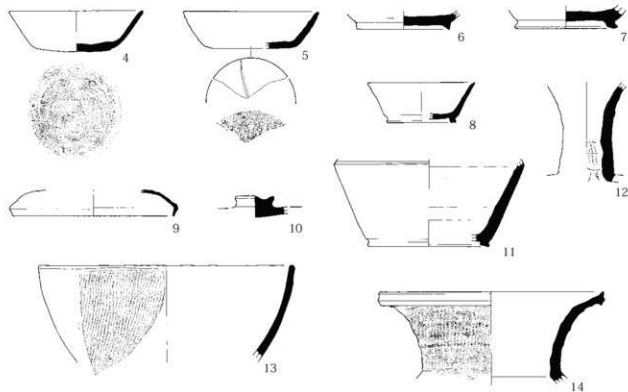
地区	出土地点	総重量 (g)	個数
1区	SD101	161.2	2
2区	SB104	18.7	3
2区	SB105	7738.3	67
2区	SB107	88.6	1
2区	SD121	119.2	2
2区	SD129	78.7	3
2区	SK118	7.7	1
2区	SX104	136.2	8
2区	ⅢO11	49.8	1
2区	ⅢO13	34.9	1
2区	ⅢO18	206.8	2
2区	ⅢT04	166.2	6
2区	ⅢT05	9.5	1
2区	ⅢT09	484.2	1
2区	ⅢT10	698.9	3
2区	ⅢT15	447.6	1
2区	VP11	207.8	4
合計		10654.3	107

第15表 スサ入り窯体片集計

SB101

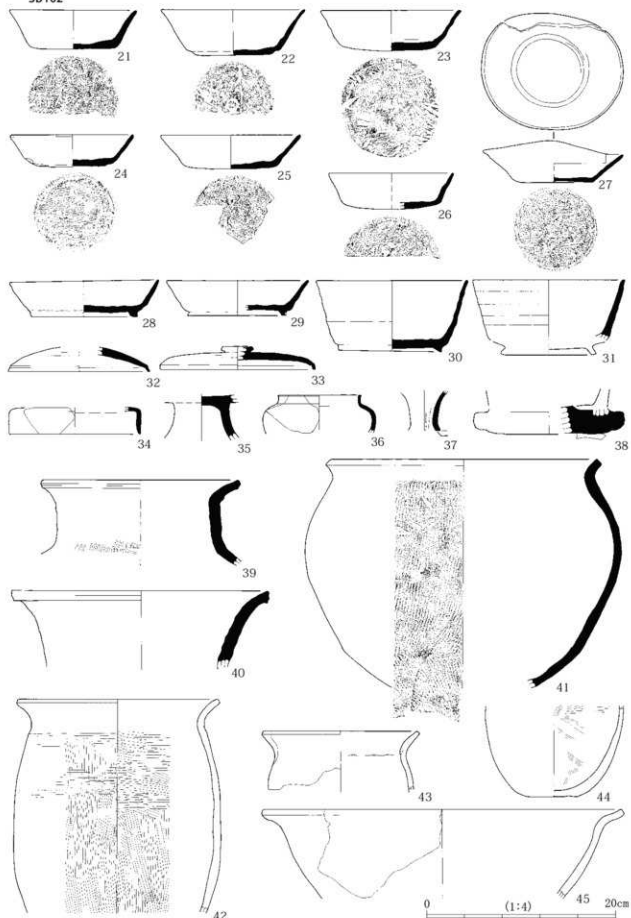


SD104・SD107 (SB101 付属施設)



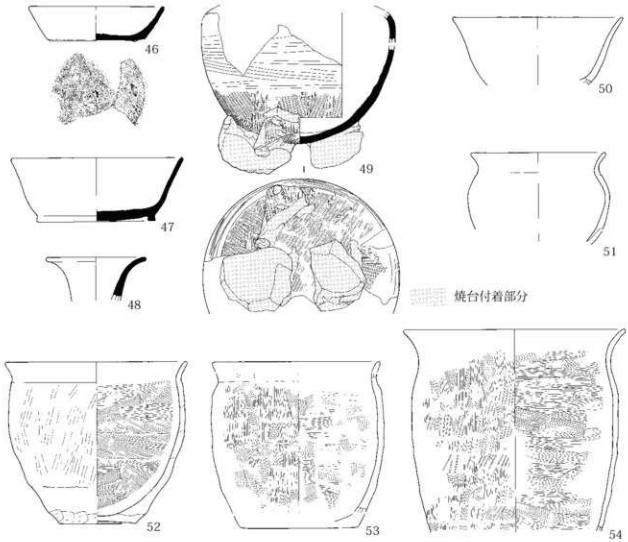
第51図 SB101 出土土器

SB102

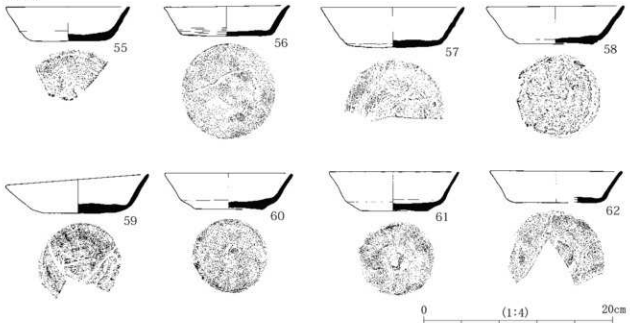


第52図 SB102出土土器

SD105 (SB102 付属施設)

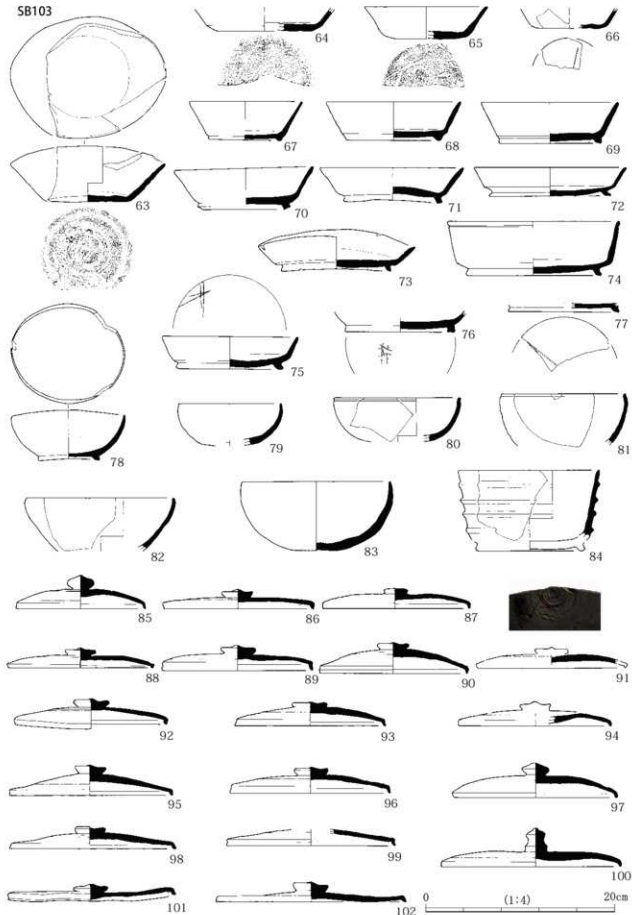


SB103



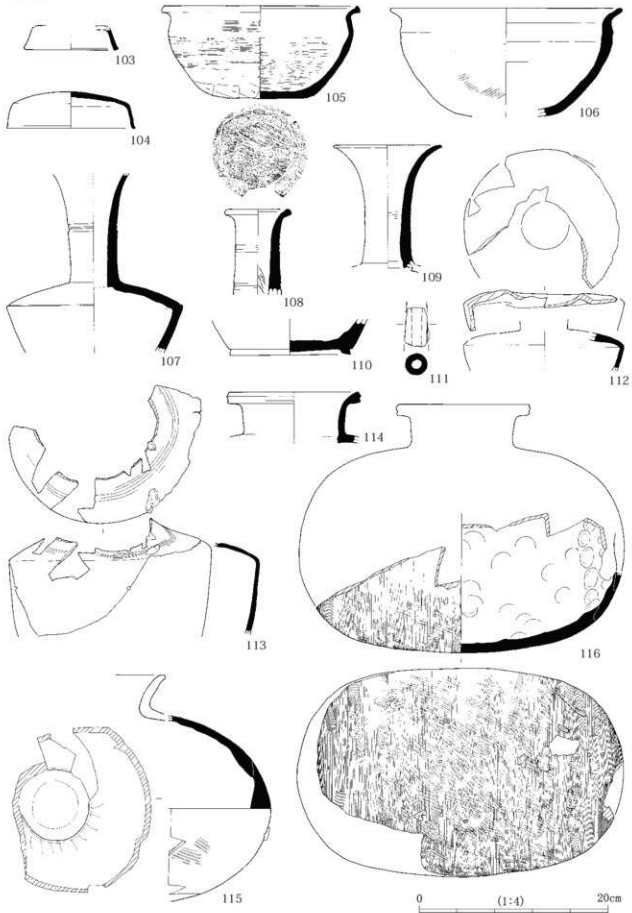
第53図 SB102・SB103出土土器

SB103



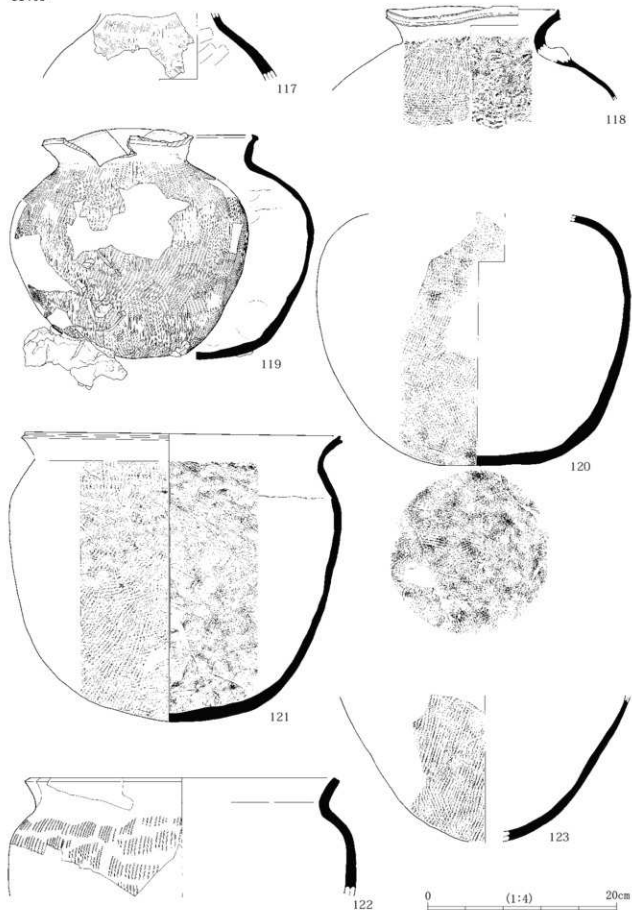
第54図 SB103出土土器

SB103



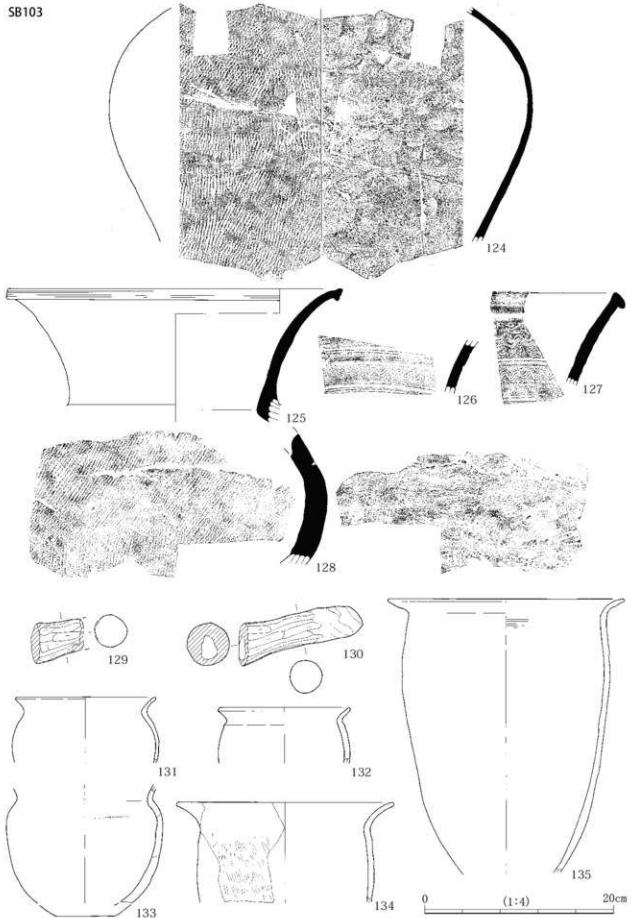
第55図 SB103出土土器

SB103



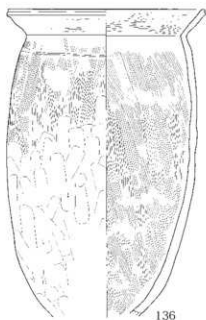
第56図 SB103出土土器

SB103

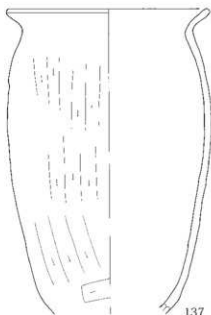


第57図 SB103出土土器

SB103



136



137

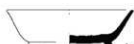
SD106 (SB103 付属施設)



138



139



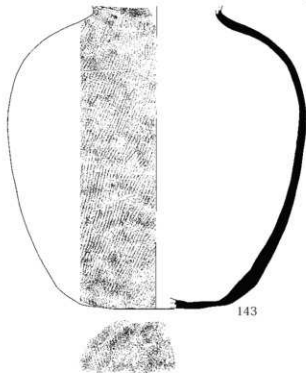
140



141



142



143



144

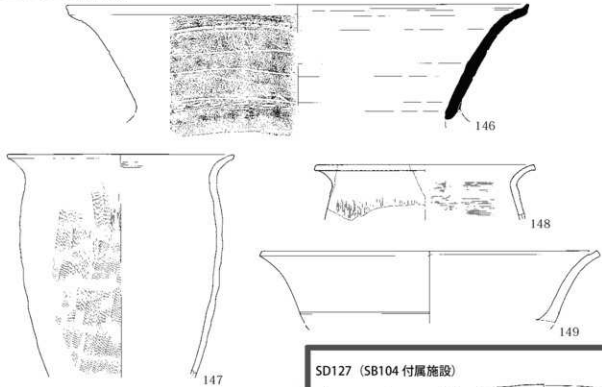


145

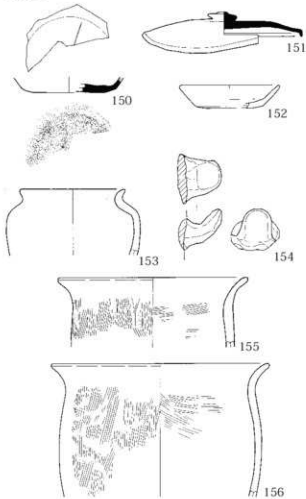
0 (1:4) 20cm

第58図 SB103出土土器

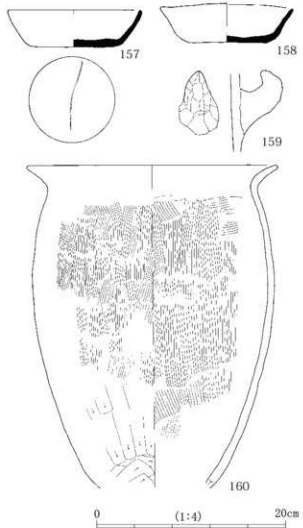
SD106 (SB103 付属施設)



SB104

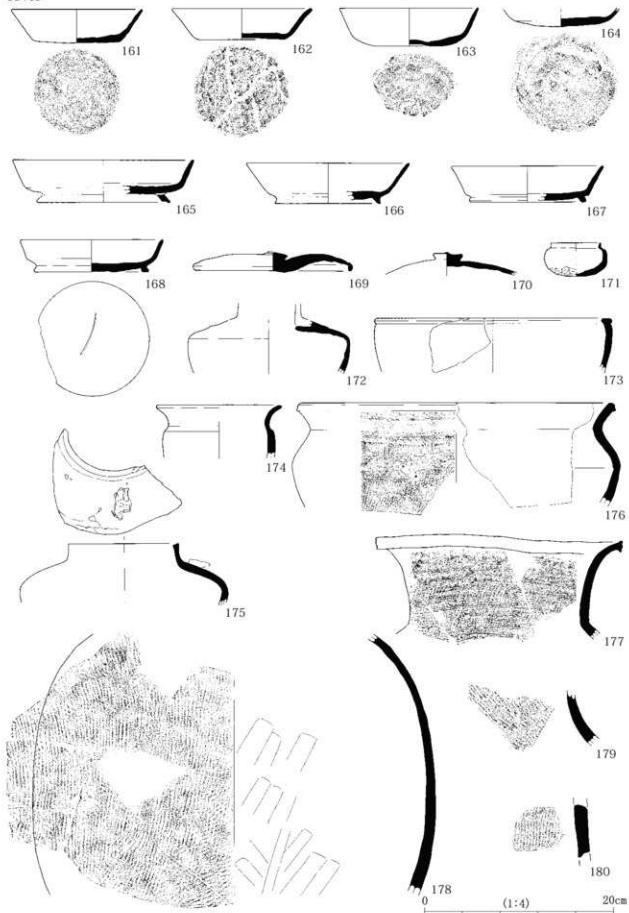


SD127 (SB104 付属施設)



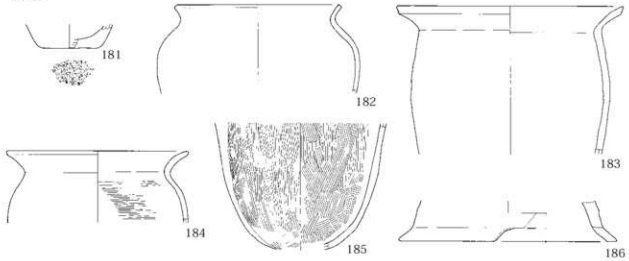
第59図 SB103・SB104 出土土器

SB105

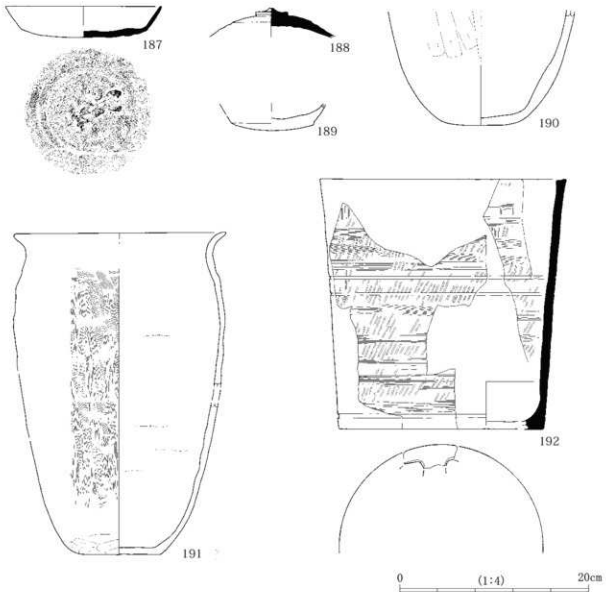


第60図 SB105出土土器

SB105

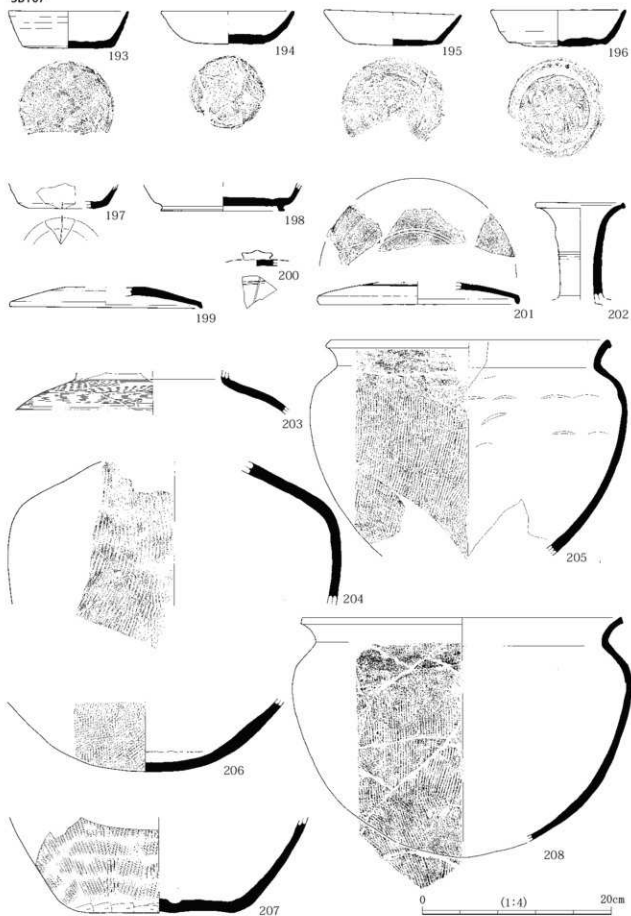


SB106



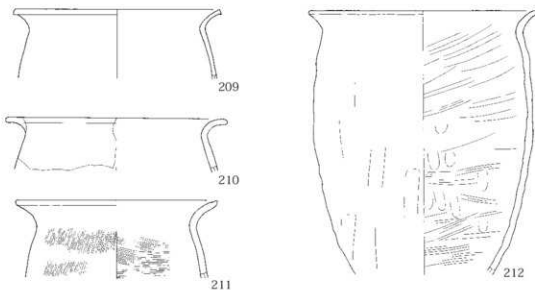
第61図 SB105・SB106出土土器

SB107



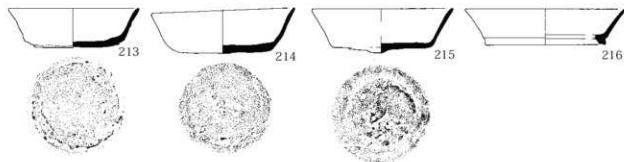
第62図 SB107出土土器

SB107



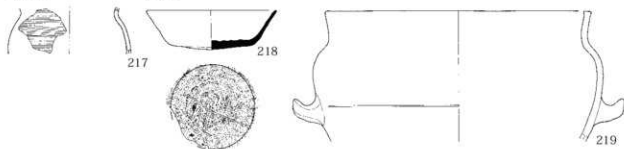
SD134 (SB107 付属施設)

SK118

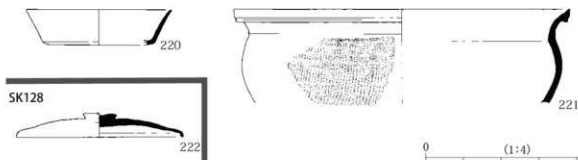


SK120

SK121



SK122

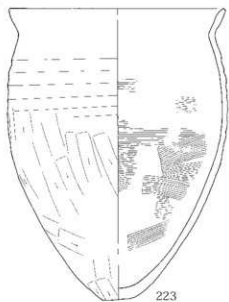


SK128

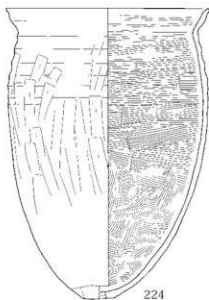
0 (1:4) 20cm

第63図 SB107、SK118・120・121・122・128出土土器

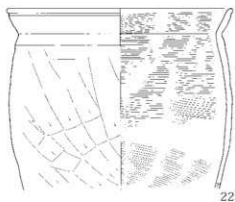
SK142



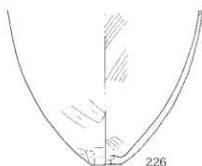
223



224



225

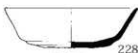


226

SK148



227



228



229



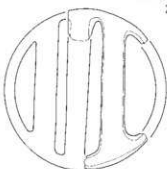
SK189



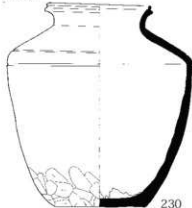
231



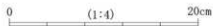
232



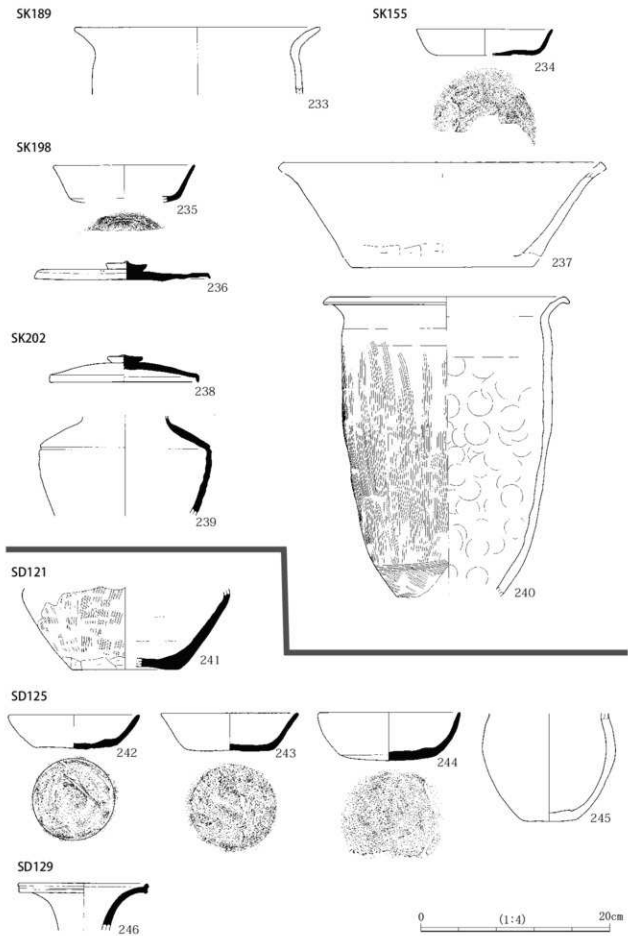
SK151



230

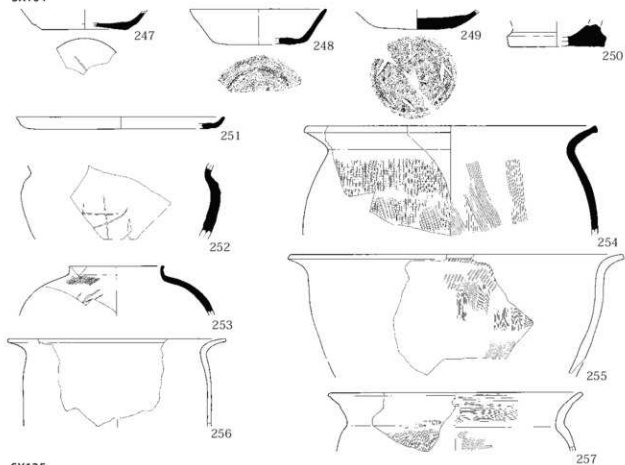


第64図 SK142・148・151・189出土土器

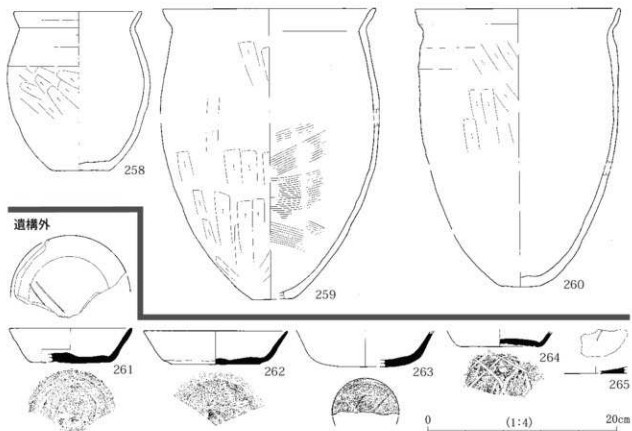


第65圖 SK155・189・198・202、SD121・125・129出土土器

SX104

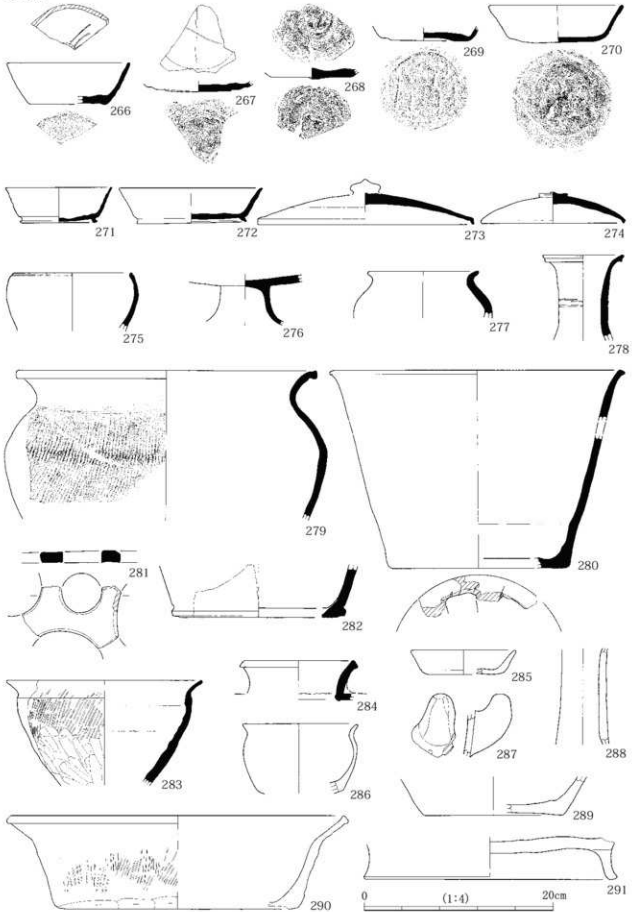


SX125

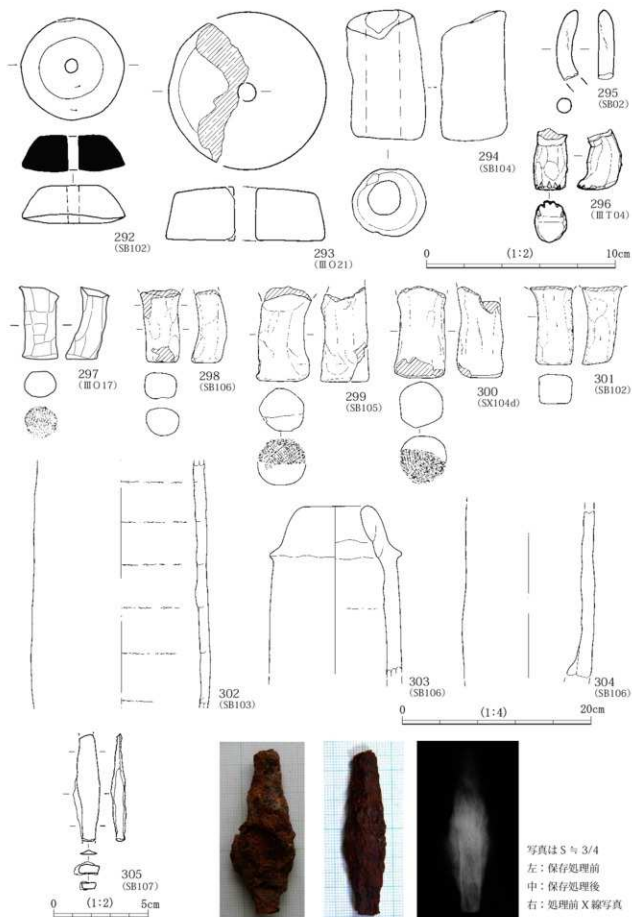


第66図 SX104・125・遺構外出土土器

遺構外



第67図 遺構外出土器



第68図 土製品・金属器

第5節 中世以降の遺構と遺物

1 概要

中世以降の遺構は、粘土採掘跡1か所、溝跡19条、ビット群1か所、土坑9である。中世と考えられる遺構は粘土採掘跡のみであり、他は近世・近代の遺構である。出土遺物がなく、時期が不明なものについても、上記の遺構数に含まれている。以下に、粘土採掘跡とビット群について記述する。他の遺構はDVD添付の遺構台帳を参照していただきたい。

2 遺構

SX104・113 (第70～72図)

遺構の構造：ⅢT2～4・7～9グリッド(2区)で検出した。当初SX104とSX113は切り合いがある別個の遺構と想定したが、切り合い関係は明確に捉えられず、結果的に一続きの遺構と判断した。広域に広がっており、便宜的にSX104a～h・SX113に区分して調査を進めた。SX106(縄文時代)と接するが、土層の切り合い関係を明確に捉える事が出来なかった。

南東側が掘乱で破壊されており全体形状は不明である。概ね等高線に平行して帯状に広がっており、幅10～17.5m、長さ29mにわたって確認された。約304㎡の広さに及び、深いところで80cm程である。底面は凹凸が著しく、小規模の採掘が繰り返された結果上記の広さになったと考えられる。断面で埋土の切り合いが確認されることもあるが、採掘の工程を復元するデータは得られなかった。

出土遺物：SX104dでは、縄文土器片が39点と集中して出土した。SX104全体では奈良時代と思われる須恵器・土師器破片約400点が出土したが、図示したもの(第66図247～257、第68図300)もすべて破片であり、その他は大半が5cm角以下の小破片である。SX104dで丸碗(第70図1)と灯明皿(第70図2)、SX104bで内耳鍋(第70図4)が出土した。2の灯明皿は17世紀代に生産されたものと想定される。この他、石鏃が3点とナイフ形石器が2点出土した。SX113では縄文土器は認められず、中世内耳鍋の破片と、16世紀代の大窯の皿(第70図3)が出土した。

この他、SX104dの底面の下の粘土層に直径2.5cmの杭状の木製品が出土した。遺構との関係は明確には捉えられず、地表下の浅いところであり、遺構埋没後に打ち込まれた可能性が高い。

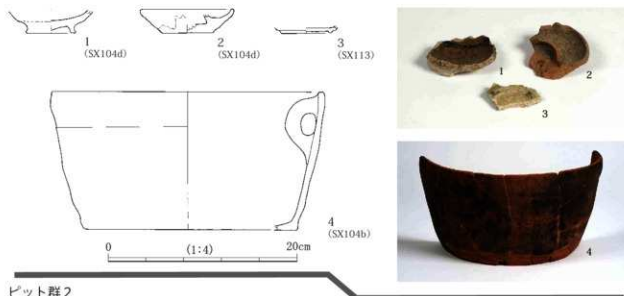
遺構の時期：須恵器・土師器は、その出土状況および奈良時代の遺構が周辺にあることを考慮すると、混入したもので、遺構の時期は示さない判断した。したがって、出土した内耳鍋や陶磁器から、粘土採掘跡は中世から近世初めのころのものであると判断した。但し、縄文土器の出土状況から、SX104dの一部は縄文時代の粘土採掘跡の可能性がある。

ビット群2 (第70図)

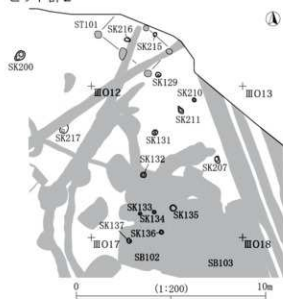
ⅢO06・07・12・13グリッドで検出されたビット群。15基のビットが確認されるが、規則的な配列が確認されなかったものである。出土遺物がほとんど確認されず、埋土の色調が異なる遺構も認められ、全てのビットが同時期のまとまりのある遺構群であるとは言いがたい。SK132・134～137はSB102(奈良時代)の埋土に掘り込まれており、奈良時代以降の遺構であることは確認できる。SK210・211・215・216・217など縄文時代・奈良時代の遺構埋土とは明らかに異なる色調であることから、中世以降の所産であると判断した。

3 出土遺物 (第70図)

1は瀬戸美濃の丸碗(17世紀)、2は在地産の灯明皿(17世紀以降)、3は大窯の皿(16世紀)、4は内耳鍋である。中世・近世の遺物では、この他に、時期不明の陶磁器が2区で数片出土したのみである。



ピット群2



遺構名	層別	出土遺物	大きさ (縦×横×深さ)	備考
SK129	Ⅲ0-07	遺物なし	23×21×14cm	
SK131	Ⅲ0-12	遺物なし	25×23×13cm	根植か?
SK132	Ⅲ0-12	遺物なし	27×27×11cm	SB102を切る
SK133	Ⅲ0-12	遺物なし	15×13×14cm	SB102を切る
SK134	Ⅲ0-12	遺物なし	16×15×8cm	SB102を切る
SK135	Ⅲ0-12	遺物なし	33×32×9cm	SB102・SB103を切る
SK136	Ⅲ0-12	遺物なし	22×19×6cm	SB102を切る
SK137	Ⅲ0-17	遺物なし	26×24×5cm	SB102を切る
SK200	Ⅲ0-06	遺物なし	64×44×28cm	
SK207	Ⅲ0-12	遺物なし	38×23×20cm	
SK210	Ⅲ0-12	遺物なし	20×18×8cm	
SK211	Ⅲ0-12	遺物なし	44×23×11cm	
SK215	Ⅲ0-07	遺物なし	26×19×9cm	
SK216	Ⅲ0-07	遺物なし	29×20×14cm	
SK217	Ⅲ0-11	古代須恵器	51×39×40cm	

ピット群2遺構一覧

第70図 中世以降の埴物・ピット群2

註

1) 発掘調査報告書は以下のものである。

(財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田銅土遺跡ほか』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24

中野市教育委員会 1993 『沢田銅土遺跡第Ⅱ地点』

中野市教育委員会 1995 『沢田銅土遺跡』

2) 発掘調査では砂質シルト・砂層・砂礫層をV層、粘土層をVI層と認識していたが、整理段階で、他地区との整合性を考慮し、層名を本文のとおり変更した。

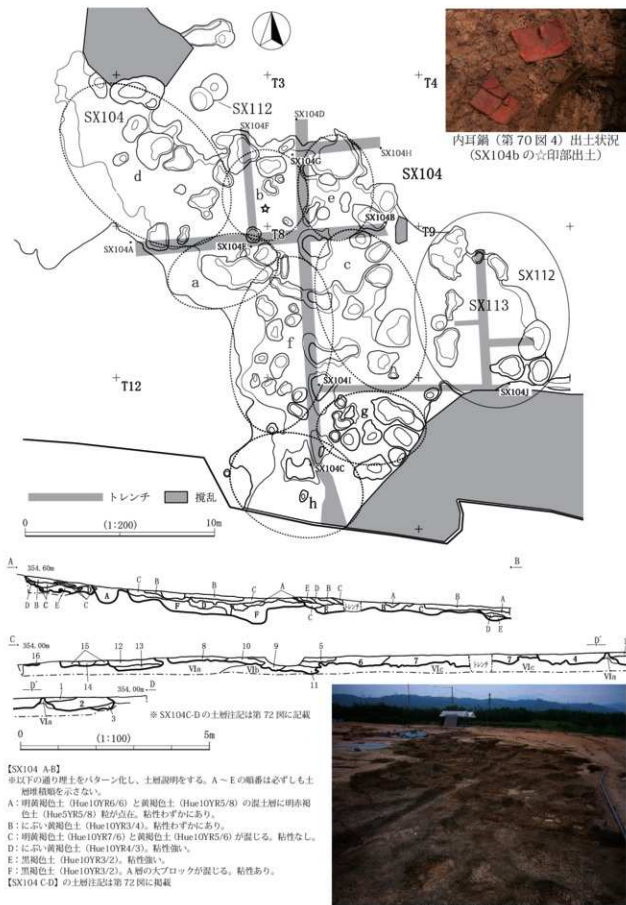
3) 調査区により層序が異なり、2区の層序を本遺跡の基本層序とした。基本土層IV層(2区)は1区のⅢa～c層に相当する(第4表参照)。

4) 基本層序Ⅲ・Ⅳ層(旧石器時代遺物包含層)から出土した石器のまとまりをブロックと呼称する。

- 5) 基本層序IV層は、1区のⅢa・Ⅲb層に対応する。
- 6) 粘土採掘跡（遺構記号SX）の調査は遺構により調査精度が異なっており、出土した剥片数が本来含まれていた点数を反映しているとは限らない。
- 7) SX104を便宜的にa～hに区分して遺物を取上げた。SX104 d以外の部分では縄文土器は出土せず、古代の須恵器・土師器及び中世の内耳銅が出土した・SX104の詳細は第3章5節に記載した。
- 8) 千田遺跡は、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこない、平成24年度に報告書刊行予定である。
- 9) TOT処理した遺物については、添付CDに収録した遺物台帳に記載した。
- 10) 以下の綿田氏の分類（綿田2002）にしたがった。A群は外反する口縁部から頸部屈曲部までを無文帯とし、それ以下の丸みを帯びた胴部を文様帯とする鉢形土器。B1群は外反する胴上半から中位間で文様帯となる深鉢及び鉢で、胴上半に緩い屈曲部があり、低部付近を除いて胴部全面が文様帯となるもの。B2群は外反する胴上半から中位間で文様帯となる深鉢及び鉢で、胴部中位かこれより下に後を持ち、文様帯の下端となるもの。
- 11) SD125と同様に竪穴住居に付随した溝は、8世紀代の事例は千曲市社宮司遺跡14号竪穴式建物跡で確認されている（長野県埋蔵文化財センター2006）。また、須恵器工跡である埼玉県鳩山窯跡群小谷遺跡A地区の竪穴住居跡に複数認められる（鳩山町教育委員会1991）。これらの溝は排水溝とされており、排水溝は古代では工房跡での発見例が多く、作業で生じた汚水などの処理用である可能性が指摘されている。
- 12) 器種は古代の道具の用途を研究者が想定して区分した概念。器種名等は前述の報告書の他、「吉田川西遺跡」（長野県埋蔵文化財センター1989）、「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編」（同1999）、「松原遺跡 古代・中世」（同2000）を参考とした。
- 13) 一般的に須恵器は1,100度前後で焼かれた青灰色の硬質の焼き物、土師器は700～800度で焼かれた褐色の焼き物とされている。また、須恵器は登り窯で焼成され、土師器は土坑状の焼成施設で焼かれるという理解がされている。8世紀代が中心となる本遺跡の出土遺物を観察すると、杯、杯蓋などの破片に青灰色の硬質の須恵器とは別に、橙色の軟質の破片が多く認められ、胎土や焼成からは、土師器長胴裏と区別できないものが認められる。これらの杯・杯蓋などを土師器とするのか須恵器とするのか、破片では判断できない場合がある。
本遺跡の出土土器の大半は8世紀代のものと判断される。8世紀代の平城京などの土器では、土師器の杯にはミガキが認められ、須恵器杯と土師器杯は製作技法により明確に区分される。本遺跡における杯類はすべて製作技法が口クロ整形によるものである。したがって、製作技法の観点で本遺跡の杯を区分すると、いずれも須恵器となる。しかし、9世紀末以降に見られる口クロ整形の軟質の橙色の杯については土師器としており、須恵器と土師器の定義が明確ではない。また、本遺跡出土の杯蓋の中には、橙色の軟質で、色調、焼成では所謂土師器と区分できないものが存在する。8世紀代の土師器杯蓋は確認されない器種であるので、これらは須恵器杯蓋である。立ヶ花表遺跡を含めて、本遺跡が須恵器生産関連遺跡であることを考慮し、焼成では土師器と区分できないものであっても、須恵器と同じ器形や製作技法があるものは須恵器と判断した。

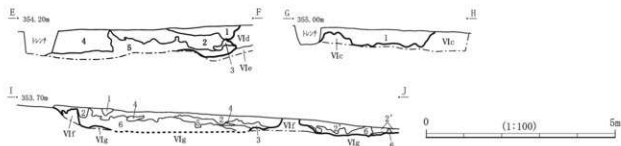
引用・参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 1989 『吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3
 長野県埋蔵文化財センター 1994 『栗林遺跡 七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
 長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田銅土遺跡 他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
 長野県埋蔵文化財センター 1999 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26
 長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡 古代・中世』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
 長野県埋蔵文化財センター 2006 『社宮司遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書78
 長野県埋蔵文化財センター 2009 『西四ヶ屋遺跡 表町遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書90
 中野市教育委員会 1993 『沢田銅土遺跡 第II地点』
 中野市教育委員会 1995 『沢田銅土遺跡』
 中野市教育委員会 2006 『長野県中野市遺跡詳細分布図』
 鳩山町教育委員会他1991 『鳩山窯跡群 III 工人集落編（1）』
 綿田弘実 1990 『長野県の縄文後期前葉の土器群』『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
 綿田弘実 2002 『長野県の縄文後期前葉土器群II』『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』



第71図 SX104 (1)

第3章 沢田銅土遺跡の調査



【SX104 E-F】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に灰オリーブ色粘土 (Hue5Y5/3) ブロックが混じる。
 - 2: 黄褐色土 (Hue2.5Y5/6) の粘土ブロックに黒褐色土 (Hue10YR3/2) ブロックが混じる。
 - 3: 灰色土 (Hue10Y6/1) に黄褐色土 (Hue10YR7/8) が混入。粘性強い。
 - 4: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に明黄褐色と黄褐色土粘土 (Hue10YR6/6-5/8) ブロックが混じる。明黄褐色土 (Hue5YR5/8) 粒が点在。
 - 5: 灰オリーブ色粘土 (Hue7.5Y5/2) に黄褐色土 (Hue10YR7/8) が混じる。(地山の可能性あり)
- VId: 灰色～明褐色土粘土 (Hue10Y5/1～7.5YR5/6)。(地山)
 VIc: 黄褐色土～灰黄褐色粘土 (Hue10YR5/6～10YR5/2)。(地山)

【SX104 G-H】

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に明黄褐色土～黄褐色土 (Hue10YR6/6～5/8) が混じる。明黄褐色土 (Hue5YR5/8) の粒が点在。粘性わずかにあり。
- VIc: 灰オリーブ色粘土 (Hue5Y5/2) に褐色粘土 (Hue7.5YR6/8) が混じる。(地山)

【SX104 I-J】

- 1: VI f層と類似。
- 2: 暗褐色土 (Hue10YR3/4) にオリーブ黄色粘土 (Hue7.5Y6/3) ブロックが混じる。
- 3: 暗褐色土 (Hue10YR3/4) にオリーブ色粘土 (Hue5Y5/4) ブロックが混じる。
- 3: 暗褐色土 (Hue7.5YR6/1) と灰色土 (Hue7.5YR4/2) の混じりにオリーブ黄色土 (Hue7.5Y6/3) の粘土ブロック混入。
- 4: 褐色土 (Hue10YR4/4) に灰オリーブ色粘土 (Hue5Y5/3) ブロックが混じる。粘性あり。
- 5: 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性あり。灰オリーブ色粘土 (Hue7.5Y6/2) の小ブロックが混じる。
- 6: 暗オリーブ色粘土 (Hue5Y4/3) と暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) が混じる。
- VI f: オリーブ黄色粘土 (Hue7.5Y6/3)。(地山)
- VI g: 黄褐色土～灰黄褐色粘土 (Hue10YR5/6～10YR5/2)。(地山)



SX104 土層断面

※第71図 SX104 断面の土層注記。

【SX104 C-D】

- 1: 明黄褐色土 (Hue10YR6/6)。粘性あり。
- 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に明黄褐色土 (Hue10YR6/6) が混じる。粘性わずかにあり。
- 3: 黄褐色土 (Hue10YR5/6)。明黄褐色土 (Hue10YR7/6) に黒褐色土 (Hue10YR3/2) が混じる。粘性あり。
- 4: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄褐色土 (Hue10YR5/6)。明黄褐色土 (Hue10YR7/6) のブロックが混じる。粘性なし。
- 5: 褐色土 (Hue10YR4/4) に灰色土 (Hue10Y5/1) のブロックが混じる。粘性なし。
- 6: 灰オリーブ色粘土 (Hue5Y5/2) に黒褐色土 (Hue10YR3/2) が混じる。
- 7: 黄褐色土 (Hue10YR5/6)。明黄褐色土 (Hue10YR7/6) に灰オリーブ色粘土 (Hue5Y5/2) のブロックが混じる。粘性わずかにあり。
- 8: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。粘性わずかにあり。
- 9: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄褐色土 (Hue10YR5/6) のブロックが混じる。粘性わずかにあり。
- 10: 灰色粘土 (Hue10Y6/1) に黒褐色土 (Hue10YR3/2) のブロックが混じる。
- 11: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄褐色土のブロックが混じる。粘性強い。
- 12: 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄褐色土 (Hue10YR7/8) の小ブロックが混じる。粘性わずかにあり。
- 13: 灰色粘土 (Hue10Y6/1) と黒褐色土 (Hue10YR3/1) と黄褐色土 (Hue10YR7/8) が混じる。
- 14: 黄褐色土 (Hue10YR3/2)。粘性わずかにあり。
- 15: 不明。
- 16: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) に明黄褐色土 (Hue10YR7/6) のブロックが混じる。粘性わずかにあり。
- VI a: 灰色粘土 (Hue10Y6/1)。(地山)
- VI b: 灰色と褐色粘土 (Hue10Y6/1～7.5YR6/8)。(地山)
- VI c: 灰色 (Hue10Y6/1) に灰オリーブ色 (Hue5Y5/2)、褐色 (Hue7.5YR6/8) が混じる粘土。



SX104 底面の凹凸

第72図 SX104 (2)

第4章 立ヶ花表遺跡の調査

第1節 調査の概要

1 遺跡範囲と発掘調査歴

立ヶ花表遺跡は中野市大字立ヶ花字表872-1番地ほかに所在する。昭和35年のし尿処理場建設に際し発見された遺跡で、昭和37年に神田五六氏・金井汲次氏らによって発掘調査がおこなわれ、褐色粘土層からナイフ形石器、彫器など50点余りの黒曜石製の旧石器時代の石器群が出土した（中野市教育委員会1962、金井・川上1967）。また、『中野市遺跡詳細分布図』によると、弥生時代竪穴住居跡、平安時代の土師器・須恵器が確認されたとされているが、詳細は不明である。

本遺跡は、沢田鍋土遺跡の南側に隣接し、千曲川支流の篠井川に臨む丘陵上及び南斜面に広がる遺跡である（第73図）。その範囲は、東西280m、南北170mに及ぶ。丘陵の頂部は、中野市し尿処理場建設に伴い、大部分が削平され、遺跡の西側にわずかに丘陵頂部が残されているのみで、原地形は大きく変更されている。また、残された西側の頂部には、円墳とされる立ヶ花1～3号墳が存在する（第74図）。

また、隣接する立ヶ花城跡、がまん淵（湧）遺跡（註1）と立ヶ花表遺跡の3遺跡を「立ヶ花弥生遺跡群」と呼称し、弥生時代後期の防御的集落跡に関わる遺跡群と評価する見解も示されている（土屋1999）。残念ながら、これらの3遺跡は、遺跡の主体部分が削平されてしまい、全体像を知ることはできない。

2 調査の概要

（1）調査の方法と調査成果の概要

調査対象地区をA～Eの地区に区分し（第74図）、県教委と運輸機構との協議のうえ、以下のように調査を実施した。A～C地区は、平成19・20年度に長野県埋蔵文化財センターが確認調査を実施した。A地区は人力によるトレンチ調査をおこない、須恵器窯跡を確認し、本調査を実施することとなった。B・C地区は重機によるトレンチ調査で遺構が確認されなかったため、本調査を実施しなかった。トレンチ調査は窯跡の存在が想定される緩斜面部で実施し、窯跡が構築不可能な急斜面は調査不要と判断し、トレンチ調査はおこなっていない。D・E地区は削平されており慎重工事とされた。D地区では、工事の際、地表下1.5m以上掘削された後に大量の産業廃棄物が投棄されており、遺物包含層に相当する層が失われていることを確認した。E地区は、し尿処理場建設に伴う削平により遺構は消滅しており、遺構・遺物は残されていなかった。A地区のみが本調査の対象となり、雑木の伐採後、重機で表土を除去し遺構検出をおこなった。なお、第73図の地形図は削平部の範囲が発掘調査の時とは異なる。削平部と調査区の位置関係は第74図下図が実態を示している。

A地区では、須恵器窯跡3基（SY01～SY03）が検出され、窯跡の斜面下方には灰原1か所が確認された。また、各窯跡の燃焼部の脇に遺物集中地点が確認され、SQ01～03の遺構名を付した（第74図）。これらの他に、削平部と斜面の境界付近に不整形な帯状の黒褐色土の落ち込みが確認された（SX01～04）。旧石器時代の剥片と須恵器が出土したが、調査の結果、これらの落ち込みは遺構ではなく、地滑りや断層によって生じたものであると判断した。

須恵器窯跡に関連する遺物の他には、旧石器時代の彫器、石刃、剥片、縄文時代の石鏃、弥生時代の甕破片・磨製石斧・刃器などが出土した。また、中世の内耳網の破片2点、と近世以降の陶磁器が数点出土した。これらの遺物に伴う遺構は確認されなかった。

SY02出土の炭化物の年代測定及び樹種同定を、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した。

(2) グリッドの設定と遺構記号

グリッドの設定方法は第1章2節に記述した。ただし、灰原の調査では1mグリッド単位で遺物を取上げるため、2メートルグリッドを4分割し、a～dの記号を付した(第1図)。

灰原は調査では遺構記号を用いず、上記のグリッド単位で遺物を取上げた。整理作業において1号灰原と名称を付した。

遺構番号は以下のものを用いた。

SY【窯跡】SY01～SY03

SQ【遺物集中地点】SQ01～SQ02。

SX【不明遺構】SX01～SX04

3 基本層序

A地区の調査区内においても、場所により土層が異なる。第73図に確認調査で記録した各地点の土層を示した。以下に土層の説明を記す。Ⅱ層群を除去したところで窯跡が確認される。須恵器を包含する灰原層(A層)はⅢa層とⅢb層に挟まれる。遺物包含層はⅢ層群に含まれており、Ⅲ層群は調査区内の斜面下方の緩斜面部を中心に確認される。Tr7ではSY03・SQ01に関わる遺物包含層(B層)がⅡ層群の下に確認された。

Ⅲ層群が縄文時代から奈良時代の遺物包含層、Ⅳ層以下は旧石器時代以前の堆積層である。

I層：暗褐色土。表土(腐植土)。

Ⅱa層：黄褐色土(Hue10YR5/6)。

Ⅱb層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)。5cm大の円礫を少量含む。

Ⅱc層：褐色土。礫を含まない。

Ⅲa層：暗褐色土(Hue10YR3/4)。礫を少量含む。

Ⅲb層：暗褐色土(Hue10YR3/3)。

Ⅲc層：黒褐色土(Hue10YR2/3)。

Ⅲd層：暗褐色土(Hue10YR3/4)。スコリア状の岩粒を多く含む。

Ⅳ層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)。

Va層：黄褐色砂質土。

Vb層：黄褐色砂質土に礫を多く含む。粘土を混じる。

Ⅵ層：黄褐色砂層。

Ⅶ層：黄褐色土を混じる砂礫層。

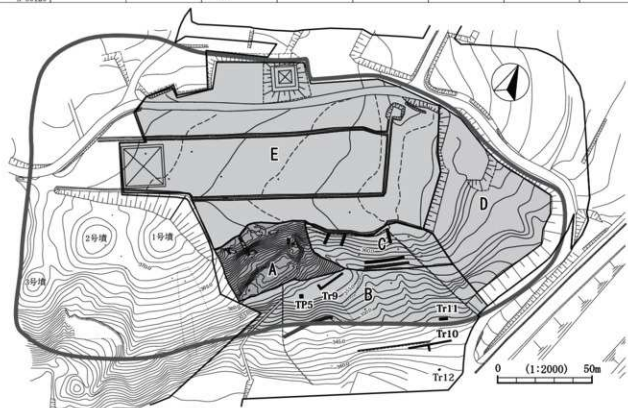
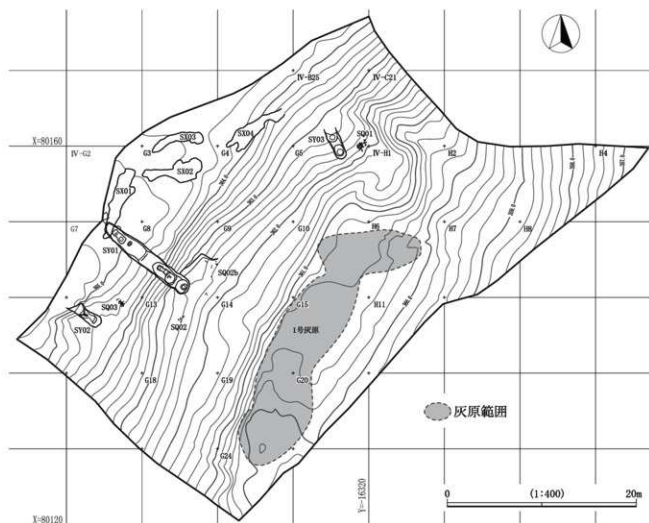
Ⅷ層：褐色～灰色粘土層。

A層：黒褐色土。焼土粒、炭化物、須恵器破片、円礫を含む灰原堆積層。

B層：暗褐色土。焼土粒、炭化物、須恵器破片を含む。SQ01の堆積層。



第73図 立ヶ花表遺跡調査範囲と基本層序



第74図 立ヶ花表遺跡遺構配置図

第2節 旧石器時代から弥生時代の遺物

1 旧石器時代の遺物

旧石器時代では、57点の石器群が出土した。剥片、破片がすべて旧石器時代の遺物とは断定できないが、縄文時代の遺物は石鏃2点のみであり、土器も出土していないことから、上記の石器の大半は旧石器時代の遺物と判断した。これらの遺物は、須恵器が出土する基本層序Ⅲ層群及び遺構埋土内より出土しており、原位置を保っている遺物は認められない。いずれも、斜面上方に包含されていたものが崩落し、二次堆積した石器群と考えられる。

石器群は、彫器1点(第75図1)、削器1点(第75図2)、石刃4点(第75図3)、二次加工がある剥片2点(PL18)、楔形石器1点、剥片43点(PL18)、破片3点である。剥片の中に細石刃の可能性があるものが1点ある。下呂石の石刃1点、チャートの剥片3点の他は、すべて黒曜石である。彫器1点、石刃4点の黒曜石産地推定分析の結果、すべて和田鷹山群であった。産地推定分析は望月明彦氏に依頼し実施した。遺物の属性は、巻末の遺物観察表および添付DVDの「立ヶ花表遺跡石器観察表」に記録した。

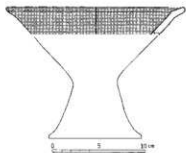
75図1は彫器である。上縁部の裏面と、基部側の二側縁の表面に連続した二次加工が施された後、左側縁に槌状剥離がなされる。自然面が残されている。2は削器である。左側面は折れた面であり、全体形状は不明であるが、抉入削器とすべきものである。下側縁部に裏面からの連続した二次加工が施され、抉入状の刃部が形成されている。右側縁部には連続した微細な剥離が認められる。3は石刃である。打面は欠損しており、裏面端部に剥離が認められる。ガジリによる剥離が著しい。本遺跡で出土した唯一の下呂石製の石器である。これらの石器の他に、写真図版PL18に石刃(管理番号6・8・13)、二次加工がある剥片(管理番号7・12)、剥片(管理番号10・19・20)を掲載した。

2 縄文時代と弥生時代の遺物

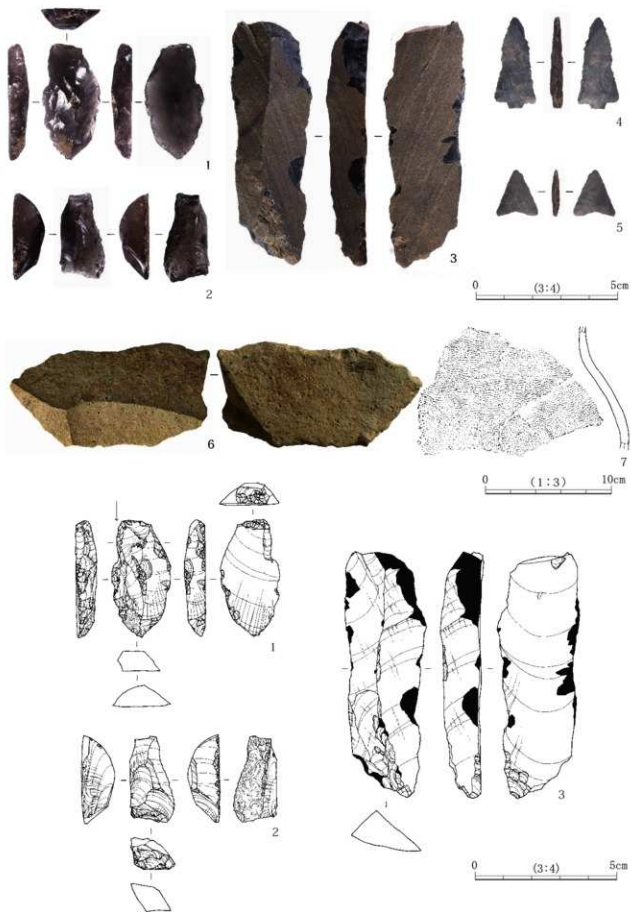
縄文時代の遺物は石鏃2点のみである(第75図4・5)。いずれも形の整った石鏃で、色調と質感が類似したチャート製である。縄文時代の土器が出土していないことから、周辺に集落跡があることは想定できない。狩りなどの集落外での活動の際に、残された遺物であると考えられる。遺物の属性は、巻末の遺物観察表および添付DVDの「立ヶ花表遺跡石器観察表」に記録した。

弥生時代の遺物は、輝石安山岩製の刃器1点(第75図6)と太形蛤刃磨製石斧破片1点、甕形土器破片1点(第75図7)、と高杯破片1点のみである。

調査区付近で、かつて弥生時代の高杯破片(右図参照)が採集されており(土屋1999)、遺構の存在が示唆されている。今回の調査では遺構は確認できなかったが、削平された丘陵頂部に弥生時代の遺構があった可能性が指摘できる。



採取された高杯(土屋1999より)



第75図 旧石器時代～弥生時代の遺物

第3節 奈良時代以降の遺構と遺物

1 概要

第74図にA地区の遺構配置図を示した。奈良時代の須恵器窯跡3基(SY01～SY03)と灰原1か所を確認した。須恵器窯跡は等高線に直交するように築かれている。SY01とSY03は底部回転ヘラ切りの杯Aが出土しており、SY02では底部回転糸切りの杯Aが確認され、「1号・3号窯」→「2号窯」の順で、操業時期を少なくとも二つに区分できる。各須恵器窯跡の脇には、土器がまとまって出土した遺物集中部(SQ01～SQ03)が確認された。窯跡の斜面下方には灰原1か所を検出した。灰原は調査時には遺構名を付していなかったため、整理段階で「1号灰原」とした。

出土遺物の器種分類は、第3章第4節3項で示した分類(第48・49図、12表)にしたがった。

この他、中世の遺物が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

2 窯跡

(1) 1号窯(SY01・SQ02)(第76図～82図)

調査経過：焼成部のプランを検出後、長軸方向に1本、短軸方向に複数のトレンチを入れ、長軸方向の燃焼部の範囲や焼成部と燃焼部の壁の立ち上がり・床面を確認した。地山の亀裂と推測されるSX01が、SY01の煙道付近を壊していた。SY01の前底部と想定される両脇に遺物がまとまって出土しており、それぞれSQ02、SQ02bとした(第77図)。

構造：煙道へ続く被熱した奥壁の立ち上がりを確認した。全長10.99m、主軸N38°Wで、等高線と直交する。焼成部(中間部を含む)は6.48m、燃焼部から焚口部は4.51mの長さである。幅は燃焼部から焼成部にかけて1.43～1.88mを測るが、焼成部の奥壁付近が若干狭くなる。

焼成部は、床面は堅緻で燃焼部に向かって緩やかな傾斜を形成し、貼床が施される。傾斜角は6～8°である。床面と壁の立ち上がりは、被熱により赤褐色化している。浅い皿状のくぼみが2か所確認され、大甕を置いた痕跡と推定した。

焼成部と燃焼部との間の床面(中間部)が焼成部より一段高くなり、焼成部と燃焼部の床面が連続しない構造で、燃焼部底面は焼成部より約1.8m低くなる。中間部は焼成部と18cm程の段差があり、表土直下で被熱面が確認されたが、土層断面観察用のベルト以外の部分は床面を掘り抜いてしまい、詳細は不明である。中間部から燃焼部底部に向かい約40°の急斜面となり、中央部に幅45cmの階段状の平坦面が設けられ、燃焼部底面に至る。急斜面部も被熱により赤褐色化しているが、焼成部の赤褐色化の度合いが弱い。燃焼部には2か所のピットが確認される。焚口付近のものはいわゆる舟底状ピットと考えられる。

埋土は、以下の4群に区分される。窯体崩落後に堆積した1・2層、窯体が崩れて堆積した3・4層、焼成部の貼床と地山が赤色化した5・6層、焼成時の床下堆積層の7・8層である。

本窯跡の構造は高丘陵陵窯跡群で他に例を見ない構造をしており、出土した須恵器の大半は大甕破片である。また、焼成部の大甕を置いた痕跡と推定される窪みの存在も勘案し、須恵器大甕を焼くための特殊な構造の窯跡と判断した。

一段高い中間部があること、焼成部と燃焼部に1.8mの比高差があることから、2基の窯跡が重複している可能性がある、との指摘もなされているが(註2)、調査では2基の重複を示す所見は得られなかった。遺物出土状況等も考慮し、2基の窯跡の重複ではないと判断した。

遺物出土状況：窯体内では、焼成部床面および燃焼部の急斜面に須恵器大甕破片が多数出土した（第77図）。焼成に失敗したと思われる、著しく歪みを生じた破片が認められる。

焼成部には大甕の破片が大半を占める。燃焼部および焚口付近には大甕の破片と共に杯A、杯B、杯蓋、甕、壺、横瓶などの破片が出土した。

出土遺物（第79～82図）：杯A（1・2）、杯B（3～5）、杯蓋（6～8）、壺蓋（9）、長頸壺（10）、短頸壺B（11）、横瓶（13）、甕（12・15～18）、大甕（19～34）などが出土した。

1は底部回転糸切りで、2は回転ヘラ切りである。杯Aの底部は12点出土したが、11点は回転ヘラ切りである。底部糸切りの杯A（第79図1）は燃焼部検出面から出土しており、本遺構で焼成された須恵器ではなく、埋土に混入したものであると判断した。3・5・6・9・11～14は自然釉がかかっており、5は欠損面にも自然釉が認められる。11は肩部に円形の付着痕跡が認められる。焼成の折に、乗せていた壺蓋が付着した痕跡であろう。第89図24の壺蓋の端部が剝離していることと符合する。13は横瓶としたが、壺類の高台の可能性もある。14は体部外面にタタキ、内面に縦方向のロクロ調整痕が見られ、高台付の横瓶と判断したが、著しく歪んでおり本来の器形が推定できない。底部内面に直径5～6cmの範囲に自然釉が認められ、横瓶の頸部内径にしては小さい印象を受ける。底面に「多井口」の窠書が認められる。16は長頸部に窠書が見られるが、内容を判読できない。17はタタキ後に、螺旋状のハケ目が見られるが、歪んでおり器形は不明である。18は焼成部より出土した甕の胴部破片で、タタキ後に部分的にハケ目が見られる。厚さ6～8mmと薄く土師質の焼成である。19は頸部に2本の沈線が廻る。20～30・32～34は外面にタタキ、内面は無文あて具痕の上にハケ調整が認められる大甕体部破片で、19・21・23・28・30～34は厚さ2cmを超える厚手のものである。28～34は著しく歪んだ大甕の破片で、30は器面が波打つように歪み、32は外面が内側になるように折れ、33は2枚の破片が付着している。なお、20～29の大甕破片は1/8縮尺で提示し、調整が良好に観察できる部分の拓本を別途1/4で示した。なお、31は1号灰原から出土した。

35～39はスサ入りの窯体破片である。35は窯体壁面に布目痕がある。36・39は窯体内部に直径1cmと1.6cmの円筒形の空洞がある。37は幅3cmの円筒形棒状圧痕、39は直径0.6cmほどの棒が束になった草簀（よしず）状の圧痕が、窯体壁面に観察される。

この他、焼台が7点出土した。粘土塊に須恵器破片が付着したもの4点、自然釉が付着し、被熱で亀裂が生じた楕円礫3点である。

遺構の時期：8世紀前半を想定する。



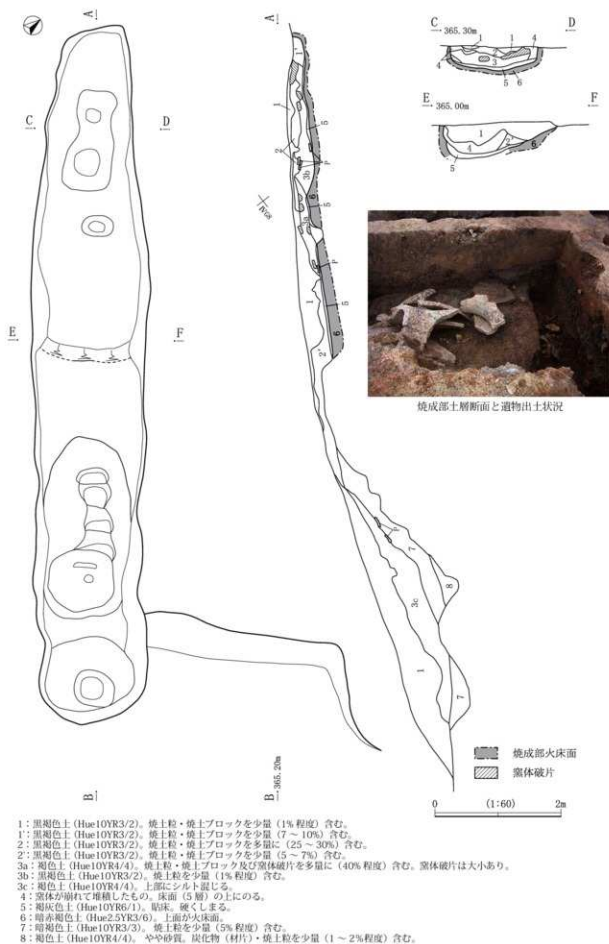
SY01 遺物出土状況



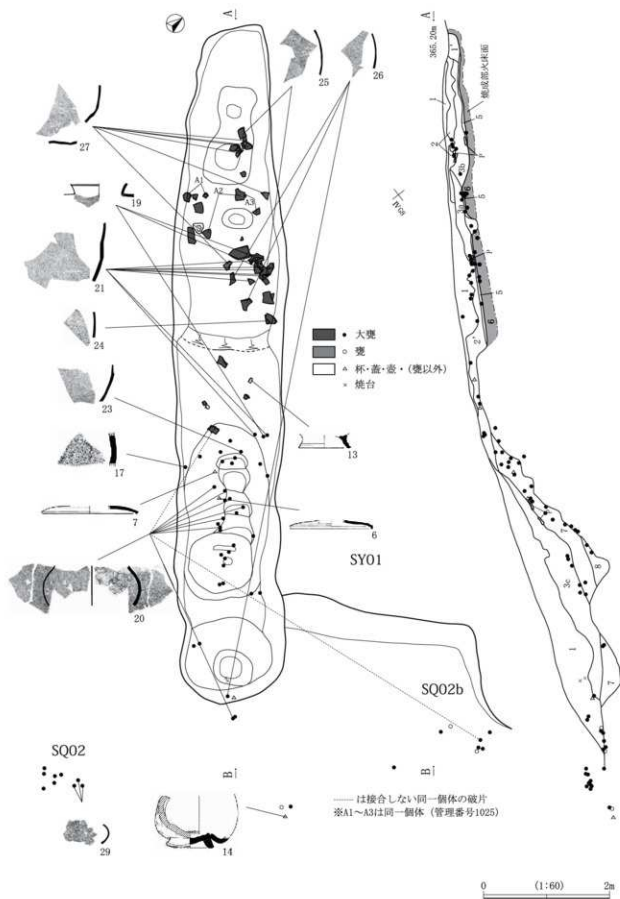
SY01 焼成部



SQ02 遺物出土状況



第76図 SY01



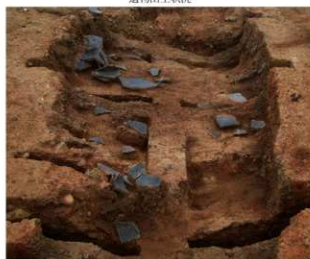
第77図 SY01 遺物出土状況



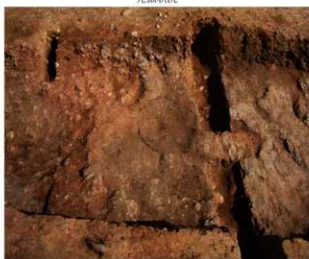
遺物出土状況



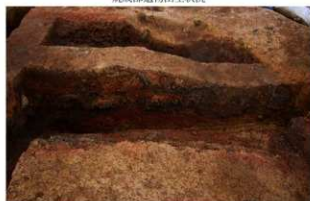
完掘状況



焼成部遺物出土状況



焼成部の窪み

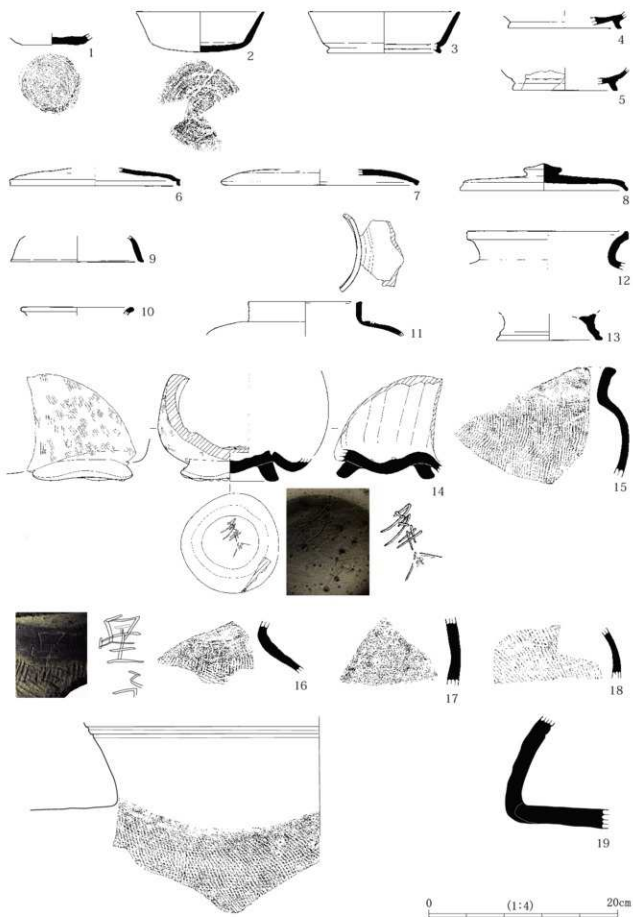


土層断面 A-B

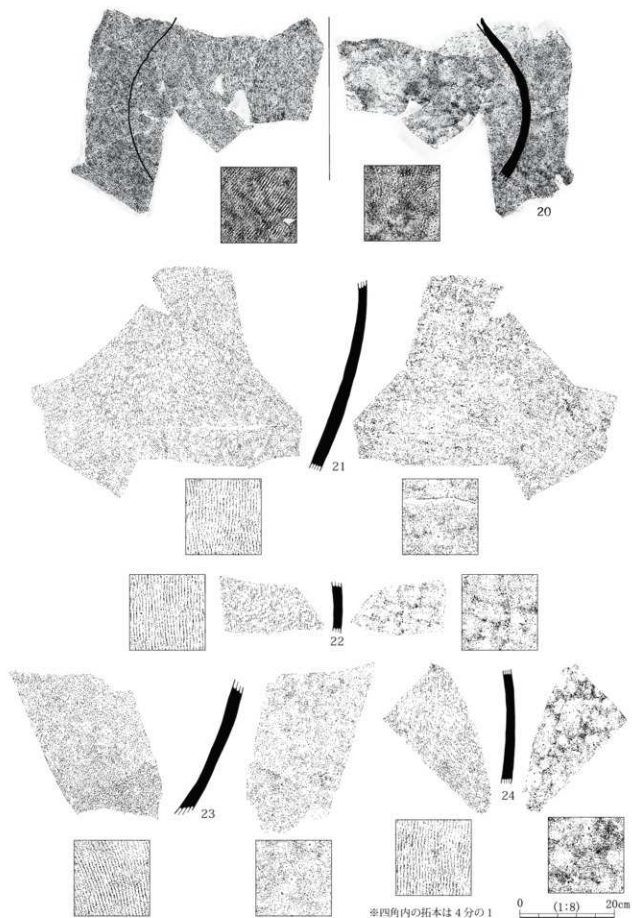


土層断面 C-D

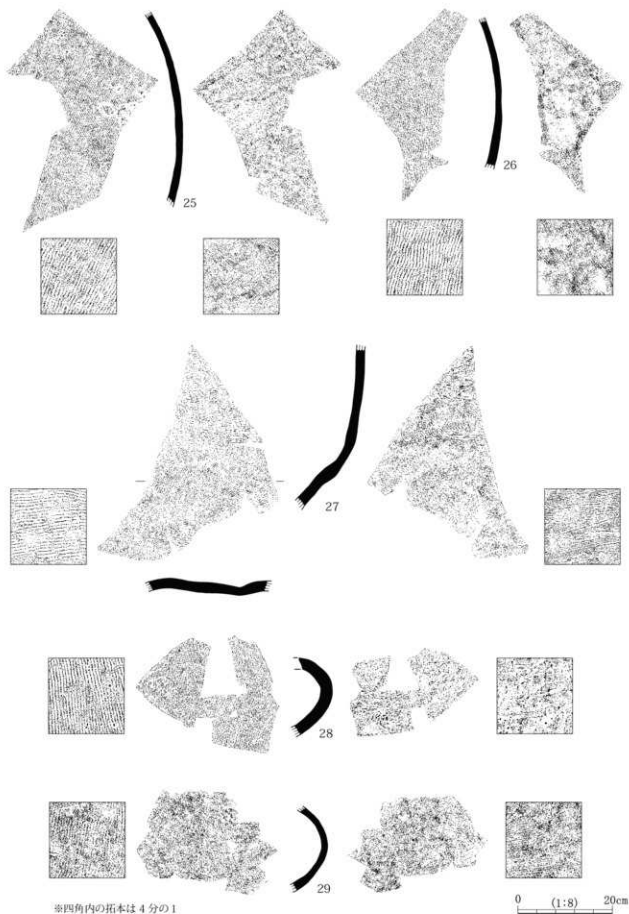
第78図 SY01 写真



第79図 SY01出土遺物(1)



第80図 SY01出土遺物(2)



第81図 SY01出土遺物(3)



第82図 SY01出土遺物(4)

(2) 2号窯 (SY02・SQ03) (第83図～85図)

調査経過:SY02の焼成部の脇の50×80cmほどの範囲に遺物がまとまって出土し、これをSQ03とした。焼成部との位置関係から、SQ03はSY02の前底部に残された遺物と推定されるが、前底部が確認されていないため断定はできなかった。斜面上方は削平と攪乱により、焼成部の大半が失われ、焼成部のみの調査となった。

構造:検出された遺構の全長は3.4mである。主軸方向はN54°Wで、等高線と直交する。

焼成部は削平され残存しないが、斜面上方の削平された平坦部に、床面下が被熱して赤褐色化した地山砂礫層が確認された。この赤褐色部は焼成部の床面が削平され被熱面のみが残ったものと考えられるが、北西側は削平後の攪乱で削られており、焼成部の詳細は不明である。

焼成部は幅1～1.3m、長さ2.94mであるが、焼成部に連続しない構造を示す。焚口から焼成部に向かい約15°の下り傾斜で約2.3m続いた後、約65°の登り傾斜で焼成部に向かい立ち上がる。この立ち上がり部分の斜面には被熱面が認められず、地山の礫層の隙間にわずかに焼土が残っていた。斜面直下には窯壁と焼土ブロックが多量に堆積していたことから、斜面部の窯壁が崩落したものと判断した。焼成部底面には半円形と、楕円形の落ち込みが検出された。これらの落ち込み部分の埋土上部には硬化面は確認されない。焼成部の側壁は粘土を貼ることなく地山をそのまま壁面としている。北東側は地山の砂層が暗灰色の脆い砂岩ようになっており、これを取り除くと赤色化した層となる。南西側は砂礫層で、被熱し赤色化している。

埋土は、以下の4群に区分される。窯体崩落後に堆積した1～6層、窯体が崩れて堆積した7層、焼成に関わる炭化物を多く含む8層・9層、地山が赤色化した11層である。1～6層に含まれる窯体破片は焼成部の窯体破片が埋没過程で崩れ落ちてきたものと推定できる。断面C-Dで南西側の壁面が崩れており、残存する壁面の高さが南東側に対して低くなる。2層・3層からは中世の遺物が出土しており、南西側の壁面の上部が崩されて失われた時期は、中世以降であることが想定される。

本窯跡の焼成部は大半が失われており、窯跡構造は不明な部分が多いが、焼成部の特異な構造はSY01に類似している。

遺物出土状況:SY02では、焼成部端にまとまる1群と焼成部にまとまる1群がある。両者のレベル差は130～140cmであり、前者が2層、後者が7層中に出土したことになる。SY02では大甕が主体を占めるのに対し、SQ03は大甕・甕以外の器種が多い。

杯Aは底部回転系切りが5点、底部回転ヘラ切りが2点出土した。系切りは2層および7層から出土したのに対し、ヘラ切りは1層または2層から出土していることから、SY02で焼成された杯Aは底部回転系切りであり、ヘラ切のものは、混入したものであると判断した。SQ03の杯Aはすべて底部回転系切りである。SY02とSQ03には接合関係が認められない。

この他、2層上面からすり鉢、3層から中世のカワラケが各1点(第91図1・3)、焚口付近で内耳鍋の破片が数点出土した。また、5層下部から鉄鉢が1点出土した(第85図34)。

出土遺物(第84・85図):SY02では、杯A(1・2)、杯蓋B(3)、短頸壺B(4)、凸帯付四耳壺(5)、甕類・大甕(6～13)、鉄鉢(34)が出土した。SQ03では、杯A(14～18)、長頸壺(19)、土師器長胴甕(20)、焼台が出土した。なお、SY02・SQ03いずれにも杯Bは確認されなかった。

1・2・14～18はいずれも底部回転系切りの杯Aである。口径12.7～13.3cm、底径6.0～7.0の範囲に概ね収まり、器形に斉一性が認められる。18以外は焼成が良好である(焼成タイプI)。2は外面に粘土塊が付着しており、焼台である可能性がある。3は口径12.8cmと小形で、つまみ部が剥落している。本遺構では杯Bは確認されず、杯Aの口径は12.8cm以上で、蓋と対になる杯が確認できない。ちなみに、

杯蓋破片がSY02で9点、SQ03で3点出土しているが、口径を確認できる資料はない。4はSY01出土の短頸壺(第79図11)に類似しており、肩部に円形の杯蓋の付着痕が認められ、付着痕の内側に自然釉が見られる。出土状況から混入遺物である可能性がある。5は凸帯付四耳壺で、同器種は本例を含めて2点出土したのみである。欠損面に自然釉が付いているところがあり、焼台に用いられた破片の可能性はある。大甕は体部器壁が約1cmの薄いもの(6・7)、厚さ1.5～2.2cmの厚いもの(8～13)がある。10・12は内面に自然釉が付着しており、10では割れ面に被熱痕跡が見られる。19は肩部の接合痕で円形に割れており、肩部と頸部の接合方法が観察できる。20は土師器長胴甕で、底部付近がケズリ調整、胴部はナデ調整がなされる。21～33はスサ入り窯体破片である。21～27は直径0.6cmの棒が束になった葦簀(よしず)状圧痕が窯体壁面に、28～31は直径1～2cmの棒状圧痕が窯体内部に確認される。32は窯体壁面に布目痕が確認される。33は窯体内部に直径2.8～3.0cmと1cmの筒状の穴が確認される。棒状圧痕には直径0.6cmのもの、1～2cm前後のもの、3cm前後のものが認められ、2cm以上の太いものは窯体内部に圧痕が認められる。但し、1号窯では窯体壁面にも太い圧痕が見られるものが出土している。34の鉄鏝は、莖部が変形し、腐食してほとんど折れかかっている。主に8世紀～11世紀前半にみられる形態とされており(註3)、出土状況とも整合する。

この他、粘土塊に須恵器破片が付着した焼台が5点出土した。炭化物材5点の樹種同定の結果、すべて落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。

遺構の時期：8世紀後半を想定する。ただし、5点の炭化物の放射性炭素年代測定をバリノ・サーヴェイ株式会社委託し実施した結果、7世紀後半もしくは8世紀前半の年代が示された(第6章参照)。これまでの、信濃の須恵器研究によると糸切り技法の開始は8世紀中ごろとされており、年代測定の結果と齟齬が生じた。測定結果が操業時期より古くなっている可能性も考慮しなくてはならないが(註4)、北信濃地域での、糸切り技法導入の年代の再検討が必要であろう。土器編年からだけでなく、窯跡の調査成果を統合した研究が望まれる。



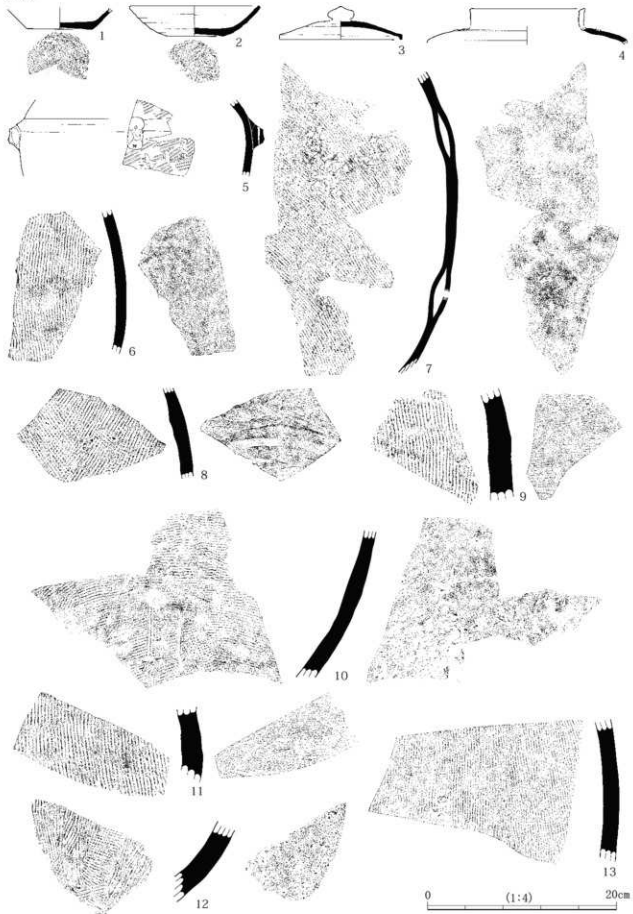
SY02 完備 (南東より)



SQ03 遺物出土状況

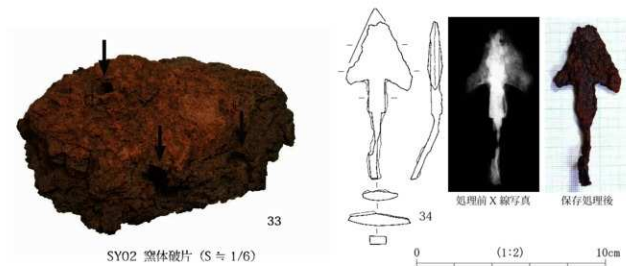
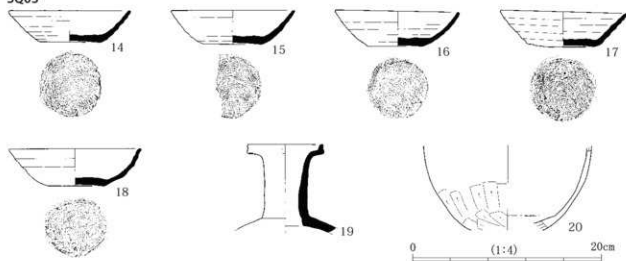


SY02



第84図 SY02出土遺物

SQ03



第85図 SY02・SQ03出土遺物

(3) 3号窯 (SY03-SQ01) (第86図・87図)

調査の経過: SY03の燃焼部の脇の80×110cmほどの範囲に遺物がまとまって出土し、これをSQ01とした。焼成部との位置関係から、SQ01はSY03の前庭部に残された須恵器と推定されるが、前庭部が確認されていないため断定はできなかった。

構造: 検出された遺構の全長は3.1m、幅1.1～1.3mである。主軸方向はN28°Wで、等高線と直交せず北に15°ふれて構築されている。焼成部がすべて削平で失われており、燃焼部のみが残存している。燃焼部には2か所の窪みが確認される。北側の窪みの底面には平坦部から続く赤色化した硬い火床面が認められる。側壁部が被熱して赤色化が顕著であるのに対し、燃焼部奥壁にあたる部分は、被熱による赤色化が見られず、違和感があるが、奥壁は約40°の角度で立ち上がり、焼成部へ続くものと推定した。南の窪みには被熱による赤色化がわずかに側面に確認されたのみで、北側の窪みと対照的である。壁面の地山の砂層の一部が暗灰色の砂岩のように硬化しており、SY02の燃焼部の構造と類似する。

埋土は、1層(表土)、2・3層(窯体破片を含む層)、4層(炭化物を多く含む)に区分される。

遺物出土状況: 北側の窪みの壁面に大甕破片が貼り付いた状態で出土した部分がある(下写真)。SY03とSQ01とに接合関係(第86図8)が認められ、SQ01がSY03に関連する遺物群であること判断した。

出土遺物(第86・87図): SY03では、杯A(1)、杯B(2～4)、杯蓋(5～7)、横瓶(8)、壺類の胴部破片、甕(9・10)、大甕(11～16)、SQ01では、杯B(17・18)、杯蓋(19)、横瓶、壺類、甕類(20・21)、大甕(22)が出土した。

1は底部回転ヘラ切後ナデ調整をしている。SY03では、杯Aと判別できる底部が残存する資料は1のみである。8はタタキ調整の後ナデ調整をしており、タタキ痕が不明瞭な部分もある。実測図左半分に沈線が廻り、閉塞部がある右半分には沈線が認められない。また、内面には無文のあて具痕がかすかに確認される。左半部の内面のみにロクロナデが残っている。焼き歪みで亀裂が生じている。9は肩部に1条の沈線がある。10は青海波文に類似した同心円状のあて具痕がかすかに確認される。11・13・14の内面はあて具痕の後にハケ調整がみられる。12は焼き歪みが著しく、器形復元が正確ではない。欠損面に自然軸の付着が認められる。15は丸底の底部で、タタキの後に底部中央部に螺旋状のハケ目が認められる。16は底部付近の破片とみられ、形状から丸底であることが推定される。内面はナデ調整がなされている。17は底部に筒書きの一部が認められる。20・21は内面に浅い青海波文状のあて具痕が確認され、色調・焼成も類似しており同一個体の可能性がある。22は内面にハケ目が見られる。

この他、粘土塊に須恵器が付着した焼台が2点出土した。

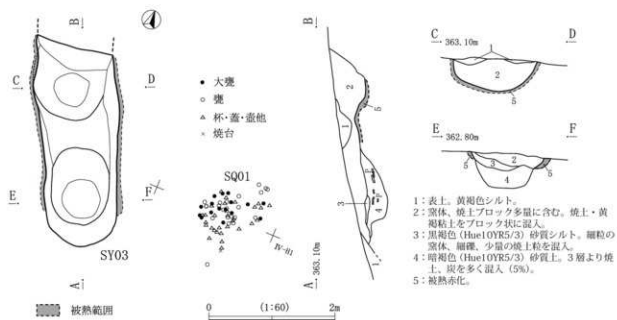
遺構の時期: 8世紀前半を想定する。



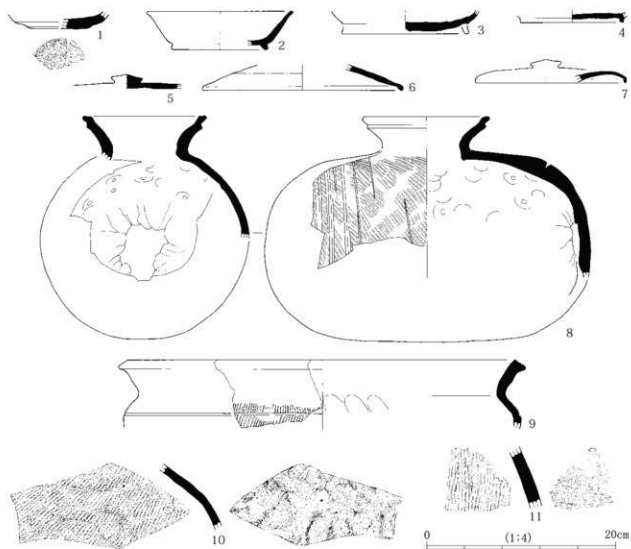
SY03 断面 E-F



SY03 裏出土状況

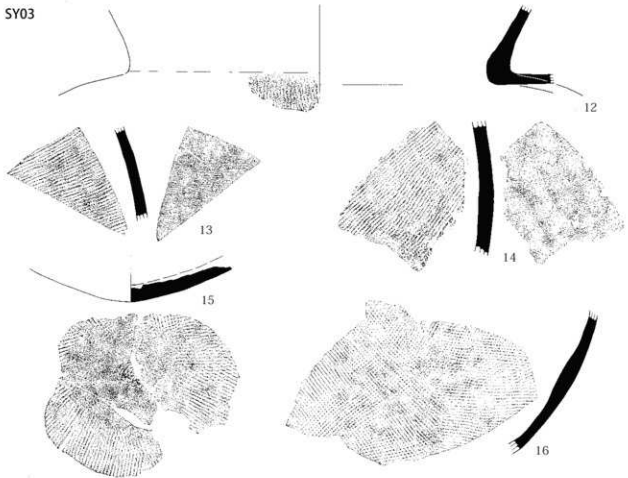


SY03

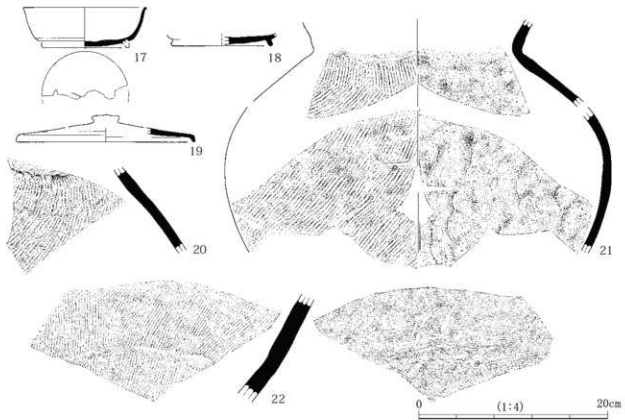


第86図 SY03・SQ01

SY03



SQ01



第87図 SY03・SQ01 出土遺物

3 灰原

(1) 1号灰原の遺物出土状況 (第88図)

3基の窯跡の斜面下方の緩斜面に炭化物、須恵器を含む灰原が1か所確認された。幅6m、長さ29.2mにわたって確認され、3基の灰原がつながっている。土層は単層であり、作業時期を区分するような土層堆積は示さない。第88図に1mグリッド別に須恵器の出土量の重量分布を示した。上段の図は、すべての器種の合計を示したもので、下段左は大甗の重量分布、下段右は大甗以外の重量分布である。甗と大甗の区分は、胴部破片の厚さが1cm以下のものを甗、1cmを超えるものを便宜的に大甗とした。全器種の重量分布をみると、3基の窯跡の斜面下方に、それぞれに対応するように分布密度が高いエリアが認められる。大甗の重量分布ではSY01の下方に特に密度が高いことが確認できる。大甗以外の器種では、SY03の下方に多く出土していることが読み取れる。

IV G19・20・24グリッドから出土した横瓶、壺がSY02出土のものと同接合し、IV G15、TP3、IV H06グリッドから出土した横瓶(第89図31)がSQ01出土のものと同接合したことが確認された。

(2) 灰原及び遺構外の遺物 (第89・90図)

杯A(1~10)、杯B(11~16)、双耳杯(17)、杯蓋(18~23)、壺蓋(24)、円面硯(25)、横瓶(26・31・32)、盤?(27)、長頸壺(28)、双耳壺(29)、壺(30)、凸帯付四耳壺、甗類(33~36・41~43)、大甗(37~40・44~46)が出土した。その他、杯、杯蓋などの破片に粘土が付着した焼台が数点出土した。

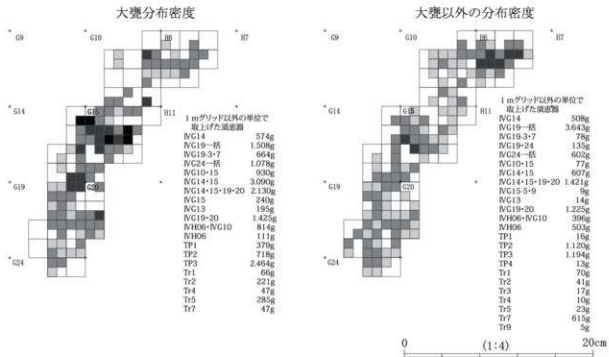
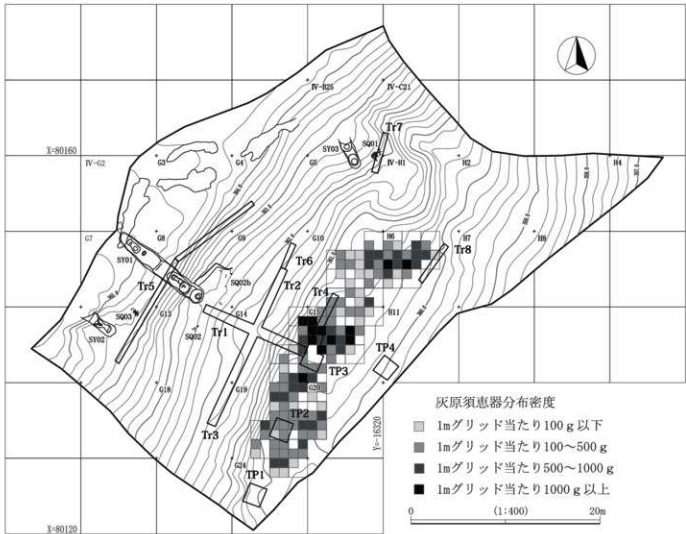
出土位置と窯跡内の須恵器との比較から焼成された窯を想定すると、1・3・4・16・18・21・24・33~41・44~46がSY01、2・5~9・11・14・17・22・23・26・29・30・42がSY02、10・12・13・15・19・20・25・27・28・31・32・43がSY03で焼成された蓋然性が高い。

1~3・6・8・11には「一」「×」などの施書が確認される。1は平行する沈線がランダムに複数見られ、他と異なる。4は太い圧痕状の沈線が交差する。10は3枚の杯が付着している。14の底部は回転糸切り後に回転ヘラ削りを行っていることが観察できる。16も同様に糸切りの後に回転ヘラ削りを行っているが、静止糸切りの可能性もある。18・19は杯蓋Aで、本遺跡では他に類例がない。25は本遺跡唯一の円面硯の小破片である。26は第79図14と同様に縦方向のロクロナデが観察され、同じ器形であると推定できる。

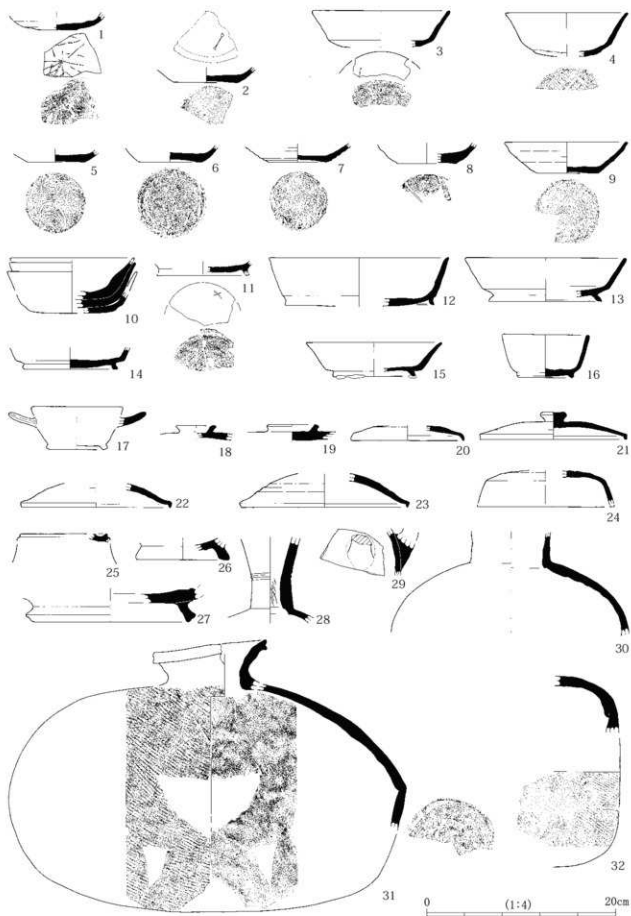
27・29・30は類例が見られず、器形が判然としない。器種名の再検討が必要である。31の内面はナデにより不明瞭であるが、青海波文のあて具痕が観察される。31・32は焼き歪みが特に著しい。33・41はタタキの後にカキ目状の板状工具によるナデが観察され、内面には無文のあて具痕が見られる。42は太い施書がある。43は器形復元が正確ではないが、2条もしくは3条の沈線が廻り、把手が付く器形であろうか。内面は青海波文のあて具痕が認められる。44~46の大甗体部破片は内面に無文のあて具痕の後ハケ調整が認められる。45・46は厚さ2.5cmを超える。

この他、粘土塊または楕円礫に甗などの須恵器破片が付着した焼台が16点出土した。被熱で亀裂が入った5~8cm大の円礫が8点出土しており、これらの礫も焼台に用いられたものと考えられる。

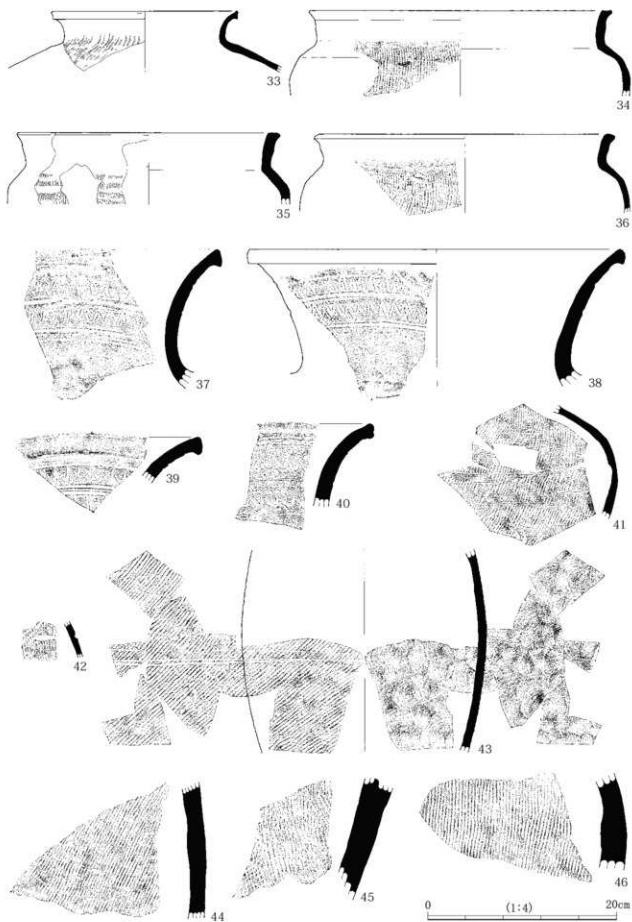




第88図 灰原遺物出土状況



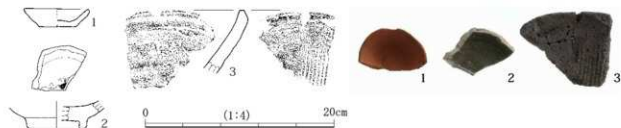
第89図 灰原・遺構外出土遺物(1)



第90図 灰原・遺構外出土遺物(2)

4 中世の遺物

中世以降の遺構は確認されなかったが、遺物が数点出土した(第91図)。2号窯の埋土上層からはカワラケ(1)、すり鉢(3)、内耳鍋の破片が各1点ずつ出土し、1号灰原から青磁碗(2)、内耳鍋が各1点出土した。1は底部回転糸切りのロクロ整形のカワラケ。3は珠洲焼のすり鉢である。



第91図 中世の遺物

注

- 1) がまん淵遺跡は、立ヶ花表遺跡の小谷を挟んだ東側の丘陵に立地する。弥生時代後期の竪穴住居跡と環濠と思われる溝と柵列が確認されている。
- 2) SY01では燃焼部と焼成部とに大きな段差が生じており、燃焼部と焼成部との間に焼成部から一段高い中間部が存在している。このような構造の須置器窯の類例が認められない。また、このような構造にする合理的な理由が推測できないことから、2基の窯跡が重複しているのではないかと指摘がなされている。しかしながら、SY02、SY03は焼成部が失われているが、同様な構造になると推定されることから、すべての窯で2基重複があったとは考えられない。また、さらに、SY01の接合関係を考慮すると、焼成部と燃焼部は同一時期の遺構と考えられることから、2基の窯跡の重複説は否定した。しかしながら、特異な構造の窯跡となり、燃焼部と焼成部に大きな段差を設けた構造の説明に苦慮する。大衆を焼く窯跡であることに起因する特異な構造と考えることもできるが、SY01～03の燃焼部の奥壁部分の被熱があまり顕著ではない点が気になる。SX01～04は地すべりなどで生じた亀裂であると判断されたもので、出土遺物から奈良時代以降のものであることが確認されている。地すべり等で窯跡が破壊されている可能性も考えておく必要があるが、検討する十分なデータは得られなかった。SY01の特異な構造が本来あるべき姿であるのかどうか、今後、類例が発見されたところで、再検討をする必要がある。
- 3) 津野仁氏による古代・中世の鉄鎌分類(津野1991)の「長三角形Ⅲ式」に該当するとみられる。長三角形Ⅲ式は8世紀～11世紀前半に主体的にみられる形式とされており、14世紀前半ごろまで確認例があるとされている。中世の出土例には透かしがある形態を例示している。
- 4) 以下のケースでは、測定年代が操業年代よりも古くなると考えられる。①:測定資料が樹齢数十年の芯部である場合、②:操業時期よりも数十年古い時期に伐採された材を燃料に用いていた場合、③:①・②が複合した場合、である。

参考・引用文献

- 中野市教育委員会 1962 『立ヶ花遺跡発掘調査略報』
 金井汲次・川上元 1967 「長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」『信濃』Ⅲ 19-7
 土屋積 1999 「防衛的集落の新例」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7
 津野仁 1991 「古代・中世の鉄鎌」『物質文化』54

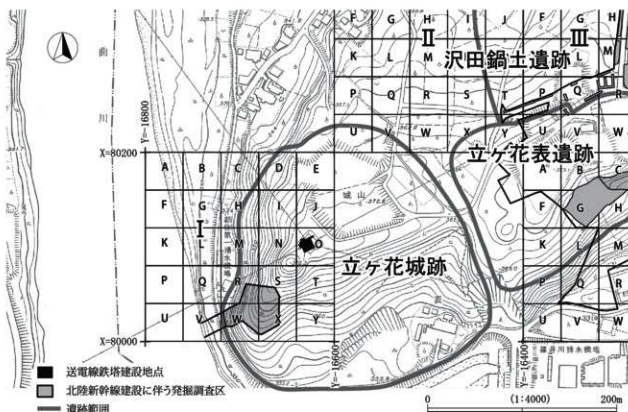
第5章 立ヶ花城跡の調査

第1節 立ヶ花城跡の発掘調査歴

立ヶ花城跡は中野市大字立ヶ花字表山772-1ほかに所在する。千曲川と篠井川の合流点に臨む丘陵上に立地しており、遺跡範囲は南北約276m、東西約280mである。千曲川の対岸の手子塚城跡と対峙する。また、遺跡の西側には、千曲川をわたる渡船場跡があり、交通の要衝であったとされる。三つの郭とそれを区切る堀り、土塁を持つ全長100m余りの複郭式山城で、「おそらくは茶臼峯城とともに使用された城で、城郭というよりも砦や物見台としての性格の強い山城」とされている（藤沢1996）。丘陵先端部から第1郭、第2郭、第3郭とされている。第2郭では、1980年に中部電力の送電線鉄塔建設に伴う発掘調査がおこなわれ（第92・95図）、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代前期の祭祀址とされる遺物集中などが検出された。この他、旧石器時代の剥片他、縄文時代中期の土器と石器が出土した（中野市教育委員会1981）。

第95図Aは1980年の調査の再作成された実測図、Bは2002年に発表された縄張り図、Cは現在の地形図にAの図を合わせたものである。第3郭で確認されていた土塁部分は削平され、現在は大きな窪地となっており、第3郭の詳細は不明である。

北陸新幹線建設に伴う発掘調査区はトンネル坑口であり、立ヶ花城跡の地下にトンネルが掘削されることになる。



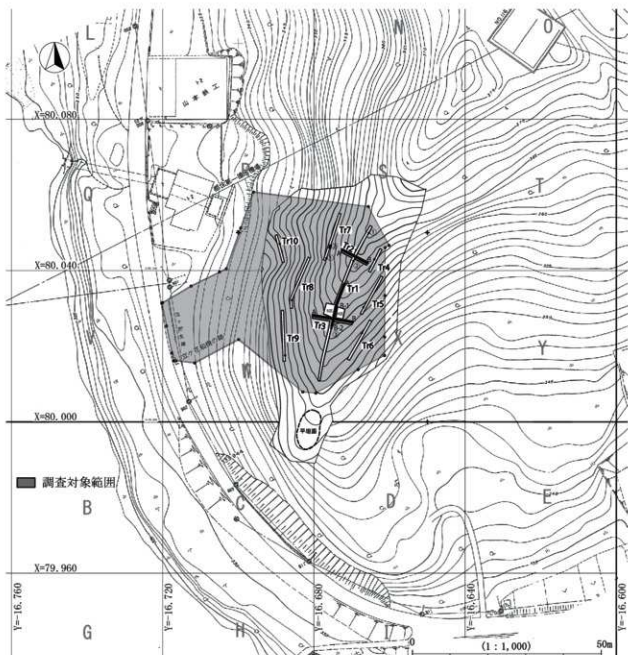
第92図 立ヶ花城跡の調査範囲とグリッド配置図

第2節 調査の方法と調査成果

1 調査の方法

調査対象地区は第1郭の南西側の尾根の先端部にあたる。調査区南側に平坦部が確認されていたことから、第1郭から尾根先端の平坦部に至る通路などの施設の存否の確認、および斜面部の竪堀の存否の確認を目的として、第93図に示した10本のトレンチを設定し、調査をおこなった。トレンチ調査は、すべて人力で掘削をおこなった。特に斜面部は急斜面であることから、命綱をつけての調査となった。

なお、斜面地の掘削土砂の崩落防止のため、トレンチの斜面下方に木杭を打設し、粗朶などを用いた土留め用のフェンスを築いて、調査を実施した。

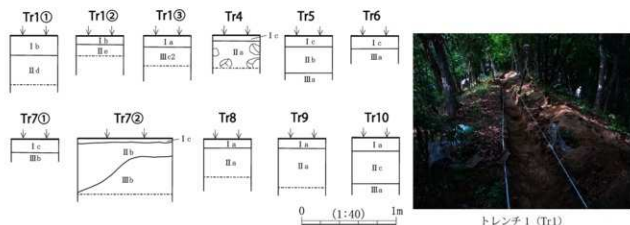


第93図 立ヶ花城跡 トレンチ配置図

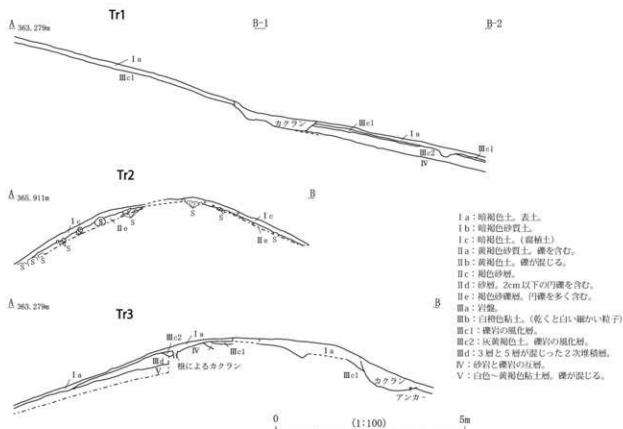
2 調査成果

土層は、Ⅰ層群が表土、Ⅱ層群が表土下の堆積土層、Ⅲ層群・Ⅳ層・Ⅴ層は地山である（第93図、94図）。丘陵は岩石で構成されており、尾根頂部では地表下10cmで地山のⅢ層群になるところもある。斜面部は、地山の岩石の状態により、Ⅱ層群の状態が異なる。トレンチ10などでは、表土下が砂層のところも認められる。また、トレンチ1の斜面上方では、円礫を含む砂層が地山であり、斜面下方と異なる状況を示す。立ヶ花城跡が立地する丘陵は数万年前からの隆起により形成された丘陵である。地層内部は激しい褶曲のため、場所により地山の状況が異なっていると想定される。

トレンチ調査の結果、中世城郭にかかわる遺構や造成跡は確認されなかった。遺物も出土せず、調査対象範囲には、城郭に関わる施設はないと判断し、確認調査のみで調査を終了した。



トレンチ1 (Tr1)



- I a: 暗褐色土。表土。
- I b: 暗褐色砂質土。
- I c: 暗褐色土。(腐植土)
- II a: 黄褐色砂質土。礫を含む。
- II b: 黄褐色土。礫が混じる。
- II c: 褐色砂層。
- II d: 砂層。2cm以下の円礫を含む。
- II e: 褐色砂礫層。円礫を多く含む。
- III a: 岩盤。
- III b: 白褐色粘土。(乾くと白い細かい粒子)
- III c: 礫岩の風化層。
- III d: 灰黄褐色土。礫岩の風化層。
- III e: 3層と5層が混じった2次堆積層。
- IV: 砂岩と礫岩の互層。
- V: 白色-黄褐色粘土層。礫が混じる。

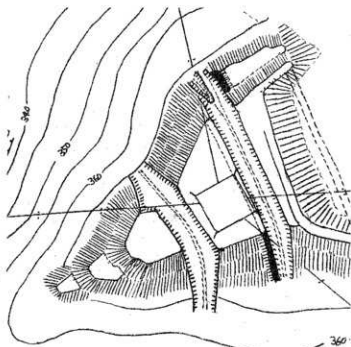
第94図 立ヶ花城跡 土層断面図



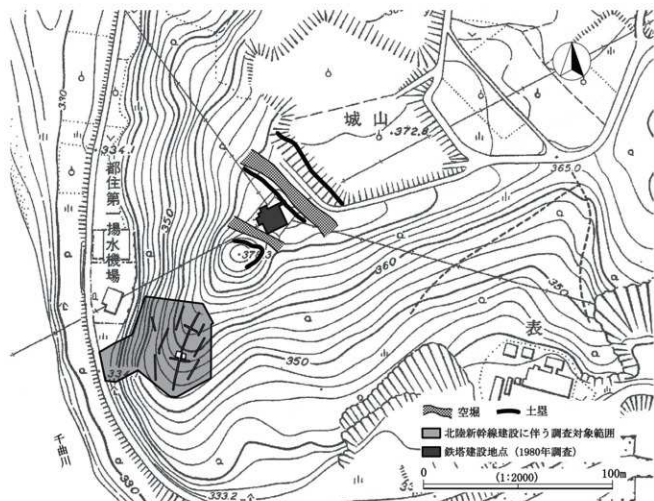
第1郭 第2郭 第3郭



A: 立ヶ花城跡遺構実測図
(中野市教育委員会 1981 年より)



B: 立ヶ花城跡縄張り図 (宮坂竹男 2002 年より)



C: 立ヶ花城跡の遺構と調査範囲

第95図 立ヶ花城跡の概略図

これとは別に、トレンチ1とトレンチ3の交点付近で、礫を配置した土坑2基を確認した(写真)。2基の土坑を中心として四方にアンカーが配置されており、近代の送電線の電柱を埋設した穴であることが判明した。土坑付近から電柱に関わる鉄製の鏝(かすがい)が1点出土した。

引用・参考文献

中野市教育委員会 1981 『立ヶ花城跡等緊急発掘調査報告書(送電線铁塔建設地点遺跡緊急発掘調査)』

藤沢高広 1996 『立ヶ花城』『定本 北信濃の城』

宮坂武男 2002 『図解 山城探訪 第十二集 高井資料編』



斜面部のトレンチ調査



送電線の電柱を埋設した穴



立ヶ花城跡遠景(北西より)



立ヶ花城跡遠景(西より)



立ヶ花城跡遠景(北西より)

第6章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

沢田鍋土遺跡および、立ヶ花表遺跡において下記の分析を業務委託で実施した。分析報告の詳細は添付DVDに記録した。分析報告書で用いている分析試料番号は遺物観察表（巻末・添付DVD）の該当する遺物に示した。以下に本報告書に関わる分析内容、分析対象遺跡、委託業者、分析報告者を記す。

火山灰分析（沢田鍋土遺跡）平成17年度 ㈱パリノ・サーヴェイ 石岡智武
 光ルミネッセンス年代測定（沢田鍋土遺跡）平成19年度 ㈱古環境研究所 奈良教育大学 長友恒人・小畑直也
 放射性炭素年代測定と樹種同定（立ヶ花表遺跡）平成20年度 ㈱パリノ・サーヴェイ 高橋敦
 放射性炭素年代測定と樹種同定（沢田鍋土遺跡）平成23年度 ㈱パリノ・サーヴェイ 高橋敦・本村浩之
 胎土分析（沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡）平成23年度 ㈱パレオ・ラボ 藤根久・米田恭子・竹原弘展
 黒曜石産地推定分析（沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡）平成23年度 望月明彦

第2節 火山灰分析・年代測定

1 火山灰分析・光ルミネッセンス年代測定

沢田鍋土遺跡1区において、旧石器時代の遺物包含層及びその前後の層の火山灰分析及び、光ルミネッセンス年代測定を実施した。サンプル地点と分析結果の概要は第3章第15図と第5表に示した。

火山灰分析は長野県埋蔵文化財センターが土壌サンプル採取をおこない、業者に分析を委託した。採取した16サンプルの内、8サンプルの分析をおこなった。光ルミネッセンス年代測定は、分析者の奈良教育大学長友恒人教授が土壌サンプル採取をおこなった。第15図の断面C-D、E-Fに分析サンプル採取箇所と試料番号を示した。

二つの分析の結果、沢田鍋土遺跡の旧石器時代遺物包含層の堆積年代は約3.5万年以降であると想定され、旧石器時代の出土遺物がいずれも後期旧石器時代のものである蓋然性が高いことが判明した（第16表）。

分析結果の詳細は添付DVDのPDFファイル「沢田鍋土遺跡ルミネッセンス年代測定」「沢田鍋土遺跡火山灰分析」を参照していただきたい。

基本層序名	1区層名	IRSL年代（千年前）	火山灰分析
III	II	5.2±0.4	IG
IV	IIIa	12±2 (14±2)	IG・AT
	IIIb	22±2	AT
	IIIc1	34±4	0n・Pn1 ?
V	IV	36±3	

※（ ）内の数値はフェイディング補正をした年代値。

第16表 光ルミネッセンス年代測定と火山灰分析結果



土壌サンプル採取風景

2 放射性炭素年代測定

以下の遺構出土の炭化材の年代測定を実施した。合わせて、同資料を用いて樹種同定をおこなった。測定結果は第17・18表に示した。これらの測定年代と考古学的な編年研究の年代観には若干の差が認められた。それに対する評価は各遺構の記述を参照していただきたい。分析結果の詳細は添付DVDのPDFファイル「沢田鍋土遺跡年代測定」「立ヶ花遺跡年代測定」に示した。

沢田鍋土遺跡：SB105（竪穴住居跡） SK120（土器焼成遺構） SX108（粘土探掘跡）

立ヶ花表遺跡：SY02（須恵器窯跡）

試料名 (樹種)	δ 13C (‰)	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)	相対比	測定機関Code
分析番号1 SB105 (コナラ節)	-26.57 ± 0.12	1276 ± 20	σ cal AD686-calAD719	0.536	PLD-20235
			cal AD742-calAD769	0.464	
			2 σ cal AD677-calAD773	1.000	
分析番号2 SB105 (クスギ節)	-27.11 ± 0.13	1308 ± 20	σ cal AD664-calAD693	0.704	PLD-20236
			cal AD749-calAD764	0.296	
			2 σ cal AD660-calAD720	0.721	
			cal AD742-calAD769	0.279	
分析番号3 SB105 (クスギ節)	-26.31 ± 0.27	1263 ± 23	σ cal AD692-calAD749	0.878	PLD-20237
			cal AD763-calAD772	0.122	
			2 σ cal AD671-calAD780	0.976	
			cal AD792-calAD805	0.024	
分析番号4 SK120 (クスギ節)	-26.57 ± 0.16	1383 ± 23	σ cal AD643-calAD662	1.000	PLD-20238
			2 σ cal AD615-calAD670	1.000	
分析番号6 SX108c (コナラ節)	-29.90 ± 0.14	3853 ± 24	σ cal BC2433-calBC2423	0.058	PLD-20239
			cal BC2403-calBC2380	0.162	
			cal BC2348-calBC2282	0.659	
			cal BC2248-calBC2232	0.105	
			cal BC2217-calBC2214	0.016	
			cal BC2459-calBC2416	0.137	
			2 σ cal BC2411-calBC2274	0.709	
			cal BC2255-calBC2208	0.154	

1) 暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0を使用

第17表 沢田鍋土遺跡放射性炭素年代測定結果

試料名 (樹種)	δ 13C (‰)	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)	相対比	測定機関Code
SY02 炭No.2 (コナラ節)	-25.154 ± 0.007	1262 ± 30	σ cal AD689-calAD753	0.834	IAAA-82578
			cal AD760-calAD774	0.166	
			2 σ cal AD668-calAD783	0.893	
			cal AD787-calAD823	0.077	
			cal AD841-calAD861	0.030	
SY02 炭No.3 (コナラ節)	-27.740 ± 0.006	1350 ± 31	σ cal AD649-calAD681	1.000	IAAA-82449
			2 σ cal AD636-calAD715	0.915	
			cal AD744-calAD768	0.085	
SY02 炭No.4 (コナラ節)	-27.564 ± 0.005	1297 ± 30	σ cal AD669-calAD712	0.664	IAAA-82579
			cal AD745-calAD767	0.336	
			2 σ cal AD663-calAD772	1.000	
SY02 炭No.5 (コナラ節)	-27.501 ± 0.008	1336 ± 32	σ cal AD652-calAD689	0.926	IAAA-82450
			cal AD753-calAD760	0.074	
			2 σ cal AD644-calAD721	0.833	
			cal AD741-calAD770	0.167	
SY02 炭No.6 (コナラ節)	-27.483 ± 0.005	1264 ± 32	σ cal AD688-calAD754	0.817	IAAA-82451
			cal AD759-calAD773	0.183	
			cal AD667-calAD783	0.887	
			cal AD787-calAD824	0.080	
			2 σ cal AD841-calAD861	0.034	

1) 暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02を使用

第18表 立ヶ花表遺跡放射性炭素年代測定結果

第3節 胎土分析・黒曜石産地分析

1 胎土分析

(1) 分析の目的と分析試料

沢田鍋土遺跡2区・4区で、縄文時代後期、平安時代、中世以降の粘土採掘跡が発見された。調査区周辺の遺跡調査では、縄文時代中期、古墳時代前期、奈良時代の粘土採掘跡が確認されており、沢田鍋土遺跡を中心に各時代の粘土採掘跡が集中する。また、沢田鍋土遺跡がある高丘丘陵には、奈良・平安時代の須恵器窯跡が多数調査されており、高丘丘陵古窯址群は長野県内でも有数の窯址群として知られている。

長野県内では、粘土採掘跡の調査例が少なく、粘土採掘を含めた土器生産と土器の消費の問題はあまり論じられていない。採掘跡で採取した粘土の特徴と、そこで消費されていた土器の胎土の特徴を明らかにし、土器生産と土器の流通・消費の問題を議論するための土器胎土の基礎データの提示を目的として、分析を実施した。

縄文時代後期と奈良・平安時代の土器について薄片の偏光顕微鏡観察による微化石類と砂粒組成の分析と、蛍光X線分析による胎土分析を実施した。分析試料は沢田鍋土遺跡の粘土採掘跡・竪穴住居跡などの遺構から出土した縄文時代後期土器・須恵器・土師器及び粘土、立ヶ花表遺跡の窯跡から出土した須恵器である。立ヶ花表遺跡の窯跡資料は、焼成部ものを中心に選択した。また、対比資料として、千曲川の下流約5.5kmにある川久保遺跡、宮沖遺跡の土師器の長胴甕、沢田鍋土遺跡の北側に隣接する清水山窯跡、池田端窯跡(註1)の須恵器の分析をおこなった。

薄片の偏光顕微鏡観察は、縄文土器5点、須恵器9点、土師器18点、粘土3点について実施した。(第19表・第96図)。蛍光X線分析は、縄文土器5点、須恵器77点、粘土7点について実施した。

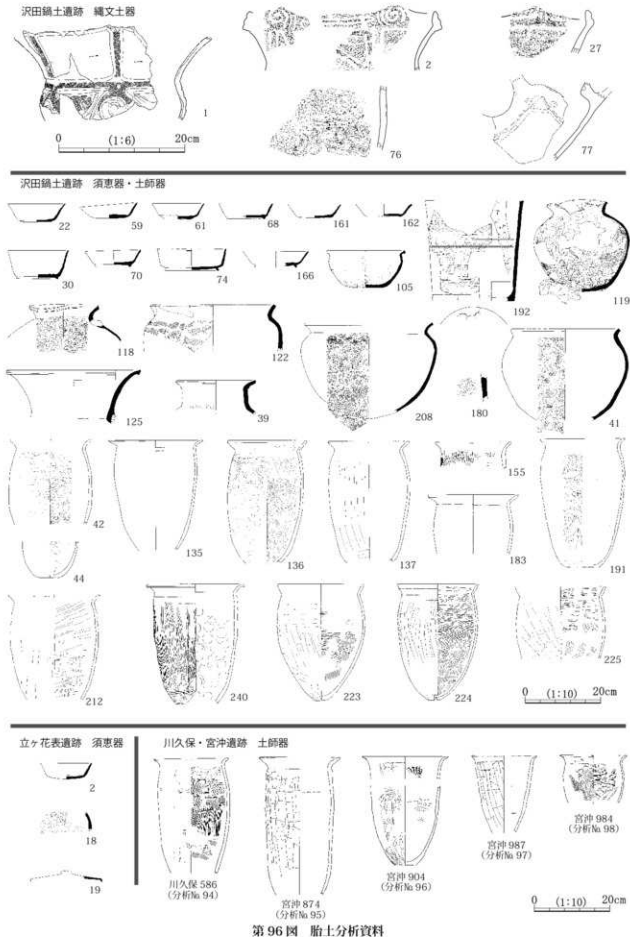
なお、薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を併用した試料が14点ある。二つの分析を併用するため、須恵器はできる限り焼成の悪いものを選択した。

分析報告の詳細は添付DVDのPDFファイル「沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡胎土分析」に示した。

(2) 分析成果の概要と検討

薄片の偏光顕微鏡観察の結果を見ると、沢田鍋土遺跡の縄文時代の土器は、報告番号27・76と1・2・77の2群に大別された。砂粒組成において前者は粘土採掘跡の粘土と近似し、後者は違いがあると報告された。なお、沢田鍋土遺跡採取の粘土については、「第四紀後期更新世～完新世の粘土と考えられるが、微化石類を含まない粘土であり、砂粒組成は主に堆積岩類にガラス質テフラや凝灰岩類を伴う」と報告された。奈良・平安時代の土器では、沢田鍋土遺跡SB103出土の須恵器鉢B(第55図105)が、他の須恵器や土師器と比べ、大きく異なる胎土であることが指摘された。また、沢田鍋土遺跡の土師器長胴甕は、胎土に斉一性があり、川久保遺跡、宮沖遺跡では、概して沢田鍋土遺跡とは異なる胎土であることが示された。沢田鍋土遺跡は千曲川東岸の旧高井郡にあり、川久保・宮沖遺跡は千曲川西岸の旧水内郡にある。分析報告書では、千曲川東岸にある牛出遺跡の長胴甕の胎土が沢田鍋土遺跡のものに近いことが指摘されており、川を挟んで、東側(高井郡)と西側(水内郡)で土師器の胎土に違いがあるという予測が立てられる。今後、検討すべき課題である。

蛍光X線分析では、粘土及び焼成粘土(註2)と縄文土器、奈良時代の須恵器を分析対象とした。立ヶ花表遺跡の3基の窯跡では、SY01・03とSY02との2つのグループに区分された。但し、SY02の1点



第96図 胎土分析資料

の大衆(第84図11)はSY01・03のグループに含まれる。考古学的な出土須恵器の観察からは、SY01とSY03の操業時期が同時期で、SY02が新しいと判断しており、同一窯または同時期操業窯の須恵器はまとまった元素組成を示すことが確認された。また、立ヶ花表遺跡SY02が沢田鍋土遺跡SB102と類似する化学組成を示すと指摘されているが、両者は時期が異なっている。類似する粘土を用いたと推定することは可能である。なお、沢田鍋土遺跡SB105の須恵器が他の分析試料に比べ、酸化リン(P₂O₅)の含有量が明らかに高いことが指摘された。また、粘土の焼成サンプルでは、遺構別の化学組成の振れ幅よりも、大きな振れ幅を持つ場合があり、沢田鍋土遺跡周辺の粘土が必ずしも同じ化学組成を示すものではないことが分析結果から読み取れる(添付DVDに収録した分析報告の図1-1～図1-7の元素分布図を参照)。縄文土器は粘土焼成サンプルよりもさらに広い振れ幅を示す元素があり、沢田鍋土周辺以外で採取してつくられた土器の存在も予想される。

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

分析No.	遺跡名	種類	器種	粘土の特徴						砂粒の特徴						鉱物の特徴						X線分析	図版番号	
				種別	海水種	淡水種	不明種	骨針化石	分級	深成岩類	堆積岩類	凝灰岩類	火山岩類	テフラ	ジルコシ	角閃コシ	雲母類	輝石類	珪石類	珪物	珪物			
3	立ヶ花表	須恵器	杯	水成						△	△	Gc	△	○							◎	○	第7902	
7		須恵器	壺	水成						△	△	Cg	△	○	△	△	△	△	△	△	○	○	第790618	
13		須恵器	杯							△	△	C	△	○	△	△	△	△	△	△	○	○		
23		須恵器	杯蓋	水成						△	△	Cg	△	○	△	△	△	△	△	△	○	○	第87図19	
29	沢田鍋土	須恵器	杯									C	△	○	△	△	△	△	△	△	○	○	第52図22	
36		須恵器	杯	海水成	△							Cg	○		○	△	△	△	△	△	○	○	第53図61	
40		須恵器	鉢	淡水成		○	○					C	△	○	△	△	△	△	△	△	○	○	第55図105	
46		須恵器	杯B	水成								△	C	△	○	△	△	△	△	△	○	○	第60図166	
49		須恵器	壺	水成								(C)	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	第62図208	
81		土師器	長胴壺										△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	第52図44
82		土師器	長胴壺	海水成	△							C	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第52図42
83		土師器	長胴壺	水成								△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第57図135
84		土師器	長胴壺	水成								△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第58図137
85		土師器	長胴壺	水成								△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第58図136
86		土師器	長胴壺									△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第59図155
87		土師器	長胴壺	水成								△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第61図183
88		土師器	長胴壺	水成								△	Cb	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第61図191
89		土師器	長胴壺									C	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第63図212
90		土師器	長胴壺									Cd	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第64図223
91		土師器	長胴壺									Cd	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第64図224
92	土師器	長胴壺									△	Cd	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第64図225	
93	土師器	長胴壺	水成								△	Cd	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	第65図240	
94	川久保	土師器	長胴壺									Eg	○	△	△	△	△	△	△	△	◎	△	(第38図586)	
95	土師器	長胴壺	水成								△	Cg	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	(第53図874)	
96	土師器	長胴壺	淡水成	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	C	△	○	△	△	△	△	△	△	◎	◎	(第54図904)	
97	土師器	長胴壺									◎	Gc	△	○	△	△	△	△	△	△	◎	◎	(第57図987)	
98	土師器	壺										Dc	△	◎	△	△	△	△	△	△	△	△	(第57図984)	
99	沢田鍋土	粘土									△	Cg	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△		
104		粘土										C	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△		
105		粘土										△	C	△	◎	△	△	△	△	△	△	△		
106		縄文土器	深鉢									△	C	△	◎	△	△	△	△	△	△	△		
109		縄文土器	深鉢	水成								△	C	△	◎	△	△	△	△	△	△	△		
110		縄文土器	深鉢										Cd	△	○	△	△	△	△	△	△	△		
112	縄文土器	深鉢										Dc	△	○	△	△	△	△	△	△	△			
113	縄文土器	深鉢										Dc	△	○	△	△	△	△	△	△	△			

第19表 薄片の偏光顕微鏡観察による土器胎土の特徴一覧

2 黒曜石産地推定

旧石器時代の石器の中心に、沢田鍋土遺跡 26 点、立ヶ花表遺跡 5 点の蛍光 X 線分析による黒曜石産地推定分析をおこなった。今回の調査では、旧石器時代の良好なブロックは確認されず、多くの石器は粘土採掘跡等の後世の遺構埋土から出土したものである。剥片類は時代・時期が不明確であるため、定形的な石器を中心に産地推定をおこなった。沢田鍋土遺跡では、調査区内で出土する場所にまとまりがあることから、それぞれに A～F の名称を付けて区分した。産地推定分析結果は第 20 表に示すとともに、第 3 章 2 節、第 4 章 2 節に触れた。分析結果の詳細は添付 DVD のエクセルファイル「沢田鍋土&立ヶ花表遺跡推定結果」に記録した。

遺跡名	出土場所	報告番号	管理番号	器種	分析番号	黒曜石産地分析結果
沢田鍋土遺跡	B地点	第19回20	35	細石刃	TH T-17	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	B地点	第18回3	6	ナイフ形石器	TH T-8	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	B地点	第19回9	8	槍先形尖頭器	TH T-1	和田土屋橋北群
沢田鍋土遺跡	B地点		26	石刃	TH T-18	和田土屋橋北群
沢田鍋土遺跡	C地点	第18回7	50	ナイフ形石器	TH T-10	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回12	46	石刃	TH T-19	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第18回1	1	台形石器	TH T-2	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第18回4	2	ナイフ形石器	TH T-4	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回10	4	ナイフ形石器	TH T-6	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第18回6	7	ナイフ形石器	TH T-9	諏訪屋ヶ台群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回11	52	籠器	TH T-11	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回17	31	細石刃?	TH T-13	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回15	10	石刃	TH T-15	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	C地点		61	石刃	TH T-21	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回18	71	細石刃	TH T-12	和田土屋橋西群
沢田鍋土遺跡	C地点	第19回13	48	石刃	TH T-20	和田芙蓉ヶ台群
沢田鍋土遺跡	D地点		11	石刃	TH T-16	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	D地点	第19回14	58	石刃?	TH T-22	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	D地点	第18回8	5	ナイフ形石器	TH T-7	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	E地点	第18回5	3	ナイフ形石器	TH T-5	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	F地点	第19回16	9	石刃	TH T-14	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	F地点	第14回写真	91	石核	TH T-23	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	F地点	第14回写真	85	剥片	TH T-26	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	F地点	第18回2	92	台形石器	TH T-3	和田廣山群
沢田鍋土遺跡	F地点	第14回写真	74	剥片	TH T-24	和田土屋橋西群
沢田鍋土遺跡	埋土外		75	剥片	TH T-25	和田廣山群
立ヶ花表遺跡		PL18	13	石刃	TH T-30	和田廣山群
立ヶ花表遺跡		SY01灰原	3	籠器	TH T-31	和田廣山群
立ヶ花表遺跡	遺構外	PL18	12	二次加工がある剥片	TH T-27	和田廣山群
立ヶ花表遺跡	遺構外	PL18	6	石刃	TH T-28	和田廣山群
立ヶ花表遺跡	遺構外	PL18	8	石刃	TH T-29	和田廣山群

第 20 表 黒曜石産地推定分析結果

注

- 1) 清水山窯跡と池田端窯跡の分析試料は当センターでかつて胎土分析をおこなった試料の残片を用いた（長野県埋蔵文化財センター 1998）。
- 2) 粘土の焼成実験をおこない、未焼成、500℃、1000℃の 3 資料で、定量した 14 元素の比率に変化がないことを確認した。この結果から、高温の焼成により、測定元素の増減は考慮しなくてよいことが確認された。

引用・参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『牛出遺跡 葦山遺跡 風呂屋遺跡 対面所遺跡 他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 28

第7章 総括

第1節 調査成果と課題

本書は沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、立ヶ花城跡の3遺跡の発掘調査報告書である。立ヶ花城跡は、遺構・遺物が確認されなかった。沢田鍋土遺跡および立ヶ花表遺跡の調査成果を時代ごとにまとめる。なお、両遺跡では複数次にわたる発掘調査がおこなわれており、本報告書で報告した調査地点を新幹線地点と呼称した。

旧石器時代

沢田鍋土遺跡と立ヶ花表遺跡の2遺跡で旧石器時代の石器が出土した。沢田鍋土遺跡でブロックが3か所確認されたが、いずれも剥片のみで時期が確定できない。定形的石器はすべて後世の遺構埋土または後世の遺物包含層から出土したものである。定形的石器を見ると、沢田鍋土遺跡では槍先形尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、彫器、石刃、細石刃が出土し、立ヶ花表遺跡では、彫器、削器、石刃が出土した。これらの石器は、すくなくとも4時期に大別される。すなわち、台形石器を含む石器群、二側縁のナイフ形石器を含む石器群、槍先形尖頭器を含む石器群、細石刃を含む石器群である。

沢田鍋土遺跡では、多くの資料が原位置を保っていない上に、複数時期の石器が混在していることが想定され、これらの資料評価は難しい。縄文時代以後の遺構埋土や包含層から出土したものを、分布状況からA～F地点に区分して報告した(第3章第14図)。これらの各地点は、複数時期の石器群を含む可能性は十分ある。しかし、原位置を保っていない石器の多くは、粘土採掘跡埋土から出土したもので、埋土の移動距離は小さいと考えられることから、各地点は有意なまとまりをもった資料群と評価した。ただし、C地点では、細石刃と台形石器が確認されており、少なくとも2時期の石器群が混在していると判断できることから、各地点の石器群が必ずしも同時期のものではないことを考慮しておく必要がある。

沢田鍋土遺跡では、これまでの発掘調査でも旧石器時代の石器群が出土しており、細石刃などを含む複数のブロックが調査されている。特に中野市教育委員会によって調査された市道高丘9号線地点の石器群は、かつて中期旧石器時代に関わる資料と評価された(中島1997)。その後、出土層位の堆積年代の理解が変更され、石器群は後期旧石器時代の石器群であることが明らかにされた(中島2006)。今回出土した石器群は、いずれも黒曜石が大半を占める石材組成であるのに対し、市道9号線地点の石器群は、チャートを主体とした多様な石材組成である。新幹線地点の石器群とは様相が大きく異なる。

立ヶ花表遺跡では、下呂石製の石刃が出土した。長野県北部では、出土例が少ない石材である。野尻湖遺跡群の仲町遺跡、貫ノ木遺跡、清明台遺跡、飯山市太子林遺跡Ⅱ地点などで下呂石が確認されている(中村2007)。石材の流通を検討するうえで、興味深い資料である。また、昭和37年に神田五六氏・金井汲次氏らによって立ヶ花表遺跡の発掘調査がおこなわれ、褐色粘土層からナイフ形石器、彫器など50点余りの黒曜石製の旧石器時代の石器群が出土した(中野市教育委員会1962、金井・川上1967)。これらの石器群の出土状態は不明であり、今回採取された石器群との位置関係は明らかではない。

立ヶ花表遺跡・沢田鍋土遺跡の周辺では、牛出古窯遺跡、がまん淵遺跡、南曾峯遺跡、茶臼峯遺跡、栗林遺跡などで旧石器時代の石器群が確認されており、小地域内における編年案が示されている(中島ほか1995)。前述のように沢田鍋土遺跡市道9号線地点の評価が変更されており、新幹線関連など新たに調

査した石器群を加えて、再検討が必要である。

縄文時代

沢田鋼土遺跡高速道路地点の調査で後期前葉の粘土探掘跡を検出した。縄文時代の粘土探掘跡は、清水山窯跡（長野県埋蔵文化財センター 1997）で中期後半の、中野市（旧豊田村）飯綱平遺跡（豊田村 2005）で後期後半のものが確認されているのみであり、長野県では調査事例の少ない遺構である（註1）。新幹線地点の粘土探掘跡から出土した土器は、主に堀之内1式に相当する土器であるが、若干の時期幅が認められる。粘土探掘の期間は、数年の短期間ではなく、ある程度長期間にわたることが想定される。新幹線地点の粘土探掘跡の特徴をあげると、①探掘跡の面積が約430㎡と広く、ある程度長期間にわたって粘土探掘がおこなわれていたと考えられること、②様相の異なる土器がある程度まとまって出土しており、時間の経過に伴って粘土探掘の場所が移っていることが読み取れること、などである。清水山窯跡の中期の粘土探掘跡（SK03～SK05）が、比較的小規模であり、短期間で探掘が終了したと想定されることと対照的である。

残念ながら、土層堆積の観察から、遺構の形成過程を復元することができなかったため、粘土探掘が比較的長期に及んだとする仮説を検証することができなかった。今後の調査の課題とした。

胎土分析の砂粒組成の比較では、粘土探掘跡の粘土と近似する一群と、異なる一群とがあることが明らかにされた。分析点数が少なく、土器型式と胎土類型の相関関係を明確に示すことはできなかったが、今後の研究の進展に期待したい。

弥生時代

今回の調査では、弥生時代の遺構は検出されず、立ヶ花表遺跡で後期の甕の破片が出土したのみである。しかしながら、立ヶ花城跡と立ヶ花表遺跡は、がまん淵遺跡を含めて「立ヶ花弥生遺跡群」と捉え、これら3遺跡が弥生時代後期の防衛的集落である可能性が指摘されている（土屋 1999）。これら3遺跡は、丘陵頂上部が削平され、主体部分は失われている。詳細が不明な点が多いが、がまん淵遺跡では、斜面部に環濠をもつ丘陵上の集落跡が確認されている（長野県埋蔵文化財センター 1997）。高丘丘陵南端部のこれらの遺跡は、越後に通じるルート上の、善光寺平を一望する場所に立地している。今回の発掘調査で出土した少数の土器片は、立ヶ花表遺跡にも防衛的集落が存在したことを示す資料であるかもしれない。

奈良・平安時代

沢田鋼土遺跡と立ヶ花表遺跡で、土器生産に関連する遺構群を検出した。両遺跡は、高丘丘陵古窯址群に属しており、周辺では多数の須恵器窯跡が調査されている。

沢田鋼土遺跡では、土器製作や鍛冶の関連施設が認められる工房跡と想定される竪穴住居跡、土器焼成遺構、粘土探掘跡を検出した。前二者は奈良時代、後者は平安時代の遺構である。竪穴住居跡からは、隣接する清水山窯跡で特徴的にみられた、「井」の甕書須恵器杯B、数条の稜線がある須恵器椀C（第54図75・76・84）が出土しており、その関連が注目される。

立ヶ花表遺跡では須恵器窯跡3基が検出された。1号窯跡は燃焼部と焼成部の間に大きな段差を持つ、長野県内では他に類例を見ない構造である。2号・3号窯跡は焼成部が削平され失われているが、燃焼部の構造が1号窯に類似していることから、これらも1号窯と同様に、燃焼部と焼成部の間に大きな段差がある構造であると想定できる。燃焼部と焼成部との段差、焼成部と燃焼部の境界部分が一段高くなる特殊な構造については、①2基の窯跡が重複している、②地滑りなどの地形変動により本来の遺構の構造が変更されているなどの可能性も指摘されているが、調査所見を尊重し本来の構造を示していると判断しておきたい。今後、類例を確認したところで、窯跡構造について再度検討したい。

1号窯跡では大甕の破片が多数出土し、大甕以外の器種は少数であることから、大甕を主体的に焼いた

窯であったと判断した。焼成部の傾斜角度が周辺で確認された須恵器窯跡に対し緩やかであり、大甕を置いたと推定される窪みも確認される。2号窯・3号窯では大甕以外の器種の比率が高く、焼成する器種が窯により異なっていたと想定した。第97図に窯跡別のおもな須恵器を掲載した。なお、1号窯の須恵器は大甕破片が多数を占めるが、それ以外の器種を中心に掲載した。1号窯・3号窯の杯Aは底部回転ヘラ切りであり、2号窯が回転糸切りであることから、1号・3号窯→2号窯の2時期の操業期間があったと判断した。また、1号窯では「多井□」などの銘書が出土しているが、何を示しているのか判明していない。

1号窯の大甕の体部は、内面にあて具痕の他に、ハケ目が見られるものが多い。2号・3号窯でも同様に内面にあて具痕の上にハケ目が見られるものが大半を占める。周辺地域の甕・大甕の器面調整について論じた例を知らないが、本遺跡の特徴の一つであると考えておきたい。3号窯では青海波文が認められる甕類の破片が少数出土している。高丘丘陵古窯址群では、7世紀代の窯跡出土の甕に青海波文が特徴的に認められることから、青海波文はより古い様相を示すものと考えられる。3号窯→1号窯→2号窯の3段階の操業開始時期があるとも考えることも可能である。甕・大甕の製作技法の変遷も今後検討していかねばならない課題である。

中世以降

沢田鍋土遺跡2区で約300mに及ぶ粘土採掘跡が検出された。粘土採掘跡から出土した中世の出土遺物が少なく、粘土採掘跡の時代を判断するには課題も残しているが、状況証拠から中世の粘土採掘跡である蓋然性が高いと判断した。周辺に土器製作に関わる工房跡などの存在も想定され、今後の調査研究で中世土器生産の実態を明らかにしていくことが課題であるとする。周辺には立ヶ花城跡、西山中世墓址(中野市教育委員会1994a)、清水山中世墓址群(中野市教育委員会1994b)などがあり、各遺跡の時期の検証などと合わせて、高丘丘陵における中世の景観を復元するための資料がまた一つ蓄積された。

第2節 高丘丘陵における須恵器生産

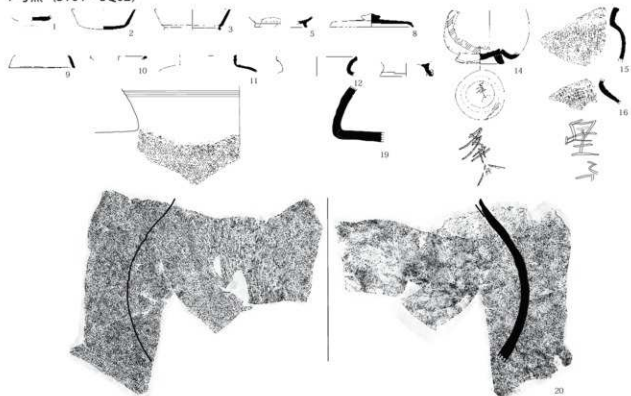
1 須恵器窯跡について

長野県内には、約300基の古代の須恵器窯(瓦窯を含む)が確認されており、第98図に示したように窯址群名が付されている。高丘丘陵古窯址群は高井郡に位置しており、隣接する水内郡には髷山窯址群があり、信濃国北部では一部一窯の様相を示す。しかし、佐久郡では複数の窯址群が存在しており、安曇郡、諏訪郡では窯址群が確認されていないなど、信濃国全体では一部一窯体制を明確に示しているとは言えない。高丘丘陵古窯址群は長野県の最北に位置する窯址群で、これまで51基の窯跡が確認または調査されている。県内では、調査事例の多い窯址群のひとつであり、高丘丘陵古窯址群を中心とした5期10段階区分の窯址編年が示されている(第

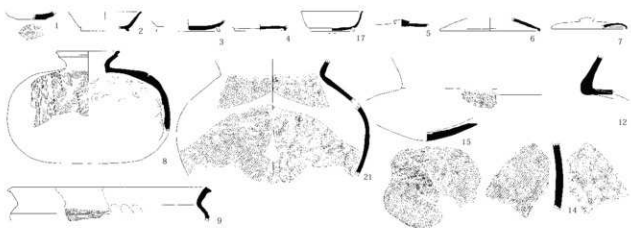
時期区分	高丘丘陵古窯址群	髷山古窯址群
第1期	茶臼峯9号窯	○
第2期	茶臼峯6・7・8号窯	○
第1段階	がまん洲1号窯	
第2期		髷山東南麓枝群1号窯
第2段階		山の神1号窯
第3期	沢田鍋土1・2号窯・1号灰原	
第1段階	立ヶ花表山2号窯	
	安源寺窯	
第3期	清水山1号窯	
第2段階	大久保2号窯	
第3期	池田端2・5号窯	
第3段階	清水山2・3号窯	
	大久保1号窯	
第3期	大久保3号窯	
第4段階	池田端1号窯	
第4期	牛出古窯1号窯	
第1段階	茶臼峯5号窯	
第4期	立ヶ花表山3・4号窯	
第2段階	中原古窯跡	平出上の山1号窯
	上の山古窯跡	
第5期	池田端6・7号窯	前高山西1号窯

第21表 高丘丘陵古窯址群の窯跡編年(中島他1997より)

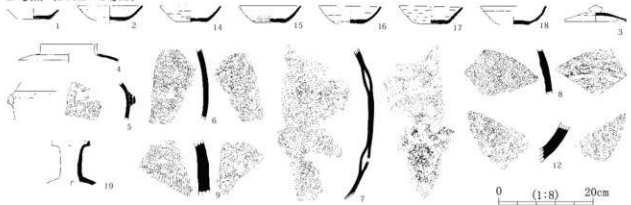
1号窯 (SY01・SQ02)



3号窯 (SY03・SQ01)

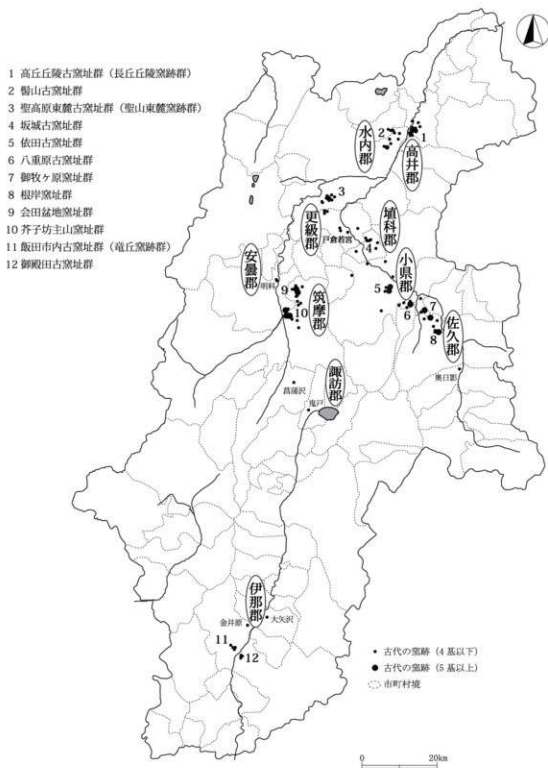


2号窯 (SY02・SQ03)



第97図 立ヶ花表遺跡出土須恵器

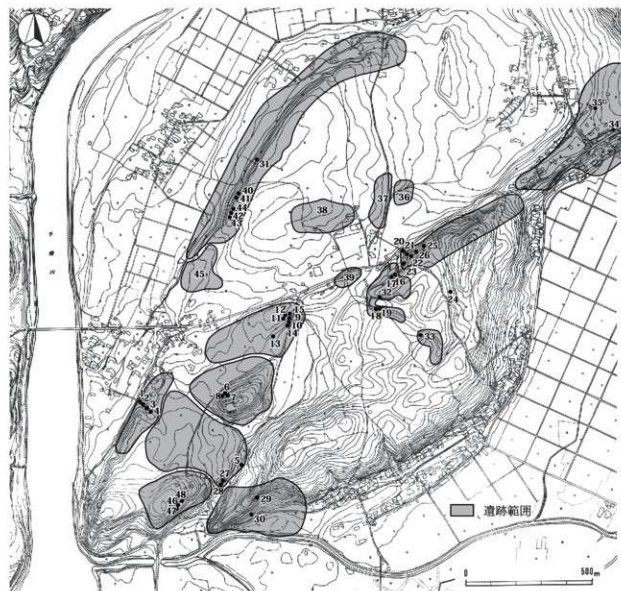
21表) (中島英子 1997)。1期は古墳時代からの系譜を引く杯と杯蓋E、2期は杯蓋C、3期はヘラ切り技法で切り離される杯A、4期は回転系切り技法で底部径が6cm以上の杯A、5期は回転系切り技法で底部径が6cm以下で定形化した杯A、をそれぞれ指標としたものである。その後、窯跡の調査例が増え、編年及び年代観の再検討をすべきであると考えるが、本報告ではその任を果たせなかった。今後の課題としたい。編年の再検討の第一歩として、高丘陵陵窯址群の資料集成を添付DVDに掲載したので参照して頂きたい。



第98図 長野県須恵器・瓦窯跡分布図

2 工人集落について

高丘陵陵古窯址群の須恵器生産に関わる遺構は、須恵器窯跡のほかに、工房跡、粘土採掘跡などが発見されている。新幹線関連の発掘調査では沢田鍋土遺跡において、工房跡を含む7棟（註2）の竪穴住居跡と粘土採掘跡が検出された。2区で検出された竪穴住居跡はすべて奈良時代前半のものであり、4区で検



- | | | | |
|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1: 立ヶ花表山1号窯 | 14: 池田端6号窯 | 27: 沢田鍋土1号窯 | 40: 牛出窯跡1号窯 |
| 2: 立ヶ花表山2号窯 | 15: 池田端7号窯 | 28: 沢田鍋土2号窯 | 41: 牛出窯跡2号窯 |
| 3: 立ヶ花表山3号窯 | 16: 大久保1号窯 | 29: がまん瀬1号 | 42: 牛出窯跡3号窯 |
| 4: 立ヶ花表山4号窯 | 17: 大久保2号窯 | 30: 西山窯址 | 43: 牛出窯跡4号窯 |
| 5: 沢田鍋土1号灰原 | 18: 大久保3号窯 | 31: 牛出古窯1号窯 | 44: 牛出窯跡5号窯 |
| 6: 清水山1号窯 | 19: 大久保4号窯 | 32: 大久保5号窯 | 45: 草間西原窯址 |
| 7: 清水山2号窯 | 20: 茶臼峯1号窯 | 33: 上ノ山1号窯 | 46: 立ヶ花表1号窯 |
| 8: 清水山3号窯 | 21: 茶臼峯2号窯 | 34: 安源寺第1号窯 | 47: 立ヶ花表2号窯 |
| 9: 池田端1号窯 | 22: 茶臼峯3号窯 | 35: 安源寺第2号窯 | 48: 立ヶ花表3号窯 |
| 10: 池田端2号窯 | 23: 茶臼峯4号窯 | 36: 坂下古窯 | |
| 11: 池田端3号窯 | 24: 茶臼峯5号窯 | 37: 東池田窯址 | |
| 12: 池田端4号窯 | 25: 茶臼峯6号窯 | 38: 中原古窯 | |
| 13: 池田端5号窯 | 26: 茶臼峯7号窯 | 39: 林畔古窯 | |

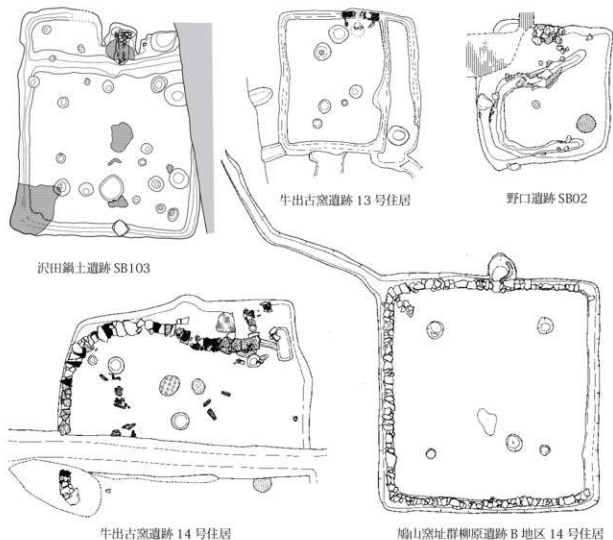
第99図 高丘陵陵古窯址群窯跡分布図

出された粘土採掘跡は平安時代のものである。

須恵器製作に関わる工房跡と明言できる遺構は、沢田鍋土遺跡のSB103である。SB103ではロクロビットとカマドに続くオンドル状の施設が確認され、床面には粘土塊が出土した。他の竪穴住居跡では、須恵器製作に関わる特別な施設等は確認されなかったが、床面中央付近の火床面と竪穴住居跡の斜面上方を廻る溝など、SB103と共通する要素が認められた。これらは、通常の竪穴住居跡では確認されない施設であり、SB103が須恵器製作工房跡であることを考慮すると、他の住居跡もこれに準じた機能を有していたと想定することができる。ただし、SB105は竪穴住居の斜面上方を廻る溝が確認されず、鍛冶に関連すると考えられる遺物が出土していることから、他の竪穴住居跡とは異なる性格の工房跡と考えておきたい。

高丘丘陵古窯址群では、沢田鍋土遺跡の他に牛出古窯遺跡でも須恵器製作工房と思われる竪穴住居跡(SB12・SB13)が確認されている(長野県埋蔵文化財センター1997)。沢田鍋土遺跡よりも後出で、奈良時代中頃とされている。牛出古窯遺跡SB12ではロクロビットと粘土塊が確認されている。また、竪穴住居跡の斜面上方を廻る溝跡、オンドル状施設としたカマドにつながる住居内の溝、床面中央部に火床面が認められるなど、沢田鍋土遺跡の竪穴住居跡と類似した構造を示す(第100図)。斜面上方を廻る溝を有する竪穴住居跡は、埼玉県鳩山窯跡群の工人集落でも確認されている(註3)。

沢田鍋土遺跡高速道路地点と側道地点では、奈良時代前半の竪穴住居跡が5棟検出されており、新幹



第100図 オンドル状施設を有する竪穴住居跡(1:100)

線地点の堅穴住居跡とは70～80mの距離にある。今後、両者の中間部分の未調査部分の状況を知ることができれば、工人集落としての沢田鍋土遺跡の様相がより明らかとなるであろう。沢田鍋土遺跡を工人集落として評価するならば、この集落はどの窯跡の操業に関わったのか、問題となる。近隣の窯跡に関わったのか、高丘陵全体に操業に関わったのか、窯跡編年の再検討とともに検討しなければならない課題である。沢田鍋土遺跡SB103からは須恵器椀C、「井」の篋書須恵器杯Bなど、清水山窯跡に特徴的にみられる遺物が出土しており、沢田鍋土の工人が清水山窯跡の操業に関わっていたという想定は許されるであろう。但し、沢田鍋土遺跡の工房跡は、清水山窯跡より近い距離に、沢田鍋土1号・2号窯、立ヶ花表1号・3号窯などの奈良時代前半の窯跡が存在しており、これらの窯跡との関わりも考慮しなくてはならない。

次に、粘土採掘跡について若干ふれておく。粘土採掘跡が検出された4区の出土遺物は大半が土師器であり、須恵器はごく少数の破片が出土したのみである。したがって、粘土採掘がおこなわれた時期は、高丘陵の須恵器生産終焉後である可能性が高い。今回検出された粘土採掘跡は、直接須恵器生産に関わる遺構ではなく、土師器生産のための粘土採掘跡であると推定した。4区の粘土採掘跡から北東に約550mの池田端窯跡には、奈良時代前半の粘土採掘跡が確認されており、隣接する清水山1～3号窯、池田端1・2・5号窯、沢田鍋土1・2号窯などの奈良時代前半の窯跡に関わる可能性が指摘される（長野県埋蔵文化財センター1997）。

沢田鍋土遺跡の獸脚円面硯・脚付土器

沢田鍋土遺跡では、出土例が少ない遺物が出土した。須恵器生産の工人集落との関わりがあるか否か定かではないが、以下に取り上げておく。

沢田鍋土遺跡では、須恵器獸脚円面硯・土師器脚付土器の脚部が出土した（第68図296～301）。獸脚硯は佐久市周防加道遺跡群の風字硯、飯田市恒川遺跡で確認されているが、県内の確認例は少ない。脚部の大きさなどから円面硯の脚部と判断したが（註4）、該当する硯部は確認できなかった。脚付土器（註5）の脚部は、粗雑な作りのものと、面取りをした丁寧な作りのものがある。脚付土器としたものの中には甔などの把手が含まれている可能性も否定できない。体部との接合例がなく、これらの体部がどのような器形であるのか判然としないが、胎土や出土状況から、浅鉢形甕に著けられる脚が含まれている可能性がある。長野県及び隣接県の発掘調査報告書を検索したが、器形がわかる例が少ない。石川県寺家遺跡、荒木田遺跡（石川県埋蔵文化財センター1988・1995）の三足盤、足付平鉢と報告されている例が脚付土器の器形を確認できる数少ない資料であろう。沢田鍋土遺跡出土の脚付土器については、器形と器種の確認が第一の課題であることを述べておく。

また、奈良時代前半と判断できる円筒形土製品が出土した（第68図302～304）。長野県では、近年の発掘調査で出土例が増加しているが、どの遺跡でも出土する遺物ではない。円筒形土製品については、7世紀代にカマドの芯材として用いられ、その後その機能を長胴甕に転化し、いったん消失し、長野県では9世紀代に再び円筒形土器が用いられるようになる、と評価されている（西山1996・上田2000）。沢田鍋土遺跡の円筒形土製品は8世紀前半のものであるから、少なくとも8世紀代には残存していたことが確認され、7世紀から9世紀代まで継続して存在していた可能性を検討する必要がでてきた。円筒形土製品は、長野県、山梨県、三重県、関東と東北の一部、北陸地方を中心に分布するとされ、土師器焼成遺構との関わりも指摘されている（望月2002）。沢田鍋土遺跡では土師器焼成遺構が検出されており、土師器生産と須恵器生産に関わる工人集落としての沢田鍋土遺跡の実態の解明が、今後の課題であろう。

今回の発掘調査では、奈良時代前半の遺構・遺物が主体を占める。今後、周辺の調査が進めば、須恵器窯跡、工人集落、粘土採掘跡を含めた、奈良時代の須恵器生産に関わる高丘陵の全体の景観がより明ら

かにされるであろう。そのための資料の一つとなれば幸いである。

沢田綱土遺跡・立ヶ花表遺跡・立ヶ花城跡がある高丘陵陵の南端部には旧石器時代から中世・近世にわたる人間の活動の痕跡が確認された。高丘陵陵では、上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター 1997）の他、中野市教育委員会による多数の遺跡の調査がおこなわれている。今回の北陸新幹線建設に伴う発掘調査では、上記のような新たな発見がなされた。北信濃の歴史の実像が少しずつ明らかになっていく。

注

- 1) 長野県内の粘土採掘跡の調査事例を以下にあげる。
安源寺遺跡（中野市）：弥生時代後期？、古墳時代前期。（中野市 1995・2003）
沢田綱土遺跡（中野市）：縄文時代中期・後期、古墳時代前期、平安時代、中世。（中野市教育委員会 1993、長野県埋蔵文化財センター 1997、本書）
池田端窯跡（中野市）：奈良時代。（長野県埋蔵文化財センター 1997）
上の山遺跡（中野市）：平安時代。（中野市教育委員会 1994b）
東池田古窯跡遺跡（中野市）：詳細不明。
飯綱平遺跡（中野市）：縄文時代後期加曾利 B1 式（2 基）。（豊田村教育委員会 2005）
聖原遺跡（佐久市）：古墳時代後期から奈良・平安時代？。（佐久市教育委員会 2004）
西近津遺跡（佐久市）：未報告。
芝宮遺跡群（佐久市）：時期不明。（長野県埋蔵文化財センター 1999）
中原遺跡群（佐久市）：時期不明。（長野県埋蔵文化財センター 1999）
堂垣外遺跡（飯田市）：明治・大正時代。（飯田市教育委員会 1994）
- 2) SB104 を竪穴住居跡と認識し、7 棟とした。
- 3) 船山窯跡群柳原遺跡 B 地区 14 号・15 号住居跡（船山町教育委員会 1991）で竪穴住居跡の外側を廻る溝が確認される。14 号住居跡では斜面上方を廻る溝、15 号住居跡では斜面下方の一方所を除きほぼ全周を廻る溝がある。また、14 号住居跡では「壁溝は上位側を除き、須恵器破片で全面を被覆する」、オンドル状の施設に類似した構造が確認できる。なお、長野県内では、松本市岡田町遺跡の 8 世紀の竪穴住居跡、麻績村野口遺跡の 10 世紀前半の竪穴住居跡などで、カマドにつながる溝をもつオンドル状の施設が確認されている。
- 4) 田中明広氏のご教示による。
- 5) 脚付土器は、体部の器形が不明であるために付した仮の器種名であり、体部の形状が判明したところで、器種名の再考が必要である。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1994 『堂垣外遺跡 橋爪遺跡 飯上遺跡 長橋遺跡』遺構編
石川県埋蔵文化財センター 1988 『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
石川県埋蔵文化財センター 1995 『荒木田遺跡』
上田典男 2000 「第4章2節2(1) 円筒形土製品」『松原遺跡 古代・中世』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 53
金井汲次・川上 元 1967 「長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」『信濃』Ⅲ 19-7
佐久市教育委員会 2004 『聖原 第4分冊』佐久市埋蔵文化財調査報告書第122
土屋 積 1999 「防衛的集落の新例」『長野県埋蔵文化財センター紀要 7』
豊田村教育委員会 2005 『飯綱平遺跡Ⅱ』
中島英子ほか 1997 「第9章第3節 高丘陵古窯址群の須恵器生産について」『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡・沢田綱土遺跡他』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 24

- 中島庄一ほか 1995 「第IV章まとめにかえて 第1節 旧石器時代」『沢田銅土遺跡』中野市教育委員会
- 中島庄一 1997 「第9章1節 高丘丘陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群—がまん潤遺跡を中心として」『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん潤遺跡・沢田銅土遺跡他』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書24
- 中島庄一 2006 「中野市周辺の調査と石器群—南曾峯・沢田銅土・がまん潤—」『第18回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム後期旧石器時代以前の遺跡・石器群をめぐる諸問題』
- 中野市教育委員会 1962 『立ヶ花遺跡発掘調査略報』
- 中野市教育委員会 1993 『沢田銅土遺跡第Ⅱ地点』
- 中野市教育委員会 1994a 『がまん潤遺跡（西山中世墓址）・上の山遺跡』
- 中野市教育委員会 1994b 『清水山古窯跡（古窯址群）（中世墓址群）』
- 中野市教育委員会 1995 『安源寺遺跡 中野市西部ディサービスセンター建設用地内』
- 中野市教育委員会 2003 『安源寺遺跡 中野市西部ディサービスセンター（痴ほう型）建設に伴う発掘調査報告書』
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『向六工遺跡 十二遺跡 野口遺跡 古司遺跡 子尾入遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書15
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん潤遺跡 沢田銅土遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『芝宮遺跡群 中原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書39
- 中村由克 2007 「下呂石の供給」『縄文時代の考古学6 ものづくり 道具製作の技術と組織』
- 西山克己 1996 「7世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79
- 鳩山町教育委員会 1991 『埼玉県比企郡 鳩山窯跡群 Ⅲ—工人集落編（1）』
- 松本市教育委員会 1995 『松本市岡田町遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.118
- 望月精司 1996 「第6章第2節第2項古代の土器様相 2 古代土製履脚小考」『荒木田遺跡』小松市教育委員会
- 望月精司 2002 「(3) その他の特殊器種について（台付鉢及び獣足鉢について・円筒形土製品について）」『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会 p307—p312



立ヶ花表遺跡 雨の中の遺跡説明会（平成20年9月13日）

遺物観察表

1 石器観察表

沢田鍋土遺跡	旧石器時代石器観察表
立ヶ花表遺跡	石器観察表
沢田鍋土遺跡	縄文・弥生時代石器観察表

2 土器・土製品観察表

沢田鍋土遺跡	縄文時代土器観察表
沢田鍋土遺跡	弥生～中世土器観察表
沢田鍋土遺跡	奈良・平安時代土器観察表
立ヶ花表遺跡	奈良・平安時代土器観察表
立ヶ花表遺跡	弥生～中世土器観察表

1 石器観察表

旧石器時代の遺物と判断したものと、縄文時代以降で加工が認められる石器の観察表を掲載した。掲載しなかった石器及び、非掲載の属性については添付 DVD にデータを収録した（ファイル名：「沢田鍋土遺跡石器観察表」「立ヶ花表遺跡石器観察表」）。

器種、石材の略称は、巻頭の凡例を参照して頂きたい。

2 土器・土製品観察表

報告書に実測図または写真を提示した土器・土製品等の観察表を掲載した。掲載しなかった土器、及び、非掲載の属性については添付 DVD にデータを収録した（ファイル名：「沢田鍋土土器観察表」「立ヶ花表遺跡土器観察表」）。

(1) 器種について

器種名は「第3章第4節3項目(1)の遺物の分類と概要」に従った。

(2) 層位・番号について

層位・番号欄は以下の略号を用いた。No付きの数字は取上げ番号である。

ケ：検出面 シ：焼成部 タ：焚口部 ネ：燃焼部（立ヶ花表遺跡のみ）

(3) 須恵器の焼成分類について

須恵器の焼成について以下の4タイプに分類した（詳細は第3章4節3項、写真図版 PL8 を参照）。縄文土器、弥生土器、土師器については焼成状態の分類はおこなっていない。

タイプⅠ：青灰色で硬質のもの。暗赤褐色で硬質なものがある。

タイプⅡ：赤褐色から橙色の部分があり、硬質のもの。概して、タイプⅠより焼成が悪い。

タイプⅢ：灰色で軟質のもの。触ると、手に粉状の胎土が付着する。

タイプⅣ：橙色の軟質のもの。触ると、手に粉状の胎土が付着する。土師器との区分が困難である。

(4) 筥書について

筥書については備考に記した。欠損で筥書の全体の形が不明なもの、または沈線は認められるが筥書が否か判断できないものについては「？」を付した。

沢田鍋土遺跡 旧石器時代石器観察表

報告番号	管理番号	地区	地点	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	欠損 状況	分析 番号	黒曜石産地 分析結果	備考
224	1K	地点外	SD101				Fl	3.57	6.33	0.89	20.47	Sh	完形			
225	1K	地点外	SD101				Fl	4.20	-2.60	1.41	9.05	Ch	欠損			
226	1K	地点外	SD101				Fl	2.58	3.38	1.20	9.95	Ob	完形			
227	1K	地点外	SD102				Fl	4.17	2.21	1.27	12.3	Ch	完形			
228	2K	和地点	102号ブロック外縁部	ⅡT01	IV上	1.5	Fl	1.49	2.31	1.27	1.83	Ob	完形			
229	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ	1.57	Fl	-0.99	1.67	0.21	0.29	Ob	欠損			
230	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.89	Fl	1.19	0.65	0.25	0.16	Ob	完形			
231	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ	1.90	Ch	0.61	0.47	0.07	0.03	Ob	完形			
232	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ	1.91	Fl	0.56	1.22	0.21	0.1	Ob	完形			
233	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.92	Ch	0.62	0.25	0.09	0.02	Ob	完形			
234	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.93	Ch	0.95	0.57	0.08	0.05	Ob	完形			
235	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.94	Ch	1.08	0.72	0.13	0.17	Ob	完形			
236	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.95	Ch	0.75	0.33	0.05	0.01	Ob	完形			
237	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.96	Ch	1.17	0.57	0.20	0.16	Ob	完形			
238	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.97	Ch	0.46	0.25	0.02	0.01	Ob	完形			
239	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.98	Ch	0.62	0.30	0.15	0.01	Ob	完形			
240	2K	和地点	102号ブロック外縁部	ⅡO11	Ⅲ下	1.99	Ch	1.30	0.37	0.16	0.09	Ob	完形			
241	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.100	Fl	1.13	1.18	0.11	0.25	Ob	完形			
242	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.101	Ch	0.72	0.50	0.15	0.05	Ob	完形			
243	2K	和地点	102号ブロック	ⅡO12	Ⅲ下	1.102	Ch	0.56	0.42	0.07	0.01	Ob	完形			
244	2K	和地点	102号ブロック外縁部	ⅡO12	Ⅲ下	1.103	Ch	0.90	0.41	0.04	0.01	Ob	完形			
245	4K	F地点	103号ブロック外縁部	ⅡC20		1.66	Fl	-1.50	2.07	1.28	3.56	Ob	欠損			被蝕?
246	4K	F地点	103号ブロック外縁部	ⅡC20		1.67	Ch	1.00	0.87	0.07	0.11	Ob	完形			
247	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.68	Fl	1.13	0.96	0.23	0.34	Ch	完形			
248	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.69	Fl	1.31	0.65	0.32	0.29	Ob	完形			
249	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.70	Fl	1.26	1.02	0.22	0.42	Ch	完形			
250	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.70	Ch	1.17	0.53	0.28	0.17	Ch	完形			
251	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.71	Fl	1.47	0.72	0.26	0.32	SS	完形			
252	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.72	Fl	1.17	1.22	0.24	0.58	Ob	完形			
253	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.73	Ch	0.73	0.80	0.05	0.06	Ob	完形			
254	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.74	Fl	1.46	1.40	0.18	0.37	Ob	完形			
255	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.75	Ch	0.62	0.62	0.05	0.01	Ob	完形			
256	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.76	Ch	0.80	0.41	0.12	0.04	Ob	完形			
257	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.78	Ch	1.28	0.61	0.35	0.11	Ob	完形			
258	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.80	Ch	0.88	0.40	0.13	0.04	Ob	完形			
259	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.81	Fl	1.34	0.72	0.61	0.54	Ob	完形			
260	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.82	Ch	-0.67	0.99	0.14	0.16	Ob	欠損			
261	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.83	Fl	1.92	1.03	0.84	1.12	Ob	完形			
262	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.84	Fl	-2.06	-1.55	0.35	0.94	Ob	欠損			
263	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC25		1.85	Ch	0.70	0.50	0.09	0.08	Ob	完形			
264	4K	F地点	103号ブロック	ⅡC20		1.86	Fl	1.48	2.48	0.61	1.64	Ob	完形			
265	2K	地点外	SX104a				RF	-3.94	-2.61	1.39	10.17	Ch	欠損			
266	2K	地点外	SX104a				Fl	2.61	4.87	0.44	6.31	An	完形			

立ヶ花表遺跡石器観察表

報告番号	管理番号	地区	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	欠損 状況	黒曜石 産地分 析番号	黒曜石産地 分析結果	備考
PL18	6	A区	遺構外	IVG10-12b		Bt	-2.37	1.70	0.36	2.12	Ob	欠損	THT-28	和田薬山群	
PL18	7	A区	遺構外	IV16-5d		RF	2.82	2.95	0.76	6.83	Ob	欠損			
PL18	8	A区	遺構外	IVG20-9b		Bt	3.59	1.53	0.48	2.38	Ob	完形	THT-29	和田薬山群	
PL18	10	A区	SX01			Fl	-4.42	1.39	1.35	7.09	Ob	欠損			しの字状割片
PL18	12	A区	遺構外	IVG15-2d		RF	-2.26	1.06	0.30	1.17	Ob	欠損	THT-27	和田薬山群	
PL18	13	A区	SX01			Bt	-2.06	1.91	0.39	2.85	Ob	欠損	THT-30	和田薬山群	
PL18	19	A区	遺構外	IVG10-12c		Bt	-3.1	1.36	0.6	2.9	Ob	欠損			
PL18	20	A区	遺構外	IVG15-2c		Bt	-2.94	2.2	0.92	5.49	Ob	欠損			
第75041	3	A区	SV01灰塚	IVG14-15-19-20		Gr	4.05	2.04	0.68	5.92	Ob	完形	THT-31	和田薬山群	
第75042	9	A区	SV03灰塚	IV106・IVG10		Sc	3.01	-1.65	0.93	4.12	Ob	欠損			
第75043	5	A区	SX01			Bt	8.71	2.78	1.27	29.7	Ge	完形	THT-32	下呂石群	
第75044	2	A区	TP2			AH	1.59	1.40	0.21	0.57	Ch	完形			
第75045	1	A区	遺構外	IVG19		AH	-3.15	1.39	0.33	1.76	Ch	欠損			
第75046	18	A区	SV02	IVG12		UF	8.50	16.20	1.69	292	PAn	完形			

沢田鍋土遺跡 縄文時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	器種	部位	外面色調	胎土	備考
第2601号	65 SX106		No.1	深鉢	口縁部(口唇部)	黒褐色(Hue10YR3/2)	白色粒子多、石英少、雲母僅	胎土分析番号112
第2602号	85 SQ101			深鉢	口縁部	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英少、雲母僅	胎土分析番号113
第2603号	76 SX106		No.2	深鉢	口縁部～胴部	明褐色(Hue7.5YR5/6)	白色粒子多、砂石僅	
第2604号	71 SX110		No.1	深鉢	口縁部～底部	にぶい・赤褐色(Hue5YR4/4)	白色粒子多、赤褐色粒子少	
第2605号	87 SQ101		No.5	深鉢	胴部～底部	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)	白色粒子多、石英僅	
第2606号	48 SX105	埋土	深鉢	胴部～底部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子中、赤褐色粒子少、石英中		
第2607号	66 SX106		No.10	深鉢	口縁部～底部	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	白色粒子多、赤褐色粒子中	
第2608号	68 SX106		No.9	深鉢	口縁部～胴部	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子僅	
第2609号	5 III-T-02	検出面	深鉢	口縁部～胴部	にぶい・黄褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子多、赤褐色粒子中、砂粒僅		
第2610号	90 III-N-19	II	深鉢	胴部	赤褐色(Hue5YR4/6)	白色粒子多、赤褐色粒子中、石英僅		
第2611号	31 SX108		No.8	深鉢	口縁部～胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR7/3)	白色粒子多、赤褐色粒子中	
第2701号	82 III-N-12	I	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/3)	白色粒子多、石英少		
第27013号	41 SX107		深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子多、礫石僅、赤褐色粒子少、砂粒少		
第27014号	25 SX108	暗褐色	深鉢	口縁部	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子多、礫石少、石英僅		
第27015号	16 SX109		深鉢	口縁部	にぶい・黄褐色(10YR6/3)	白色粒子少		
第27016号	70 SX110	下	深鉢	口縁部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/3)	白色粒子中、砂粒中		
第27017号	59 SX106		深鉢	口縁部(口唇部欠)	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子少		
第27018号	43 SX109		No.7	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/3)	白色粒子多、石英僅	
第27019号	24 SX108		深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子多、石英僅、雲母僅		
第27020号	56 SX105		深鉢	口縁部(口唇部欠)	暗褐色(Hue7.5YR3/3)	白色粒子中、石英少、雲母僅		
第27021号	63 SX106		深鉢	口縁部	褐色(Hue7.5YR7/6)	白色粒子中、砂粒少	底部割代直	
第27022号	44 SX109		No.7	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue5YR7/7)	白色粒子多、赤褐色粒子僅	
第27023号	49 SX105		No.3	深鉢	口縁部(口唇部欠)	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子多	
第27024号	11 SX109	堀下	深鉢	口縁部	黒褐色(Hue7.5YR3/2)	白色粒子多、石英僅		
第27025号	84 III-S-10	II	深鉢	口縁部(口唇部欠)	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/3)	白色粒子少、雲母僅、礫石?僅		
第27026号	62 SX106		深鉢	口縁部(口唇部欠)	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/3)	白色粒子少、雲母僅		
第27027号	91 III-N-13	III	深鉢	口縁部	明赤褐色(Hue5YR5/8)	白色粒子僅	胎土分析番号106	
第27028号	91 III-N-13	III	深鉢	口縁部	褐色(Hue5YR6/6)	白色粒子僅		
第27029号	21 SX108	褐色土	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR6/4)	白色粒子僅		
第27030号	22 SX108	褐色土	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR6/4)	白色粒子中、赤褐色粒子中		
第27031号	47 SX105		深鉢	口縁部(口唇部欠)	黒褐色(Hue5YR3/1)	白色粒子中		
第27032号	13 SX109	暗褐色土	深鉢	口縁部	にぶい・黄褐色(10YR7/3)	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英、礫石僅		
第27033号	2 SX104d		深鉢	胴部	にぶい・赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子多、礫石僅		
第27034号	7 SX109		No.11-14	深鉢	胴部	灰褐色(Hue7.5YR5/2)	白色粒子多	
第27035号	1 SX104d		深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子多、赤褐色粒子僅		
第27036号	29 SX108		No.4	深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子多、石英僅	
第27037号	14 SX109		深鉢	胴部	灰褐色(Hue7.5YR5/2)	白色粒子多		
第27038号	52 SX105		深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR7/4)	白色粒子少		
第28039号	60 SX106		深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR5/4)	白色粒子多、石英僅、雲母僅	外面に付着物有り	
第28040号	64 SX106	暗褐色	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR7/4)	白色粒子僅、石英僅		
第28041号	34 SX109	埋土	深鉢	胴部	赤褐色(Hue2.5YR6/4)	白色粒子多、石英中、雲母僅		
第28042号	80 III-O-21	検出面	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR6/4)	白色粒子多、石英多、赤褐色粒子中		
第28043号	3 SX104d		深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(10YR7/3)	白色粒子中、石英少		
第28044号	89 SX108		No.2	深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/3)	白色粒子少	
第28045号	78 III-O-21	検出面・III	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子多、礫石?僅		
第28046号	79 III-O-22	検出面	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子多、礫石?僅		
第28047号	46 SX105		深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR7/3)	白色粒子僅、礫石僅		
第28048号	15 SX109		深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(10YR6/3)	白色粒子少、礫石僅		
第28049号	8 SX109		No.12	深鉢	胴部	灰褐色(Hue7.5YR6/2)	白色粒子少	
第28050号	22 SX108	褐色土	深鉢	口縁部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子中、赤褐色粒子中		
第28051号	88 SX104d		深鉢	胴部	灰褐色(Hue5YR3/2)	白色粒子中		
第28052号	12 SX109	暗褐色土	深鉢	胴部	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	白色粒子少、石英僅		
第28053号	12 SX109	暗褐色土	深鉢	胴部	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	白色粒子少、石英僅		
第28054号	24 SX108		深鉢	胴部	褐色(Hue7.5YR4/6)	白色粒子多、石英僅、雲母僅		
第28055号	51 SX105		No.8	深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子僅	
第28056号	39 SX109	暗褐色土	深鉢	胴部	黒褐色(Hue10YR3/1)	白色粒子少、石英多、雲母僅		
第28057号	92 III-N-19	II	深鉢	胴部	にぶい・赤褐色(Hue5YR4/4)	白色粒子少、石英僅		
第28058号	19 SX108c	褐色土	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/3)	白色粒子多、石英中、黒色粒子中		
第28059号	19 SX108c	褐色土	深鉢	胴部	にぶい・褐色(Hue7.5YR5/3)	白色粒子多、石英中、黒色粒子中		
第28060号	29 SX108		No.4	深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子少、石英多	
第28061号	32 SX108c		No.10	深鉢	胴部	にぶい・黄褐色(Hue10YR6/3)	白色粒子少、石英多	
第28062号	40 SX107		深鉢	口縁部(口唇部欠)	明赤褐色(Hue5YR5/6)	白色粒子多、赤褐色粒子中、砂粒中		
第28063号	40 SX107		深鉢	胴部	明赤褐色(Hue5YR5/6)	白色粒子多、赤褐色粒子中、砂粒中		

沢田鍋土遺跡 縄文時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	種類	部位	外面色調	胎土	備考
第28図64	33	SX108c	No.12	深鉢	胴部	にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)	白色粒子僅、石英多	
第29図65	51	SX105	No.8	深鉢	胴部	にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子僅	
第29図66	51	SX105	No.8	深鉢	胴部	にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子僅	
第29図67	51	SX105	No.8	深鉢	胴部	にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子僅	
第29図68	4	SX104d		深鉢	胴部	黒褐色(Hue10YR3/1)	白色粒子多、石英僅	
第29図69	28	SX108	No.3	深鉢	胴部	にぶい褐色(Hue7.5YR7/4)	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英僅	
第29図70	42	SX107		深鉢	胴部	にぶい赤褐色(Hue5YR5/4)	白色粒子多、石英僅	
第29図71	69	SX106	No.8	深鉢	胴部	黒褐色(Hue7.5YR3/2)	白色粒子中、礫石?中、赤褐色粒子僅	
第29図72	9	SX109	掘下	深鉢	胴部	にぶい褐色(Hue7.5YR6/4)	白色粒子多、赤褐色粒子中、雲母僅	
第29図73	67	SX106		深鉢	胴部	褐色(Hue7.5YR4/3)	白色粒子中、礫石僅、赤褐色粒子中	
第29図74	93	III-N-19	II	深鉢	胴部	赤褐色(Hue5YR4/6)	白色粒子多、礫石?多、雲母僅	第29図75と類似
第29図75	77	III-N-18	I	深鉢	胴部	にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	白色粒子中、雲母少、石英僅、赤褐色粒子中	
第29図76	18	SX108		深鉢	胴部	にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)	白色粒子少、赤褐色粒子少	胎土分析番号109
第29図77	23	SX108		浅鉢	口縁部(口唇部欠)	にぶい褐色(Hue5YR6/4)	白色粒子中、赤褐色粒子少、礫石僅	胎土分析番号110
第29図78	20	SX108c.d	褐色土	浅鉢	口縁部	褐色(Hue7.5YR6/6)	白色粒子中、赤褐色粒子少、礫石僅	
第29図79	83	III-N-18	I	浅鉢	口縁部(口唇部欠)	褐色(Hue7.5YR6/6)	白色粒子多	
第29図80	37	SX108d	褐色土	深鉢	胴部～底部	明黄褐色(Hue10YR6/6)	白色粒子多、石英中、雲母僅	底部網代煎
第29図81	72	SX110	No.11	深鉢	胴部～底部	にぶい褐色(Hue7.5YR6/4)	白色粒子多	底部網代煎
第29図82	35	SX109	No.8	深鉢	胴部～底部	褐色(Hue7.5YR6/6)	白色粒子僅、雲母僅	底部網代煎
第29図83	38	SX108c	No.11	深鉢	胴部～底部	にぶい褐色(Hue7.5YR6/3)	白色粒子中	底部網代煎
第29図84	73	SX106	No.4	深鉢	底部	褐色(Hue7.5YR6/6)	白色粒子中、赤褐色粒子僅、石英少、雲母僅	底部網代煎
第29図85	45	SX109	No.2	深鉢	底部	赤褐色(Hue2.5YR4/6)	白色粒子多、石英少	底部網代煎
第29図86	53	SX105		深鉢	底部	にぶい黄褐色(Hue10YR7/4)	白色粒子多、赤褐色粒子少、雲母僅、石英僅	

沢田鍋土遺跡 弥生・中世土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	種類	器種	部位	時期	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	外面色調	備考
第32図1	301	III-43	埋土	甕	口縁部	弥生後期～古墳初期	1600B3					にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	
第32図2	302	III-C-14-19	検出面	高杯	接合部	弥生後期～古墳初期	4/5					赤色(Hue10R5/6)	外面赤彩
第32図3	303	III-N-19	検出面	高杯	接合部	弥生後期～古墳初期	4/5					褐色(Hue7.5YR7/6)	外面赤彩
第32図4	401	SD127		土師器	甕	口縁部	古墳	1/6				褐色(Hue7.5YR7/6)	
第76図1	2002	SX104		陶器	丸瓶	胴部～底部	中世	3/4		5.0		暗褐色(Hue10YR3/0)	
第76図2	2003	SX104		陶器	打明瓦	口縁部～底部	中世	1/4	10.0	2.5	5.4	にぶい褐色(Hue5YR6/4)	
第76図3	2004	SX113	埋土	陶器	皿	底部	中世	1/3			5.2	灰オリーブ(輪)色(Hue7.5YR5/3)	
第76図4	2001	SX104		内耳罐	口縁部～底部	中世	2/5	30.0	14.5	22.4		褐色(Hue5YR4/1)	

沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	種類	器種	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	焼成 分類	調査箇所	備考	分析 番号	
第51001	1136	SB104		埴土	須恵器 杯蓋	蓋面部	10.3			I	外:回転ヘラケズ			
第51002	1137	SB101		埴土	土師器 長脚甕	口縁部～胴部	20.6				外:タタキ～ナデ, 内:ナデ			
第51003	1392	SB101		埴土	土師器 長脚甕	口縁					外:ハケ, 内:ハケ			
第51004	1290	SD107	No.4	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.0	4.1	7.8	I	底部:回転ヘラ切り→静止ヘラケズ	赤み		
第51005	1343	SD104	No.1	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.3	3.9	9.6	I	底部:回転ヘラ切り→静止ヘラケズ	ヘラ横; 底部外面に「一」?		
第51006	1338	SD104		埴土	須恵器 杯B	底部				9.6	II 底部:回転ヘラケズ			
第51007	1329	SD104		埴土	須恵器 甕	底部				10.4	I 底部:回転ヘラケズ			
第51008	1347	SD104		埴土	須恵器 杯B	口縁部～底部	11.3	4.2	7.2	II	底部:回転ヘラケズ			
第51009	1251	SD107		埴土	須恵器 杯蓋	蓋面部	17.6			I	外:ロクロナデ	赤み		
第51010	1344	SD104	No.1	須恵器	杯蓋?	フタミ				I				
第51011	1337	SD104		埴土	須恵器 長脚甕	胴部～底部				12.6	I 外:ロクロナデ 内:ロクロナデ			
第51012	1254	SD107	No.3	須恵器	長脚甕	胴部				I	外:ロクロナデ, 内:ロクロナデ	胴部接合部粘土押え痕有り		
第51013	1252	SD107	No.1	須恵器	鉢?	口縁部～胴部	27.0			I	外:タタキ, 内:黒文太て貝殻ナデ			
第51014	1348	SD104	No.1	須恵器	甕	口縁部	24.0			I	外:タタキ～ナデ, 内:ナデ			
第51015	1369	SD104		埴土	土師器 甕	口縁部～胴部	24.2				外:ナデ, 内:ナデ			
第51016	1253	SD107	No.2	土師器	小型甕	口縁部～底部	14.0	12.4	7.5		外:ケズリ～ハケ, 内:ハケ			
第51017	1342	SD104		埴土	土師器 小型甕	口縁部～胴部	13.7				外:ナデ, 内:ナデ			
第51018	1345	SD104	No.1	土師器	長脚甕	口縁部～胴部	19.8				外:ケズリ, 内:ナデ			
第51019	1341	SD104	No.1	土師器	長脚甕	口縁部～胴部	18.6				外:ナデ? (厚肌), 内:ナデ (厚肌)			
第51020	1340	SD104		埴土	土師器 長脚甕	底部					外:ヘラケズ, 内:ナデ			
第51021	1001	SB102	No.29	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.4	4.1	8.8	IV	底部:静止ヘラケズ, 条線状圧痕			
第51022	1002	SB102		須恵器	杯A	口縁部～底部	15.2	4.8	7.8	II-III	底部:回転ヘラ切り?	底部外面に円形刺突	29	
第51023	1008	SB102	No.19, 床下	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.8	4.2	9.7	III	底部:ヘラ切り(条線状の圧痕)			
第51024	1005	SB102	No.27	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.0	3.3	8.0	I	底部:回転ヘラ切り(条線状の圧痕)	赤み, 気泡による膨らみ		
第51025	1006	SB102	No.27	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.7	3.7	10.2	I	底部:ヘラ切り(条線状の圧痕)	赤み, 気泡による膨らみ		
第51026	1003	SB102		焼出面	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.2	3.8	10.2	I	底部:回転ヘラ切り→静止ヘラケズ		
第51027	1004	SB102	No.30	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.8	4.3	11.2	I	底部:回転ヘラ切り→静止ヘラケズ	赤み		
第51028	1010	SB102	No.26	須恵器	杯B	口縁部～底部	15.8	3.7	10.0	II	底部:回転ヘラケズ	赤み, 気泡による膨らみ		
第51029	1009	SB102		焼出面	須恵器	杯B	口縁部～底部	14.9	3.7		I	底部:回転ヘラケズ		
第51030	1007	SB102		焼出面	須恵器	杯B	口縁部～底部	16.1	11.1	III	底部:回転ヘラケズ			
第51031	1330	SB102	No.16	須恵器	杯B	口縁部～底部	16.0			II		底部欠損		
第51032	1014	SB102	床下	須恵器	杯蓋	蓋面部	14.9			I	外:回転ヘラケズ			
第51033	1013	SB102	No.20	須恵器	杯蓋	フタミ～口縁部	16.4	2.4		III	外:回転ヘラケズ			
第51034	1030	SB102		須恵器	甕蓋	蓋面部	14.0			I				
第51035	1011	SB102	床下	須恵器	高杯	胴部				III				
第51036	1019	SB102		須恵器	短脚甕	口縁部～胴部	8.8			I	外:ロクロナデ			
第51037	1020	SB102		須恵器	長脚甕	胴部				I	外:ロクロナデ			
第51038	1024	SB102	No.17	須恵器	罐鉢	底部			15.3	I		底部に土器付着		
第51039	1022	SB102		焼出面	須恵器	鉢	口縁部	20.9		I	外:口縁部ナデ, 胴部タタキ 内:ナデ	赤み	28	
第51040	1023	SB102	No.27-29-30, 床下	須恵器	甕	口縁部	27.2			I	外:ナデ, 内:ナデ	赤み		
第51041	1021	SB102	No.5-6	須恵器	甕	口縁部～胴部	29.0			II	外:タタキ, 内:ナデ	赤み		
第51042	1018	SB102	No.15-16-18- 28	土師器	長脚甕	口縁部～胴部	21.4				外:ハケ		82	
第51043	1017	SB102	No.26	土師器	小型甕?	口縁部～胴部	16.6				外:ナデ, 内:ナデ			
第51044	1015	SB102	No.2	土師器	長脚甕	胴部～底部					外:厚肌のための縦筋不能 内:ハケ		81	
第51045	1016	SB102	No.1	土師器	長脚甕	口縁部～胴部	28.3				外:ナデ, 内:ナデ			
第51046	1227	SD105		須恵器	杯A	口縁部～底部	14.2	3.6	10.0	II	底部:回転ヘラ切り未調整			
第51047	1229	SD105		埴土	杯B	口縁部～底部	18.2	6.8	12.3	III	底部:回転ヘラケズ			
第51048	1230	SD105		須恵器	長脚甕	口縁部	10.6			I	外:ナデ, 内:ナデ	自然軸あり		
第51049	1232	SD105	No.2	須恵器	長脚甕?	胴部～底部				I	外:タタキ後ロクロナデ 内:ロクロナデ	外面に発行付着		
第51050	1228	SD105	No.3	土師器	杯	口縁部～胴部	17.9				外:ロクロナデ, 内:ロクロナデ	黒底あり		
第51051	1231	SD105	No.1	土師器	小型甕	口縁部～胴部	14.2				外:ロクロナデ, 内:ロクロナデ			
第51052	1233	SD105	No.4+5	土師器	小型甕	口縁部～底部	19.2	17.6	8.0		外:タタキ後ナデ, 内:ハケ	第51053と同器形であるが、外面の調整が異なる		
第51053	1382	SD105	No.4	土師器	小型甕	胴部					外:ハケ, 内:ハケ	第51052と同器形であるが、外面の調整が異なる		
第51054	1234	SD105	No.4	土師器	長脚甕	口縁部～胴部	23.5				外:ハケ, 内:ハケ			
第51055	1033	SB103	No.64	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.0	3.6	7.4	II	底部:回転ヘラ切り未調整			
第51056	1031	SB103	No.51	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.3	3.1	9.4	I	底部:回転ヘラ切り後ナデ?			

沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グロブ	層位・番号	種類	器種	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	構成 分類	器面調整	備考	分析 番号
第5500113	1081	SH103	N:8	須恵器	短頸壺?	胴部				I	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	焼成時の歪みがあり、胴部との接合部は自然軸が中心になっており、焼成時に破損していたことが観察される	
第5500114	1098	SH103	N:22	須恵器	横瓶	口縁部	14.1			I	外:ナデ, 内:ナデ		
第5500115	1099	SH103	N:13	須恵器	横瓶	胴部				I	外:タタキ→ナデ, 内:ナデ		
第5500116	1097	SH103	N:16-22-51	須恵器	横瓶	胴部				I	外:タタキ→ウキ目, 内:ナデ		
第5600117	1087	SH103	N:34	須恵器	壺?	胴部				I	外:ハケ, 内:ナデ		
第5600118	1090	SH103	N:24-26	須恵器	壺C	口縁部～底部	18.3			I	外:タタキ→ウキ目, 内:青海波文	気泡による膨らみ	31
第5600119	1091	SH103	N:4+20-22, 検出面	須恵器	壺C	口縁部～底部	16.0	24.0		I	外:タタキ 内:ナデ(煎状工具による)	壺台付蓋, 歪み	33
第5600120	1092	SH103	N:1+3+9+20+26+30+44+54, 検出面	須恵器	壺C	胴部～底部				I	外:タタキ 内:ナデ	歪み	
第5600121	1094	SH103	N:5+16+50+51+52	須恵器	壺C	口縁部～底部	33.5	30.2		I	外:タタキ, 内:ナデ+無文あて具痕		
第5600122	1095	SH103	N:23	須恵器	壺D	口縁部～胴部	32.7			III	外:タタキ, 内:ナデ+無文あて具痕		34
第5600123	1093	SH103	N:3+8+11+20+43	須恵器	壺C	胴部～底部				I	外:タタキ, 内:ナデ+無文あて具痕		
第5700124	1303	SH103	N:8+25	須恵器	壺C	胴部				I	外:タタキ→ウキ目, 内:ハケ		
第5700125	1096	SH103	N:30-48	須恵器	大甕	口縁部	35.3			I	外:タタキ→ナデ, 内:ナデ	気泡による膨らみ	32
第5700126	1125	SH103		須恵器	大甕	口縁部				I	5本の煎煮状工具による炭状文		
第5700127	1123	SH103		須恵器	大甕	口縁部				I	6本の煎煮状工具による炭状文		
第5700128	1101	SH103	N:13	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ, 内:青海波文	歪み	
第5700129	1116	SH103	N:10	土師器	把手?	不明					外:ケズリ, 内:ケズリ		
第5700130	1115	SH103	N:60	土師器	把手?	胴部?					外:ケズリ, 内:ケズリ		
第5700131	1108	SH103	Fr:3No1	土師器	壺	口縁部～胴部	14.8				外:ナデ, 内:ナデ		
第5700132	1106	SH103		土師器	壺	口縁部～胴部	14.0				外:ナデ, 内:ナデ		
第5700133	1107	SH103	N:45	土師器	壺	口縁部～胴部					外:ナデ, 内:ナデ		
第5700134	1109	SH103		土師器	長頸壺	口縁部～胴部	23.0				外:ハケ, 内:ナデ		
第5700135	1110	SH103	N:2+49, 検出面	土師器	壺	口縁部～胴部	25.0				外:ナデ? (摩耗) 内:ナデ (摩耗) ハケむすびかんだ 外:底部上下ハケ, 下平ケズリ 内:ハケ		83
第5800136	1114	SH103	N:32-38	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	21.0				外:ケズリ, 内:ナデ		84
第5800137	1111	SH103	N:2+3+5+7+11+16-22	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	21.5				外:ケズリ, 内:ナデ		
第5800138	1242	SD106	N:10	須恵器	杯B	底部			11.0	III	底部:煎転ヘラケズリ		
第5800139	1241	SD106		須恵器	杯B	口縁部～底部	16.4	3.7	12.0	IV	底部:煎転ヘラケズリ 高台接合用瓦葺		
第5800140	1240	SD106	N:11-13	須恵器	杯B	口縁部～底部	13.4	3.8	8.8	I	底部:煎転ヘラケズリ		
第5800141	1247	SD106		須恵器	壺	口縁部～胴部	28.6			II	外:タタキ, 内:ナデ		
第5800142	1244	SD106	N:12	須恵器	壺A	口縁部	28.8			I+II	外:タタキ→ナデ		
第5800143	1246	SD106		須恵器	壺C?	胴部～底部				I	外:タタキ, 内:ナデ		
第5800144	1245	SD106	N:5	須恵器	壺A	口縁部～胴部	32.0			I	外:ナデ, 内:ナデ		
第5800145	1248	SD106	N:8	須恵器	大甕	口縁部				I	外:沈殿→6本の煎煮状工具による炭状文, 内:ロクロナデ 外:沈殿→6本の煎煮状工具による炭状文+煎転, 内:ナデ		
第5900146	1239	SD106	N:3, 検出面	須恵器	大甕	口縁部～胴部	50.0			I			
第5900147	1249	SD106	N:5	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	24.0				外:ハケ 内:ハケ? (摩耗にて不明)		
第5900148	1243	SD106	N:9	土師器	壺	口縁部～胴部	23.3				外:ハケ, 内:ハケ		
第5900149	1238	SD106	N:14	土師器	直縁杯壺	口縁部～胴部	35.9				外:タタキ→ナデ, 内:ナデ		
第5900150	1130	SH104		須恵器	杯A	底部			7.6	I	底部:外面ナデでヒダス状痕	ヘラ描:底部外面に「一」?	
第5900151	1127	SH104		須恵器	杯壺	ツマミ～口縁部	17.0	4.0		I	外:ハケケズリ	歪み	
第5900152	1394	SH104	N:5	土師器	杯A	口縁部～底部	-16.2	2.4	-1.8		底部:外面ナデ		
第5900153	1133	SH104	N:6, 埋土, 検出面	土師器	小型壺	口縁部～胴部	11.2				外:ナデ, 内:ナデ		
第5900154	1135	SH104		須恵器	壺? 把手	把手部				III			
第5900155	1128	SH104	N:2	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	20.0				外:ハケ, 内:ナデ, 摩耗が著しい		86
第5900156	1129	SH104	N:2, 検出面	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	22.9				外:ハケ, 内:ナデ, 摩耗が著しい		
第5900157	1225	SD127	N:2	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.1	3.9	8.9	IV	底部:ウツロ	ヘラ描:底部外面に「一」	
第5900158	1324	SD127	N:1	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.0	4.2	8.2	IV	底部:ナデ?	底部ヘラ切り, 歪み	
第5900159	1326	SD127	N:1	土師器	壺把手	把手部					外:ケズリ		
第5900160	1328	SD127	N:1, 埋土	土師器	長頸壺	口縁部～胴部	26.4				外:ハケ→ナデ+ケズリ, 内:ハケ		
第5900161	1155	SH105	N:1	須恵器	杯A	口縁部	13.8	3.5	9.2	III	底部:煎転ヘラ切の未調整		44
第6000162	1160	SH105	N:14	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.5	3.2	9.0	IV	底部:煎転ヘラ切の未調整? 摩耗が著しい		45
第6000163	1153	SH105		須恵器	杯A	口縁部～底部	14.6	4.0	8.0	IV	底部:煎転ヘラ切の未調整		

沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	種類	器種	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	焼成 分類	調査内容	備考	分析 番号	
第6000164	1156	SB105	%5	須恵器	杯A	底部			8.2	IV	底部:回転ヘラ切り未調整 条痕状の圧痕?			
第6000165	1152	SB105		須恵器	杯B	口縁部～底部	20.0	4.4	14.0	I	底部:回転ヘラケツ			
第6000166	1151	SB105		須恵器	杯B	口縁部～底部	17.2	4.2	10.8	III	底部:回転ヘラケツ。摩耗が著しい		46	
第6000167	1147	SB105		須恵器	杯B	口縁部～底部	16.0	3.8	12.0	II	底部:回転ヘラケツ			
第6000168	1156	SB105	%9	須恵器	杯B	口縁部～底部	15.0	3.4	12.8	I	底部:回転ヘラケツ	ヘラ指:底部外面に「一」		
第6000169	1159	SB105	%8	須恵器	杯蓋	フツニ～口縁部	16.8	2.0		I	外:回転ヘラケツリナゲ	赤み著しい。外面に自然釉		
第6000170	1157	SB105	%10	須恵器	杯蓋	フツニ～蓋肩部				IV	外:回転ヘラケツリナゲ			
第6000171	1145	SB105		須恵器	短頸蓋D	口縁部～底部	5.2	3.5	4.0	I	外:上部口ケツナゲ、下部ヘラケツ			
第6000172	1176	SB105		須恵器	長頸蓋	胴部				I	口ケツ調整			
第6000173	1175	SB105		須恵器	鉢A	口縁部	24.9			II	外:口ケツ	内:カキ目状の口ケツナゲ		
第6000174	1144	SB105		須恵器	短頸蓋D	口縁部	13.1			I	口ケツ調整			
第6000175	1143	SB105		須恵器	短頸蓋D	口縁部～胴部	11.6			I	口ケツ調整	赤み。外面に自然釉		
第6000176	1154	SB105	%2	須恵器	甕D	口縁部～胴部	33.6			I	体部外:タタキナゲ、内:ナゲ			
第6000177	1162	SB105		須恵器	甕A	口縁部	25.7			I	胴部外:タタキナゲ 内:口ケツナゲ	赤み		
第6000178	1142	SB105		須恵器	甕A?	胴部				I	外:タタキ、内:ナゲ			
第6000179	1130	SB105		須恵器	甕	胴部				I	外:タタキ、内:ナゲ	赤み		
第6000180	1174	SB105		須恵器	甕	胴部				II	外:タタキ、内:ナゲ		43	
第6000181	1140	SB105		土師器	小型甕	底部					外:底部付近ケツリ(摩耗)	底部に木葉痕?		
第6000182	1161	SB105	%5・H1- 床粘土	土師器	甕	口縁部～胴部	17.5				調整不明			
第6000183	1149	SB105	%3・4-6-8	土師器	長頸甕	口縁部～胴部	23.8				調整不明		87	
第6000184	1172	SB105		土師器	長頸甕	口縁部～胴部	19.2				外:ナゲ?、内:ハケ			
第6000185	1148	SB105		土師器	長頸甕	胴部					外:ハケ、内:ハケ			
第6000186	1150	SB105		土師器	台付土師	高台部			22.8		外:ナゲ、内:ナゲ			
第6000187	1171	SB106		須恵器	杯A	口縁部～底部	3.3	12.3	IV	底部:回転ヘラ切り未調整	黒底有り			
第6000188	1170	SB106		須恵器	杯蓋	フツニ～蓋肩部				II	外:回転ヘラケツ			
第6000189	1166	SB106	%3	土師器	長頸甕?	底部					外:ナゲ?、内:ナゲ			
第6000190	1167	SB106		土師器	長頸甕	胴部～底部					外:ヘラケツリ、内:摩耗により不明			
第6000191	1163	SB106	%4	土師器	長頸甕	胴部～底部	22.5		8.0		外:ハケ、底部:ケツリ 内:摩耗により不明		88	
第6000192	1169	SB106		須恵器	甕	口縁部～底部	25.9	26.3	21.3	III	外:タタキナゲ、内:ナゲ	第602図28と同一体体の可能性有り	47	
第6000193	1184	SB107	%47	須恵器	杯A	口縁部～底部	12.6	3.9	9.5	I	底部:回転ヘラ切り後ナゲ			
第6000194	1193	SB107	%20	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.1	3.2	7.3	III	底部:板状工具によるナゲ? (条痕状の圧痕)			
第6000195	1189	SB107	%47-56	須恵器	杯A	口縁部～底部	14.6	3.5	9.0	III	底部:回転ヘラ切り未調整	赤み		
第6000196	1177	SB107		須恵器	杯A	口縁部～底部	14.2	3.9	10.2	I	底部:ヘラ切り(ケツリ)後、板状工具によるナゲ	ヘラ指:底部外面に「一」?		
第6000197	1198	SB107		須恵器	杯A	底部			7.0	I	底部:板状工具によるナゲ? (条痕状の圧痕)			
第6000198	1194	SB107	%17	須恵器	杯B	胴部～底部			13.0	I	底部:回転ヘラケツ	赤み		
第6000199	1192	SB107	%14	須恵器	杯蓋	蓋肩部	20.4			I	外:回転ヘラケツ			
第6000200	1196	SB107		須恵器	杯蓋	蓋肩部				I		ヘラ指:蓋肩部内面に「×」?		
第6000201	1178	SB107		須恵器	杯蓋	蓋肩部	21.4			I	二本沈線が彫る			
第6000202	1186	SB107		須恵器	長頸甕	口縁部～胴部	9.4			I	外:ナゲ、内:ナゲ	赤み。気泡による膨らみ		
第6000203	1195	SB107	%4	須恵器	短頸蓋	胴部				I	外:カキ目、内:ナゲ			
第6000204	1180	SB107	%49	須恵器	甕A?	胴部				I	外:タタキ、内:ナゲ?	赤み。気泡による膨らみ		
第6000205	1185	SB107	%53	須恵器	甕D	口縁部～胴部	29.9			II-B	外:タタキ、内:ナゲ?あて具痕	第602図28と同一体体の可能性有り		
第6000206	1191	SB107	%30	須恵器	甕A	底部				III	外:タタキ、内:ナゲ			
第6000207	1190	SB107	%31	須恵器	甕A?	胴部～底部			15.5	III	外:タタキ、底部付近ケツリ 内:ナゲ?	底部内面に「一」か指指印による痕みがある		
第6000208	1182	SB107	%1・4-30-49- 52-53-54	須恵器	甕D	口縁部～胴部	34.0			II-B	外:タタキ、内:ナゲ		49	
第6000209	1187	SB107	%36	土師器	長頸甕	口縁部～胴部	21.9				調整不明			
第6000210	1183	SB107	%48	土師器	長頸甕	口縁部～胴部	23.4				調整不明			
第6000211	1181	SB107	%48	土師器	長頸甕	口縁部～胴部	21.2				外:ハケ、内:ハケ			
第6000212	1188	SB107	%7	土師器	長頸甕	口縁部～胴部	24.1				外:板状工具のナゲ 内:板状工具のナゲ?	指痕圧痕	89	
第6000213	1255	SK110 (SD130)	%3	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.8	4.1	9.0	I	底部:回転ヘラ切り未調整			
第6000214	1334	SK134	%1	須恵器	杯A	口縁部～底部	15.1	4.5	9.5	IV	底部:回転ヘラ切り後ナゲ			
第6000215	1360	SK118		須恵器	杯A	口縁部～底部	14.9	4.6	10.5	III	底部:回転ヘラ切			
第6000216	1361	SK118		須恵器	杯B	口縁部～底部	16.9	3.7	12.6	I	外:ナゲ、内:ナゲ			
第6000217	1362	SK120		土師器	小型甕	胴部					外:浅いカキ目、内:ナゲ			

沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グリップ	層位・番号	種類	器種	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	焼成 分類	器底調整	備考	分析 番号
第67図272	1278	ⅡO-18	I	須恵器	杯蓋	口縁部～底部	15.2	3.7	11.4	I	底部:凹輪ヘラケズリ	赤み	
第67図273	1267	ⅡO-18	I	須恵器	杯蓋	裏身部	22.8			II	外:凹輪ヘラケズリ		
第67図274	1266	ⅡO-11 ⅡO-12		須恵器	杯蓋	フタミ～口縁部	15.2	3.2		IV	外:凹輪ヘラケズリ(摩耗)	土師質	
第67図275	1265	ⅡO-11		須恵器	碗A?	口縁部～胴部	12.6			I	外:ナデ, 内:ナデ	自然釉付かへ心	
第67図276	1307	ⅡO-13	I	須恵器	高杯	胴部～脚部				III			
第67図277	1315	Vp-11	I	須恵器	高脚器	口縁部～胴部	11.6			I	外:ロクロナデ, 内:ロクロナデ	自然釉付かへ心	
第67図278	1299	ⅡN-15, ⅡN-20		須恵器	長脚蓋	口縁部～胴部	8.6			I	外:ナデ, 内:ナデ		
第67図279	1316	Vp-11	I	須恵器	雙口?	口縁部～胴部	31.7			III	外:タタキ, 内:ナデ		
第67図280	1217	ⅡT-05- 10, S8105		須恵器	瓶	口縁部, 胴部	31.3		18.2	IV	外:ナデ, 内:ナデ		
第67図281	1330	エ	I	須恵器	瓶	底部				III		第61図192と同一器体の可能性有り	
第67図282	1298	ⅡT-05		須恵器	瓶	底部			18.0		外:ナデ, 内:ナデ		
第67図283	1303	ⅡT-10	I	須恵器	鉢口?	口縁部～胴部	20.6			Ⅲ・IV	外:タタキ→ナデ→ケズリ, 内:ナデ		
第67図284	1291	ⅡT-01, ⅡN-05		須恵器	楕瓶	口縁部	12.4			I	外:ナデ, 内:ナデ		
第67図285	1215	ⅡT-04		土師器	杯A	口縁部～底部	11.1	2.5	6.0		底部:外面ナデ		
第67図286	1268	ⅡO-11 ⅡN-20		土師器	小形壺	口縁部～胴部	12.2				外:ナデ, 内:ナデ		
第67図287	1312	ⅡN-05	II	土師器	把手?	把手部					外:ケズリ		
第67図288	1311	ⅡN-05	II	土師器	不明	脚部or胴部?					外:ナデ(摩耗), 内:ナデ		
第67図289	1292	ⅡT-01		土師器	壺	底部			14.7		外:ナデ, 内:ナデ		
第67図290	1279	ⅡO-18	I	土師器	西縁形壺	口縁部～胴部	36.0	28.0			外:タタキ→ナデ→ケズリ, 内:ナデ		
第67図291	1310	ⅡO-22		土師器	台付土器	高台部			26.0		外:ナデ, 内:ナデ		
第68図292	1197	S8102	%32	須恵器	結輪車					I	側面+上面:ケズリ, 底面:ナデ	5.3×5.5×1.9cm	
第68図293	1308	ⅡO-21	I	土師器	結輪車						側面:ケズリ?, 上面+底面:ナデ	残存値7.3×2.8×0.0cm	
第68図294	1132	S8104		須恵器	土師					I	外:ナデ, 下面端部:ケズリ	片面は割れた面を磨り滑らかにしている。6.8×3.9×0.9cm	
第68図295	1027	S8102	%4	土師器	土製品	不明							
第68図296	1213	ⅡT-04		須恵器	雙脚 (円面底)	脚部				I	ケズリによる面取り	残存値3.2×1.7×2.2cm	
第68図297	1276	ⅡO-17		土師器	蹄?	脚部					側面:手づくね, 底面:圧痕あり	残存値7.6×3.5×2.9cm	
第68図298	1168	S8106		土師器	蹄?	脚部					側面:手づくね, 一部ナデ	残存値7.5×3.6×2.9cm	
第68図299	1141	S8105	埋土	土師器	蹄?	脚部					側面:手づくね, 底面:圧痕あり	残存値(10.0)×5.3×4.5cm	
第68図300	1287	SX104		土師器	蹄?	脚部					側面:手づくね, 底面:圧痕あり	残存値9.6×5.3×5.2cm	
第68図301	1026	S8102	%21	土師器	蹄?	脚部					側面:ケズリ 底面:ケズリまたはナデ	残存値7.5×3.6×3.1cm	
第68図302	1112	S8103	ク%7・12・17・ 21	土師器	器蓋+杯	胴部					外:ナデ(摩耗), 内:ナデ		
第68図303	1165	S8106	%1	土師器	器蓋+杯	口縁部～胴部					外:ナデ(摩耗), 内:ナデ		
第68図304	1164	S8106	%2・4	土師器	器蓋+杯	胴部					外:ナデ→ケズリ? (摩耗), 内:ナデ		
PL15	1117	S8103		粘土質	粘土塊								
PL15	1118	S8103		粘土質	粘土塊								
PL15	1119	S8103		粘土質	粘土塊								
PL15	1197	S8103	埋土	粘土質	粘土塊								
PL15	1398	S8103	埋土	粘土質	粘土塊								
PL15	1399	S8103	ク%15	粘土質	粘土塊								
PL15	1402	S8103		粘土質	粘土塊								
PL15	1403	S8103	埋土	粘土質	粘土塊								
PL15	1405	S8103	埋土	粘土質	粘土塊								
PL15	1422	S8103		粘土質	粘土塊								
PL15	1408	S8104		粘土質	粘土塊								
PL15	1409	S8104		粘土質	粘土塊								
PL15	1173	S8105	埋土	不明	不明								
PL15	1401	S8105		粘土質	粘土塊								
PL15	1406	S8105		粘土質	粘土塊								
PL15	1404	S8107		粘土質	粘土塊								
PL15	1400	SD118	埋土	粘土質	粘土塊								
PL15	1407	SX104a		粘土質	粘土塊								

立ヶ花表遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・グランド	層位・番号	種類	形態	部位	口径cm	高さcm	底径cm	形状分類	胎土・釉	観察備考	備考	分析番号
第79001	1018	SV01	ケ	須恵器	杯A	底部			5.7	I		底部:回転糸切り		
第79002	1010	SV01		須恵器	杯A	口縁部～底部	13.4	4.2	10.2	III		底部:回転ヘラツクリ		3
第79003	1013	SV01	ネ	須恵器	杯B	口縁部～底部	15.8	4.4	11.6	I		外:ナデ 内:ナデ	自然釉有り, 赤み有り	
第79004	1017	SV01	タ	須恵器	杯B	底部			12.0	III		底部:回転ヘラツクリ		
第79005	1015	SV01	ネ	須恵器	杯B	底部			10.8	I			自然釉有り, 欠損部に釉がはかばか	
第79006	1005	SV01	№.60	須恵器	杯蓋	赤身部～口縁部	17.5			I		外:回転ヘラツクリ	自然釉有り	
第79007	1003	SV01	№.54, ネ	須恵器	杯蓋	赤身部	20.4			I		外:回転ヘラツクリ		
第79008	1006	SV01	ネ	須恵器	杯蓋	フツ～口縁部	17.6	2.8		II		外:回転ヘラツクリ	内面が褐色	
第79009	1019	SV01	ネ	須恵器	蓋蓋	赤身部～口縁部	14.0			I		外:ナデ 内:ナデ	自然釉有り	
第79010	1016	SV01	ネ	須恵器	長頸壺?	口縁部	11.6			I				
第79011	1008	SV01	ネ, 床下	須恵器	短頸壺	口縁部～胴部	11.8			I		外:ナデ	自然釉有り, 表面割傷有り	
第79012	1020	SV01	ネ	須恵器	壺?	口縁部	16.8			I		外:ナデ 内:ナデ	自然釉有り	
第79013	1001	SV01	№.38	須恵器	壺?	高台			11.0	I		外:ナデ 内:ナデ		
第79014	1007	IVG08	№.12	須恵器	横瓶?	胴部～底部				I		外:タタキ 内:口コロナデ	胴部には腕方向の口コロナデの 變形痕が有り, 横瓶としたが, 高 台付きの平瓶の可能性あり, 赤み が著しい, 内面底部にみられる内 形の自然釉が範囲から, 5~6cm の範囲内から? 胎土:底部「多弁?」	
第79015	1012	SV01	ネ	須恵器	壺??	口縁部～胴部				I		外:タタキ 内:無文のあて具前		
第79016	1011	SV01	ネ	須恵器	壺	胴部				I		外:タタキ	胎土:胴部付近外面に「??」	
第79017	1028	SV01	№.56	須恵器	壺?	胴部				I		外:タタキ, 同心円状のケギ目 内:ナデ?		
第79018	1132	SV01	シ	須恵器	壺	胴部				III・ IV		外:タタキ 内面:無文のあて具前		7
第79019	1021	SV01	№.21-26- 64, ネ	須恵器	大壺	口縁部～胴部				I		外:タタキ		6
第80520	1027	SV01	№.62-53- 58-59-62- 64-66-65, ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	赤み IVG08, IVG15→接合	
第80521	1022	SV01	№.22-23- 25-27-28- 35-43-45	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	IVG08→接合	
第80522	1022	SV01	ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	IVG08→接合	5
第80523	1022	SV01	№.48, 床下	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	IVG08→接合	
第80524	1022	SV01	№.34	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	IVG08→接合	4
第81025	1025	SV01	№.12-29, ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	赤み	
第81026	1025	SV01	№.21-32-82	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	赤み	2
第81027	1024	SV01	№.3-3-5 10-20, シ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	著しい赤み, 気泡による膨らみ	1
第81028	1029	SV01	ケ, ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	著しい赤み, 気泡による膨らみ IVG08, IVG15→接合	
第81029	1026	SV01	ケ, 床下	須恵器	大壺B	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	一部色調の違う破片有り SQ02, IVG13→接合	
第82030	1023	SV01	№.30-46	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	著しい赤み, 気泡による膨らみ	
第82031	1129	IVG10- 16		須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:ナデ→ハケ?	赤み, IVG15-74接合	
第82032	1130	SV01	ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	著しい赤み	
第82033	1023	SV01	№.70	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	著しい赤み, 気泡による膨らみ	
第82034	1128	SV01	ネ	須恵器	大壺	胴部				I		外:タタキ 内:無文あて具前→ハケ	気泡による膨らみ IVG10-14-15-19-20→接合	
第82035		SV01		密体									右目録	
第82036		SV01		密体									棒状圧痕(A)	
第82037		SV01		密体									棒状圧痕(A)	
第82038		SV01		密体									棒状圧痕(細)	
第82039		SV01		密体									棒状圧痕(A)	

※層位・番号欄は以下の略号を用いた ケ:焼出面 シ:焼成部 タ:焚口部 ネ:燃焼部

立ヶ花表遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・アゾナ	層位・番号	種類	形態	部位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	底部分割	調査調整	備考	分析番号
第840E1	1134	SV02	ネ	須恵器	杯A	胴部～底部			7.0	I	底部:回転糸切り		16
第840E2	1133	SV02	夕	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.0	3.2	6.0	I	底部:回転糸切り		15
第840E3	1030	SV02	No.29-10, ネ	須恵器	杯蓋B	フタミ～口縁部	12.8			I	外:回転ヘラケズリ		
第840E4	1049	SV02	2層	須恵器	短頸蓋B	胴部				I	外:ナデ 内:ナデ	自然釉有り、蓋蓋の付着痕	
第840E5	1141	SV02	No.8	須恵器	凸帯付四耳蓋	胴部				I	外:タタキ 内:不明	内面に自然釉有り、粘土塊付着。燒台か?	
第840E6	1039	SV02	No.2	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ		
第840E7	1038	SV02	No.16-18・25, ネ	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ	気泡による膨らみ、自然釉有り	9
第840E8	1040	SV02	No.44	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:指ナデ		
第840E9	1045	SV02	No.46	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ		
第840E10	1042	SV02	No.21	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:自然釉が厚く調整不明	気泡による膨らみ、内面に自然釉有り	
第840E11	1044	SV02	No.43	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ	外面自然釉有り	10
第840E12	1042	SV02	No.70	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:自然釉が薄い調整不明	内面自然釉有り	8
第840E13	1048	SV02	夕	須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→踏状工具によるナデ(ハケ痕跡)		11
第850E14	1031	SQ03	No.1・11-116	須恵器	杯A	口縁部～底部	12.7	3.3	6.4	I	底部:回転糸切り	外面に顯著にロクロナデの凹凸が認められる	
第850E15	1033	SQ03	No.25-27	須恵器	杯A	口縁部～底部	12.8	3.5	6.2	I	底部:回転糸切り		
第850E16	1034	SQ03	No.11-24・26-28・30・35-36	須恵器	杯A	口縁部～底部	12.8	3.7	5.8	I	底部:回転糸切り	歪み	
第850E17	1037	SQ03	No.1・11-13・35	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.3	3.7	6.4	I	底部:回転糸切り	歪み	
第850E18	1036	SQ03	No.8+9-34	須恵器	杯A	口縁部～底部	13.7	3.9	6.0	II	底部:回転糸切り	歪み	14
第850E19	1032	SQ03	No.18	須恵器	長頸蓋	口縁部～頸部	7.8			I	外:ナデ、内:ナデ(右目痕?)		
第850E20	1035	SQ03	No.29	土師器	長頸甕	胴部					外:底部ケズリ、胴部ナデ 内:ナデ		
第850E21		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E22		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E23		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E24		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E25		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E26		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E27		SV02		竈体								棒状圧痕(細)	
第850E28		SV02		竈体								棒状圧痕(大)	
第850E29		SV02		竈体								棒状圧痕(大)	
第850E30		SV02		竈体								棒状圧痕(大)	
第850E31		SV02		竈体								棒状圧痕(大)	
第850E32		SV02		竈体								右目痕	
第850E33		SV02		竈体								棒状圧痕(大)	
第860E1	1059	SV03	夕	須恵器	杯A	底部			6.0	III	底部:回転ヘラ切り後ナデ		18
第860E2	1051	SV03	ネ	須恵器	杯B	口縁部～底部	15.2	4.0	10.0	I	外:ナデ 内:ナデ		
第860E3	1056	SV03	夕	須恵器	杯B	底部				II	底部:回転ヘラケズリ		24
第860E4	1050	SV03	ネ	須恵器	杯B	底部			10.8	I	底部:回転ヘラケズリ	歪み	
第860E5	1052	SV03	ネ	須恵器	杯蓋B	フタミ～口縁部				I	外:回転ヘラケズリ		
第860E6	1053	SV03	ネ	須恵器	杯蓋B	蓋身部	21.0			I	外:回転ヘラケズリ		
第860E7	1140	SV03	ネ	須恵器	杯蓋	蓋身部～口縁部	15.6			I	外:回転ヘラケズリ	歪み著しい	26
第860E8	1064	SV03	No.1+6-7・13-16-41・51-59	須恵器	横瓶	口縁部～胴部	13.0			I	外:タタキ+比喩 内:無文あて具痕、ロクロナデ	燒き歪みによる亀裂有り	
第860E9	1057	SV03	ネ	須恵器	甕C-D	口縁部～胴部	40.8			I	外:タタキ 内:無文あて具痕	口縁内面と欠損面に自然釉有り	
第860E10	1058	SV03	ネ	須恵器	甕	胴部				I	外:タタキ 内:青釉薬のあて具痕		22
第860E11	1137	SV03	ネ	須恵器	大甕	胴部				III	外:タタキ 内:あて具痕→ハケ		21

※層位・番号欄は以下の略号を用いた ケ:検出面 シ:焼成部 夕:焚口部 ネ:燃焼部

立ヶ花表遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺物・アフリット	層位・番号	種類	形態	部位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	底径 分類	辦法調整	備考	分析 番号
第870E12	1131	SV03	卒	須恵器	大甕	頸部				I	外:タタキ 内:不明	自然釉の付着有り, 赤み著しい	
第870E13	1060	SV03	卒	須恵器	大甕	頸部				I	外:タタキ 内:ハケ	自然釉有り	
第870E14	1063	SV03	卒	須恵器	大甕	頸部				I・III	外:タタキ 内:あて具痕→ハケ	編目により焼成が異なる	19
第870E15	1061	SV03	卒	須恵器	大甕	底部				III	外:タタキ→縦線状のハケ 内:不明	編目により焼成が異なる	17
第870E16	1062	SV03	卒	須恵器	大甕	頸部				I	外:タタキ 内:ナデ		
第870E17	1065	SQ01	No.49	須恵器	杯B	口縁部→胴部	13.0			I	底部:回転→ラケズリ	黒書:底部外面に「一」?、焼き 赤みによる亀裂有り, 気泡による 膨らみ有り	
第870E18	1139	SQ01	No.42	須恵器	杯B	底部			10.4	I	底部:回転→ラケズリ	赤み	25
第870E19	1138	SQ01	No.10	須恵器	杯蓋	縁部→口縁部	18.8			III	外:回転→ラケズリ?		23
第870E20	1067	SQ01	No.66	須恵器	壺	頸部				I	外面:タタキ 内面:青黒炭文状のあて具痕		
第870E21	1125	SQ01	No.23-24- 30-31-35- 33-53-54- 44-56-63	須恵器	壺	頸部, 胴部				I	外面:タタキ 内面:青黒炭文状のあて具痕		26
第870E22	1068	SQ01	No.40	須恵器	大甕	頸部				I	外面:タタキ 内面:ハケ		
第890E1	1070	IVG19-4		須恵器	杯A	底部			4.2	I	底部:回転→切り後ナデ	黒書:底部外面に放射状の沈線	
第890E2	1069	IVG24		須恵器	杯A	底部			6.8	I	底部:回転→切り	黒書:底部内面に「一」	
第890E3	1009	IVG08		須恵器	杯A	口縁部→胴部	14.4			I	底部:回転→切り	黒書:底部外面に「一」?	
第890E4	1100	IVG14 +15		須恵器	杯A	口縁部→底部	13.0		-7.2	I	底部:回転→切り, 椅子目状の 圧痕		
第890E5	1113	IVG19		須恵器	杯A	底部			6.0	I	底部:回転→切り		
第890E6	1102	IVG19		須恵器	杯A	底部			6.4	II	底部:回転→切り	黒書:底部外面に「一」	
第890E7	1112	IVG20		須恵器	杯A	胴部→底部			6.0	I	底部:回転→切り		
第890E8	1103	IV24, IVG19		須恵器	杯A	底部			6.2	II	底部:回転→切り	黒書:底部外面に「一」?	
第890E9	1084	IVG19		須恵器	杯A	口縁部→底部	12.7	3.3	6.4	I	底部:回転→切り		
第890E10	1074	IVG10- 16		須恵器	杯A	口縁部→底部				I	底部:回転→少切り		
第890E11	1106	IV19, IVG24		須恵器	杯B	底部				I	底部:回転→ラケズリ	黒書:底部外面に「×」	
第890E12	1075	IV10, IV186		須恵器	杯B	口縁部→底部	18.8	5.1	15.8	I	底部:回転→ラケズリ		
第890E13	1078	IV05, IV06, IVG10		須恵器	杯B	口縁部→底部	16.8	4.6	12.0	I	底部:回転→ラケズリ		
第890E14	1111	IV2, IVG24		須恵器	杯B	胴部→底部			9.8	I	底部:回転→切り→回転→ラケズリ		
第890E15	1096	IV106		須恵器	杯B	口縁部→底部	14.4	3.5	8.6	I	底部:回転→ラケズリ	高台に砂質土付着, 赤み著しい	
第890E16	1082	IVG15		須恵器	杯B	口縁部→底部	9.0	4.5	5.6	I	底部:少切り→回転→ラケズリ		
第890E17	1072	IVG19- 11		須恵器	双耳杯	把手部				I			
第890E18	1081	IVG15		須恵器	杯蓋A	フタミ→蓋身部				I			
第890E19	1077	IV186- 10		須恵器	杯蓋A	フタミ→蓋身部				III			
第890E20	1095	IV06- IVG10		須恵器	杯蓋	蓋身部→口縁部	11.8			I	外:回転→ラケズリ		
第890E21	1014	IVG13		須恵器	杯蓋B	フタミ→口縁部	15.4	2.9		I	外:回転→ラケズリ	赤み有り, 自然釉有り	
第890E22	1101	IVG19		須恵器	杯蓋	蓋身部	15.6			I	外:回転→ラケズリ	赤み有り	
第890E23	1109	IV2, IV19-20		須恵器	杯蓋	蓋身部	17.7			I	外:回転→ラケズリ?		
第890E24	1076	IV14, IVG19		須恵器	蓋甕	蓋身部				I	口コロナデ	第790E11の短頸蓋皿と対にな る?。自然釉有り	
第890E25	1071	IV186-6		須恵器	片面碗	碗部	9.0						
第890E26	1098	IV19-20		須恵器	横瓶?	底部			9.8	I	内:縦方向の口コロナデ	高台底部に砂質土の付着	
第890E27	1142	IV186- 10a		須恵器	壺?	底部			16.4	I			
第890E28	1079	IV106		須恵器	長頸蓋	胴部				I	外:ナデ, 内:ナデ	自然釉あり, 2本の沈線	
第890E29	1073	IVG19- 16		須恵器	双耳蓋	胴部				I	外:ナデ, 内:口コロナデ		
第890E30	1080	IVG19		須恵器	蓋	頸部→胴部				I	外:口コロナデ 内:口コロナデ	胴部外面に黒書?	

※層位・番号欄は以下の略号を用いた ケ:検出面 シ:焼成部 タ:焚口部 ネ:燃焼部

立ヶ花表遺跡 奈良・平安時代土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・ブツID	層位・番号	種類	器種	部位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	構成 分類	表面調整	備考	分析 番号
第890E31	1085	SQ01	No.21	須恵器	横瓶	口縁部～胴部				I	外:タタキ 内:青陶段文のあて具痕→ナゲ	TP3, IVG14-15, IV106が適合	
第890E32	1124	SQ01	No.26	須恵器	横瓶	胴部				I	外:タタキ 内:ナゲ	焼きまみりによる亀裂有り, 自然釉有り	
第900E33	1091	IVG14		須恵器	甕C?	口縁部	19.6			I	外:タタキ→カキ目? 内:平塗無文あて具痕		
第900E34	1108	IVG14		須恵器	甕C?	口縁部	31.8			I	外:タタキ 内:無文あて具痕		
第900E35	1094	IVG15		須恵器	甕C?	口縁部	27.8			I	外:タタキ 内:無文あて具痕		
第900E36	1092	IVG15		須恵器	甕C?	口縁部～胴部	30.4			I	外:タタキ 内:無文あて具痕		
第900E37	1087	IVG15		須恵器	大甕	口縁部				I	外:沈線→5本の櫛歯状伏具による段状文	内面自然釉有り	
第900E38	1086	IVG15		須恵器	大甕	口縁部	38.6			I	外:沈線→5本の櫛歯状伏具による段状文	内面自然釉有り	
第900E39	1089	IVG15		須恵器	大甕	口縁部				I	外:沈線→5本の櫛歯状伏具による段状文		
第900E40	1088	IVG08		須恵器	大甕	口縁部				I	外:6本の櫛歯状伏具による段状文		
第900E41	1110	IVG13-9-10		須恵器	甕	胴部				I	外:タタキ→ナゲ 内:無文のあて具痕		
第900E42	1105	IVG19		須恵器	甕	胴部				I	外:タタキ	胴部外面に塗書?	
第900E43	1123	IV19, IVG24		須恵器	甕?	胴部				I	外:タタキ, 沈線 内:青陶段文のあて具痕		
第900E44	1093	TP3		須恵器	大甕	胴部				II	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ		
第900E45	1126	IVG15		須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ		
第900E46	1127	IVG15		須恵器	大甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文あて具痕→ハケ		
粘土分析	1135	SV02	7層	須恵器	杯	口縁部～胴部	13.8			II	外:ナゲ 内:ナゲ		13
粘土分析	1136	SV02	ネ, ケ	須恵器	甕	胴部				I	外:タタキ 内:無文のあて具痕→ハケ		12

※ 層位・番号欄は以下の略号を用いた: ケ: 検出面 シ: 焼成部 タ: 焚口部 予: 燃焼部

立ヶ花表遺跡 弥生・中世土器観察表

報告番号	管理番号	遺構・ブツID	層位・番号	種類	器種	部位	時期	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	外面色調	備考
第915E7	301	IV106-10-a		弥生土器	甕	胴部	弥生	破片				にがい・黄褐色0ha10V02/4)	
第915E1	2002	SV02	ケ	土器	カマツケ	口縁部～底部	中世	1/2	6.8	1.9	4.0	褐色0ha5V07/6)	SV02埋土3層出土
第915E2	2004	IVG19		磁器	青磁碗	底部	中世	3/10				5.8 オリーブ(灰色0ha10V6/2)	
第915E3	2001	SV02	ケ	陶器	オマリ鉢	口縁部	中世	破片				灰白色0ha7.0V7/1)	
	2003	IV106-IVG10			内耳鍋	底部	中世	破片				赤褐色0ha2.5V04/3)	
	2005	SV02			内耳鍋	底部	中世	破片				赤褐色0ha5V04/3)	

※ 層位・番号欄は以下の略号を用いた: ケ: 検出面

写真図版





2区遠景



2区基本土層



1区の土層



SB101



SB102



SB102 カマド



SB103



SB103 カマド



SB103 カマド下の溝を覆う土器



SB105



SB105 床面焼土



SB106



SB106 カマド



SB107 遺物出土状況



SB107



SK120



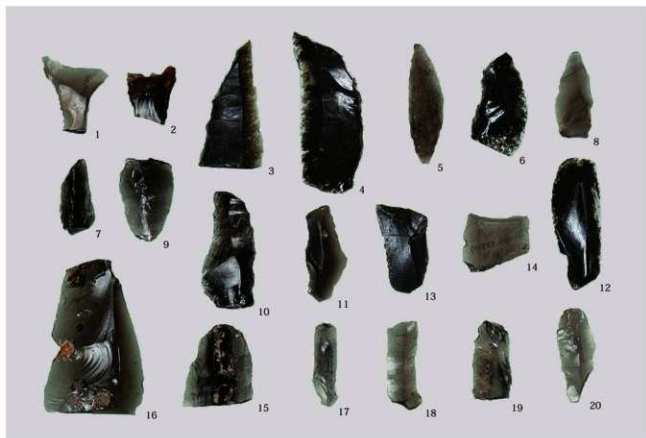
SK121



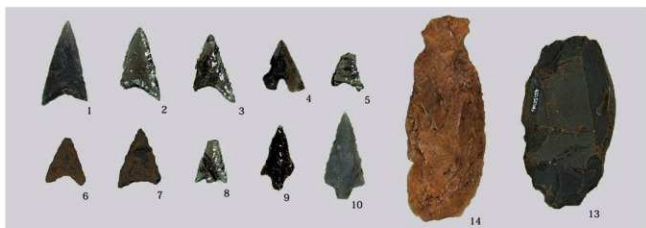
SX109 土層断面



SX107 土層断面



旧石器時代の石器 (S ㉔ 3/4)



縄文時代の石器 (S ㉔ 3/4)

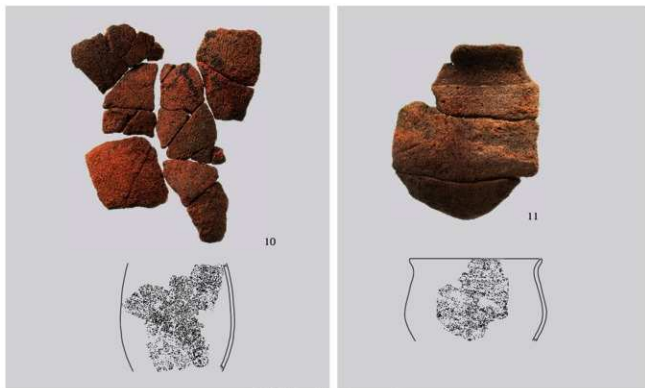


縄文時代の石器 (S ㉔ 1/3)

() 内は管理番号



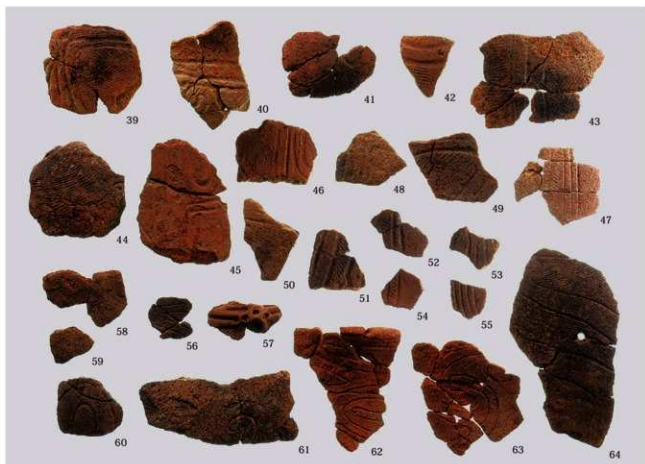
縄文時代の土器 (S 5/1/4)



縄文時代の土器 (S ≒ 1/4)



縄文時代の土器 (S ≒ 1/4)



縄文時代の土器 (S ㉮ 1/4)



縄文時代の土器 (S ㉮ 1/4)



弥生時代・古墳時代の遺物 (S ㉮ 1/3)



須恵器の焼成による分類



甕書土器 (S ≈ 1/4)



奈良時代の須恵器 (S ≒ 1/4)



奈良時代の須恵器 (S ≒ 1/4・1/2)



奈良・平安時代の土師器 (S ≒ 1/4)



SB103 出土遺物 (1)



SB103 出土遺物 (2)



SB102 出土遺物



SB105 出土遺物



SB101 出土遺物



SB106 出土遺物



SB107 出土遺物



土製品他 (S 1/3)



円筒形土製品 (S 1/4)

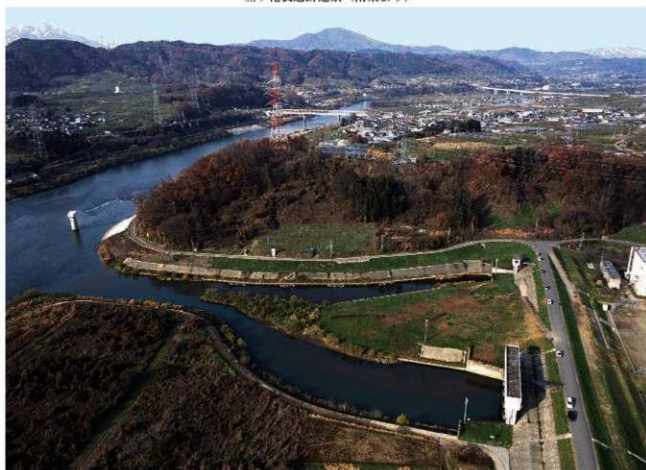


粘土塊 (S 1/3)

() 内は管理番号



立ヶ花表遺跡遠景（南東より）



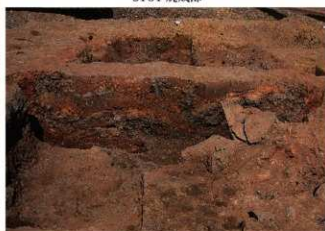
立ヶ花城跡・立ヶ花表遺跡遠景（南より）



SY01



SY01 焼成部



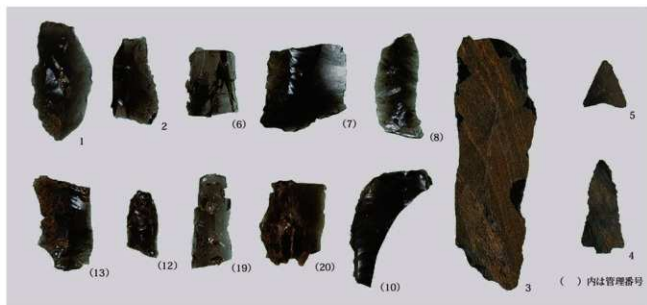
SY01 焼成部土層断面



SY01



SY02



旧石器・縄文時代の石器 (S ㉔ 3/4)



1号窯 (SY01) の須恵器 (S ㉔ 1/4)



1号窟 (SY01) の須恵器 (S ㄱ 1/4)

1号窯 (SY01) の須恵器 (S \approx 1/4)3号窯 (SY03) の須恵器 (S \approx 1/4)



3号窯 (SY03)・SQ01の須恵器



2号窯 (SY02)・SQ03の須恵器



2号窯 (SY02) の須恵器 (S 与 1/4)



灰原出土の須恵器 (S 与 1/4)

報告書抄録

ふりがな	ほくりくしんかんせんけんせつじぎょう まいぞうふんかざいはくつちょうさほうこくしょ 7							
書名	北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書7							
副書名	沢田鋼土遺跡 立ヶ花表遺跡 立ヶ花城跡							
巻次	中野市内その1							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	94							
編著者名	鶴田典昭							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL026-293-5926							
発行年月日	2013年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さわだなつせいせき 沢田鋼土遺跡	ながのけんなかのしおあざたてがはな 長野県中野市大字立ヶ花 あざなつせいせき 字鋼土 583-7 他	20211	229	36° 43' 36"	138° 18' 54"	20051026～ 20051209 20080605～ 20080613 20090408～ 20090930	8,916㎡	北陸新幹線 建設に伴う 事前調査
たてがはなつせいせき 立ヶ花表遺跡	ながのけんなかのしおあざたてがはな 長野県中野市大字立ヶ花 あざなつせいせき 字表 872-1 他	20211	91	36° 43' 30"	138° 18' 49"	20071119～ 20071126 20080624～ 20081029	1,600㎡	
たてがはなつせいせき 立ヶ花城跡	ながのけんなかのしおあざたてがはな 長野県中野市大字立ヶ花 あざなつせいせき 字表山 772-1 他	20211	87	36° 43' 29"	138° 18' 37"	20060710～ 20060808	3,000㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
沢田鋼土遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安時代 中世		ブロック3 粘土探掘跡20 竪穴住居跡7 土器焼成遺構3		ナイフ形石器 縄文土器（後期） 須恵器・土師器		オンドル状の施設を 伴う竪穴住居跡（奈 良時代須恵器工房跡）
立ヶ花表遺跡	窯跡	旧石器時代 奈良・平安時代		須恵器窯跡3		形器など 須恵器		1号窯は主に大甍を 焼成
立ヶ花城跡	城跡	中世		なし		なし		
要約	<p>上記3遺跡は高丘丘陵古窯址群の一角にあり、調査では奈良時代を中心とした遺構・遺物を検出した。立ヶ花表遺跡では、新発見の須恵器窯跡3基を調査した。焼成部と燃焼部に段差がある特殊な構造の窯跡で、特に1号窯は大甍を主体的に焼成した事が判明した。操業は2時期に分けられる。沢田鋼土遺跡の1号窯跡と同時期（8世紀前半）の工人集落の一部を調査した。工房跡（竪穴住居跡）は、斜面上方に排水施設と考えられる弧状の溝を廻らせたもので、オンドル状の施設をもつものも確認された。工房跡からは、隣接する清水山窯跡と類似する須恵器が出土した。これらの竪穴住居跡先行して、土器焼成遺構も確認されており、須恵器・土師器生産に関わる工人集落であったと評価できる。</p> <p>この他、旧石器時代の石器、縄文時代・平安時代・中世の粘土探掘跡などを調査した。</p>							

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 94

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 7

—中野市内その1—

沢田鍋土遺跡 立ヶ花表遺跡 立ヶ花城跡

発行 平成 25 年 (2013) 3 月 21 日

発行者 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構

鉄道建設本部 北陸新幹線建設局

(財)長野県文化財振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157

E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷 三和印刷株式会社

〒 381-2226 長野市川中島町今井 1822-1

Tel 026-285-2300